



Title	詐術としてのフィクション：デフォーとスマレット
Author(s)	服部, 典之
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/1334">https://hdl.handle.net/11094/1334</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 詐術としてのファイクション

デフォートとスマレット

服部典之

詐術としてのフイクンジョン

デフォーとスマレジット

目次

序章 トリック・レトリック・詐術——フィクションの創生 4

## 第一部 捏造からフィクションへ

- |                                       |    |
|---------------------------------------|----|
| 第二章 「生粹」という捏造——『生粹のイギリス人』             | 14 |
| 第三章 「捏造」から「フィクション」へ——産出されたフライデー       | 43 |
| 第四章 デ「フォー」と『フォー』——ポストロニアル主体は自らを名乗りうるか |    |

## 第二部 フィクションのトリック

- |                                  |     |
|----------------------------------|-----|
| 第五章 『ロアリック・ランダム』における二重逆転構造       | 90  |
| 第六章 「トリック」スター——『ファゾム伯爵・ファーディナンド』 | 105 |
| 第七章 旅の弁証法——『バンフリー・クリンカー』         | 124 |

### 第三部 フィクションのレトリック

第八章 統合者と非統合者——『コンソリデーター』	145
第九章 境界線上のH・F——『ペスト』	166
第十章 自己参照といふレトリック——『ロクサンナ』	188
第十一章 ガリバーの肉体	221

### 第四部 フイクションの詐術

第十二章 詐術としてのレトリック——『カーネル・ジャック』	251
第十三章 メソディスト・クリンカー	273
第十四章 『オックスフォード英語辞典』と『ロビンソン・クルーソー』	288

注 313

引用文献 343

## 序章

# トリック・レトリック・詐術——フィクションの創生

### 1

「語る」ことと「騙る」ことに準えられぬことがある。「語る」ことが「筋のある一連の話をする」(広辞苑)、「ある時」「事実」が語られる場合もあるだろうし、「虚偽」が語られる場合もあるだろう。特に後者の場合は、悪辣な詐欺の「騙り」のこともあれば、貴重な時間を過ごさせてくれる物語との「語り」のこともあら。しかし、楽しい物語の場合でも物語は虚構なのであるから、畢竟「騙り」と通底していくことに変わりはない。「事実」を語る場合においても、ある事実をメディアや人が介在して伝達しているわけであるから、それに解釈行為が加わってくる。」の意味で「事実の語り」にも「騙り」は関与しうるし、そこから目を背けるならば事実の良き「語り手」にはなれないだろう。

イギリス小説においても事情は同じだ。物語を語ることは、ノベル(novel) = 「新奇なり」と「を語る」ことであ

り、フィクション(fiction)＝「虚構」を語ることである。やはり語りは騙りなのである。かくも虚構や騙りと不可分に結びついた分野である小説が、「虚偽」であるとか「捏造」であるとかいう誹謗中傷を逃れて、いかに社会的認知をされるに至ったかということを考えることとは、文学研究において重要な視点であると考えられる。特に最近の研究動向として、「小説の起源論」がこの二十年ほど脚光を浴びている。様々な起源論がこれまで提唱されてきたが、いずれも十七世紀後半から十八世紀前半にその「起源」(＝オリジン)を求める点では共通していると思われる。

私の研究も、「小説の起源論」を考察するための糸口をイギリス十八世紀の文学作品及び政治パンフレットに探った博士論文である。私は「小説」という言葉より「フィクション」という用語を採用している。「小説」はノベルであり、常に新奇なことを探し求めるという意味で「差異性」を前提にしている。自分が新たなことを打ち出して、従来のものとは違つたものを創造するのだという意識である。私が考えるフィクションには、なるほどそのような意味も含まれるにせよ、フィクション(虚構)という言葉の中に、より根源的な物語形成に関わる、積極的な意味を持たせたいという私の研究姿勢が関与している。

ノベルという言葉の持つ、差異性による創造という意味の中には「騙る」という意識がどこかに含意されているのであるが、フィクション(虚構)の方には、はつきりと「捏造」であるという意識が埋め込まれていて、これが重要である。「フィクション」という言葉を使って小説を書く人、「フィクション」という言葉を使って研究を行う人の意識の中には、どこかで「フィクション」が嘘であり、それを扱つているという後ろめたさ、もしくはその罪深さを意識した上で、より人間存在の根底に根ざしたものを作り出したいという、自意識的な作業として捉える視点があると思われる。

例えば、今では評価が完全に定まつたイギリス人作家であるマキュー・アン(Ian McEwan)が、2001年に『つぐない』(Atonement)という小説を出版した。その中の女性主人公ロジーが感じた「捏造」＝「フィクション」の罪は、そのまま作者マキュー・アンが感じている罪悪感である。マキュー・アンが過去に創造した「フィクション」の数々の波及効果に対する罪意識について「つぐない」はあり得るのか、という問題をフィクションの形で提起しているわけだ。

そしてまた、フィクションという概念には、本の形で出版されたある程度の長さを持った物語、というノベル＝「小説」の範疇を越えて、広く映画やドラマや様々なメディアに流布する物語の提供者としての意味合いもある。私の最終的な目標はフィクション学(フィクションノロジー)を確立することである。本博士論文では、その大きな目標に達するための基礎的研究の確立を目指している。

## 2

本博士論文では、以上のようなフィクション観に基づき、十八世紀イギリスのフィクションに大きく関わった、「トリック」、「ノトリック」、「詐術」という概念を取り上げ、それに関わる論文を執筆し、それらを第二部「フィクションのトリック」、第三部「フィクションのノトリック」、第四部「フィクションの詐術」というタイトルのもとに集めている。第一部に関しては後に触れるとして、第一部からの基本的考え方を述べたい。

第一部の「トリック」という概念は、ピカレスク小説としてデフォーとスマレントの小説が研究されていた時代の考え方とある程度共通している。サブジャンルとして考察されていったピカレスク小説の主人公たちはピカ

ロと書われ、世間を放浪し、様々な主人に仕え、いたずらを働き、世間を混乱させながらも、いつかどこかに去っていく。なるほど、「デフォー」とスマレットが書く小説には、まさにそのような主人公が多い。クルーソーは召使いではないが、親のもとを離れ、世界を放浪し、様々な事件に遭遇する。スマレットの『ロデリック・ランダム』の主人公ランダムもヨーロッパを放浪しながら様々ないたずらを働き、どたばた喜劇を起こしていく。同じくスマレットの『ファゾム伯爵・ファー・ディナンド』のファゾムはまさにトリックの天才であった。デフォーの『ペスト』の語り手H・Fはペストという大災禍の中でうろうろとしながらどこに落ち着くでもなく境界線上を彷徨する。デフォーの同名作品のロクサーナは様々な男性のもとを遍歴しながら蓄財していく。デフォーのカーネル・ジヤックもピカロの特徴を兼ね備えている。

ピカレスク小説というジャンルには、それだけの定義で小説を捉えてしまうと、重要な様々な要素が捨象される危険性があると私は考えるので、用語としては利用したくないが、ピカロ的人物、すなわち私の採用した言葉で言うなら「トリックスター」的 人物は、確かにその持つ典型的な機能によって、十八世紀小説に大いなる攪乱を与える、無骨ながらも大いなる力を吹き込んだと考えられる。

第一部の第五章「ロデリック・ランダム」における「二重逆転構造」においては、ピカロでありいたずら(トリック)を働くランダムの放浪を辿り、その外的状況と倫理観の浮き沈みを辿った。ランダムはトリックで人を騙したが、スマレットは私の指摘する「二重逆転運動」という構造をフィクションに忍び込ませることで、読者心理をうまくコントロールしている。読者に気取らせないで牽引する意識を「読者を騙そうとする近代的意識」であると結論づけた。

第六章の「トリック」スター——『ファゾム伯爵・ファー・ディナンド』では、ピカロのトリックというにはあまり

にもたちの悪いいたずらを働く「悪漢」とでもいうべきファゾムの機能を辿り、ユングの「トリックスター」概念に接合させて論じた。ファゾムはトリックという機能をもつとも特徴的に表現している。

第七章の「旅の弁証法——『ハンフリー・クリンカー』」は、この小説の主人公であるクリンカーが、旅を行つてゐる一行の中にはる緊張感と合致した人物であり、いたずら者としてその旅を混乱させ、また逆に前進させる機動力になつてゐることを論じ、作品中の相反する力をその力によって衝突させ、弁証法的に旅の成立を促したこと述べた。

第三部で論じた「レトリック」という概念は、はウェイン・ブースの『フィクションの修辞学』によつている。<sup>30</sup> ブースは作品に「内在する作者」を仮定し、その作者が読者をそのレトリックで誘い、二者が手を携えて作品といふ旅行を行うのだとしている。読者を誘う手法の總体を「レトリック」(=修辞学)と言うのだ。

第八章「統合者と非統合者——『コンソリデーター』」では、「内在する作者」と読者という想定がまだ不可能であつた、1705年という段階でのデフォーの散文作品を取り上げてゐる。デフォーは架空流行記の枠組みを借りながらも、現実に自分が関わつた政治的事件を取り上げ、その正当化を行つてゐる。<sup>31</sup> に見られる自己参照的レトリックやその他の技法は、デフォーの後期小説の手法に連結してゐるという主張を行ふ。

第九章「境界線上のH·F——『ペスト』」は、1665年にロンドンを襲つた、ペストという現実の災害を取り上げ、ルポルタージュ風に描く語り手H·Fの言動の持つ境界性を、その語りの手法を分析することで明らかにした。ある自然災害を、ジャーナリストとして離れた視点から描く客観的描写と、一人の個人として一人

一人の悲劇に関与していく描写が拮抗していることを明らかにし、この二つの視点のバランスを取ることが、デフォーにとっての重要な課題であることを論じた。

第十章「自己参照というレトリック——『ロクサーナ』」は、結末が破綻しているとして、従来評価の低かったこの作品の語りを徹底的に洗い直した。そして、この作品の持つ「自己参照性」が、作品の中心的な力を作り出しているのであって、結末の破綻は認めざるを得ないにせよ、結末部にも見られる「自己参照性」は、作品他の部分や作品外とも密接に絡み合っており、魔術的効果をあげていることを実証した。

第十一章「ガリバーの肉体」はスウェイフトを論じていて、デフォーと同時代人であったスウェイフトの作品の「肉体」という観点に着目し、スウェイフトも『ガリバー旅行記』という長い作品を通して、肉体をレトリカルに取り扱いながら、現実の肉体が心理的肉体に墮落していく様を辿った。作品を通して一貫して扱われる「肉体」という概念は最終的に墮落するにせよ、基盤とすべき「物体としての肉体」を見据えているスウェイフトを論じた。

「トリック」は、フィクションの登場人物が行う現状打開策のようなものであつた。ファゾムが金を手にするために人の弱みにつけ込むこと、『ペスト』のロンドンを逃れた三人男が小さな町を通過するときに考案する作戦、そして『モル・フランダーズ』で傲慢な男が女性を捨てたとき、その男を改心させ幸福な結婚をさせてやるためにモルが考案する「トリック」、などが例として挙げができるだろう。

ただししかし、「トリック」はただエピソード内のみに留まるわけではなく、フィクションの仕掛けとなつていく。トリックがプロットと密接に絡まりあつて、レトリックを用いた作者による意識的な物語作りに繋がっていく。さ

らにそれがイデオロギー的色彩を濃厚に示す時、プロットは策略となり、ある種のイデオロギー操作がもくろまれた、もしくは無意識に忍び込んだ作品となる。」のような作品の有り様を私は、「トーリック」を逸脱した「詐術」という概念で捉えたいと考える。それらの問題意識で執筆した論文が第四部「フィクションの詐術」である。

第十二章「詐術としてのレトリック——『カーネル・ジャシク』」では、十八世紀にはさほど着目されなかつたであろう小さなエピソードである、黒人奴隸懐柔の物語を取り上げ、この欺瞞に充ちたレトリックが、作者の意図的な構成の中で見事に正当化されていることを指摘した。この章が取り扱う事態は、まさに「トーリック」が「詐術」となりそれが作者の「レトリック」となつた見事な一例である。

第十三章「メソディスト・クリンカー」は再び『ハンフリー・クリンカー』を取り上げ、この作品をメソディズムという宗教がどう扱われているかという視点から読んだとき、社会安定を望む上流階級のための、願望成就小説として読みうることを論じ、スマレシットという作者の取り込みの詐術を描いた。

第十四章「『オックスフォード英語辞典』と『ロビンソン・クルーソー』」は、『ロビンソン・クルーソー』という十八世紀的イデオロギーを持った作品が、ヴィクトリア朝という帝国主義絶頂期にどう受容されていたかという問題を、十九世紀半ばにイギリスの一大国家プロジェクトとして企画されたOEDという辞書の中に見ようとした試みである。OEDに採用された『ロビンソン・クルーソー』の引用を辿ることで、それらの引用を寄稿した雑志文献読者の意識が解釈可能になり、OEDそのものがヴィクトリア朝的価値観で構築されたものであることを、コンピュータを駆使することによって証明した。

数多くいる十八世紀の文人の中で、デフォーとスマレジットという二人の作者を主要な対象にしたのは、「トーリック」という観点でこの二人が好対照を示しているからである。デフォーは1660年に生まれ、1731年に死亡した。スマレジットは、デフォーがその締結に多大な貢献を果たしたイングランド・スコットランド併合が締結された1707年の十数年後、1721年にスコットランドに生まれ、1771年イタリアで客死している。

デフォーからスマレジットへの流れは、「悪漢小説」つまりいわゆる「ピカレスク小説」の系譜として捉えられることが多い。先述したように、両者の登場人物たちはトーリックを働くピカロの人物であることが多い。私が二者を比較して定義づけるならば、スマレジットのピカロは「消費されるトーリックスター」であり、デフォーのピカロは「消費するトーリックスター」と言うことができると考えている。

スマレジットの小説では、ロデリックは結婚という幸福な結末の中でロマンス的世界に回収される。ファズムは消費され、残つたのは既存の社会の基盤強化という結末であった。クリンカーはピカロであつたはずであるのに、カントリー・ハウスを所有する大地主の隠し子であることが発覚し、体制の一部として取り込まれる。

片やデフォーの場合、クルーソーは、七十才を越えるまで大航海旅行をやめるとはいを見せない。モルは大泥棒で社会から金品を盗むことで消費者の生活を続けていく。ロクサーナは次から次に男性を食い物にし、消費し、挙げ句の果てに、彼女と関わった男たちはなぜか死んでいく。

なぜこのような差が生じるのかはさらに詳細な研究を要するであろうが、デフォーという、主に十八世紀前半を生きた作家から主に十八世紀後半に活躍したスマレジットに、フィクション作りという「作家性」が継承

されるにあたつて、ファイクションの持つ罪深さが薄れ、物語が「消費される物品」に変化していつた様を見る」とができるよう思う。トーリックは「詐術」に変化し、そのイデオロギー性は各所に影響を与えていくが、殊スマレットの小説に限ると、ファイクションの本来的な「毒」は、例えば『ロデリック・ランダム』のエピソードにある、カルタゲナ沖の戦争で、弾丸に吹き飛ばされてきた生首の描写がもたらす「現実の毒」つまりいわゆるリアリズム的エピソードの毒々しさにすり替わり、イデオロギーは、むしろスマレットが自ら帰属すると考えていた貴族上流層としてのイデオロギー保持に向かつていたように感じる。もちろんスコットランド人としてロンドンに上京して様々な艱難辛苦に耐えたスマレットの揺れた階級意識は複雑で、「内在する作者」の支持するイデオロギーは、彼自身のものとは微妙なズレを見せる。

小説起源論を論じたホーマー・ブラウ恩(1997)によると、小説の起源を考えるには遡るという行為が重要だと言うことだが、私自身、ファイクションの成立を考えるにあたつて、デフォーからスマレットという時間的な流れを意図的に逆に辿り、第二部から第四部はむしろスマレットからデフォーという流れで論じることになった。それは概念で言うと、繰り返しになるが、「トーリック」→「トーリック」→「詐術」ということであつた。

#### 4

順序は逆になつたが、第一部の意図は以下の通りである。第一部は、ファイクションの成立を「捏造」から「ファイクション」へ、作品でいうとデフォーの『生粋のイギリス人』から『ロビンソン・クルーソー』への流れで考察している。第一章「「生粋」という捏造——『生粋のイギリス人』」は、この作品で表面的に行われている「正統なるイ

「ングランド人」の否定は、実は逆転の論理で、正統性を強調することで血統による個人の価値を強調するのではなく、過去と切れた上で自分の功績を高める「こと」こそ正統性の証なのだと主張し、近代西欧式国家の成立を高らかに謳っている作品である」とを論証した。

第三章「捏造」から「ファイクション」へ一産出された「ライター」は1701年の『生粹のイギリス人』から1719年の『ロビンソン・クルーソー』までの社会・文化・政治の変化を辿り、どのようにして「捏造」という貶める言葉から「ファイクション」という物語が生まれ得たのか、ということを論じている。ここではおそらく「内在する作者」に近い存在となっている語り手クルーソーが自分を呼ぶ言葉を「わたし」と表記し、語り手の呼びかける仮想の読者の「こと」を「あなた」と表記している。論を展開している私は「私」と表記する。

第四章「デ「フォー」と「フォー」——ポストコロニアル主体は自らを名乗りうるか」では、ポストコロニアル主体たりうるもの的存在も「私」と表記している。第二章では、2002年という本論執筆の時間を起点として十八世紀の状況に遡つて考察を深めたのだが、この章ではまたデフォー的（また十八世紀的）な変遷の状況を略述し、それを模倣した二十世紀の作家であるクッシェーの『フォー』を取り上げることで、時間をクロノロジカルに跳躍している。そして見えてくる状況は、ファイクションの起源となつた十八世紀的問題は、近代の問題として西洋を越えてグローバルな展開を見せ、一向に解決がつかないといふことだ。

これは、第一二章、第三章で取り上げた、ファイクションの成立過程、その根本的矛盾が孕んでいる問題であった。ただ、この十八世紀的矛盾はファイクションという物語を成立させる力を持ち、豊饒なる物語を産出してゐる。こういった認識の上にたつて、どう現代の問題に対処していくべきかを考えることはとても困難な課題である。遡行して十八世紀的状況を研究することは、現代を研究することでもあるのだ。

# 第一部 捏造からフイクションへ

## 第二章

「生糀」と「捏造」——『生糀のイギリス人』

1

アーフォーの『生糀のイギリス人』(*The True-Born Englishman*)と云々長詩が出版されたのが十八世紀の初年1701年で、以降三百有余年の歳月が流れたりとなる。この作品は「詩」という形式を取つてゐるが、「ハイクション」という概念を極めて特徴的に謳つております。かつイギリス近代国家形成を考える上で重大な位置を占めると私は考えてゐる。

ホーマー・オベッド・ブラウンはその『制度としてのイギリス小説』(1997)の中で、語る「制度」としての小説は制度が整備された時点での「起源」を遡って確定されていくのだと述べ、新たな「小説の起源」論を提唱している<sup>五</sup>。ブラウンの説によれば、イギリス「小説」という制度が整うのは、スコットランド人ウォルター・スコットが国民小説を確定すると同時に小説史を遡る作業を行つたことに端を発する。及び彼を十八世紀と現在の中間点に位置づけ、研究する視点をそこに定めてから遡つてみると見取り図として理解がしやすくなるという「こと」だ。ブラウンの説は後に詳しく検討することになるが、「こと」で視点として重要なことが「遡る」という意識である。ファイクションの起源を考えることとは、とりもなおさず歴史を遡行するという意識的作業を行うことである。その定点となるのは「今／ここ」でなくてはならない（「ここ」は日本ではあるが研究対象のイギリスの「今／ここ」を仮想する）。「今／ここ」から一挙に三百有余年の懸隔を遡ることによって極めて興味深い状況が明らかになると思われる。遡行して行き着くターゲットは、この章で取り扱う『生糸のイギリス人』及び第三章で論じる『ロビンソン・クルーソー』(1719)である。

遡る手がかりとして以下のようないくつかの視点を考える。現在イングリッシュネスの重要性が再浮上している中でその淵源を十八世紀に求められるのではないかと考へる視点。次に今現在に至るまで書き続けられているクルーソー物語の観点。それと関連して植民地主義以降の現況、そしてグローバライゼーションが大きな負債を抱えながら進行していく現在、国家形成の要になつたであろうイギリス十八世紀を遡つて考へることで、負債の大きな契機となつたレトリックをいぶりだしたいという観点である。

現在のイギリスは移民問題に揺れ、移民の人口比の大きな町で暴動が散発している。2001年四月六日づけの朝日新聞によると、連合国の中で自分をブリティッシュでなくイングリッシュだと考える層が1997年の7%から1999年の17%に急上昇しているということだ。これはイングランド人の保守反動化の動きが理由として考えられ、イギリス政府のスコットランド・ウェールズへの権限委譲(devolutions)と運動して十八世紀的状況へ逆戻りしている証左とも言えよう。デフォーが『生粋のイギリス人』において憂慮していた十八世紀の難民問題の背後には、当時フランスからのユグノー難民の流入等多数の移民を抱えていたという社会情勢があり、現在のイギリスの移民問題への意識と共通するものがある。

ポスト植民地主義に顕著に見られる批判対象として俎上に載せられるイングリッシュネスの場合、むしろ現実のイングランドの反動化と正反対の意味でイングリッシュネスを歴史的視座で取り上げた問題意識だと考えられる。つまり、帝国拡張主義の起源としてイングリッシュネスを位置づけ、拡張しながらも排他的であり続けるそのあり方を批判する立場である。例えば現代イギリス小説（正確には英語圏小説）の中でもイングリッシュネスと移民という問題は大きなものとして取り上げられる機会が多いことに気がつく。

例えば2000年に出版されたマシュー・ニールの『「イングリッシュ」な乗客たち』という小説を取り上げてみよう。これは十九世紀半ばの、イギリス人によるタスマニア島植民地化の物語である。現地人とイギリス人植民者の闘争が進行しているタスマニア島ヘイギリスから乗り込む船にはイングランド人とマンクス島人（同じグレート・ブリテンという国にありながら異質の文化を持つている）が乗り合わせ、タスマニアの植民地化の終結を

田撃する。イギリス帰還の途中イングランド人に自分の船を奪われ軟禁されたマンクス人船長は、次のように言う。「これはイングリッシュマン式殺人の格好の例だった。何もしないことによる殺人なのだ。何もしないといふことがイングリッシュマンのお好みなんだ。」植民地化の狡猾さをも含意して、イングリッシュであるいと（＝イングリッシュュネス）への痛烈な批判であると言えよう。

同じく2000年に出版されたゼイディー・スマスの『ホワイト・ティース』は、白人一家とバングラデシュ移民の交流を描き移民問題を取り上げている。その中でバングラデシュ移民のサマドは、白人文化のただ中に入り込んだ息子マギッドを痛罵している。「おまえは、賢い学者様つてわけだ。インテリぶりやがつて。白ズボンをはいたイギリス人様、不撓不屈の精神、大きな歯は真っ白。おまえは何でも知つていて最後の審判の日でも逃れるだけの知恵も持つている、お偉い方なんだな。」

この二作品は、どちらも2000年ベストセラー上位に入つたものだが、多数の人々に読まれるベストセラーの取り上げるテーマとして、イングリッシュュネスや移民問題が脚光を浴びてることが実感される。先ほど述べたように現実のイギリス社会がブリティッシュネスからイングリッシュュネスへ逆行していく状態、そして過去の負債として批判対象となるイングリッシュュネス、これらの問題意識が逆に、この二作品を含む多くの現代英語圏小説を紡ぎだす原動力になつてゐるようだ。

もう一つ重要な事実は、この二作品とも広い意味で『ロジンソン・クルーソー』の系譜を引いているという点である。『ホワイト・ティース』に田でくるある白人の老人は戦争中白い歯を田印にして黒人を識別し手当たり次第に殺戮した経験を物語る。作品のタイトルにもなつてゐる「白い歯」は、フライデーの「象牙のようないい美しい歯」("his fine Teeth...white as Ivory")の末裔であるに間違いない。そして『「イングリッシュ

ユ」な乗客たち』のタスマニア島で繰り広げられる血で血を洗う闘争は、『ロビンソン・クルーソー』の中のクルーソー軍団対カリブ人の対立、そしてゴールディングの『蠅の王』の島で起る子供たちの殺し合いを掛け合わし、現実に起つた植民活動をポスト植民地物語として語り直した物だと言えよう。この二作品を含め、第四章で扱う『フォー』は言うに及ばず、現代に至るまでロビンソン・クルーソーに範を取つた物語が引きも切らず出版され続けている事実は、マーティン・グリーン<sup>九</sup>、岩尾龍太郎<sup>一〇</sup>らの研究で明らかである。2001年にも『ロビンソン・クルーソー』のモデルであるという説があるセルカーカの伝記が『セルカーカの島——本物ロビンソン・クルーソーの真実で不思議な冒険』というタイトルでダイアナ・スーム<sup>一一</sup>によって出版されている。クルーソー物語が消滅することはないであろう。この理由に関しては、第二章、及び第三章で議論する。

イギリス国家形成に関してだが、『生粋のイギリス人』をも論じているリンダ・コリーの『イギリス国民の誕生』<sup>一二</sup>を考えてみよう。この書物はイギリスが1707年のスコットランドとの合併をも含めた複合国家としてグレート・ブリテンとなつた上で帝国国家形成を行つていく過程を、様々な文献を縦横に利用することで解き明かした極めて興味深い研究書である。ウェールズ、アイルランドをも内包した内部的軋み音を抱えたブリテンがその矛盾を克服しようとするとき、カトリック、フランスを他者と規定し、それを攻撃する言説の蓄積化によつて、イギリスという国家の合同、一体化、つまりデフォーの言葉を借りればコソソリデーション(Consolidation)を計つたのだとされる。

ただ、既に指摘があるとおり、図式が明確なだけに個々の作品の扱いは必ずしもきめ細やかなものになつてない面も見受けられる。『生粋のイギリス人』の引用箇所はベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』<sup>一三</sup>からの孫引きで、その解釈は以下の通りである。『生粋のイギリス人』の人を嘲る野蛮さは文字通り受

け取る」とはできない。デフォーがイングランド人のうぬぼれを挫いているのは確かだが、彼自身一人のイングランド人であるデフォーが「のように遠慮会釈のない風刺の言葉を使えるという事実そのものがイングランド人の自信を強力に実証している。<sup>一四</sup>」後で議論することだが、デフォーのこの作品のレトリックはあまりにも巧妙なもので、「イングランド人の自信」という言葉で表現し尽くすことは難しい。

コリーの研究書を評価できるのは、十八世紀のこの時代、「イギリス人とは何者で、そもそもイギリス人は存在したのか」<sup>一五</sup>という強烈な問い合わせがイギリス人の中で問われていたという事実の指摘であろう。コリーはそれに明解な解答を出している。「プロテスタンティズムが説得的で効果的な解答であり、おそらくそれが唯一可能な満足のいく解答である。グレート・ブリテンは三つの異なった国家から成立しているが、神の元ではそれらは唯一の、そして連合した国家と成り得たのだ」<sup>一六</sup>。

コリーが指摘する十八世紀イギリス人たちの感じた問いかけは、まさにクルーソーが孤島で神を思った時に感じた次の疑問だったのではないだろうか。「ここまでわたしが知っていると思っていた地球や海はいったい何か。どこからそれは産み出されたのか。わたしは何なのだろう。……そしてわたしたちはいったいどこからやつてきたのだろう?」確かにクルーソーはすぐさまその解答として「それは神だ」<sup>一七</sup>と言つて、コリーの論を裏打ちしているかに見える。ただ、『ロビンソン・クルーソー』の中で、最終的に神への信仰が確定されるには様々な修辞的操作が必要なのであって、この手続きが、複雑な構成を持つた国家を「捏造」(コリーは表題に Forging という言葉を使い私はその認識を共有している)するのに効力を持つたと思われる。

レトリックを検証する前に、なぜ現在から振り返ってデフォーの『生粋のイギリス人』と『ロビンソン・クルーソー』を検討する意味があるのかを改めて確認しておきたい。十八世紀後半にはデフォーはそれほど読まれなくなり、おおよその見方によれば、この時代リチャードソンやフィールディングによつて小説(novel)が始まったということになる。そして当時イングリッシュネスを体現する作家はフィールディングであった。

一旦忘れられたデフォーを再生させた人物としてスコットにスポットライトを当てたのが前述したブラウンである。ブラウンによれば、スコットが1819年に編んだデフォー著作集に女性を主人公とした『モル・フランダーズ』や『ロクサーナ』が含まれなかつた理由として、スコットが好んだ「男性の冒險ロマンス」、特に彼好みの、「歴史ロマンス」の創世者としてデフォーが位置づけられた点が指摘されている<sup>18</sup>。その後ヴィクトリア朝でイギリスの帝国主義的冒險小説の祖型として『ロビンソン・クルーソー』が大いに読まれたのは言うまでもないであろう(第四章、第十四章参照)。注目したいのは、この限られた著作集中にフィクションと旅行記以外では唯一『生粋のイギリス人』という長詩が選ばれている点である。

『生粋のイギリス人』はよく知られているように、ジョン・タッチンの『外国人たち』というパンフレットにおけるウイリアム三世批判、つまりオランダ人という外国人がイギリスを統治する」とへの批判をしたタッchinたちへの反発としてデフォーが書いたということは事実である。しかし、もし、この作品が、イギリス人を歴史的に見た場合に複数の民族が混在してできた異質性(heterogeneity)を持つているという点を指摘するにどもつたものであるなら、これが十九世紀に改めて読み直される必要もなかつたように思われる。またこの作品が出版当初から良く売れ、作品を自ら誇りに思つたデフォーが、周知のことくオーサーシップを表す必要があ

つたとき、「『生粧のイギリス人』の作者」と自称したことからも、この作品が表向きに持つ單純さと裏腹に、イギリス性と正嫡性の根幹に関わっているのではないかと考えざるを得ない。以下この作品を検討していく。

#### 4

この作品がまず行つてゐることが、私がまさに今行つてゐる「遡る」という行為である。

昔に、過ぎ去つた時代に遡つてみよ。

そして國家というものが存在しなかつた昔にかかるがよい。

今は老いたブリタニアの若かりし頃に遡ろう。

そこで「生粧のイングリッシュマン」なるものを尋ねてみよ。

ブリタニアは即座にその名を否認するだろう。

そして彼らがどこからやつてきたのか自分は知らないと言ふだろう。

.....  
.....  
.....  
.....  
.....

我らの愚行の宿る原因へ立ち帰ろう。

そして暗黒の起源を地獄から取り戻そう。  
一九

つまりこの詩は、ブリタニアという女神を象徴とするイングランド国家の起源を辿るうというもくろみで始

まつてゐるわけだ。イギリスの近代国家形成期にあたつて、國家の統一原理を探るために國家の起源を希求しようといふ情動は、極めてよく理解できる。

ただ、統合の象徴であるブリタニア女神は、起源として存在したはずの「イングリッシュマン」を認知しない(disown)だらうと言われる。さうに國家の起源＝オリジンは暗黒のもので、始源の追求と回復の試みは始源の消失に繋がるだらうといふ實にデフォー的なねじれた感情構造が、いの前口上(introduction)で既に見て取られる。

第一部に入つて、悪魔があまねく世界を「死」という永遠の帝国化していくことが語られる。悪魔は人類を「完璧に征服」(161)したのだが、「悪魔は常に人間たち自身の合意によって支配する」(69)のだとされる。デフォーの統治論における君主と臣民の関係、もしくは植民論における支配者と現地人の関係において、常に「征服」("conquest")は「合意」("consent")にすり替えられ、巧妙なるレトリック形成の要になつてゐるが、いよいよおいても悪魔の征服は人類の合意との共謀関係に置き換えられ、人間風刺に一役買つてゐる。

悪魔は手下の指揮官に一つ一つの国を統治させ、そこに適切なる罪を一つずつ分配する。スペインには「傲慢」、イタリアには「色欲」などを配置した後、いよいよイングランドについて語られる。

サテュロスよ、情けを持ち沈黙のヴェイルを引くがよい。

おまえの住むイングランドの悪徳を隠すために。

もしそれが不可能であるなら、

少なくとも公正に、イングランドの美德をも示すがよい。

しかしああ、悪徳はあまりに多く、美德はあまりに少ない。(145—9)

イングランドは他の国同様風刺の対象ではあるが、イングランドのみが「公正に」美德をも示すチャンスが与えられる。そしてこれ以降、国の始源から始まって、時間軸に沿つてイングランドがいかに堕落していくかが語られていく。まずイングランドの太古である。

イングランドは、まだ知られず、人に住まわれない時は、

幸福であつたし、もし今日までそのままでいたなら

ありとあらゆる国の食い物にはならなかつただろう。

彼女の開かれた港湾と肥沃な田畠、

前者は商人たちの栄誉であつたし、後者は牧夫たちの誉れであつた。

しかし彼らは彼女を裏切り野蛮なる国々に売り払つてしまつたのだ。

外国の国々は侵入するたびに彼女を征服した。

そうして、無垢さのみで守られていた美が、

防御するべきであった彼女を破滅させてしまったのだ。(150—8)

イングランドという国が女性として表象されているのに注目すべきである。この女性の所有者らしき商人と牧夫は、あたかも娼婦を斡旋する女衒のように描かれ、「開かれた港湾」と「肥沃な田畠」というセクシユアル

な表現で形象化するイングランドは女体として受肉してしまふ。

「侵入」("invade,") & 「征服」("conquer,") といふ単語は常にレイアの比喩であることを考へるに、彼らによつて売り払われたイングランドは外国の國々にとつて陵辱の対象になつてゐると言えよう。海外の產物を港湾といつう入り口を通つてイングランド内に入れる商人たち、そして外国の移民を受け入れ、外国人たちにその肥沃な田畠を耕させる牧夫たち、彼らの裏切りにより、外国人たちはイングランドといつう女性の肉体をレイブし、受胎させる(種を植え付ける)。

次々と陵辱する外國の言葉や習慣が、女性の生む子供たちに伝へられ、それらの混じり合へた残滓を国民は引き継いでいたとされ、この過程は「庶出の生殖」と呼ばれる。イングランド人は生粹であるといふが、複雑に混交した異質体、つまり「混血児」なのである。

ローマ人、ノルマン人を始め様々な民族がイギリスに入つてきて、「略奪」し住み着き、自分たちの子孫を残していく。彼らの軍隊の殘党などが先住者のブリテン族と交わつて混合された民族が結果的に残つていいくのだとされる。ティフォーは、「の残つた子孫たちを「水陸両生の」群衆だと言うのだ。「これらの水陸両生の悪しき生まれの群衆から、かの傲岸で惡しき性質を持つもの、イングリッシュマンが始めた。」(一八八一—〇)

『マル・フランダーズ』の中で、紳士であり商売人である男("Gentleman-Tradesman,)が同じ「水陸両生物 ("amphibious Creature,)」呼ばれたいふことを想起させる。」の水陸両生の多義的性質を持つた集団から、傲岸で粗んだ性格を持つ存在、つまり「イングリッシュマン」が産まれたのだと主張されている。

ノルマンの「征服」王ウイリアムは、兵士たちに金でなく土地で報酬を与え、その結果外國の兵隊たちは市民となり土地の自由保有権者となつた。

かくしてならず者は金持ちになり、ウイリアムは彼らを貴族と呼んだ、新しく作った言葉で成り上がり者たちの高慢な心を喜ばせるために。

ドゥームズデーブックがウイリアムの專制政治を記録している。(209—11)

正統なるイギリス人貴族も起源を辿ればフランスの兵士たちである。現在の正統が過去を辿れば非正統である以上、貴族たちの誇る血統や生まれはウイリアムの時代に「新たに作られた言葉」つまり捏造された称号であったのだ。イギリスの歴史の開始点として記憶される土地台帳ドゥームズデーブックも、正しく判断すればウイリアムの捏造した恣意的な產物にすぎないと謳われる。

紋章登記簿の中にこれらのは記録されたのだ、  
彼らの高貴で卑賤な血筋を説明するために。

しかし眞の英雄は誰だったのかは誰にも分からない、  
どこの鼓手だったのか、それともどこの大佐だったのか、  
物言わぬ登記簿は恥じて明かさない、

断絶してしまつた暗黒の起源を。(220—4)

紋章登記簿も正統性を保証する権威であるはずだ。ところが、フランス兵士出身の貴族たちは自分たち

が戦争で身につけていた刀や槍を適当に紋章としてしまった。」のような事情でなりたつた以上、正統なる英雄は皆自分からず、登記簿は純粹なる血統を表すのではなく、あのウイリアムという「ノルマンの私生児」(2-15)のように、貴族たちの「庶子性」を示すものでしかないのだ。「起源」は前口上で述べられていたように、「暗黒」なのである。

征服者たちにとって、イングランドの地は「植民地」であった。しかし長くその統治を享受する間もなく、彼らは自らがイングリッシュマンになつていき、スコットランド等を攻め領土拡大を計るようになつてきたとされる。征服者たちがイングリッシュマンに帰化(naturalization)・イギリス化(Anglicization)したのであつた。

## 5

王政復古を歌う部分では、チャールズがフランスから帰国し、彼に付き従つて「外国人の宮廷人」や「外国人の娼婦たち」が流入する」とが語られる。チャールズ自身「難民国王」("royal refugee")と呼ばれる」とからもわかるように、新種の移民たちの流入が指摘される。チャールズはいわば出戻り移民ではあつたが、彼の生ませた六人の私生児の話題が持ち出され、彼らが正統性、正嫡性の問題をより複雑にさせた事情が描かれる。移民問題と私生児問題は、正統性の根幹を揺るがせる問題として同時に論じられる。

チャールズの生んだ六人の私生児の男子が全て貴族の名前を継いだことから、貴族の正嫡性は脅かされるし、逆に彼らがチャールズのれつきとした息子であることを考えると後に王位を継いだ彼の弟ジェイムズの正嫡性は揺らぐ。」こうした正統性の問題は、決して抽象的議論ではなかつた。特にチャールズの息子の一人

モンマス公が1685年にジエイムズに反抗して反乱を企てたときにはせ参じたデフォーにとつて、これは生死に関わる重大事であつた。事実この反乱の際に多くの加担者が死刑に処せられている。

だが、反乱する非嫡出者であり非正統に属するモンマス公は、公爵という最高位の爵位を与えられている。つまり彼は「私生児」でありかつ「貴族」なのであつて、先ほどのデフォーの表現を借りるなら、まさに水陸両用動物だったのである。

かくして、ありとあらゆる種類の者の混交から、

あの異質なるもの、つまりイングリッシュマンが始まった。

彼らは欲望に満ちたレイプと激烈な性欲によつて、

顔をペンキで塗ったブリトン人とスコットランド人の間に産み出された。

.....

そこから産まれたのが雜種・混血民族達であつた。

名もなく國もなく言葉も名譽もない。

その熱き血の中に新たな混合物が素早く流れ込んだ、

サクソン人とデンマーク人の混合だ。

彼らの放埒な娘達は、親のやり方を見習い、

その相手を選ばない情欲で全ての国民を受け入れた。

その雑種達がアングロサクソン七王国の間に分配され、

国家狂騒曲を奏でるのだ。

自分たちの間で絶え間ない内戦を繰り返してきた。

にも関わらずレディー方は征服者を愛する。(334—7、340—6、348—51)

この箇所はベネディクト・アンダーソン<sup>(1)</sup>もコリー<sup>(2)</sup>も引用している有名な箇所である。「生粹」＝純粹さの象徴とも取られるイングリッシュマンを「異質なる者」と断言した意外性を持ち風刺の毒を放つ詩句である。また国家形成の過程は、象徴的、集約的にレイプと性的欲望で表現されている<sup>(3)</sup>。イングランドは相変わらず女性として表象され、レイプによってイングリッシュマン(男性)を産み出した。雑種混交存在であるイングリッシュマンには権威たる「国家」も「名前」もない。全てが一からの再スタートということになる。

イングリッシュマンの子供である娘たちは、相手を選ばず様々な国家の血を受け入れていく。「レディー方は征服者を愛する」という表現は、「女性はレイプを好む」と「うへ征服」と「合意」をすり替えた男側のセクシュアルファンタジーを如実に語っている。ただこのすり替えるレトリックは、「征服する男」→「合意する女」→「戦う男」→「全てを受容する女」という論理の流れに接合し、過去の雑種混交を受け入れた上で、外の国家や植民地に対する征服願望を持つたまなざしに至るまで、後一步の所まで迫つてゐる。

スコットランド、ピクト、ブリテン、ローマ、デンマークは屈服し、全てがイングリッシュのサクソンと結合した。

人々は混じり合いということを追い求めたため、

彼らの「名前」そして「記憶」は封じ込められ

今やローマもブリテンもない。

ウェールズは離れようとしたが無駄であった。

沈黙の国々は区別のつかない状態に融和し、

やがてイングリッシュマンが皆の共通の名前になった。

理由は分からぬが運命が彼らをいたまぜにしたのだ。

彼らが過去に何であったにせよ今は皆「生粹のイングリッシュ」なのだ。(3308—67)

一一にきて詩の調子が変化している。これまでイングリッシュマンの異質性に対する痛烈な風刺だったのであるが、右の詩行では複数の民族の混交が融和に至り、「結合」("unite,")が強調される」となる。昔の「名前」や「記憶」は抹消され一つに解け合つたとき浮上する共通の名前("the common Name for all,)は、他ならぬ「イングリッシュマン」であった。一一で共通の名前としてあげられるときの「イングリッシュマン」は明らかに、この長詩の以前の部分で揶揄されていた性質のイングリッシュマンとは異なつており、一一で過去と切れた未来へ進むべき名前として再定義化されているわけだ。たとえ過去がどうであれ、異質の者の集団であれ、それが鳥合の集団でなく同じ名前を持ったとき、それはスコットランドとの1707年の合併がそう言われたように

合併(Union)なのやないか、これは過去を一旦払拭した新たなる国家の宣言と成り立つのだ。国家形成の要件としてハルネスト・ルナンは「共有する」と、共通性を認識する)ム(“Sharing,” “Commonness,”)を挙げているが(四、デフォーの)の部分は、アイロニカルな口吻の中に「生粹のイギリス人」ではない、ある共通性を持つた新たなる国家をこれから形成する新生「イングリッシュマン」の提唱に向かっていふように読めるのである。

ただし「生粹のイギリス人(イングリッシュマン)」という概念は依然無効である。複数の民族の混交体としての共通の名「イングリッシュマン」は確認された。その上で融和した民族は「生粹のイギリス人」(“True-Born English”)を性質として持つ。しかし「生粹」の「イングリッシュマン」は改めて俎上にあげられ徹底的に弾劾される。

というのも、イングリッシュマンが血筋を自慢する(いせん)自分たちの知識を帳消しにする(いせん)ことであり、国家を侮辱する(いせん)ことなのだ。  
〈生粹のイギリス人〉というのは矛盾である。

言葉として皮肉であり事実という点では捏造(フイクショナ)である。  
馬鹿者を計る物差しとなる悪ふざけであり、  
正しく言葉を使う人を侮蔑する言い方だ。

世界中の人と血縁がある者を

表現するために捏造された隠喩である。(三〇一)

共通性の認識後の「一の激烈な憤怒の言葉は意外なほどである。一つはつきりしているのは、二の憤りは、既得権者である一部特権階級の貴族を念頭においていることである。血筋と生まれに安住し惰眠をむさぼる階級に対して、デフォーは強烈な反感を持っていたと思われる。

デフォーは『生粧のイギリス人』を書いた1701年の数年後の1707年に起きた、イングランドとスコットランドの合併という時代を画する出来事に大きく関わった。1707年1月、「スコットランド議事会議事録」の陳述52条において、デフォーは合同の後、スコットランドの封建的な階級特権を温存する「一」と反対している。以下はその『グレート・ブリテン合併史』の関連部分である。

「一」で意味している「優越性」とはスコットランドの貴族層が人民に対して持つ封建的階級の中での特権である。「一」の部分の解釈は拡大され、首領やクランの頭や地主や教区の土地所有者に、虐げられた貧乏な人民の身体や品物に対する完全なる統治権を与えていた。「一」とはスコットランド固有の、そして全ての自由国家一般の平和や発展に全くそぐわないものであると考えられる。<sup>115</sup>

また、372—3行で言われている批判措辞は極めて興味深いものだ。彼は「生粧のイギリス人」は矛盾である。言葉として皮肉であり事実という点では捏造(フィクション)である」と言う。イギリスという国が旧弊なものとして制度の中に抱え込んでいた矛盾、硬直したもの、それをこの詩は「捏造＝フィクション」であるとい批判する。フィクションという言葉は概ね否定的ニュアンスで十八世紀使われていた言葉であるし、デフォー

は十八年後に書いた『ロビンソン・クルーソー』の序文において「この作品が「フイクションではない」と否定の身振りを示している」とからも、批判に適した単語ではあつただろう。

しかしこの箇所の少し前で、そしてこの後でこの詩が打ち出している、新たなる結合によって世界に伸張していく共通の名前はイングリッシュマンではなかつたか。そしてどういう出自を持つていてもこの結束に参加した人々は「生粹のイギリス性」を持つてていると言うではないか。こう謳ひてこの詩が打ち出そうとしている新機軸は、まさにこの詩がこの詩のレトリックと力で創生した「フイクション」なのだと私は考える。この詩は既存のフイクションを捏造であると断罪しながらも、自らの捏造によって、近代を切り開く要諦となりうる捏造＝フイクションを作り出しているのだ。私は、この詩はフイクション創世にまつわる作品なのだと考えるものだ。

というのも賢明なる人が言つてきたように、スコットランド人が

世界中を放浪して自分たちの種をばらまいたように、

そのようにして、気前のいいイングランドは(そう信じられているのだが)

世界中の落ち穂を受け入れてきたのである。(37-8—81)

スコットランドは世界に拡がつていく。イングランド人は世界からの移民を引き受ける受容者である。注目すべきは、この詩でデフォーはイングランド・スコットランド合併を視野に入れて、この両者が相互補完的に連携しながら世界伸張の基盤を作ることをこの段階で示唆している点である。

イングランドこそ神の命を受けた国だと考える人もいる。

神の福音は世界中に届けられるべきである。

神の祝福の言葉がこの国に届けられてからというもの、

その言葉は全ての国に伝道すべきなのである。

美德こそが、高貴な身分を与えるべきものだ。

さもなければどこに貴族を捜していいのか誰にも分からない。

というのも、外国人に由来しない貴族の家系は

ほとんど全く存在しないのであるから。(3882—9)

イングランドがスコットランドと合同して世界に植民活動を拡げるとき、その道德的根柢として、宗教＝神の名が借りてこられるというのは常套手段である。ここにきて、雑種国家であるイギリスはイングリッシュという共通の名前による統一によつて、内的不和から反転してその目を外国に向け、「神から受けた使命」を完遂すべきであると語られる。

「美德こそが高貴な身分を与える」という断定は、「高貴さ」は生まれによるものではなく、新たに身についた個人の刻苦精励による「美德」こそが「高貴さ」なのだという主張である。つまり「生まれによるジェントルマン」は否定され、「功績によるジェントルマン」こそが、近代国家の担い手になるのだというかけ声であると言えよう。(二六。)の美德称揚は作品最後の行に接合していく。

過去から一旦自分たちを切斷した上で、国家としての共通意識を持つて世界に延びていく国家を創世

する。そしてそれをなしうのが、「美德」("Virtue")を努力によつて身につけた新興階級である自分たちなのだと、いう「近代国家樹立宣言」として、これまでの箇所を読む」とが可能なのである。

## 7

第一部は以上、イングリッシュショマンの由来を辿つたもので、第二部はその性質を謳つてゐるが、直接本章の論旨に関わる部分は少ないので詳述はしない。ただ、そもそもこの詩がかかれた動機がタッチン批判であつたわけだが、そのタッチンを「似非ホイッグ党員」("Shamwhig")として直接風刺してゐる部分が第二版以降削除されてゐる事実は注目に値する。

当初の執筆動機が個人や作品攻撃であつたものが、その風刺の意図を超克して独立した作品となる」といがしばしばはあるのは、フィールディングの『シャメラ』(1741)から『ジョーゼフ・アンダルーズ』(1742)へ至つた経緯などに典型的に見られるが、『生粹のイギリス人』にもそれが看取される。

第二部ではイギリス人の持つ性質が述べられ、その後具体例として人の名があげられるという詩の展開になつてゐる。例えばイギリス人の「酒浸り」という性質があれこれと描かれ、末尾に典型的例としてチャールズ一世の名が挙げられる。同じように、「イギリス人は従属を嫌惡する」という性質を述べてゐる途中で具体例としてシャムウェイッグ(タッチン)風刺が導入され、その後再び「隸属状態嫌惡」の主題に回帰してゐるので、実質上、第二版以降の削除版でも作品の主旨に変化はなかつたと考えられる。現に十九世紀になつてもこの作品が読まれたのは、近代国家創世宣言としてであるわけだから、作品執筆当初のタッchin批判という目

的は、作品そのものの意味について後世には重要なものではなくなつたわけだ。

「隸属状態嫌悪」という問題は、名誉革命再評価の部分に繋がつて、さういふは重要な君主と臣民の関係が謳われる事になる。デフォーの取る立場は基本的にジョン・ロック風の社会契約説である。名誉革命の時のように君主と臣民の相互契約("mutual contract")が侵犯されると、お互いに対する責務も雲散霧消する」とになる。そのような事態は好ましいことなく、単なる混乱であり、そうなれば

恐るべき乱雑交なる群衆がヒュドラーの「」と横たわるのだ。

法が復活し相互契約が結びつけるまでは。

.....

もし民衆が一人の国王に國の舵取りを頼むなら

その良心にかけて、従う義務がある。

しかしまだ国王は自分の宣誓によつて

政府の要求に同意する必要があるのだ。

もしそれを破るなら、自分の後の王位継承権をも切り離すことになり、

権力はその起源に戻る」ことになる。(810—1, 814—9)

第一部ではイングリッシュ・ヤンの起源は雑種性で、混乱であると論じられていた。しかし、ソードは、無政府状態、国王不在状態を「混沌」と捉え、その乱雑で雑種な状態から、国王と臣民の一者間の「契約」によつて

脱出すべきであるという論調に変化している。

これは第一部の最後の「美德」と「共通性」による前進という宣言文からの連続であると解釈されよう。イギリスの現状は雑種であり、過去の起源も異質性を特徴として持っていた。しかし今「契約」「美德」「共通性」を合い言葉に統一に向かうべきであるという檄が飛ばされるのだ。

この檄の前提条件は、国王と臣民の「相互契約」であった。詩はこの後、女性として表象されるイギリスの象徴のブリタニア女神、その窮境を救うべくオランダから招聘された素晴らしい国王のウィリアム三世、そしてそれを支えるべき国民、の三者を扱うようになる。この三者が一丸となって未来に向かうべき姿が描かれる「ブリタニア女神の歌」を分析してみよう。

## 8

ブリタニア女神はイギリスの大地を支配する神である。女性としてのイングランドは第一部では娼婦のイメージで語られた。しかし作品のレトリックにより征服が合意にすり替わっていくうちに娼婦は女神に、イングランドはブリタニア女神に変身する。女性像として想像されたイングランドは男のセクシュアルファンタジーによつてレイプの対象として描かれるが、征服は合意に強姦は和姦に反転し、ついには崇め立てられイギリス統一のシンボルとしてのブリタニア女神が出現する。娼婦は女神に逆転させられる。

今日、ブリタニアは依然イギリスの統一のシンボルとして崇められているが、1665年イギリスの貨幣に初めて描かれたブリタニア神像が、デフォーの1701年の詩でインボケーションの形で召喚されて、国家形成、

国家統一の錦の御旗となつたのは想像に難くないところである。

では、ブリタニアという女性の神とウェーリアムという男性の国王の関係はどうなつてゐるだろうか。ブリタニア女神の謳うウェーリアム贊歌は全土に響き渡つてゐる。ウェーリアム三世はブリタニア女神にとつての英雄であるという。ウェーリアム三世はイギリスという国を救済する救世主として船に乗りやつてきたとされ、彼は自己の恣意的権力行使のために統治するのではなく国民の自由を確保するために支配をするのだ。

彼は肩書きを詐称するための詩行を必要としない、

そして行動で実証すべきことを言葉で粉飾したりしない。

「ブライの物語から似たような話しを持つてくる必要もないし、神のような王の話しのたとえ話も必要がない。

借りてきた名前で、わたしのこの生きた主題を偽装する必要もないのだ。

わたしは直接ここで、名前と事柄を宣言しよう。

偽りのない偉業が彼の栄光を高める。

それらが高めている人、その人を褒め称えることに躊躇はない。

「このような主題について誰もはにかむことはない。

美德とは、へつらいの手の届かない先にある。

彼には自分自身の栄光以外に必要な物はない。

へつらうようなどんな肩書きも必要なく、自分の名前だけでよい。

ウイリアムこそが全ての人が口にする名前。(919—31)

世間の多くの詩は不必要な文飾や借り物の名前("borrow'd Name" おひこな)によって人を褒めそやす慣習を持つが、ウイリアムに関してはそのような必要はないと言われる。そして「ド・ハーリー」と名前の宣言が行われる。デフォーがそのほとんどの作品に署名をせず、そのフイクションにおいてはほとんどの主人公が「名前の隠匿」=匿名化を行つてゐる事実を考えると(第三章参照)、「の名前の宣言は極めて異例なことである。

「」でウイリアムの名声を保証してゐるのは彼の「偉業」("Merit")であり彼の「美德」("Virtue")であった。この両者とも血筋の正統性によつて生まれ持つてゐるものではなく、一個人の努力で勝ち得るものである。すなわち、第一部の最後で宣言された未来への邁進する一個人の代表がウイリアムなのだ。ウイリアムはウイリアムとしての偉業により名声を勝ち得たのだ。

ウイリアムこそが全ての人が口にする名前。

ウイリアムこそがわたしの歌の愛すべき主題。

汝乙女たちよ、この魅惑に充ちた音を聞くがよい。

そして永遠の舞踏を踊つてそれを皆で回すがよい。

この祭壇におまえたちの若き供物を捧げるがよい。

ウイリアムを、愛する者であり王たるものにするのだ。

彼が何者にも屈服せず、ただ汝たちの腕にのみ屈するようだ。

そして決して征服されないように、汝たちの魅惑以外には。(931—8)

「」で乙女たちと言われているのはイギリス国民のことであり、国王と臣民の関係は男と女の関係として隠喩化されている。国王と国民には愛し愛されるものとして、合意のもとにお互いに身を任せ会うべき」とが述べられ、「性的関係の比喩は國家統一の比喩として語られる。

この関係は第二部で論じられた相互契約というよりも官能的なものであり、論理を越えた性愛の様相を呈している。さらにその性愛は征服と屈服という支配のイメージと絡めて語られる。現実に行われているのは、ブリタニア女神がその権威によつて乙女たちを供物としてウイリアムに差し出す、つまり女衒としてイギリスの乙女たちとウイリアムを関係させていることであり、これは太古にイギリスという女体を外国に売り払つた商人や牧夫と機能的には相同である。

しかしこの「ブリタニア女神の歌」においては、女衒の機能を司るのは絶対の権力を持つた女性の神であり、ブリタニア神は戦う女性(Warrior Woman)と言われる」とから、ショーンボーン説によればデフォーに取つて戦う王的存在であるウイリアム三世と補完的に一体になり、それが国民である乙女たちと関係を取り結ぶことを正当化するように諷諭している。もちろんウイリアム三世と同時即位したメアリーとの関係も連想されうるだろう。さらに言うと、作品の途中に呼び出された神もあわせて、「神」「君主」「ブリタニア」という三位一体となつた存在の「名」のもとに、国家としてこれから世界に伸張していくイングリッシュマンの生粹性を、新たな「名前」として高らかに宣言しているのだ。

「生粹」の「イングリッシュマン」とは三位一体の権力という庇護の元に、過去と断絶し個人の努力と「美

徳」やイギリスの将来を切り開くものであり、作品最後の詩行「個人の美德、それのみがわたしたちを偉大にするのだ」という宣言に連結し、見事に作品を終結させた。

## 9

しかし、第一部で「生粧のイギリス人」が「捏造」＝「ファイクション」であると睡棄された」とを想起すると、今この作品で新たな名前ひいては題名された「生粧のイギリス人」も同じく「捏造」であるとは言えないのだねうか。

ナレーハンヒとしてのネーション、つまり国家創世をナラティブとして論じたホミ・バーバは、その論文「国民の散種」("DissemiNation")において、国民という存在を、語りという行為の遂行に置いて構築されたものと規定する<sup>11)10</sup>。やつてもうに先に引用したルナンを参照しながら、国家という物語を創世するのは過去を忘却するという行為であり、起源におけるマイナス記号なのだとしている。さらに「忘却しなくてはいけないということが国家を思い出すことの根本要因になる。つまり新たに国民を住ませ、新たな闘争と解放をもたらす文化的自己認識の形があり得るのだ」という創造を行うことが根本なのだ<sup>11)</sup>と言ふ。バーバは、國家創世の物語は想像と創造の産物であるとするのだ。」の創造された国家創世物語は、私がデフォーに置いて指摘した」と、つまり「捏造」＝「ファイクション」を批判の対象としながら、まさにその「捏造」という物語＝ファイクションを産出するというレトリック構造がまさに国家創世言説の源泉になつてゐるという認識と通底している。

私の辿ったデフォーのマイクションを再検討してみよう。まず複数の集団間に亘る詩が見いだす「共通性」だが、これは異質性の消去による同質性の現出のように一見見えるが、これはイングランド、スコットランドなどが代表していたヨーロッパの崩壊という当時痛切であった喪失感という空白を埋める、ベーバの言葉を借りると「ホモジニティでない「グモニー」」<sup>11)</sup>の出現を逆接的に証明しており、何よりも1701年の段階で無理にでも締結（＝「捏造」）すべき、焦眉の急であったイングラム・スコットランド合併を見据えた議論であることは間違いない。

またの12行で「ウイリアム」そがわたしの歌の愛すべき主題」と唱うときの主題の英語は subject である。この箇所によって君主と国民が調和するのだという空想が語られている。しかしデフォーにおいて征服と合意が概念的に混乱をしていたことが象徴するように、支配者と被支配者という主体と客体は同じサブジョクトという単語の中で未分化の状態で留められていくように思われてならない。デフォーの近代国家宣言の深部には、暴力的ゲモニー抗争が甘い合意の性交にすり替わるセクシュアルファンタジーが潜在していたのではないか。

世界に伸張していくイングリッシュマンの名前の宣言は「神」「君主」「ブリタニア」という権威（オーサー）を借りていくことで成されたわけで、イギリス国民は主体として自らを宣言してはおらず、その意味で道徳的責任は一時棚上げにされているようだ。連合し統合した相手との蜜月は、「外」の「他者」に対する立場宣言を回避しており、「他者」はおそらくグレー・ブリテン合併によってスコットランドが愛し愛されるサブジョクトとして内部化したのと同じように、イングリッシュマンに結合していく仮想上の、また将来的なサブジェクトの一部として夢想される存在なのではなかろうか。

これら全ての国家形成レトリックにおいて棚上げになつた責任主体は三百年経つた今も棚上げになつたままで、現在の近代国家が抱える負債の根本になつてゐるようと思われる。このようなデフォーのレトリックは、「イギリス人の自信の現れ」というにはあまりに巧妙であると思われるのだ。

しかし、コリー・ヤンダーソンがイギリス近代国家論を展開するにあたつて、この作品を取り上げたいとは、極めて深い洞察力をもつてのことだつたと考へる。十八世紀初頭に身をおいて考へると、「捏造」という唾棄すべき名前を自分の攻撃対象にすり替えた上で新たな「名前」を謳うという修辞法は、国家形成というフィクションを支えるための理想的な嘘であり、そのコロニアルファンタジーは見事といふしかないものである。これこそがイギリス近代国家という幻想をはぐくむ起爆剤になつたのである。十八年後にこのコロニアルファンタジーがまさにフィクション(捏造)という形式である物語として再提出されるのが、他者を「野蛮人」として具象化した『ロビンソン・クルーソー』になるわけだ。

『生粋のイギリス人』のレトリックが産み出したフィクションはイギリス国家を創世したといえ、イギリス近代国家への駆動力はそのオリジン＝起源ともなるべきフィクションである『生粋のイギリス人』と『ロビンソン・クルーソー』を作り出したと言える。国家とフィクションは共謀者なのである。

フィクションはイギリス近代国家を創世した。イギリス近代国家はフィクションを創成した。

## 「捏造」から「ハイクシヨン」——フライデーの産出

1

ディフォーの長詩『生糸のイギリス人』の宣言した雑多な民族の結合した新たな近代国家像が、神話的とも言える衝撃を与えたことは、例えばアメリカ合衆国独立後の1782年にクレブクールが『アメリカの一農民の手紙』の中に書いた次の言葉の中にもうかがうことができる。

次に旅人が知りたいと思うことは、いれらの人々(アメリカ人)がどこからやつてきたかという、とです。彼らは、イングランド人、スコットランド人、アイルランド人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、スウェーデン人の混血です。これらの雑多な民族("promiscuous breed")のなかから、あの民族つまり今アメリカ人と言われてくる民族が発生したのです。<sup>34-1</sup>

アメリカ人という民族の起源を問う、クレブクールの第三書簡「アメリカ人とは何か」で描かれる上記の言

葉は、間違いなく『生糀のイギリス人』を意識している。「イギリス性」に疑義を挟みながら、新たなイギリス性を謳つたデフォーの言葉は、ヨーロッパ人の近代国家強化の動きに活力を与え、「イギリス性」はそのまま「アメリカ性」にも横滑りが可能となつたのだ。

この部分を引用しながら、植田和文氏は『群衆の風景』の中で、「ただし、」のヘメリティング・ポジトノ論からヨーロッパ人でない人種は排除されていた」と言う<sup>三四</sup>。確かに十八世紀の段階で、新たな近代国家成立を祈願する国々の中に黒人や黄色人が入つてゐることは極めて考えにくい。その意味で同じ移民問題を抱えていたとはいへ、ユグノー移民問題で揺れていたデフォーの十八世紀初頭のロンドンと、重要な登場人物がバンガラデシュからの移民である小説『ホワイト・ティース』(2000)が描く、移民問題にたゆたう二十一世紀のロンドン社会とは似て非なるものであったのは事実である。

黒人である「生糀のイギリス人」が、『ロビンソン・クルーソー』第三部、『真摯な反省録』のエピソードの中に出てくる。このムラット(白人と黒人の混血)の男は、とあるパブで紳士たちと会話を交わしており、極めて知識的で教養があり、生まれも良いことが如実に見て取られる。語り手ロビンソン・クルーソーは思い切つて尋ねる。「あなたはイギリス生まれなのでしようか?」

彼はたいそう冗談めかして、しかし彼の父に対する極度の怒りを表明しながら答えた。「そうですとも。わたしは生糀のイングリッシュマンです。父の恥ですが、申し上げますと、彼は自身イングリッシュマンでありながら、どういう訳か黒人女性と結婚するつもりになつたのでした。でも父は、生まれてきた子供がこの父の決断の記憶を呪い、それが故に自分の名前そのものを忌避するだらう」と

を知るべきでした。(三五)

この混血の男は「生粋のイングリッシュマン」と自称しており、デフォーの『生粋のイギリス人』の作品の主旨によれば新たなる名前を謳う資格があるかに見えるが、当の本人はその「名前を呪つて」いる。さらに「父が奴隸と結婚すると決めたなら…彼は奴隸としてわたしたちを産み、奴隸として育てるべきでした。でも父はわたしに恐ろしい顔を与え、次にわたしにジェントルマンの仮面を付けさせることで、二度も破滅させたのです」<sup>(三六)</sup>と言い、黒人と白人の混血という自分の生き立ちを激しく呪詛している。黒人のイングリッシュマン、黒人のジェントルマンは正に「言葉の矛盾」<sup>(三七)</sup>そのものだったのだ。

この部分は「親の誠実さ」について書かれた部分で、親は子供に教育を授け、子供を世に出す責務があることが論じられている。その最後の部分にこのエピソードが語られ、この混血男性の親は、「親の誠実さ」の論旨通りの誠実な教育をしたはずなのに、子供は皮肉にも悲惨な運命に至っている。これについて語り手は「これ以上言う必要はない」と言い、この男が「黒人の顔をした男の中で」一番謙虚で思慮深い人間だったと言うのみである。

このエピソードにより、「黒人の顔をした」者の範疇が全く次元の違うものとして捉えられていることは確認できた。それでは、人種が混じり合つても結束し、新たな世界を切り開くことができるのは具体的にどのように存在なのかを検証しなくてはならない。

最初に結論を言うなら、混血しあつても結束し、同じグレート・ブリテン人として世界に躍進できる存在の核となるものとして想定されているのは、デフォーという作家の本の「読者」なのではないか。英語という言語を読み、デフォーの作品を読み、その呼びかけに呼応できる存在、それは、当時は白人であり、ヨーロッペ人であり、キリスト教徒であったはずの「読者」である。『ロビンソン・クルーソー』が出版されて後に、この作品が世界各国語に訳されて、異なった種類の読者（いは）には日本人も含まれる）をもそのイデオロギーに感染させていった」とはその後の展開である。当時クルーソーが呼びかけていた「仮想の読者」を考察してみよう。

『ロビンソン・クルーソー』は、デフォーの作品で初めて「語り手」という存在が登場し、物語の構成に対しても意識過剰とも言える操作を行っている、作者59才の時の作品である。語り手は、思い出しながら昔自分の体験した（はずの）人生を粉飾し、昔書いた（はずの）日記も織り交ぜながら、ぎこちなく歩を進めている。

彼は語っている自分自身にも自信が持てず、行動している自分が遙巡し、書いたはずの日記もいつか消滅し、頼る相手も見あたらず、なるほど孤島で孤独な様であり、おぼつかない存在に見える。その彼が唯一仲間と言えるのは、どうも「あなた」という存在のようだ。

特徴的な呼びかけ方が「あなたにはおわかりやしないが」（"you may be sure"）という作品中何度も使われる表現である。難破船で最初にすぐき」とが海水で痛んだ物と大丈夫なものを分ける」とだといふ」と三八、わたし（クルーソー）が今年の収穫の小麦を注意深く保管したこと（一七九）、いろいろな作業をしながらもわたしは島の反対側から見かけた大陸のことを思い煩つていたこと（一二四）などに、「あなたはおわかりやしないが」と、読者はしきりと理解を求められる。明らかに語り手は、自分の行動に関してその了解者として読

者を引き込もうとしている。この表現は孤島に流されて様々な経済活動に乗り出す前半部分に特徴的に見られ、確信を持つて行動できない語り手クルーソーが、読者をその行動の保証人としてわざわざ呼び出しているようにすら見える。

語り手は自分の日記を作品中に挿入するとき「う言う。「わたしはそれから日記を付け始めました。その写しを……あなたにお渡しします(ただ、これまで述べた細目がもう一度その中で語られる)ことになりますが」。日記が続くまでの分を。というのは、インキがなくなつたので、途中でやめざるを得なかつたのです。」(6)

日記は確かにその次のページから始まつてはいるが、読者は決して現物を手渡されたわけではない。日記というプライベートなものを、……でシンボリックに譲渡されることによって、読者は語り手の最も信頼する情報共有者として「共通性」を分かち持つ存在として確立される。

1701年『生糀のイギリス人』を書いたデフォーが十八年後に書いた最初のフィクションで登場させた語り手は、読者との結託を謀つている。読者は徐々にその教唆に乗り、共謀者として作品での地位を築いていく。後に『ロビンソン・クルーソー』の序文を検討する時にも議論するが、「読者」は「楽しみの共有者」であり「教化の対象」であった。その読者は「あなた」という囁きを聞きながら、語り手と結託して一種の仮想コミュニティのようなものに引き込まれていく。楽しみを共有しながら教化されていくのだ。語り手は価値観を共有する(もしくは語り手が価値観を共有すると想定している)「読者」との仮構世界を構築していく。『ロビンソン・クルーソー』の中で語り手と結束する存在とは、「読者」となりうる価値観の共有可能な相手のことだったのだ。

「」で価値観を共有したいわば「共通の名前」を持つ「読者」と共に築く仮構世界は、ある社会のイデオロギー装置のもとで駆動する、仮構・想像の名前、つまりは実のところ「借りてきた名前」なのである。「あなた」として招来された読者たちと語り手の空間は「仮構のイデオロギー空間」と名付けてもよいだろう。読者はこれからこの仮構の名前の集団に属しているように作品では描かれているが、これは作品が施す詐術によるものである。徐々に「あなた」「あなた」と何度も甘い声で呼びかけられていく内に誘惑されていくのだ。読者を被勧誘者と言つてもよい。

しかし、気がつくと読者は重要な共謀者となつてゐる。「これをわたしの統治の時代と言つて良いのか、それとも虜囚の時代と言つて良いのかお好きに呼んでいただきたい」(137)と判断を迫られたり、語り手が他者と自己が区別のつかなくなつた状態に關しての決断を迫られたり(142)、果ては語り手が野蛮人を殺したときカリブ人たちがいかに狼狽していたか「おわかりでしょう」(234)と殺人の目撃者にまでさせられてしまう。「仮構のイデオロギー空間」たる所以である。

クルーソーは読者に、自分がこの孤島で「支配者なのか虜囚なのか」決定できないと言つた。なぜか。彼は船乗りになるなどいう父の命令を拒絶して出奔し海に出たのであつた。彼は権威への反乱者なのだ。そのクルーソーは嵐によつて孤島に流された。これは、神の罰として、もしくは権威への反乱者として流刑囚として流されたのか、それとも彼は自らの植民者としての意志を持つて自ら島を「発見」したのか、決定されない。彼はいわばあらかじめ島流しされた未決囚である。反乱者であるなら、神＝父という権威との関係において、自らを幽閉された囚人として決済できるだろう。しかしそもそも父への反抗を「原罪」に準えるクルーソーは、樂園を追われたものとして労働に明け暮れる必要があるわけで、正に彼の島での生活がそうである以上、行

動しない監禁された「囚人」となる」とは不可能であるし、それでは近代の物語は始動しない。

であるなら、彼は支配者、植民者であるはずだ。しかし植民されるべき野蛮人という他者の居住地が不明である限り、彼は自分を支配者として確定できない。他者が不在ならば産み出すしかないであろう。愛し愛される甘い関係の「あなた」と「わたし」、つまり西洋人であり白人でありキリスト教徒である「語り手」と「読者」が結合した上で、支配者として自己規定する時、「他者」（おそらく黒人に類した人種）の存在、つまり被支配者の存在が必要で、その存在が産出されたとき、支配者はその逆照射によって初めて存在を確保できる。この問題はフライデー産出というこの第二章の第6節の議論に繋がっていく。

### 3

その前に、「仮構のイデオロギー空間」が、「捏造」から「ファイクション」へ変貌する契機となることを議論しておかなくてはならない。レナード・ディヴィスはその画期的な小説起源論、『事実とファイクションの狭間——イギリス小説の起源』において、小説がニュースと不可分であった時代から歴史を辿った議論を開いて、次のように述べた。「以前は出版されたニュースというものは全体として偽物だと考えられていたが、今では偽物」という言葉はイデオロギー的立場を表明することとなつた。偽物のニュースとは、対立した党派が出版したニュースのことを言うようになった<sup>(三九)</sup>。

偽物、あるいは捏造は「眞実」に対する概念であり、ある程度真贗は決着することが可能であった。しかしピューリタン革命以降、党派間抗争が激化し、政治的ペンフレットによつて議論が交わされていくうちに、「捏

造」は対抗勢力の出版物に冠される形容辞と変化したのである。確かにデフォーが『生糸のイギリス人』で捏造呼ばわりしていたのは、貴族の方世一系気取りを擁護する似非ホイッグ党員が「生糸のイギリス人」という言葉を使ったとき、そのイデオロギーを唾棄したときであった。

しかし、の「捏造」という概念は、そのイデオロギー性から独特の発展をしていくことになる。他人のの「」を「捏造」呼ばわりしながら、自ら新たな「名前」を捏造する」といそがイデオロギー鼓吹になるとき、そのイデオロギーを支えるのは、『生糸のイギリス人』という作品においては国王と結合された乙女たち(=臣民)であつただぬうし、『ロジンソン・クルーソー』という物語においては語り手と結合する「読者たち」なのである。すなわち、イデオロギー鼓吹の物語として、批判辞としての「捏造」が反転して自分たちの大いなる捏造の装置として発動する「フィクション」と変化して姿を現すには、の「仮構のイデオロギー空間」が不可欠なのである。『生糸のイギリス人』の夢想した新たな近代国家は、『ロジンソン・クルーソー』において、「あなた」という読者を呼び込む」とによって近代国家物語=フィクションとなることができたのだ。

#### 4

1701年から1719年に至る時代の変化を辿るためにデフォーの書いた二つの序文を比較検討してみよう。1705年に出版された、1701年の『生糸のイギリス人』を含む初めての著作集『「生糸のイギリス人」の著者の眞の著作集』(A True Collection of the Writings of the Author of True-Born

まず『第二著作集』の序文では、自分の作品に関して、とりわけ『生糀のイギリス人』に関して、多くの海賊版出版社が偽造版の数々を出版したために、自分が利益という観点で多大な被害を蒙ったことが述べられている。よしんば海賊版出版を認めるとしても、自分の原作が時には六十行も削除され、ずたずたにされているのは忍耐の限界を超えており、「子供の親が自分の子供を見分けられない」<sup>四三</sup>ほどだと言うのだ。

特に『第一著作集』の中では、デフォーの「偽りの著作集」なるものが出版され、それがデフォーという著者の名を冠してくること、それが著者の意図にそぐわないほどに間違いや削除が多いことを批判し、そのような出版社は「自分が手を染めたこともないいくつかの作品を厚顔無恥にも挿入した不正なる著作集を捏造したのだ」と書いて、「捏造」("forge")やまやかし("sham")という言葉で痛罵する。「まあねといふ、これらの事情こそが、これ(著作集)を出版するに至った本当の原因なのだ」。

これらの状況、つまり中傷的政治パンフレットが政府を風刺しても罰せられないままのさばる状況を是正

し、そして全ての人が自分の労働と勤勉の果実を保持するためには、デフォーは『第一著作集』の中で講ずるべき二つの方策を提案する。第一に、全ての著者が自分の書いたものに署名を書きつけること、もし署名がない場合、その本の出版社が本の内容には責任を持つ「著者」と見なされるべき事。第二に、何人も他人の本を勝手に出版しないこと、わかりやすく言えば、いかなる出版社も本屋も他人の家から盗みを働くこと四六。」の一箇条であった。

これは正嫡性、現代批評の言葉で言えばキヤノンに関わる優れて十八世紀的状況である。この序文自体の中でもデフォーも「誹謗中傷罪」(libel)に関して、彼自身「非国教徒処理小径」(1703)によつてもやに、の法律で投獄された経緯もあり、極めて慎重な発言をしている。さらに、現在に至るまで自分に帰せられた中傷の批判に応えそれら全てに反論している四七。

そもそもデフォーが提案する「著者が自分の著作に署名をすること」は、今日では当然のことと思われるかもしれないが、党派間抗争が熾烈を極めたパンフレット論争時代では、誹謗中傷を現実に行いがらも罪を免れるためには署名をしないことが最も簡便で習慣的に行なわれていたことであった。しかし「自分」の利益を確保し、「自分」の子供を他人が自分のものだと詐称しないためには「真性の署名」の必要がある。この矛盾した二つの要請を満たすのが、『「生まれながらの本当のイギリス人』』という作品の「著者」の「本当の」著作集』という、正嫡性を表す言葉を執拗にタイトルに畳み込んだ作品集を出し、かつそれにD·Fというイニシャルのみで署名を書いた、極めて折衷的な恣意行動だったのだ。

この著作集は、「事実／捏造」という曖昧な図式を生きていた当時のパンフレット作者たちの実体を典型的に反映している。ただ、本章で私が議論を展開している論点に絞ると、事情はそれほど複雑ではない。デフ

オーは単純に、イデオロギー的に反対意見の論者、及び海賊出版社という詐欺師たちに「捏造者」という汚名を押しつけ、自分は「眞実」であり眞性の「著者」であることをいふわけだ。

政治的書き物は、ディヴィスの言い方を借りれば、「ニュース／ノベル」という言説が「未分化の発生源」(“undifferentiated matrix”)<sup>58</sup>であり混交していく時代には、その曖昧性を保つたまま政治・文化の戦場に参戦する」とが可能であった。事実、第一章で見たように『生糞のイギリス人』は多分にフイクションや文学の要素を持つようになつていながら、政治的言説に大きく溶け込んでいく。

ところが、1712年の印紙税法(Stamp Act)が施行された後、課税対象となるニアースと非課税のフィクション・ヒストリーは、法によってジャンルを明解にする」と求められることになった。その後に出たのが私の扱う『ロビンソン・クルーソーの眞摯な反省』(1720)といつ、一いつ冊の序文である。この第二パラグラフを見てみよう。

著者　ムーア

嫉妬深い邪な性格の人々が、わたしの前二作(『ロビンソン・クルーソー』と『ロビンソン・クルーソーの

その後の冒険』)に関していくらかの異論を提起したと聞いてゐる。良き理性が欠如している彼らの悪い方によれば、物語は架空のものであり、名前は借りられたものであり、全てがロマンスに過ぎないということになる。そんな人もいなければ、場所もなければ、人の人生でそんな状況はあり得ないと言うのだ。全てが作り物で世間を騙すための捏造によって飾り立ててゐる、そんなことを書いてゐる。四九

」の序文は先ほどとは逆で、自分の著作への批判者が自分に対して「捏造」と「罵倒」をあびせて「」と  
対して憤っている。しかし序文の書き手は、そつくりそのまま相手に「虚偽」という言葉を返す。「わたし、ロ  
ビンソン・クルーソーは、神のありがたいご加護のもとに、現在完全に健康な精神と記憶力を保持しており、  
」に以下のこと宣言する。彼らの反論は捏造であって、その意図は醜悪で、事実の上で虚偽である。そし  
て、「」が、わたしの物語はアレゴリー的ではあるが、また歴史的でもあるのだと断言する。」捏造はやはり対立  
党派の特色であり、自分の物語はあくまでも眞性であると言うのだ。

」の発言の権威を増すために、『著作集』で述べた方策、「自分の名前を名乗ること」を彼は行っている。  
「一人の男が生きている」と…は眞実として信頼するに値し、このために、わたしは自分の名前を「」  
に記すものである<sup>五〇</sup>。「わたし」の名前は「ロビンソン・クルーソー」であって、」のよう自己の名前を宣言す  
る」と、『ロビンソン・クルーソー』物語の眞実性を保証するというのだ。」丁寧に序文の最後には Rob.  
Crusoe と署名しきものが付記されている<sup>五一</sup>。『著作集』のD·E という署名に比べればフルネームに近い物  
と聞えよう。

『著作集』の序文も『真摯な反省録』の序文も構造は同じである。両者とも自分を批判するものの発言を  
虚偽であり「捏造」であるとする。そしてその反論の根拠として、それを書いた著者=権威である自分の名  
前を名乗り、それが唯一絶対の論駁不能の証拠だとして宣言しているのだ。

しかし構造は同じであるにしても何かおかしい。デフォー・キャノンの研究者が行った実証的研究の裏付け  
もあり<sup>五一</sup>、『著作集』の著者がデフォーであることは認められるにしても、『真摯な反省録』で名前を名乗っ  
ているのは、『ロビンソン・クルーソー』第一部及び第二部で語り手として自分の物語を提示しているクルーソ

一なのである。語り手兼主人公であるクルーソーが著者に格上げされ、その権威によいで物語(parable=寓話という言葉で表現される)の真実性が確認されるというわけだ。

デフォーは『著作集』において、作品に署名するとの重要さを述べ、「ロビンソン・クルーソー」の第三部でも同じ主張を繰り返しているにもかかわらず、『ロビンソン・クルーソー』には著者名はなかった。この作品がデフォー作であると同時代の人間が即座に承知したらしいとは、皮肉にも「の作品を「ロマンズ」とあると批判した「嫉妬深い邪な」人間、つまり『ロビンソン・クルーソー』第一部が出版された一七一九年四月二十五日、第一部が出版された八月二十日に統いて、その批判文を九月二十八日に出版したチャールズ・ギルデンの批判書のタイトルが、『ダービー・デ・マー氏の生涯と冒險』<sup>ヨリ</sup>であったことに依つて見る。伏せ字にはなつてゐるが、無論これはダニエル・デ・フォー以外の何者でもない。

批判者によつてその正体を暴露されたにもかかわらず匿名を通しているデフォーが、なぜ自分の語り手=主人公に著者名を騙らせてまで、自分の作品の正統さを主張していくのだろうか。それは一つには、作品の意図が達成されてその道徳的目的が正当なものであるなら、つまり作品の価値があるならそれは正当である、他人に「捏造」呼ばねざれるいわれはないという、作品=フィクションに対する新たな価値観が醸成されただけだといふことだらう。デフォーは『真摯な反省録』の「嘘を語る」と「話す」中でその価値観を語つてゐる。「捏造」と「フィクション」の違いを述べた箇所だ。彼は他人が嘘をつき、「話しがちあげる捏造」("same forge of invention")を行つゝとを批判し、自分の物語はそうでないと主張する。

寓話、もしくはアレゴリー的な歴史を語つたり書いたりすることは全くそれらの行為とは異なっている。  
： それは人を教化する高潔な目的のために構想され、効果的にそれを行うものである。そしてその道徳を正しく適用させるものなのである。そのようなものとして聖書の歴史的寓話であるとか、『天路歴程』であるとか、言わせていただくなら、あなたの流浪する友人の冒險物語『ロビンソン・クルーソー』などが挙げられるのである。<sup>五四</sup>

）のような価値観は、新時代にあたってのジェントルマンは生まれによって地位を確保するのではなく、功績によって地位を獲得するのだという、デフォーが『完全なるイギリス紳士』で唱え、当時流布していた価値観と連続したものだ<sup>五五</sup>。当然作品を受け取る世間の変化もあり、フィクションが認知され、「嘘を騙る＝語る」ということが物語行為として認知されるに至った事情も関係している。

「捏造」が「フィクション」という物語として享楽される時代になつた重要な契機として、語り手の前景化が挙げられる。『ロビンソン・クルーソー』の作者は匿名であったが、この作品の語り手は、自らが語り手という権威であることを、先ほどの『クルーソー』第三部の序文で宣言している。これは実は鉄面皮な大嘘ではあるのだが、この捏造は、語り手による読者の取り込み、「仮構のイデオロギー空間」の成立により寛恕され、フィクションはフィクションとして社会的認知をされ、受容されるに至つたことを何よりも強く示唆してくれる興味深い宣言文と読むことが可能である。

語り手がかくも前景化したとき、本来の著者（オーサー）の原稿を受け取り、それを編集している（とされる）エディターなる存在は奇妙な緩衝地帯を形成している。『ロビンソン・クルーソー』第一部の序文を見てみよう。

ある個人の冒険物語で、かつてこの世で公開する価値があり、かつ出版したとき世に受け入れられるものがあるとするなら、この書物のエディターは、まさにこの書物こそがそれであると考える。

この物語は謙虚さと真面目さで語られ、全ての出来事を賢明なる人々が宗教的教訓としてご利用下さるよう考えられております。賢明なる人々はこの物語を範として他人を教化して下さり、全ての人生の状況において神の摂理の知恵を正しきものとし、言祝いでくださるのであります…。

わたくしエディターは、ここに書かれたことが、真実を描いた正しき歴史であると信じておりますし、またここにはファイクション（捏造）らしき様子も見られないであります。事実にしろファイクションにしろ、読者の教化と娛樂にためには、この書が啓発する分には変わりがないと考える次第です。（1）

エディターは『モル・フランダーズ』の序文執筆者（エディターとは自称していない）と違つて、元原稿を編集したとは書かれていません。彼は原稿を右から左に流すだけで、むしろ追従的宣伝文を書くことが役割で、一種の販促員であるかのようだ。彼の述べる出版の目的は、第三段落で「賢明な人」と「他人」＝一般人を区別は

して「るにせよ、最終段落で述べられるように、要するに読者の教化と娯楽であり、」の田的は語り手が責任を持つて読者に対しても果たしていくはずである。

」のエディターの最も大きな特色は、「の書物がフィクションであるのか事実であるのか」という、その当時は重要であつた区別についても、全く確信が持てていないとある。彼は事実である」とを「信じる」しかないし、フィクションであるかどうかもその外見("Appearance")がそれらしくないという内的要素による判断しか下せない。挙げ句の果てに、書物の目的や達成できるなり、事実であろうがフィクションであろうが拘泥する」ことはないとまで言つてゐる。

」の序文の中で最も重要なのは、「これが「個人」の物語でありそれが「公」開されでいる点であると考へる。私人("private Man")が公("publick")人に変化する」といふ、「の物語が出版される意義である。私はたつた一人きりの、例えて言えば孤島のクルーソーのような存在である。その私人の物語を公開する」とで、多くの読者がその物語を読み、教化され、娯楽を享受する時、私は公人になる。クルーソーという孤独な語り手は読者という仲間を手に入れ、読書空間という「仮構のイデオロギー空間」を共にする」とになるのだ。ディヴィスの言うように「人々は巨大な意味生成制度を読解し知覚する」とによつて、出来事に対する自分たちの感覚がコンテクストを共有したとき、初めて近代の、イデオロギーとともにまた集団として結束させられる」のである。

その時、作品は「事実らしさ」という捏造から近代的物語である「フィクション」性を獲得する。エディターは、フィクションという作品の特質に關して十八世紀フィクションにおいては異例とも言える自信の欠如を見せた。この作品が次のページで始まつたとき、歴史上初めての形でのフィクションが展開していくことになる。」

のフィクションの異例の力強さに、エディターは異例の自信の無さを示しているのかもしれない。『ロビンソン・クルーソー』はフィクションを創生した。また、フィクションを創生させたのは、ある特定のイデオロギー基盤を持ったイギリス近代社会であった。

## 6

ところで第2節に戻つて考察を進めよう。語り手と読者が祖型となつた「仮構のイデオロギー空間」は多大な読者集団を巻き込み、近代イギリス国家のイデオロギーを反映し、またそのイデオロギー形成を助成する」となつていった。この空間は、1707年に移民をも含めた連合王国という一応の法的国家形態の完成を見ながらも、ジャコバイトを始め正嫡の座を狙う内外的な脅威に晒されていたイギリスが、自分たちの姿勢を世界に誇示する必要性に駆られたことと密接に絡み合つている。当然、複雑な国家構成を持ち、異なつた利害関係や異なる階級を含む雜種国家であるイギリスが内外的な危険要因を孕んだ複数のイデオロギーから構成されていたことは間違ひがない。

その複雑なイデオロギーの絡まりあいから逆転して、「共通性」によつて世界に伸張していくといふ『生粋のイギリス人』の発想は、多分にユートピア的であった(第二章参照)。それはピューリタン内部のイデオロギー対立に直面して、それすら「統一」できないデフォー(第八章参照)、そしてスペイとしてスコットランドとイングランドを数知れず往復し、グレート・ブリテン合併にこぎ着けたとはいえ、数々の難問に直面したデフォーには痛いほどわかつっていたはずだ。

現実に複数のイデオロギー間の調整が極めて困難とするなら、「フィクション」の中でなら、疑似体験、もしくはイデオロギーの実験は可能だ。デフォーは『ロビンソン・クルーソー』の語り手を創造し、彼の体験と読者との仮想共同体意識の世界を構築することで、複雑な現実の中の異種混交的イデオロギーをかなり単純化することに成功しているように思われる。

支配的なイデオロギーとは…自己に対するへ他者へを認知せざるを得ず、潜在的に破壊する力を持つこの他者性を自らの形態の中に刻印するのだ。バフチーン的言い方をするなら、支配的イデオロギーはモノローグ的になるためには、つまりその臣民に確信を持った権威者として語りかけるためには、同時にへ対話的になる必要がある。というのも、権威者のディスコースですら他者に語りかかるべきものであり、他者の反応の中にのみ生きることができるのであるからだ。<sup>五七</sup>

右はイーグルトンの言葉であるが、クルーソーは孤島で孤独でありながら、常に自分自身とのへ対話へといふ「一人だけの会議」を行つており、さらには話しかける読者を想定している。この彼の物語というフィクションにイデオロギーが忍び込んでくるのは、まさにクルーソーが「仮構イデオロギー空間」を生きているからに相違ない。クルーソーはこれら仮想的他者を越えて、後にフライデーという現実的他者を産み出すに至る。

十八世紀の中で特に啓蒙の時代の中で新たに私を語るための一つの枠組みとして、主体が起つてきただといふことは認めなければいけないのでないのではないか。…主体はいつも自分ではないものを指定する

「(この) によって『自己』を対象と分離します。その分離するところが一つ、分離したところにその分離したい」とを分離するものと分離されたものの関係性として保持する」とが挙げられなければならないのです。つまり主体性の問題がどうしてか否定性の問題と結びついてくる…。<sup>五八</sup>

1)の酒井直樹の発言は重大な示唆である。分離する他者、否定すぐき他者があつて逆に主体は近代的主体足りうるわけで、それが不在であるとき、第2節で指摘したように主体は十全足り得ない。『ロマンソン・クルーソー』が他者を産出する物語になるのは、フィクションのアーティタイプとして確立するための必要条件だったのである。

7

クルーソーは嵐の中荒海に呑み込まれ、何とか島にたどり着いた時、再誕生した。「わたしは、息をつくために大波から自分自身を解放する("deliver myself")」ことができなかつたのです。」クルーソーを呑み込む大波は身体("own Body")を持つんだが、その波はクルーソーを呑み込む("swallowed", "buried")。」の身体から自分自身を解放する」とは、岩尾龍太郎も指摘するように<sup>五九</sup>、自分自身を女性の体内から出産する行為であり("delivery"=出産)、彼自身そのものを「わたしの出産=救出("my Deliverance")」と言つてゐる。

そもそも移民二一世であり、しかも末っ子(三男)であるクルーソーは、父親の薦める「中庸」以上の生活は

望むべくもなく、自分自身の生まれを手放しで喜ぶ気持ちでなかつたのは間違いない。混血で上流階級でもないクルーソーは、「生まれながらのクルーソー」(gentleman by birth ならぬ Crusoe by birth)として十全でない時、自分自身の功績をうち立てる」と「クルーソー」という名を勝ち取らなくてはならない。自分の「出産」に満足できない以上、自分自身を別の形で再出産するしか彼には選択肢がなかつた。奇しくも自分の誕生日と同じ九月三十日、クルーソーは波という水の中から孤島に産み落とされる、もしくは自分自身を「再出産」する。

フィクションは「神の言葉」に加えられた余剰の言葉であり、神に代わる人間の価値観の探求である。デフォーがフィクションを書いたというまさにその事実が、神の言葉から一步踏み出す逸脱の行為、つまり偽りの言葉＝フィクションを紡ぎ出すことであった以上、その主人公が父という神の言葉＝権力に盲従することは全く考えられない。「クルーソーがなぜ父親の家を出奔するのか」という問い合わせに対しては、ジョフリー・シルが指摘するように、數え切れないほどの解釈が加えられてきたが<sup>六〇</sup>、そもそもその問い合わせの立論が間違っているのではないか。『ロビンソン・クルーソー』という物語は、そもそも「権威」から「個人」に視座を移した物語（「神の物語」）でない近代の「個人の物語」）、つまりフィクションとして書き始められた以上、まずクルーソーは、当然、近代を生きる個人として「家を出」て早々と独り立ちするのである。

クルーソーの父親は、命令を聞かず家を出て死亡した兄の例を出し、クルーソーを諫めるが、彼は「例」から教訓を得るはずもない。序文のエディターはクルーソー物語を「例」にして読者が宗教に適つた行動をとるだろうと楽観的な観測を行う。が、もちろん十八世紀からクルーソー物語が「例」となつて、新世界の大地を目指した数知れぬ多くの若者が海に乗り出していったのである。前述した同時代人のギルダンは、不思議

な」と『ロビンソン・クルーソー』がその本の至る所で船乗りになることを諫止しようとしているため、船乗りの才能がある若者を思いとどまらせる心配があり、悪影響の上もないものである、と書いて批判しているべ。が、もちろん『ロビンソン・クルーソー』は船乗りの良き（表向きのモラルからは悪しき）「先例」となつたのであつて、デフォーもギルダンも、近代社会の上昇する若者は新世界を目指すべきだという考え方において袂を分かつことはなかつたのであつた。

新生の一個人として孤島で生活を始めたクルーソーは、フィクションの語り手として「あなた」という読者との結束を固めていくことは既に第2節で論じた。そして樂園を追放された男として労働に明け暮れる」とも論じた。労働は、labourでありそれは陣痛の意味でもある。苦しい労役を何十年にも渡り行いながら彼は、極めて長きに渡る陣痛に耐えているように見える。クルーソーは新たなる個人として出産され、「仮構のイデオロギー空間」を無数の「あなた」たちと共に共有＝性交しながら、何かを産み出そうとしている。『ロビンソン・クルーソー』は、誕生にまつわるフィクションなのだ。

長年の労働によって彼は島をプランテーション化していく。彼は島をくまなく探し、ヨートピアにも似た豊穣な土地を見つけ、長く厳しい労苦が報われたと感じ、この土地の領有宣言を行う。

…この地が全て自分のものであるという喜びを持つて眺めた。わたしは何人にも侵されない、この國の王であり領主であり、占有権を有するものである。もしわたしがこれを子孫に残せるものなら、わたしはこれを相続財産として持つことができるだろう。イングランドの莊園領主と同じぐらい完璧に。

イングランドの土地を後にしたクルーソーは、この新世界で自らをイングランドの貴族に喻え、さながら貴族として自己を確立したかに見える。権威を捨てて、自らの努力で権威を樹立する、「これこそ「仮構のイデオロギー空間」でなし得る植民行為である。

ただ、他者の不在の中での権威は自己満足の空中楼閣に過ぎない。この後も様々な「労働」や困難を経て、なお以前引用したように、彼は読者に自分が支配者であるのか幽閉の身であるのかを問うている。不安は解消していないのだ。

仮構の「わたし」を仮構の「あなた」で支えているクルーソーにとって、初めて「わたし」と「あなた」の間に混乱を来すのが、一匹の鸚鵡であった。

わたしは疲れていたので眠ってしまった。しかし、できるものなら判断して欲しい、あなた、わたしの物語を読んでいるあなた。わたしがどれだけ驚愕したことか。わたしは眠っているとき、わたしの名前を何度も呼ぶ声に目を覚ましたのだ。「ロビン、ロビン、ロビン・クルーソー、あなたはどこにいるの、ロビン・クルーソー。あなたはどこにいるの、あなたはどこにいたの？」（142）

長い間産みの苦しみに耐えていたクルーソーがついに他者を産み出し、彼を「あなた」と呼ぶ存在が出現したかに見える。しかし、これは流産された他者であった。「あなた」と呼ぶ他者は、クルーソー自身の声を真似た鸚鵡の声であり、呼びかける他者は他ならぬ自分であったのだ。「あなた」は「わたし」でしかなかつた。

」の場面は「わたし」と、わたしが呼びかける読者の「あなた」と、わたしに呼びかける声の「あなた」とが交錯し、自他の区別が一瞬攪乱する、幻惑的な場面である。クルーソーの他者を産出させようとする努力が意外な形で物語のエピソードとなり、共感を求められる読者の「わたし」もこの錯乱に巻き込まれる。クルーソーに「ど」にいるの、あなた」と呼びかける声は郷愁を誘うぶるさとの声にも聞こえるが、未来に産み出される他者がらのいざないの声にも聞こえる。

十一年目に入り、クルーソーは再び自分を島の絶対君主であると想像しながら、他人の存在を希求する。その時彼は自分自身の姿を他人の視線で眺める。「もしイングランドの誰かがわたしのような人間に会つたとするなら、恐怖に戦慄するか大爆笑するかどちらかであろう。わたしはしばしばじつと立つて自分を見ていると、自分がこのような出で立ちと服でヨークシャーを旅行したらどうなるだろうと考えて微笑を禁じ得なかつたのだ。」(149)この後彼は微に入り細をうがつて、自分の姿を描写する。誰も見るものがないのに、なぜこれほどまで執拗に自分の姿を描くのか。クルーソーは、彼をどこから見つめる他者が近くに迫つてゐることを感じ取つてゐるようだ。

クルーソーはもう一度「あなた」に、「わたしは今では『わば』の島に二つのプランテーションを持つてゐるという」とはあなたにはわかつていただけると思います」(151)と、土地領有の確認を取るのだが、その後に不完全な他者が可視化する。海岸に残されたたつた一つの裸足の足跡である。

この不完全な他者はクルーソーを震撼させる。「あなた」と「わたし」の甘い幻想の世界が現実のイデオロギー空間になるためには、恐るべき「他者」が完全なる姿で出現するという恐怖を経なくてはならない。クルーソーは他者を産み出そうとしているはずなのだが、自分の子供は恐怖の対象でもある。ましてや、他者はこの

たつた一つの足跡のように、不完全な存在、産み落とす」との出来なかつた胎児のような、不完全な身体のイメージを伴うのだ。

現実に、解体されたばらばら死体としての他者は、カリブ人たちが捕虜を食人した宴の後にクルーソーが遭遇する場面に見られる。浜辺には「複数の頭蓋骨、複数の手、複数の足、人間の体のその他の骨が散乱していた」(一〇四—五)のであつた。その光景のあまりのおぞましさに「自然とわたしの体から悪いものが吐き出されたのだ」(一〇五)。嘔吐するクルーソーの描写を直訳すると「自然がわたしの胃袋から無秩序を吐き出せた」("Nature discharg'd the Disorder from my Stomach.")ところになぬ。クルーソーは勤勉実直な労働と西洋的時間を島にわたりのすりむけ、秩序をもたらしたはずであった。西洋人の彼に統御できない島の無秩序は、彼の身体から排泄される。別の言い方をすると、非西洋的な無秩序は統御すべき世界観の一部として取り込む必要がある。」の無秩序は、私の議論では「他者」なのだ。統御すべき無秩序は、産み出した上で自分の子供として取り込まなくてはならない。クルーソーは單に嘔吐したのではなく、内臓の中で育んだ他者を出産しようとしたのだ。しかし今回も死産であつた。

孤島生活二十三年田の嵐の夜、難破船が近づく。救助すべく一晩中クルーソーは火を焚き続けるが、そのかいなく船は沈没する。クルーソーは、一人でもいい、生き残ってくれればと言葉に出して祈る。

「の願望はあまりにも強いものだったので、」の言葉を言うとき両手は組み合わされ、指は手のひらに食い込んだので、何か柔らかいものが間にあつたら知らぬうちに握りつぶしていくことだろう。そして歯をあまりにも強く噛みあわせていたため、しばらく口を開くこともできないほどであった。(一八

「これほど痛切な他者希求の言葉をクルーソーはこれまで吐くことがなかつた。他者は恐怖的であつたが、恋いこがれる対象でもあつたのだ。彼の言葉もむなしく生存者はおらず、ただ「一人の溺死した少年の死体」(1888—9)が涙辺にうち寄せられただけであつた。」この少年はおそらくヨーロッパ人のはずで、そうなるとクルーソーにとっての他者性は薄らぐはずだが、「彼の身につけているものや、*ヨーロッパ*の国出身かの手がかりになるものは何もなかつた」(189)と言われ、国籍不明の匿名である溺死した少年と「うことになつてゐる。」の溺死した少年が、クルーソーが産み出そうとして流産してきた数々の嬰児死体のうち、最後のものとなる。クルーソーが心から産み出したいたいと思つた情念に応えて生まれ出たのは、死んだ少年でしかなかつたのである。

完全なる他者は、野蛮人であるカリブ人の人食いの宴から逃走した捕虜の形を取つてクルーソーの目前に現れる」とになる。クルーソーがフライデーと名づけたこのカリブ人は言葉を発し、それは何十年ぶりにクルーソーが聞いた「初めての人の声」(204)であつた。命の恩人にうまくなりおおせたクルーソーに、フライデーは完全服従、手足となつて働き、理想的な臣民となる。クルーソーは自分を「主人＝“master”」であると教え込み、君主対家来関係が理想的なプロットの詐術で完成する。

クルーソーはフライデーを救出する前にほほそれと同じ光景を夢で見てゐる。「夢」はデフォーにおいて、しばしば神のお告げであり、そつと未来を教えてくれる<sup>ムーン</sup>("secret intimations")である。「夢」で見た」とやものは現実を招き寄せる甘い囁きであり、夢は授精させ、クルーソーは想像妊娠する。クルーソーの

想像妊娠は、次のエピソードで本当の子供を産出する。遂に現実となつて現れた他者であるフライデーの「わたしとの間に繋がれた絆と愛情は父に対する子供のそれ」(209)であった。

イギリスの言葉を覚えたフライデーにクルーソーがyouと呼びかける興味深い会話が交わされる。

わたしは言つた。おまえはいつも戦いに勝つてきたといったではないか。それでは、なぜおまえは捕まつたのだ、フライデー。

フライデー それでも、わたしの国たくさん、勝つた。

主人 勝つだつて？ おまえの国が勝つならなぜおまえが捕虜になるのだ。

フライデー わたしいた所、わたしの国よりやつらの数多かつた。(214)

この会話でのyouは「あなた」とは訳せない。一方的尋問だからだ。クルーソーはフライデーを「おまえ」と繰り返し言うが、フライデーは「あなた」とは一度も言わない。実際、第二部半ばのフライデーの死亡に至るまで、フライデーがクルーソーを「あなた」=youと呼ぶのは、神と悪魔に関する議論においてフライデーが反論する一箇所のみである(218)。語り手の読者の「あなた」と「わたし」の親密な関係には到底及ぶところではない。

しかし別の意味での親密さをクルーソーはフライデーに感じているのであって、フライデーが祖国に帰りたいという願望を口にすると、言いしれぬ嫉妬を感じる(224)。フライデーはクルーソーの欲望を充足する者として産出されたのであって、同等の立場で「あなた」と言うことは許されないと同様、主人以外の者を愛

する」とも許されない。奇妙なことだが、この嫉妬を口にする語り手クルーソーは「あなたもおわかりでしょ  
うが」という例の台詞によつて、読者の同意を要求してくる。クルーソーのフライデーに対する歪んだ欲望に  
読者は加担させられ、奇妙な欲望の三角形<sup>六二</sup>を形作る。

フライデーを「完全なる他者」と書いたが、これは実は正確ではない。フライデーは五体満足な身体として  
完全ではあるが、そもそも「他者」は自己にとって完全には捕捉しきれないから他者なのである。フライデー  
について、神は「同じ力、同じ理性、同じ愛情、同じ親切さと義理を感じる感情」(209)等々を与えたとさ  
れ、その「等しさ」=“sameness”が不自然なほどの反復で強調される。また、彼の外見は「顔つきはヨーロッ  
パ人のような感じの良い柔和さを持つていた。…髪の毛は黒く長い髪で、ウールのように縮れてはいない。…彼  
の肌の色は完全に黒とは言えず茶褐色であった。しかしブラジル人やバージニアの人たちや他のアメリカ度人  
と比べると醜くむかつくような黄色という訳ではなかつた。…鼻は小さく、黒人たちのように平たくなかつた」  
(205—6)と否定詞の繰り返しで描かれる。(一)では完全に捕捉不能な絶対的他者を起点にして、その否  
定によってフライデーという他者は規定されている。否定の否定という二重否定による定義である。ヨーロッ  
パ人と(一見)同じ内面を持ち、しかし「他者」とは「完全には同じでない」("not quite,"<sup>六三</sup>)とされるフライ  
デーは、「同定」と「否定」の境界線上に位置づけられた「構成=解釈された他者」=「仮構空間の中の存  
在」なのである。

ともあれ、クルーソーは呼びかけ可能な他者を手に入れ、島の統治を完全にし、欲望を充足させ、フライ  
デーの力で島から脱出する<sup>六四</sup>術を得て、島の外への「発見」=「拡張的植民地化」の欲望に望みを繋ぐことにな

る。「ライデー」という他者を産出する」と、「あなた」とはたつた一回しかライデーに言われないにせよ、他者の存在に呼びかけられる」とで、自己の同定が可能になる。作品を通して陣痛と労働に耐え忍びながら不安な揺らぐ存在であったクルーソーがようやく「主体」となりえたのであつた。酒井の言葉を思い出すなら、「主体性の問題は否定性の問題と結びつく」のであつた。クルーソーは否定する他者をわざわざ産み出し、再否定する」とで、主体である自己を確認できるのである。

「語り手」「読者」「野蛮人」、別の言い方をすれば「わたし」「あなた」「たにん」が危うい三位一体となつてフイクションを形成したとき、そのフイクションを読む現実の読者である近代国家の臣民であるイングリッシュマンは、「主体」となつて「海に出ていく」("go to sea")大義名分を手にしたのであつた。しかし、このフイクションの中で夢想された「仮構のイデオロギー空間」を構成する三者の関係は、形成された瞬間から、他者に対しても戦いを余儀なくされる。クルーソーはライデーと銃を取り、野蛮人の集団、反乱の起つたイギリス船、島にやつてきた三人のイギリス人悪党、偶像崇拜をする異教徒などと果てしのない抗争を続けて行かなくてはならない。「わたし」にとっての「他者」は、自らの意志・合意によって「わたし」に尽くす存在にするため、様々な詐術によって囮い込む必要がある。立ち止まることが許されないイギリス近代国家にとって、「他者」を際限なく構成し続ける必要があるのであるのだ。クルーソー自身は自分が両親を捨てたことを自分の「原罪」と呼んでいた。立ち止まる」とを許さない近代を始動したという意味で、『ロビンソン・クルーソー』＝フイクションは、「近代」の「原罪」と言えるのかもしない。

## デ「フォー」と『フォー』

——「ポスト」コロニアル主体は自らを名乗りうるか

### 1

1986年に出版された南アフリカの白人作家J.M.クツェーの『フォー』は、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)と『ロクサーナ』(1724)を下敷きに書かれている。この二作品はフィクションとしてはデフォーの最初と最後の作品である。『ロビンソン・クルーソー』の作品としての一貫性はめでたく言祝がれ、『ロクサーナ』の結末は破綻していることや悪名が高い。最初のフィクションから最後のフィクションに至る五年の間にデフォーに重大な意識の変化が起つていて、これを本章で議論する。そしてこの意識の変遷を「模倣」したクツェーの作品を対置させることで、現在の「ポストコロニアル」な状況の持つアポリアと、それにも関わらず「書き続ける」との重要性が前景化されていく状況を指摘したい。

『フォー』の一登場人物であるフォーの名前は、デフォーが初期に使っていた彼の本来のファミリーネームである。デフォーは破産した後ウイリアム三世のお抱え論客として大きく身を変貌させると同時に自ら改名して

このやうで、クツツエーは自分の登場人物をデフォーの親の姓であるフオーに戻しているのだ。本章では、この「オーラー→デフォー(デ「フオー」という名前のやりとりを念頭において、「名前を名乗る」という行為をめぐって、クルーソー、『ロクサーナ』の主人公、『フオー』の主人公スザンに焦点を絞つて考察すること)で、「主体」のありようと変貌を探つてみたい。なお、植民地主義が同時代として進行しており、それを正当化する言説に関わっていた十八世紀的主体のありようを本章では「コロニアル主体」と呼び、クツツエーが執筆当時まだアパルトヘイト下にあつた南アフリカにあつて、被植民者と植民者の言説が入り乱れ緊張した政情の中でも生き続けようとする主体のありよう、ひいては植民地時代を今なお引きずつている現代に関与しつゝ生きる主体を仮に「ボスマロコニアル主体」と呼ぶ」としたい。

## 2

わたしは1632年ヨーク市に生まれました。家柄は立派でしたが、父はこの國の人ではなくブレーメン出身の外国人で、最初はハルに住み着いていたのです。商売で一財産築いた後仕事をやめ後にヨークに住むことになつたのです。その町出身の母と結婚しました。母の実家はロビンソンという名前で良い家系の出身で、そこのわたしはロビンソン・クルイツナーエルと呼ばされました。しかしイングランドの常で言葉の転訛("corrupted")が起り、クルーソーという名前で呼ばれるようになり、というかむしろわたしたち自身で自分たちをクルーソーと呼び、そう署名もするようになりました。知り合いも「つむそら呼ひました」。<sup>65</sup>

「これは『ロビンソン・クルーソー』の冒頭部分である。クルーソーは自らの名前を宣言している。デフォーの書いたフィクションの主人公のほとんど全員が様々な理由で匿名であることを考えると、そしてデフォーのフィクションの出版がそもそも匿名で行われたことを考えると、この名前を断言する時のクルーソーの自信は異例と言えよう。

クルーソーに際だつた事実として、自分の名前と云うものは出生時に所与のものであるはずなのに、もともとは Kreutzaer という名前であった彼ら家族の名前が転訛により変化し、血ひで血ひに名前をつけたのである (“call ourselves... Crusoe”) といふことに注目する必要がある。さればフローがトフローと改名した動機を想起せよ。血ひたちに名前をつけたのは、過去から自分を遮断し血ひを新しい存在として規定し直す手段である。

植民者は被植民者に名前を与えることを思ふ。それは「名前を与える」主体である親や神の権限をその行動で模倣し、そのことによりその権力に自らを仮託するからである。(つまりクルーソーの自己命名行為は、「ヨロニアル主体」が被植民者に名前をつけ、自分の範疇によって矯正す行為を自らに対しても行っていることである。)この意味で、ロビンソン・クルーソーは生まれたときからヨロニアル主体なのである。この行為は後にクルーソーが自分の助けた一人のカリブ人にフライデーと名前を付けることの素地を形成する。

しかし、このロジカル主体の傲慢な名前の宣言は同時にある種の不安表明にもなっていることに注意しなければならない。自らに命名するかしないかの行為は、その主体を「命名者」と「被命名者」に分裂させる」とを意味する。また「軽説」(corruption)によって Kreutzaer が元來の名前が Crusoe になってしまったのである。

だが、それは名前の「堕落」をも意味し、過去からの断絶は起源の消失であり自己存在の不安の源泉とも成りうる。こうしてコロニアル主体は「自ら名乗る」とことで自らの権力を冒頭において誇示しながらも「無力感」をゆっくりなくも露呈する。また自らの中に「被命名者」を抱え込むことで、受動的なもしくは敵対的な「他者」存在をある意味で引き受けることになってしまふ。

コロニアル主体にとつての「他者」とは何であろうか。本章では第三章とは別の角度から、この問題に光を投射する。クルーソーについて考察してみよう。クルーソーが島で二十四年間一人きりであった事実から彼の「孤独」が強調されがちだが、クルーソーの生活の最も大きな原動力は実は「他者」の影だったのではないか。波や獣や蛮人が表象する「他者」に呑み込まれることをクルーソーは最も恐怖する。呑み込まれる恐怖は呑み込みたいという妄執的な行動を誘う。難破船の残骸から執拗に物を搬出することで船を解体し象徴的に「呑み込む」。

クルーソーは「自分には多くの物が欠けていたのです」(76)などと再々言う。物をため込むことはそもそものクルーソーのこのような欠落感に由来している。一体何が欠落しているのか。クルーソーは自分の時間に秩序を与える、眠る以外の全ての時間を統御し労働で埋め尽くし、物を生産し欠落を埋めようとする。しかし埋め尽くすことはできない。そして、自分を襲う他者を怖れグロテスクなほどの城塞を築いてゆく。クルーソーの他者恐怖と物の欠落感は心理的にどこかで結びついているようだ。

また彼の他者恐怖は他者願望の裏返しのようにも見える。コロニアル主体にとつて自己の一体性を確保するためには「他者」、すなわち植民される被支配者を必要とするのである。征服されるべき他者＝原住民が不在であるとき、彼の主体は不全である。コロニアル主体は自らを規定するとき、被植民者という他者を可

視化させその存在を構築した後、遡及的に自らの主体を確立する。

「他者」が不在であるとき、不在はヨロニアル主体たるものに大いなる不全感＝欠落感を感じさせ物の蓄積というずらされた形での補填に走らせる。自分の満たされない気持ちを物によって満たそうとする代替行為である。そして他者不在は「他者」を表象するものへの恐怖となつて現れてくるのだ。するとクルーソーがクルーソーであるためにはフライデーの登場を待たなくてはならないことになる。それまでは彼は不完全な植民者であり、「他者」の「欠落」を抱えた神経症的欠損主体たらざるを得ない。

作品中クルーソーが一度見る夢とそれに密接に絡まった神への信仰の問題は、欠落の不安におののく彼の植民活動を支援する。彼が唯一統御できない時間である夢は、彼を統御する駆動力となる。一度目に恐ろしい形相の神が夢に登場した後、クルーソーは聖書を読むようになり改悛への道を進むことになる。この時彼が感じた根本的疑問は、第二章でも引用した次のようなものである。「今まであれほど見てきた地球と海とは何なのだろう。どこからそれは産まれ、わたしは何なのだろう。…そしてわたしたちはいったいどこからやつてきたのか？」(92)

万物の第一原因を尋ねるこの質問の解答は当然造物主である「神」ということになるわけだが、神への祈りによつて神経症が癒えたクルーソーが、この後自信に満ちた着実な植民活動に邁進できるのも理解に難くないところだ。「神」の存在はクルーソーの中で「支配者」と「被支配者」の関係の祖型となり、彼自身の島全ての「被支配物」に対する彼の優位を保証するのであるから。

この後のクルーソーの姿は「近代人クルーソー」像の基盤となつた、何事があつてもくじけず堅忍不拔の精神で努力を持つて生活を築き上げる一見立派な姿である。彼は欠如を思うのでなく享樂を思うべきだ(13

0)などと一時的に述べ、「欠乏」という病気は完治したかのようだ。しかしこれは夢に現れた神の幻影に保證された束の間の健康のファンタズムであつたことは、作品の半ばから登場する足跡やバラバラ死体によつて、クルーソーが再び他者の影に追い回されるこことで明らかである。

食い散らかされた死体の残骸によつて征服すべき他者が可視化する。それはカニバリズムを行つた蛮人たちである。この後クルーソーの内部では二つの声が激しい議論を応酬する。非人道的な行為を行つた蛮人を処刑すべきだという声と、処刑こそが非人道的で許されべきではないという二つの声だ。

わたしの心は復讐の気持ちと、一、三十人の野蛮人たちを虐殺したいという血なまぐさい気持ちで一杯になつたのだ。(169)

奴らがお互に行つてゐる仕打ちは、かくも野蛮で非人間的であつたが、それは実の所わたしには何の意味もなかつた。…彼らはわたしのことを実際全く知らないのだから、従つてわたしをどうこうしようということはない。だから、わたしが彼らを襲うというのは正義にかなつたことではないのだ。(171)

後者の声は反コロニアル言説であり、クルーソーは一時その声の慾求に従い、自分自身が島の自然の一部になり、島の動物たちの王であることに満足し老いた山羊のように朽ち果てていこうとまで夢想し、植民者たることを放棄したかに見える。そんな彼が「やむなく」蛮人を撃ち殺すことになったのは、その前に見た作

品一度田の夢の担保があつたからである。その夢はまさに食人の餌食にならうとする蛮人の一人を救い出すといふやうのやつあつた。この夢は甘い他者希求へとクルーソーを誘う。他者はすなわち自分に救われ忠誠を誓う奴隸である。夢は現実となり、夢の誘いに乗つて奴隸となるべき一黒人を救出するため、機理の声の導くままに一人の蛮人を殺害する」ととなる。個人の責任は回避され、反ロロニアアル言説は神の機理によつて圧殺されるのである。

リリード見誤つてはならないのは、慈善や平等主義といつた反ロロニアアル言説へロロニアアル的行動は両論併記されでいいのようだ。見えて、実はその両者をひやんと見据えて「がまや」とロロニアアル言説だと、こういふのである。反ロロニアリズムはロロニアリズムに対するアンチテーゼとして生まれたのではなく、ロロニアリズムと同時に生まれ共犯関係を結んでいる。強引な植民活動や現地人殺害等への批判がある」とをも十二分に承知しながらも、「やむなく」蛮人虐殺へと向かわざるを得ない」という物語の展開こそがまや」とロロニアアル言説そのものなのだ。クルーソーの「逡巡」は、正義や良心の葛藤であるかのように書かれているが、これは詐術としての修辞法である。

ロロニアアル主体は、そもそも「他者」といふ欠損＝破綻を背負い込んでいた。破綻せざるをえな「ロロニアアル主体はそれを遅延させるために他者を構成し可視化する。ホリ・バーベの言う「矯正＝再構成された認知可能な他者への欲望」<sup>六七</sup>を満たしていく必要がある。被支配者を次々と「再」構築し、敵対的な他者は次々と虐殺していかなくてはならない。この活動は、終りなきファンタズム的反復である。ロロニアアル物語は終わらない。『ロロニソン・クルーソー』は第一部に続き、第一部は第三部に続き、『ロロニソン・クルーソー』物語は”The Robinson Crusoe story”<sup>六八</sup>となつて数限りない作品を後生に産み出していくことになつた。

『ロビンソン・クルーソー』物語は、かくして一見破綻を迎えることなくヴィクトリア朝に連綿と続いていったわけだが、その一方で『ロクサーナ』はヴィクトリア朝において全くと言つていいほど忘却に沈んだ。作品の冒頭を見てみよう。

わたしが生まれたのは、友人たちによりますと、フランスのポアクトゥ州のポアクトゥール市だつたということです。そこから両親に連れられてイングランドにやつて参りました。両親はプロテスタントたちが迫害者の圧制によりフランスを追われた1683年頃、宗教上の理由で亡命してきたわけです。バル

『ロクサーナ』の主人公の名前はロクサーナではないセ。彼女は作品で自らの名を名乗ることは決してない。それどころか、生まれた場所も伝聞による情報でしか彼女は知らない。この情報提供者である「友人たち」とはいつたい誰のことか?セ

男性遍歴を繰り返しその度に蓄財を重ねていく彼女を第一義的に植民者と言うことはできないかもしれないが、彼女の病的な増殖<sup>ハ</sup>反復衝動はクルーソーのそれと性質は同じである。彼女の終りなき蓄財活動の契機となつたのは、最初の夫の出奔→不在とそれに伴い無一文になり、住んでいた家の家主に身を任せたという事件であった。クルーソーと同じくどうしようもない不全感<sup>ハ</sup>欠落感が一連の行動の引き金を引く

のだ。

彼女の匿名性はデフォーの作品群の中でも際だつてゐる。他の作品の主人公は自分の名を名乗らない理由と言ひ訳を必ず冒頭で述べるのだが、『ロクサーナ』の主人公は名乗るけはいすら見せない。彼女の匿名性は物語の前提であり、絶対のものであるのだ。クルーソーと同じく移民第二世代である彼女は、名前を喪失してしまつてゐるとも言えよう。

匿名であり基本的に表立つた行動も行わない、主体としては不全な主人公を行動者として支援するのは女中のエイミーであり、まだそれでも補えない欠落を埋めるのが次々と彼女の魅力の虜になる男たちである。主体の欠損を行動する他者や金を貢ぐ男によつて補う彼女は、まず他者を規定してから遡及的に自己の一体性を確保するコロニアル主体の資格を備えている。彼女の欠損の補完者たちは作中「友だち」(Friends)と呼ばれている。冒頭の友人たちが出身地情報の欠落を補つたことからもわかるように、『ロクサーナ』の女主人公は自分の前に現れる様々な男や女という他者を「友だち」として自分の内部に取り込み自己の一体性をかろうじて保つ。彼女の強迫観念になつてゐるのは最初の破産体験である。彼女の場合破綻は破産である。破産を孕んだコロニアル主体である。

破産の恐怖に駆り立てられ、埋めることの出来ない主体の欠損を繰り延べるには、男を消費する生活を次々と更新していくなくてはならない。そして彼女に敵対する他者である彼女を捨てた最初の夫、彼女を恫喝するユダヤ人はどういうわけか死んでいく。それどころか、彼女と関係を持った男たちの中で家主＝宝石商もフランス皇太子も死亡する。彼女とつきあつた男たちはそのほとんどが悲惨な目に遭うのだ。『ロクサーナ』の主人公は男を他者として取り込み消費し、彼らの死亡を担保に主体を保つてゐるかのようだ。

彼女は自分で名乗ることはないわけだが、唯一作品中で他者に仮名を与える場面がある。官能的なトルコダンスを披露するエピソードで、「この時男たちにつけられた「名前」がロクサーナであった。彼女の初めての名前は隠れ蓑としてのそれであり、決して実体を露呈するものではなかつたが、結果的にこの名前は彼女に破滅をもたらす。他者を自分に仕える「友だち」として規定し消化することで生きてきた彼女は、かりそめにも他者に規定されではならないのだ。

この時たまたま女中として働いていた、彼女が最初の夫との間に設けた長女が、自分を認知するようになると、いう要求を持つて彼女に迫つてくる。これが『ロクサーナ』の最後の部分、一見作品が終わつたかに見える後に付け加えられた、身の毛のよだつような追跡と逃亡のドラマに繋がつてくるのだ。娘はスーザンという名前であり、彼女の名前によつて初めて主人公の本当の名前が確定される。「…一言で申しますと、エイミーと、それからスーザン（というのも彼女はわたしと同じ名前だったのです）は親密なる交際を始めたのでした。」(205)

このうつかりした名前漏洩は、主人公にとって致命的な事態である。確かに娘の名前の確定によつて遡及的で母親である自分の名前が確定するという状況はコロニアル主体の自己規定のありようと似通つている。決定的に違うのは、コロニアル主体が自己を隠匿しながら他者を規定して自己保証を確保していたのに対し、スーザンの場合娘という被支配者によつて名前が確定されたとき権力主体が可視化し、匿名性でこそふれた権力基盤が潰えるという点である。

クルーソーは冒頭で名を名乗つてはいるのだが、彼にとっての被支配者に絞つて考えてみよう。クルーソーは

「フライイデーに『主人』というのがわたしの名前だと分からせてあげました」(206)と書くように、フライイデーにとっては「主人（"Master"）であり、蛮人によつては魔法の光で自分たちを殺す怪物であるし、最後反乱者によつてクルーソー島に連行されクルーソーに助けられたイギリス人たちにとつてはガバナー（"governor"）」であり、決して彼はクルーソーと呼ばれることはない。権力の不可視性を存分に行使しているわけだ。ロクサーナも名前が確定される瞬間までは権力を保持し得たのだが、名前が判明し過去の所行と行為者がイコールで繋がれた瞬間最初から抱え込んでいた破産が顕在化してしまう。

主人公を執拗に追い回す娘スザンは、行動者エイミーによつて殺害された「ようだ」。しかしあくまでも事実は判明しない。クルーソーの不安は虐殺によつて延期され、物語はさらに次に続くという形で終わるが、『ロクサーナ』の主人公の不安は娘の殺害でも解消する事がない。次の引用箇所は第十章「自己参照といふレトリック」の冒頭でも議論することになるが、作品最後の部分である。

「二二で何年か裕福な、そして外見には幸福な境遇で暮しました後、わたしは恐るべき災難の人生に転落いたしました。エイミーもそうです。わたしたちの以前の良き時代のまさに逆転がありました。天の報いが、わたしたち一人によつてあのかわいそうな娘になされた罪の上に下つたようでした（"seem'd"）。そして、わたしはまたたいそう低い境遇に落ちましたので、罪の結果悲惨さがもたらされたのと同様に、悲惨な境遇に陥つたというそれだけの原因のために、後悔の気持ちを感じたようでした（"seen'd"）。

特徴的な単語が「ようだ」("seem")という語である。作品を通して順番に蓄積され確定されたはずの因果律の鎖は、作品の最後に来て「ようだ」という見せかけの因果律に墮落し、物語は結末のない状態へと融解してしまく。『ロクサーナ』の物語は文字通りの「未決」によって破産してしまう。

「用意は良いか、フライデー？」とわたしは聞いた。「はい」と彼。わたしは彼に命じた。「神の名において銃を撃て！」そう書いて、わたしは仰天している下司<sup>ナ</sup>共相手にまた銃を撃つた。そしてフライデーも同じく銃を撃つたのだ。(2334)

『ロビンソン・クルーソー』において、生まれたときに与えられた名前に経年による実体が付与されたとき人間の進歩が保証されるという機械的因果律は、作品の途中まで真実のように見える。ところが、彼の不安の解消と次に続く蓄積を保証しているのが、右の引用のように、借りものの「神の名前」("in the Name of God")であることを彼自身が白状したとき。その根拠を失うのだ。野蛮人殺害をした時の倫理的基盤であつた神の名前が、殺害の弁明に墮落してしまつた。

この認識の水平が浮上するにはポストコロニアルの時代を待たないといけない。十九世紀の帝国主義時代のイギリス人や植民地拡大を計る世界の各國には『ロビンソン・クルーソー』の進歩による調和は誠に正しい模範的訓辞であった。彼らにとってクルーソーに突きつけられていた破綻は見えなかつたし見ようともしなかつた。同じ時期、破産が顕在化した『ロクサーナ』は忘れられてしまつた。

「彼らの名前を名乗る」という行為を機軸にして、デフォーにおけるクロニアル主体の破綻の隠匿からクロニアル主体の破産の顕在化という状況へと変換していく事態を、概観した。デフォーは『ロクサーナ』の後ファイクションのレインフェイクションを書くことができなくなってしまった。デフォー自身商売の失敗で何度も破産を経験したが、ファイクション制作においてもデフォーは破産＝破綻してしまったのだ。

この大きな変遷の状況を現代の「ポスト」クロニアルな状況に置換し、新たなテキストとして産み出されたのがクツツヨーの『フォー』である。『フォー』の主人公は『ロクサーナ』の主人公と同じ名前のスザンであり、姓のバートンは「名前」の軽訛("corrupted")による "Berton" が "Barton" になったという。クルーソーの名前の「墮落」の反復である。彼女は作品の冒頭、乗船していく船で起った反乱により殺害された船のキャラブテンとともに海に流れされ、孤島に漂着する。浜辺に横たわるスザンの上に立ちはだかる黒い影として現れたハイマーに背負われ、島の主人であるクルーソーのもとに連れて行かれる。この一人は『ロムンソン・クルーソー』の登場人物と同じ名前である。

クルーソーに彼女が英語で話す最初の言葉は次の通りである。「わたしの名前はスザン・バートンです。わたしはあそこの船の船員たちによって海に流されました。の人たちは主人("their master")を殺し、わたしをいんな目に遭わせたのです。」<sup>7)</sup>スマーチは曲の名前を島の統治者に宣言している。船長はスザンの情夫であったことが後で判明する。船長が主人("master")であったという事実は彼女を被支配者に見せる。し

かし情夫を亡くした彼女の境遇は『ロクサーナ』の主人公の初めのそれと等しく、その意味で彼女は作品の主人公たる資格を有している。なるほど『ロクサーナ』のスーザンと違つて名前を告げる彼女は「主人」公であることを公言しているようだ。

しかし同時に彼女は『ロクサーナ』の娘スーザンのような他者性をも兼ね備えている。失った自分の物語を取り戻そうとするスーザンは、かの娘スーザンのような執拗さで「マスター」ナラティブを追い回すからだ。また彼女は『ロビンソン・クルーソー』から排除されていた「女性」でもある。『フォー』の物語は、スーザンという被支配者＝被害者であり周縁に迫いやられた「他者」の反逆として始まっているのだ。

スーザン・バートンはクルーソーを難詰し「島＝物語」を巡っての霸権争いを繰り広げる。スーザンはクルーソーを追求し、クルーソーに身を任せ、クルーソーは死亡する。一部になつて姿を見せるフォーは一部のスーザンの漂流物語を執筆してくれるはずであるが、彼女はフォーを問いつめ、フォーに跨り（"straddled him"）<sup>1</sup>（）、フォーはひからびた死体になる。『フォー』はある言い方をするなら、「他者」であるスーザンが纂奪された「物語」を奪還する物語だ。

「」のように徐々に自らを主体として構築していくスーザンは、激しい他者渴望の気持ちを募らせていく。クルーソーの欲望に応えた後に彼女がその関係を心の中で整理しようとするとき、次のように彼女は思つ。

わたしたちは他人の抱擁に身を任せ、波のうねりに身を委ねる。まばたきをする間わたしたちの警戒心が緩むのだ。……目のまばたきは何なのだろう。それに抗することのできるのは、永遠の非人間的な覺醒のみなのではないか。まばたきとはひびであり隙間であつて、その間隙を縫つてもう一つの声、他

者の声がわたしたちの人生に語りかけてくるのではないだろうか？何の権利があつてわたしたちはそれらの声に耳を塞ぐことができるのだろう？（30）

「のスーザンの渴望は痛切である。他の箇所でも繰り返される「のような想いには共感を覚えずにはおられない。しかしそのような発言のうち、次の箇所で欲望に応えてくれようとしないフライデーに向けた言葉を聞いてみよう。

フライデー、言葉の世界に生きているわたしたちが自分たちの質問に答えてもらいたいと感じるときの渴望を、どうしたらあなたに分かつてもらえるのだろう。それは、わたしたちが口づけをするとき、その人の応えてくれる唇を感じたいという欲望に似たものだ。（83）

「わたしたち("us")」と「うのは、言葉の世界に住む西欧社会の人間だ。『ロビンソン・クルーソー』の「仮構のイデオロギー空間」（第二章参照）の「わたし」と「あなた」は「」にきて合体し、より強固なイデオロギー存在としての「わたしたち」になつている。スーザンが作品を通して構築した主体は、実はまさに彼女の攻撃対象であつたはずの「コロニアル」主体としての「わたし」だった。

「わたしたち」はしきりに他者の「あなた」に語りかける。いくら想いが痛切であつても、違つた世界に生きる人間は彼女の想いを共有できずそれに応えることはできない。フライデーはそういった人間だ。絶対的他者たる「あなた」は応答しないのだ。しかし、他の人物は彼女の想いに自ら溺れていく。知つてか知らずかスーザン

というコロニアル主体の「他者」として包摶されていく。船長の死亡はスーザンとの性的関係に関連がありそうだ。クルーソーはイギリスに帰還する船の中で死亡する。フォーも死亡する。スーザンが他者として認知するのは性的欲望の対象になる男性である。彼女は欲望の痛切さを男に投影し性的結合によってその解消を図るが遂に癒しは得られず、男はその欲望の火に身を投じて死んでいく。『ロクサーナ』の主人公スーザンの男たちと同じだ。『ロクサーナ』において、友だち("friends")は女主人公を支援して死んでいく男たちであった。『フォー』のスーザンの男たちは、スーザンの性的交渉相手としての「あなた」として、スーザンの「わたしたち」に組み込まれ、そして消費されていくのだと言えよう。

『フォー』のスーザンは他者をこのように消費するが、代価としての他者を生産することもない。自分が産んだ娘はベヒアに消息を絶つ。ロンドンでスーザンのもとに現れ、認知を求めるスーザン・バートンという同じ名を名乗る女の子の訴えにもかかわらず、そしてその娘がスーザンの実の娘だというフォーの主張にも耳を貸さず、決して認知しようとしていない。デフォーの『ロクサーナ』の一人のスーザンの踏襲である。

フライデーと二人での旅の途中見かけた、布にくるまれた不可思議な胎児の死体、また四部で垣間見える階段に転がっている娘の死体、これらはスーザンが産み出し得なかつた流産の子供たちであり、認知せず存在が無化された「死産」であり「欠落」である。

スーザンは男を遺失し、子供を遺失する。そして一度は奪還したはずの「物語」をも遺失する。彼女は「女性作家」("authoress")として物語を生産しようと努力する。だが「物語」を語ろうとする「努力の物語」はひしひしと伝わるもの、最終的にスーザンはメタ物語であり、「物語」の「遺失」の物語という「墮落」なのである。四部になって、デフォーの『ロクサーナ』のように語り手は匿名に戻り、匿名の「私」が物語を受け継ぐが、

この語り手の描写するひからびた死体であるフォーとスーザンを見る限り、霸権抗争を繰り広げた二人は共倒れしてしまったようだ。なぜ一度はスーザンに奪取された「物語」は破産してしまうのか？『フォー』のスーザンは男を蕩尽した。それは快楽のためであると同時に批判的消費であった。パトリアーカルな物語への批判からその転覆を謀り一度は回復に成功した。しかし復活した物語は彼女の手から滑り落ちてしまう。コロニアル主体への批判から主体を解体する試みで始められた企図の末にスーザン自らがコロニアル主体の「わたしたち」として君臨する」とは、深いレベルで結局コロニアル主体とともに共謀関係にあった批判主体を暴露し、結果として自分自身を蕩尽させてしまうのである。

「」のような「ポスト」コロニアルの認識水平が姿を現すときの要として浮上するのが絶対的他者フライデーである。スーザンは一時期、フライデーの強いられた沈黙を正しく解釈している。つまり、奴隸商人に舌を切り取られ言葉を剥奪された『フォー』のフライデーは、西洋的コロニアル主体の欲望に「応じて」「日々再構成されていく」という事態に対抗する防御手段を持たないということを(122)。

しかしフライデーは西洋的「わたしたち」("us")によつて強いられた沈黙とは別に、自ら選び取つた沈黙を持つている。「沈黙」であるからそれは転覆的抵抗にはなりえない。しかし彼の沈黙は強靭である。フォーのガウンを羽織つて踊るときの沈黙がそれであり、単調な節のメロディーをリコーダーで吹き続ける声なき抵抗、スーザンがフライデーに調和しようと伴奏のレコーダーを吹く音を「黙殺」して吹き続ける時の沈黙もこの強靭さを示す。

作品の最後のフライデーは象徴的にこの沈黙という抵抗手段を「静かに」行使する。残されるのは深海に

沈んで舌の無い口蓋の奥底から流れを吐き出し、その流れによって世界中を洗い流すフライデーの声のない沈黙の物語である。

5

以上、「コロニアル主体が自らを名乗る」という状況に内在する詐術的レトリックを、ロビンソン・クルーソー、スーザン・バートンに関して分析し、「コロニアル主体が匿名である」とを貫き通すことの不可能性を『ロクサーナ』のスーザンに見た。『フォー』という作品が「模倣」した『ロビンソン・クルーソー』から『ロクサーナ』へのコロニアル主体破産までの経緯を辿り、コロニアル「従属体」であるフライデーの沈黙に行き着いた。

デフォーが身をもつて体験したこと、そして『フォー』が意識的に模倣したこと、それは「コロニアル主体は破綻（＝破産）せざるを得ない」というポストコロニアル的認識であった。しかし同時にこの認識を「声」に出すことの不可能性を『フォー』は同時に突きつけてくる。その認識をはつきり口に出して宣言すると、ポストコロニアル主体はコロニアル主体がもたらした莫大な被害をもその歴史認識の中に埋没させてしまうことになり、自らコロニアル主体の共犯者であることを告白してしまう。ポストコロニアル主体がコロニアル主体の罪を暴露するとき、「」の批判主体は「名前を問われる」とことで責任所在を明確化することを求められるだろう。その時本当に純白の潔白さで「名前を名乗る」とはおそらく不可能である<sup>セ五</sup>。

「由らを名乗る」とはできないが破産宣告をしなくてはならないというスタンスをポストコロニアル主体が示そうとするとき、ポストコロニアル主体は「声」を遺失し「沈黙」に陥らざるを得ない。『ロクサーナ』が最後に陥つ

た未完という「沈黙」、『フォー』の中の死亡した男たちの「沈黙」、『フォー』の四部に語り手の役割を降り（降板させられ）たスザンの「沈黙」、中でもフライデーの「沈黙」は、この種の沈黙なのである。

『フォー』の四部でフライデーから流れ出る水の流れを顔に眉毛に感じ取る「私」のポストコロニアル主体は「白らを名乗り」えていない。彼は状況を感じ得しているが働きかけを行う主体となりえていない。しかし確實に言えることは、この「私」は決して『ロビンソン・クルーソー』の「わたし」でもスザンの「わたし／たち」でもない、可能性を孕んだ「私」なのだということである。

コロニアル主体もポストコロニアル主体も主体としての十全性を欠いており、「不全」＝「欠如」を顕著な特徴として持つ。しかしスザン・バートンが言うように、「書く」と「欠く」ことではなく、紙に書かれた言葉は全世界に拡がる反響力を持ちうる（93）。ポストコロニアル主体は「書き続ける」のだ。「言葉」はただしスザンの認識とは違つて西洋の「わたしたち」の独占物でもないし、ベン＝ファロスを持つ「男」の独占物でもない。作品最後のフライデーの奥底から吐き出される沈黙の流れもまた言葉である。七六

アーバルトヘイト下の南アフリカで英文学教師として生きていた白人クッシェーは、「ポスト」コロニアル言説の無力さを身をもつて感じていたであろう。クッシェーに出来るることは、沈黙を書くという脱構築的＝自己揶揄的な身振りによつて、読者を震撼させる道化を演じることだけだったのではなかつただろうか。だが、その震撼は、各々異なつたポストコロニアル的状況を生きる読者にとって、たとえようもなく深いものなのだ。

## 第一部 フイクションのトリック

### 第五章

#### 『ローリック・ランダム』における一重逆転構造

1

彼の最初の劇『王殺し』(The Regicide)を遂に上演しなかつた、冷酷な世間に對する激しい憤りと、デビュー作を上梓するにあたりてのなみなみなならぬ氣概を持つて、スマレットは決意のほどを『ローリック・ランダム』の序文に書きつけてゐる。

我々は、この作品の構造を考えるためにあたりて、スマレット自身がどの程度作品構成に對して意識的であった

かを取れたなど、物語の序文を検証しながらおぼなむ。

その母で、彼は「ローラー」を改鑄した後、その欠陥を露出した性格の一人として、ホーリー・ヒルを筆すらも書かなくなってしまった。その代表作『ジル・ブラス』は以下のように批評を受けています。

The disgraces of *Gil Blas*, are for the most part, such as rather excite mirth than compassion; he himself laughs at them; and his transitions from distress to happiness, or at least ease, are so sudden, that neither the reader has time to pity him, nor himself to be acquainted with affliction. --This conduct, in my opinion, not only deviates from probability, but prevents that generous indignation, which ought to animate the reader, against the sordid and vicious disposition of the world.<sup>44</sup>

『ジル・ブラス』を批評する形で、ヒルは彼の主張が、次の三つの総合的なもの。  
1 ベントハーレが、主人公の拙境から幸福への転換が自然に受け入れられるべきではなくてはならぬとする觀點へ。  
2 転換("transitions")という單語が複数されたいふことから、幸福からの拙境への道の転換も存在する。ヒルはこれを示すので、裏は主人公の境遇の変化が自然でないことを示すのである。  
3 が直接操作構成に關係してゐるが、これは次に挙げるものは読者の反応と繋がりを持ち。読者は、主人公の窮境に同情し、ひいては彼の幸運と共に喜んでそれを期待せらる。我々がトマソ・グリヘルム指摘する所のヒルは、毎年ロットリックと別れていた従姉のベートシテが作品半ばで彼の冒険の数々を聞く時の態

度で、スマレツトの書くローデリックの物語を聞かねばならない。

During the recital, my friend was strongly affected, according to the various situations described: He started with surprise , glowed with indignation, gaped with curiosity, smiled with pleasure, trembled with fear, and wept with sorrow, as the vicissitudes of my life inspired these different passions; (253)

つまり小説は、歡喜と悲嘆という対極にある気分に我々が感情移入することによって進んでいくということになる。

三 スモレットの世間に對する怒りを、我々讀者は共有しなければならない。主人公にとつて世界は二分されており、味方から成る、心理的には内側の世界に對して、敵である、対抗すべき外的 세계가 대립되어 있다.『ロデリック・ランダム』が、ピカレスクであるかどうかの議論はさておき、ジョン・ウォーナーがピカレスク小説について指摘したことは、スモレットの小説においても正しい。

There is a tangible social world here [in *Lazarillo* or *Gil Blas*], yet the picaro exists as a separate, isolated consciousness within that world. There is a disjunction between the world outside and the subjective world within.<sup>30</sup>

主人公たるの戦いは悪意を持った世間に対するもので、彼の抱く目的地は、内的世界が何ら障害物を持たない状態で確立された地元である。この二つの世界の対立が完全に主題と関わりあって発展していく過程を見るためには、第二作『ペリグリノ・ピックル』を待たねばならぬ。

以上の主張を総合して、その作品論を『ローリック・ランダム』に応用してみよう。スマレットの企図した構図は、主人公ローリックが、世間との関わりを軸に幸運と不運に交互に遭遇しながら『冒險の旅』を続け、我々読者は彼の自然に変転する運命を共有しながらその旅を追いかけていく、といふものとなる。

この序文だけを見ても、スマレットが作品全体の構成などに対してかなり意識的であつたことが窺える。彼の思惑通りの構成が実現されているなり、ジョージ・カールの言う“*a succession of loosely linked episodes*”の中にも十分 link は見られないに違ひはない。またウォルター・トーンもハドソンの累積効果より個々の H ピードを重視するにしても、あまりに極端に走るなら作者の意図の重要な部分を見落とすところにならぬ。

無意識のレベルにおいても、スマレットは後年『サー・マー・ハドソン・グリーブズ』というハイギリス初の連載小説において、現在に至るまで使われてゐるあの手法、つまり事件の結末を隠して次回の連載に読者の関心を繋ぐ（次回に続く）を発明したが、このような、読者を引ひぱりしてハストーリーとしての天分のよさなものを持つ彼が、その同じ才覚によいで第二作を構築していくとは言えまい。

さて、作品の中に実際に実現されている構成の話に移るが、簡単に言うなり、『ローリック・ランダム』全体は、作者の意図通り順序よく起る幸運と不運の交替によって作られてゐる。ローリックの伯父ボウリングの言う単純な人生訓にある、人生は航海であつて順風の日があるかと思えば次には嵐が来る（223）、とい

いた考へを具現したものが構成である。

ハーリーの単純な構成に初めて効果的な韻調を与えた著者は、ロバート・ホールター＝ポーラード・ヘンリイエドであった。ホールターは主人公を立場から考へ、彼の人生は、一方では経験を楽しむリズム、また他方では没境によるヒューバート・スミス、それに対応する心理的領域は、それを無視するヒューバート・スミスの間に繋がる。この二つのパターンを覗く。

It [the pattern of comic—ironic—reversal] consists of two elements betokening in their way the perpetual dualistic rhythms which introduce a kind of moral order into the continuum of human experience. We have first a protracted but smooth ascent to some height of felicity or optimistic perception; this condition then precipitates a sudden, surprising reversal, a rapid descent into perception or comic disillusion—the two being very much the same thing.<sup>〔註〕</sup>

「人の規範は異なつてゐるが、期せずして圓の藝術は圓の事実に着目したのである。後者を序たて、ハーリーの研究者カラニヘル・ブーケは、數年後、圓規名作『バサル・ラムの小説研究』に於いて、バサル・ラムの小説の母なる“the very unity of moral life with its alternating peaks and precipices”<sup>〔註〕</sup>が在り得ると言ふ

ただ、むしろほど単純な構造であるな『ジル・ブース』の中にむそれは十分見られるだらう。ハサウエーの興味の中心は、この単純な絶頂と墜落の交替する構造を、自然に読者に受け入れられるよつたものにするためにスマッシュが用いた装置ばかりのよつたものであつたか、といつてはなる。それが一重逆転、ヒヤウスべきペターハンドである。

## 2

ローテリック・ランダムの父は、貧乏な女、つまり、ローテリックの母と結婚したいので、シーケンスマンである金持ちの祖父によつて勘当され、そのために悲惨な少年時代を送る。父は失踪し、母は死に、頼る人間は伯父のボウリングのみである。ボウリングの破産後の生活手段は、愚劣な外科医の徒弟として働くのみである。このような暗い生活に嫌気のやした彼は上京する決意を固め、道中偶然出会つた旧友ストラップと様々な冒険をしながらローテリックへおでんへ来る。

最初田舎者丸出しのくまばかりやつてこたローテリックは、都令の生活に徐々に慣れていゆるしたがつて傲慢な氣持ちをふくらむがセーブ(104)。雇い主の娘の愛情に応えず肉体にこだわりムードの立場をよくする術策を身につけたり、彼女の情夫を完膚なきせざりしぬけたりした彼は、自分の自信をすり固める。

I now began to look upon myself as a *gentleman in reality*, learned to dance of a Frenchman whom I had cured of a fashionable distemper; frequented plays during the

holidays; became the oracle of an alehouse, where every dispute was referred to my decision; and at length contracted an acquaintance with a young lady.... (108)

リスが、暇く廻ったロドリックの暗黒生活の末に訪れた、最初の上駄娘やおふ。読者は彼と共に氣持ひを遡るがゆゑに、心からを感じる。この上駄はロドリックの物である現実の("in reality")の心靈・内面なものではなか。同じ場面で彼は、あの眞味のまゝに忠実なペトロシットが嫌がぬる構え、あの勇士の姿相もコレット・ペリヤがやう。

I [Roderick] was even ashamed to see a journeyman enquiring after me with the familiarity of a companion." (108)

彼の道徳は精神の毒に汚染されてしまひやうだ。彼は外面では高い地位に上りやうが、現実には墜落してしま。

上の上駄は次の場面の墜落に繋がる。次の章(一一一章)で叫んで彼の敵ハイキーの陰謀により彼は主人の家を放逐され、おもむかげなく、内面墜落が次の場面で顕在化し、眞髓の境遇が落ち込むことになる。金の詰判の友も失いた彼は嘆く。"Thus I found myself, by the iniquity of mankind, in a much more deplorable condition than ever."(114)我々読者は、彼に共感をしながら、彼のよほどの責任を人懶の口出せぬほどに思はざるが、彼のその直前の道徳的墜落を知りふねださ

に、予想通りの結果だと思つてしまふのだ。ロデリックの不幸は偶然に起つたが、我々の心の中では、前の段階の道徳的墜落と次の外的墜落は因果の鎖で繋がつてゐる。

しかし、この窮境に陥ることで彼はかえつて道徳的良心を取り返す。彼は、隣りに住む、飢えて瀕死の状態にいた女性を自分の乏しい金で救う。彼は自らが苦しい目に遭う」とて慈善("charity")と寛容("generosity")の心を思い出す。つまり、この外的な墜落はその中に道徳的な上昇を含んでゐるのだ。外面と内面は同じく対極にありながらも、その関係は先ほどのものと全く逆になつてゐることに注意したい。

さて、内的な生活と外的な生活が一致した時に安定が得るれど、内面を隠したり偽つたりする、もしくは外的な自分の状況にそぐわない内面を育てたりする」とは破局に繋がるだろう。ロデリックの破局もそれに類するものだと言える。

主人公が常に相反する内面と外面を持つがゆえに、破局を予感させるような不安定な感じ、不確定な雰囲気が小説全体を覆つてゐるが、この不安定感も、読者に次に何が起つたるだらうと思わせる効果的一面であつた。不安定さが自らの圧力に耐えきれず自爆作用を惹き起つて、次の逆の不安定さを作つていく、というのが、この小説の基本的構造だと言える。

フュッセルも言うように徐々に築かれた幸運は一瞬にして崩壊するが、不運が償われるには多少の時間を要する。小説の中央部での上昇を体験するまで、ロデリックは悲惨な軍医補佐としての海上生活を送らなくてはならない。

小説の中央部にダグラス・ブルックスの言うような数秘学的意味があるべいかどうかは別にしても、スマレットの作品において、中央部が小説全体で幸福な結末を除外した最も高い上昇点になることが多いのは事実

である。リリヤローリックは数々の悲惨や記憶を背負った船サンダードを後にし、やがて偶然に旧友たちに再会し、たゞこんな歓待を取る。多額の金や品物のペニヤンヘドウから気分が高揚した彼は、自分にこのトライアフル。

Being thus provided with money and all necessaries for the comfort of life, I began to look upon myself as a gentleman of some consequence, and felt my pride dilate apace. (206)

読者は眼に餘裕な描写から解放せねど、上の上昇が、彼の慈悲や悲惨やの母の威儀を保つたりむじに対する難題やあらゆるに感ずる。外的上昇は前段階の内面に起因してゐるだ。

同時にリリヤド注目すべきは、彼が上昇したと感ぜるのは、前の上昇の時と同じく、「君子」としての地位を取り戻したからだ。而して意識せぬふりだ。彼は祖父よりも不羨しう奪われた「君子」以上の地位がの權利を奪回する所へと意にあがく。

ソの中央部に置かれてやる。“Finally, in order that the hero's fall should be harder, Smollett arranges a relative apogee for him before precipitating him down to an absolute perigee”<sup>レフ</sup> リリヤドの技術の観点からの出處。レフリリヤド「理対世」も更に大きな問題は、直後に墜落を伴つて外面の上昇が、この小説における一ひらべーへとペターハになつてゐる。ハリスド。

その場面の上昇は大団おおむに降要因は、サンタードの最大の仇敵クラハリーが彼の乗り込む船で上昇を止めてゐる。かねにや拘泥しながらリックの「カロナーナの無禪着」(insouciance)である。航海の

最中、クランプリーと決闘沙汰を起した彼は、その際大勢の不意討ちをくじ北イングランの浜辺に捨てられた。

彼はリード偶然雇われた」となった家の娘ナーシッサに一目惚れし、短い上昇を体験するが、所詮は召使いの身である。自分の学識をひけらかすという傲慢な紳士、海賊に襲われたローデリックはフランクに拉致され、セリドもまたもや捨てられた。

フランク軍の一兵卒として働いても彼の悲惨さは増大するのみである。ものはや着る物も食べる物もほとんどない。リード彼を支えるのは、自分なりのよつた境遇に本来墮つてゐる人間ではない、れいあつた紳士であるところであつた。

彼は専制的君主を崇拜するフランク族を嘲笑する。ルートベギリスを弁護して“those insurrections of the English were no other than glorious efforts to rescue that independence which was their birthright”(246)といふ。彼はこのモヘリ底辺を遺した時の出世をこころ「骑士」の身分と同様、個人的の独立を重んずる気持を放擲しなど。一族姓に対する「骑士」、「貴族」に対する「骑士」という現実の拮抗する内面を持つ、リード、彼はある日偶然、丑粋にして小金を貯めりとバーリックに再会するがだね。バーリックの貯めた三十四ポンドを受け取つ “[Roderick's] brain was almost turned with this sudden change of fortune”.(254) 小説廿三度田の大好きな上昇を味わふ歡喜する口アリシクビバーリックはfortune-hunting を熱心に勧める。

I [Strap] see none [no push] so likely to succeed as your appearing in the character of a

*gentleman* (which is your due) and making your addresses to some lady of fortune who can render you *independant* at once. (255)

ロドリックは品座に座ると。「舞士」の「独立」の一語は彼の心の扉を開ける魔法の言葉なのだ。しかし明かに、この話は道徳的・壁を越えていた。舞士であるからこそ、彼は金持ちの女性を欺く資格を得たわけではなし。

チベラ、彼の話が何よりもかっこいい。なぜなら、彼の政治家ペトロが回遊歌舞妓であつて、彼の援助の動機がもう少し物なましでないかと見えたのだ。

[This piece of information] precipitated me [Roderick] from the most exalted pinnacle of hope to the lowest abyss of despondence, and well nigh determined me to take Banter's advice, and finish my chagrin with a halter. (313)

その後の彼は、ナーナチャの神奈の豊國を除いては、下降するのみである。恋人と再びした豊國やせ”[He was] elevated above every other consideration”と描かれる。ロドリックは恋人と愛を確かめながら、彼自身が困難の極みに陥る。ナーナチャの呪せり人の仲に気がつき、彼女を連れ去る。彼の不幸はスザンヌ・クレシ、ハーマン、マリセイ、増加し、11次曲線を描く。その頂点は刑務所である。ロドリックは中傷罪でマーキュリー、一躍獄に入れるが、ソリは窮屈で全篇最後で最大の墜落に呻きあわいとなる。

しかし斷落も「それが最後であった」。『機械仕掛けの神 やめ』が限られ、やぐらを解決すたための難緒を開いておるのである。権力に成功した伯父のボウコンクドである。『I [Roderick] was utterly confounded at

*this sudden transition which affected me more than any reverse I had formerly felt.*』(358)

小説の残りの部分における、彼は小説の前半で失ったやぐらの、つまり「羅士」からの地位、友人、金、それに死んだと思つていた父を取り戻す。父の財産によつて彼は、ペーロハなどの他人に依存せざり、また働くがやゝとも経済的に暮せるに至り、二重の意味で「独立状態」("independent")になら。

最後の上昇は決して唐突なものではない。一見それは唐突である。しかし我々読者は長い間主人公に次々と訪れる不運につきあつてきて、やれによる沈鬱さがしりつのように胸の中に堆積していく。それによはやられなくなつたといひにヨウリングが幸福の第一陣としてやがて来る。やれに加えて、我々はこれが幸福な結末が訪ねるに至る(知つて)こと。その時は迫つてゐる感じなのだ。我々が心理的に要求してゐるやせじやの時に上昇が起つた。このために我々は唐突やを唐突やとして感じない。

### 3

やぐら、以上述べて来たペーターは、作中に挿入されるメロポーリヤンの話にも特徴的に現れており、それは例えば次のよつた薬葉に見られる。

Precipitated in this manner, from the highest pinnacle of hope, to the abyss of

despondence, I was ready to sink under the burthen of my affliction... (394)

（物語、やのペターハムは、頂点（“pinnacle”）と深淵（“abyss”）を交互に体験する主人公に起る変遷（“transition”）による形成やねじれ。）の小説は、川の大さな頂点を持つ。それは順番に、ロマン、小説の中央、スモレンシトの再会の部分である。山の反転運動が繰り返されながらも全体は確実に、監獄の場面に向かって下降していく。

山の上に反転運動は一重のものである。つまり外的な境遇や主人公の気持ちの変化に隠れて、逆向きのペクトルを持った内面の道徳や感情が存在し、それが外面と対称になつた上下運動を繰り返し、同時に外面に対して影響を与えるという構造を持つのだ。最後に、この構造の分析を試みたい。

第一に指摘やめるのは、十八世紀に特徴的で、の作品に繰り返し見られる「現実」と見せかけの分裂」の問題が、この一重性を持つ構造と深く関わりあひこねつてゐる点である。例えば、ホラチウスを語る該博な宿屋の主人が実は追いはぎ同然の高い勘定をぶつかける山師である、ところがピソードが語つてくれぬように、ある人や事柄の見せかけは内面の正しい眞実を伝えていないことが多く、このよのうな問題意識を持ったスマートが全体の構造を上述のよのうな一重のものにするのはやほど困難ないふではなかつただろ。」の一重性を生んでくる中心的なものは現実と見せかけのギャップなのであるから。

相反する外見と現実とは不安定な状況であつて、それは崩れやるを得ない。小説は常に不安定をもち、安定感を求めるが、前へ前へと進む。これは換言すれば、スモレンシトが、のよのうな不確定を自然だと考えて、などといふのである。

一番目にこの構造が我々に教えてくれるのは、スマレットの持つ平衡感覚である。彼の究極的な目的は、失なわれた平衡、つまり秩序の回復——具体的に言えば、例えばロデリックにおける「紳士」の回復——なのだ。

このことをわかりにくくしている原因是、スマレットが知恵と分別に基づく中庸之道("golden mean")の理想を念頭におきながらも、極端な状況を描くのに憑かれており、世界が平衡を取り戻した後の状態には何ら関心がない——これはロマンスを踏襲した小説において「結婚」が慣習的に最後におかれ、それ以後の生活は当然描かれなかつた事情を考慮に入れてもそうである——ように見えるところにある。しかしやはり、上昇の次には必ず下降を置く、という風にして互いの効果を相殺させる構造を見ると、我々はスマレットのバランスのとれた世界観を思はざるを得ない。

この小説を通して存在する不安定さに、I.C.ロスは注目しながらも、彼はその原因を作中の因果関係の欠如に求めていた。私は上に述べた様に別のところに原因を見ているし、因果関係がないという見解にも反対である。因果関係は読者の心理の中には確かに存在している。主人公が上昇や墜落を経験するのは、前段階の彼の持つ道徳・感情などに対する報酬、もしくは罰としてである。

報酬や罰を与えるのは人間でなく神だ。その意味で、この作品は近代市民社会に生きる個人としての人間の意志よりも、神の摂理という名の偶然が支配するロマンスの世界に近い。凡て上下運動の因果関係、つまり論理的連関の鍵は神が握っているのだ。このことを物語るがごとく、ノベル的色彩がより濃厚になっていく次作『ペリグリン・ピツクル』では、二重逆転的構成はかなり解体している。

しかしもちろん、神の摂理は正当なもの、合理的なものであるとは限らない。神が完全にこの小説を支配するならば、どんなに運命の逆転が不自然で唐突であっても読者は文句を言えないはずである。ところが、

再び序文に戻るなら、「この「不自然さ」「唐突さ」はスマレジットの最も忌み嫌うものであった。更に言うなら、彼は多くの十八世紀の作家たちと同じく、「現実に起りうること」("probability")を尊んだ(ital.)。だから、そ彼は偶然と神の介入による不自然さを和らげるために、この作品を私がこの論文で追つて来た構造によつて作ったのだ。これは、私がへあたかも…のように感じる)という表現を繰り返し用いたように、我々を騙す装置である。騙そうとするスマレジットの意識は近代的なものと言える。偶然を用いながらも因果関係をストーリーの中に作りだそうとするこの小説は、ロマンスとノベルの危ういバランスの上になりたつた特異な作品であつた。九〇

## 「トリック」スター——『ファゾム伯爵・ファーディナンド』

1

スマレットの第三作『ファゾム伯爵・ファーディナンド』は、彼の主要な五つの小説のうちで最も評価が低く、従つて真面目な批評の対象となることがあまり多くなかつた。スマレットの言語に深い関心を持つ、「オックスフォードイギリス小説」版『ファゾム伯爵・ファーディナンド』の編者デイミアン・グラントは、「驚くべき」とだが、その「解説」(explanatory notes)の中で、場面が急に変わることや、作中人物の言葉の浅薄さを嘆いているし乍ら、スマレットに最も深い愛情を持つ学者の一人である、フランス人の学者ブーセモーの作品だけは例外的に論難してゐる。

これまでに行われてきたこの作品への批判を三つに大別すると、それは、ファゾムの極悪非道な性格、出来・不出来の部分の大きな落差、それに、小説最後四分の一の部分での調子の変化と、それに伴う構成の破綻に対するものである。

のうち、ファゾムの悪漢性への攻撃は、あるいはねばつた道徳観念によつての断罪であつたことが多いので

無視やあらわしで、確かにこの小説中、良く書けてある所は実に生も死もあらへば、バズリシーヌの画つよう  
と“there is more power of writing occasionally shewn in it than in any of his works”<sup>十六</sup>なのだが、單なる惰性で書いたとしか思えない所もある。カリマの強姦未遂事件の場面は良いが、その後の三十ページほんは單にフアゾムが消滅するお膳立てのためだけのものだ、Hulmeはそれ以前の題材の繰り返しにすぎない、ふついた具合である。

宝石商に纏わぬHulmeは、當時の劇によくある陳腐な筋とは云々面白。ただ、他の登場人物やレナルドなどがこの間に旅行してくるにもかかわらず、このHulme中一度も姿を見せない、他のHulmeとの関連性が全く書かれず、ひたすらこのHulmeの描写に終始するのは奇妙である。ライス・ナッシュの推測一ースヤレントは自分自身の書いた未発表の劇の断篇をこいつかそのまゝ挿入したのであらうといふのは一ぱりのHulmeを見る限り、極めてあり得ないだと想われる。

しかし、私は、この作品が様々な要素の寄せ集めであることを認めぬじやね、かいから作品中には統一（“unity”）の形跡（“form”）がなきりむか当然の、リカルト編も、 “It follows that any defence of Fathom will be made in defiance of its formal deficiencies”(xvi) と嘆息するかの如きの態度には若干の疑問を感じる。

エヤレントは寄せ集めの材料であるがゆえに、かやいでそれらを統一ある全体にしつらえた形跡がある。それは必ずしも成功したとは言えないが、Hulmeの進行を見ると一定の軌跡を描いてゐるようであるし、ハーンムの懲漢としての機能が、この小説を貫くべある種のプロジェクトの統一感を与えてゐると思われる。従つて、私はこの第六章で、作中で数々のHulmeが並んで軸に沿つて進んでくるかを追ふ、その母「ミカレスク小

説」のものだとか「悪漢小説」だとか言われるファゾムの悪漢性と、その果たす機能を探りたいと思う。

「」の機能を明らかにする「」ことや、小説最後の部分での調子の変化の理由も、ある程度説明がつく。「」の部分でファゾムは小説から消え、作品世界はそれまでの「ノベル」的なものから「ロマンス」的メロドラマに移行する。先ほど述べたように「」の部分は多くの学者が批判する箇所で、たとえ評価する者でも、「」の前後に共通するテーマを拾い挙げるのみであつた<sup>15</sup>。

「」の最後の部分で、主人公はファゾムに代わってレナルドになるが、「」の一人を代表者として、作中人物を二つのグループに分け、更に世界を「一分する」とが何人かの批評家によつて行われている<sup>16</sup>。すなわち、ファゾム・悪漢たち・悪徳の世界、対レナルド・「感情の人」たち<sup>17</sup>・感情に満ちた世界、という「一分法」である。ただファゾムは、自分の仲間であるはずの悪漢たちにしばしば容易く騙されてしまい、彼らの代表としては役不足だし、ファゾムと違つて、悪漢たちは「感情の人」たちとあまり接触する場を持たず、彼と悪漢たちを同一グループに入れることはいかない。

「England becomes the real villain of the novel」<sup>18</sup>とはT.O.ナレシドウェルの言葉であるが、その通り、真の悪漢は、ファゾム<sup>19</sup>よりはイングランド、またはフランスなどの社会そのものなのである。悪徳の世界の代表者は、実はファゾムではなくイングランドなのであり、更にはそれを包括する世間、または社会なのである。つまり、真に対立するのは、「」の悪徳の権化たる世間と「感情の人」の世界、といふことになる。

しかし「」の「」は、普通の状態では接觸しあう「」はない。「」のスタティックな図式をダイナミックなものにするのが、他ならぬファゾムなのである。彼は、どのような運動を見せているだろうか。プロジェクトとからめて考察したい。

ハヤシマ幼少期最初の大事件は、悪徳ばかりの戦場の世界から、彼の母親の庇護者であるメンガヤル伯の寛容（“generosity”）と慈愛（“benevolence”）に纏わた家に移わたいたのである。しかも母親は、息も絶えぬ死の呻き声を吐き出しながら、もううだうだしな世間に寄生する大悪党であったが、その血は確実にハヤシマの身に流れ込んじゃった。彼は血の移ったメンガヤル伯の家に転出し、おじけを吸う。彼の驕り易さに付け込み、自分の罪をこじめ立派いた伯爵の息子トナリックに異じてはたら、学校で課せられた宿題の彼の解答を貰つて反対にトナリックが喜ぶねたたり、と云ふいた調子である。これが極めた時、メンガヤル伯の娘を誘惑しようとしたが、やがてだけは成功しな。

彼が人をくたぶかむるのせ、やの口実を隠し先壁に外面を鋸り取らせるのである。この意味で彼は、内心に美徳を隠す隠れの裏面は無事なトナリックを極めよう。

They were certainly, in all respects, the reverse of each other. Renaldo, under a total defect of exterior cultivation, possessed a most excellent understanding, with every virtue that dignifies the human heart; while the other [Fathom], beneath a most agreeable outside, with an inaptitude and aversion to letters, concealed an amazing fund of villainy and ingratitude. (40)

「外見」の如きは、ハーバードは常に用ひる所の単葉は、外見("outside") & "appearance" の現実に対する見せかけである。では、なぜ彼は心のよみうりの如く田舎を見せかねないのか。やれど、彼が他人のものであらはねば、深く真剣な闇やうあらを抱へてゐる金くしならかぬやうだ。ハーバードは流れの中に遊んで表面を愛する者と表現され、やの際の一枚の蝶のやさす水面の上を飛んでいたむに翻ふるおもて。

He never fairly plunged into the stream of school education but, by floating on the surface, imbibed a small tincture of those different sciences, which his master pretended to teach; in short, he resembled those vagrant swallows that skim along the level of some pool or river, without venturing to wet one feather in their wings, except in the accidental pursuit of an inconsiderable fly. (22-23)

彼は何事にも甘々とこなさず。然ば、感情を交へない斯くての關係しか求めない。彼を行動に騒つぱうのは、欲望であつて感情でななし。彼は、仲間のハッチカリに裏切られたか、彼と争った時ばかりかゝりて怒る様子もなし、女性や金を欲しつゝ、轟ちや幸福を希求してゐる風でなさのだ。ハーバードは、マルクス伯に代表される「感情の人」の世界も悪徳渦巻く世間の、欲望の象徴でなく、作中何度も使われる表現や幅のない、ルーラーからの租税を擰取する("levy contributions" 100)やめたむだけの存在なのだ。

ファゾムが自分の欲望を満たそうとする時、ある特徴的な動き方をするのがある。彼がレナルドの遊学に出かけた先、ウイーンのHaus am Bergのバーチャーを確立する。

彼は、ある宝石商の家に出入りするようにならぬ。その家の嫁と姑の仲は、一見良からず安定・調和を保てないに見えるが、実は陰険な確執が存在する」とを彼は見抜く。取り入る("insinuation")+能を持った彼は、むか一方の悪口を語り、画面に取り入り、終に両者の体と心を征服してしまう。金と宝石を貢がせたファゾムは自分の好きなものをおこしゆ、つまり金とセシクスを手に入れたわけだ、この悪事が発覚すると用済みになつた女性たちはむかづいて遁走してしまおう。

ファゾムは、二つの間に入り込み、揺乱を惹き起さず。隣りあつた姑と嫁の部屋に交互に忍んで、この悪戯を働く。これが象徴的に示すよほど、彼は二つの者間の壁は存在しない。彼は、嫁の部屋にいる時、姑と舅に踏み込まれて煙突に墜れたり、姑の部屋にいる所をその夫に見つかりやうになつたり、危うい目に余るが、心の境界を越えて血肉に没する。

このHaus am Bergの後、彼はマルティル伯に軍隊に入れられ、それになり、「感情の人」の世界を後にする。ファゾムは、悪党のくせに戦争や肉体的暴力を怖れる意気地なしで、悪事の際にも暴力を手段として使う。彼は、彼の相手に取つ入る。利益を得る。理想とするのだ。

His aim was to dwell among the tents of civil life, undisturbed by quarrels and the din of war, and render mankind subservient to his interest, not by stratagems which irritate, but by that suppleness of insinuation, which could not fail to sooth the temper

of those on whom he meant to prey. (76-77)

何か不都合が起きて利益が搾取できない状態になると、彼はその世界に見切りをいけてしまうのである。

エリスが次の瞬間、彼は相棒に全財産を奪われ、おまけに嵐の中、森にあぬ盗賊の巢窟で殺やれてしまう。このハック的場面の描写は、この小説中最も力があり最も迫真的なもの。一いやあねじら見解において、衆団の一敵であるエリスである。この強烈な体験を通して、ワゾムは悪漢としての役割の全貌を現すようになら。

パリ、やはり詐欺と博打と女性が渦巻く、「感情の人」不在の世間に舞台は移り、エリスは大いに力を発揮する。——。一つの顕著な例は、売春宿で女性のふつあいのためいかないにいたるエリス人と、一人の仲介役を演じるローレンである。彼は一人の臆病者を見抜き、ふつあいにも取り入って決闘する所へ口焚きつけた結果逆に一人は和解し、その礼として両者から様々な品物を受け取る。

Our adventurer thought he had good reason to congratulate himself upon the part he acted in this pacification: he was treated by both with signal marks of particular affection and esteem. (98)

エリスは、彼はイギリス人の詐欺師に財産の大半を手に入れる。かくして懲徳の世間で挫折したワゾムが次に出来たのは、一人の風変りなスペイン人、トマスだ。これまでの「感情の

人の世界に而き難むべし。

人並み外れて好奇心の強さにて、娘（“benevolence”）の女面を摸り、バイオリズムの触れ込みで、娘（“benevolence”）に近づき、心を捕へておは。娘（“benevolence”）の身の上緒（第十一十六章）にあるよハシ、心中の葛藤する、一ひと感情の間を揺れ動いた。彼は、元来は寛大やと慈善を尊んでいたのだが、自分の娘と身の程知らずにも恋仲になつた家庭教師に対して激怒す。やがて一人が駆け落ちしもつていた所を捕え、怒りに任せ殺してしまひたのだ。彼は、家の尊厳（“honour”）のためにやつたのだが、実は愛い想ふやうに思ふに及ばぬ爲めにやせなかつたが、心配が過る。

...those [my pride, my resentment] were the auxiliaries that enabled me in the day of trial, to perform that sacrifice which my honour demanded, in a strain so loud, as to drown the cries of nature, love and compassion. Yes, they espoused that glory, which humanity would have betrayed, and my revenge was noble, though unnatural. (p. 122)

彼は、女面（おもて）の嫉妬や怨恨や敵かね、血分の嘲弄の行動は判断を下せなかつたが、二度ね放着は叶はずはない。ふたつ不安定な状況にあるのも、

ソリヤ、彼を煙草の上緒をせせたつゝへさせ、娘（“benevolence”）の女面（おもて）の隣に彼の女面（おもて）の葛藤を意識化せたりゆゑなり。彼はその外在化した不調和に付け込み信用を得て、娘（“benevolence”）の女面（おもて）を奪へてしまへ。彼は娘（“benevolence”）の女面（おもて）を攬乱してしまつたが、

不安定な状況に陥り心理的に追い込まれた時、心の奥の性格的な脆弱さが露呈する」とある。ドン・ディエゴは感情を重んずる人であるにもかかわらず、他人の感情を殺してしまって、その重圧に苦しんでいた。今彼に必要なのは、とりも直さず他人の暖かい思いやりなのであって、彼は外見だけを飾った悪人が世の中にいる」とを知りながら、ファゾムに付け込まれてしまふ。」の状況に加えて、彼の破滅には、騙され易く自分が暖かい感情を持つ分他人もそうだと思ってしまうという、「感情の人」独特の性格的弱さも手伝つて、くることを覚えておかねばならない。

ドン・ディエゴの“*The history of the noble Castilian*”を聞いた段階で、我々は、これが例のスマレシトに、そしてイギリス十八世紀小説にしばしば見られる、アロシットに関わりのないエピソードであろうと感じなのだが……、実はこの局面が後になって全体の人物関係に大きな影響を持つことになると、心も内側から離れていくことになる。先回りをして人物関係を整理してみると、結末部でわかる」とだが、ドン・ディエゴの娘はレナルドの恋人として変名で後半部に出でてくるセラフィナ（実はセラフィナ）で、彼女をかどわかした家庭教師はレナルドの変装した姿なのである。一人がドン・ディエゴに殺された、ところは誤解であったのだ。

さて、「感情の人」ドン・ディエゴの宝石とともにその世界を去ったファゾムは、ロン・ロンという、これもまた悪徳渦巻く社会に移り大成功を治める。くずバイオリンを高価に売つたり、いんちき医者としてぼろもうけをしたりするのだが、しばらくして女性問題で投獄され、そこで尾羽打ち枯らしてしまふ。」ここで久しうりに、レナルドが恋人モニミアと共に偶然姿を見せる。

レナルドのなげなしの金で出獄できたファゾムは、この二人の恋人に代表される「感情の人」の世界に再度引き寄せられる。ファゾムに向かつて、別れて以来の身の上話をするレナルドの口調は、なぜか湿りがちである。

心の恋愛を全うするなどは、一人は様々な障礙に余る（「The melancholy of love」）、又は「サヨクス」渡ったモリーテは、彼の誠実や心愛の保護以外何のよすがむなし状態である。金を底おいていたい、職場などナハシだ、恋人と共に油断しないなどしたがが、なすすべもなく。モリーテは“languishing air of melancholy concern”（201）を見せ、ノナハシは懲りた決意をしてした。

...he was determined to combat his own desires, how violent soever they might be, until he should have made some suitable provision for the consequences of a stricter union with the mistress of his soul.... (200)

トマソは、心のよみがへ不安定やむ持つ一人の様子は、自分は回かい手招きをしてやるかと見えた。必然的に彼のトマソの犠牲者、それも最大の犠牲者になら。

義父に財産を奪われてノナルムは金策に奔走するが、皆は表向きだけを取り繕つて結局貸してくれない。社会の人間に絶望した彼は人間嫌い（“misanthropy”）に陥り、「感情の人」としては深刻な道徳的心理的危機を迎える。「感情の人」が、感情による他人との繋がりを重要視する一方で、「人間嫌い」は、一人やお嬢ちゃんなど社会から自由を切り離すアウェサイタード、社会で能動的な役割を果たす「」を拒否する101)がふむである。

ノナルムの不幸と災難は、「感情の人」に対する、悪意ある世間の恫喝によるものだと考へられると、トマソのため、始めて世間と「感情の人」の世界が摩擦を生じ、本決状態にならざるわけである。しか

し、この二つの世界は眞の戦闘状態に入るのではない。レナルドとモニミアの最終的破滅をもたらすのはファズムである。

モニミアへ情欲の炎を燃やし、ファズムは何とかそれを満たそうとする。そのため、レナルドの沈鬱な様子は浮氣と彼女への冷淡さのためだとモニミアに耳打ちする。更に、これを聞いて沈み込んだ彼女を評して、愛情が冷めたためだとレナルドに告げ、一人の恋人の誤解を作り出す。恋人たちは、お互いのプライドのため激しい争いをかいもせず、心の溝を深くしていくのみである。かくして一人の間を裂くことに成功したファズムは、体よくレナルドを祖国に追いやり、モニミアを自分のものにする寸前までいく。

ここでファズムの悪事を招いたのは、もちろん二人の恋人の不安定な状況である。彼ら二人を繋ぐ緊張の糸は、張りきつて切れんばかりであった。だが同時に、その不安定な状況の中で露呈した、彼ら「感情の人」の性格的欠陥＝「輕信」もそこに一役買っている。彼らは常識で考えるとともに騙されそうもない言葉に、ふらりと騙されてしまうのだ。

間一髪でファズムの毒牙を逃れたモニミアは、今一人の感情の人、寛大な気持ち("generosity")を持つクレメント婦人に保護される。ファズムはモニミアを自分の妻だと偽り取り戻そうとするが、彼女の重病と死を聞かされ、葬式代を出費させられては大変とさうと姿を消してしまう。

「感情の人」の世界を出奔した彼の行き先は、ロンドンの社会しかない。ファズムは、再び偽医師としていたん成功するのだがすぐに挫折し、重婚が露顕したことなどで完全に行き詰まり、再度監獄送りになる。(1)でファズムは忽然と小説から消え、話はレナルドのその後になる。

あちこちを攪乱させて、悪漢としての努めを果たし終えたファズムはお役御免になつたのである。結局ファ

ハムは、最終章になつてやがて、幾へ世の縁で現れるのみやある。

3

作品最後の十章の主人公は「感情の人」たるべ、彼の失った財産や家族や恋人を取り戻す。ナハドは財産と家族を奪い返し、エーリヤ・マヒナは娘、アリットの復活や人の素性を探る。エーリヤ・マヒナは次の元田にあらねハド、感情のゆゑの血仇の報復の行動を仄撫する。

Yet nature pleaded strongly in their [his family's] behalf! my heart was bursting while I dismissed them to the shades of death: I was maddened with revenge! I was guided by that savage principle which falsely we call honour: accursed phantom! that assumes the specious title, and misleads our wretched nation! (329)

ナハド、エーリヤ・マヒナは、一匂い殺人、無神かの覺醒し、結婚と友讐へよう新たな調和を獲得する道筋。

エーリヤ・マヒナは、娘の「感情の人」が迷惘から覚めるが、一度必ず死の体験を経て、エーリヤ・マヒナの死を聞くと半狂乱になつて、衝撃のあまり死んでしまなむ。エーリヤ・マヒナは完全に彼が死んでしまひたかのよハジ捕縛してくる。

...he was no longer heard to breathe, no more the stream of life was perceived to circulate: he was supposed to be absolved from all his cares, and an universal groan from the by-standers announced the decease of the gallant, generous, and tender-hearted Renaldo. (303)

マーラードの細盛に繋がれ、偶然運つかかれたハサウエー。一ヵ所に刀傷を受けた。彼は瀕死の重傷で、医師の診断の如く脈弱を體だ("very dubious"(310))のでいた。

最も著しくおもひは、やうやくナドアル。読書せぬ、マーラードの死の上品な題した跋隨で、やうやくナドアル女性が死んだらしく胸へてゐる。ナドアルへトベリ犯されかかれたマーラードは、病氣となりて死んだ。ナドアル作者マーラードの靈薬を應用して、「At length Mrs. la Mer gave notice to our adventurer of this amiable young lady's decease, and the time fixed for the interment....」(242)マーラードが田舎隣を離れて墓場から離り、しかも心配がやうやく回り人物なのである。例へて荒唐無稽な話しだがゆが、やがては一層、マーラードの意識の操作が感じられる。精神的肉体的に離れていた二人、ナルミルス、マーラードが再び結び合はれ、死と蘇生する最も強烈な、しかも得なこもつな体験が必要であったのだ。

さて、ファゾムの運動がある一定の軌跡を描いていると先に述べたが、それは一種の水平運動のようなものであろう。スマレジットの前二作に顕著な、主人公の境遇における上下運動（第五章参照）の痕跡は残っているが、ファゾムに最も特徴的な動き方は、今まで見てきたように、「感情の人」の世界と悪徳の世間の間を行ったり来たり彷徨することである。彼は騙したり騙されたり、つまり加害者になつたり被害者になつたりしながら二つの世界を往復している。この二つの場を交互に行き来する運動は個々のエピソードの中でも見られ、彼は対立する二者を交互に訪れることがある。

彼は一つの世界に安住することを知らない。そして、常に人をペテンにかけようとするため、まことに神出鬼没である。ファゾムにとって二者間の境界は存在せず、彼は自由にどこにでも出没する。社会と「感情の人」の間に存在する壁も、対立する二者間の壁も彼にとつてはなきに等しく、自在にと動き回ることで、〈壁〉に対して何らかの働きかけをする」とになる。ファゾムは自由に動き回りながら、自由にその姿を変える。彼は、紳士の子息でも博打打ちでも音楽家でもあり、誰もある。誰もあるといふことは誰でもないということであり、このことは既に触れた彼のもう一つの特質を我々に思い出させてくれる。ファゾムの見せかけだけで実体がない、という特質である。このために人が騙されるといふことも、既に指摘しておいた。彼の悪漢性の中心を要約しよう。それは境界を越える能力と、変身の能力である。

それでは、ファゾムはどこにへ居るるのであろうか。彼は社会には属しておらず、その周縁のどこかにいるようである。かといって「感情の人」の世界にもいない。彼はこの二つの世界の中間にいるのである。

この二つの世界の、互いにあまり接触しあうことのないスタティックな状況は、最後まで基本的に変わらない

とはなく、これらを決定的に衝突させる」とはファゾムにもできない。しかし、個人的レベルでは重大な役割を、彼は果たす。ここで、ファゾムの悪漢としての機能の考察に移りたい。

彼は、一見調和を保っている二者間、もしくは、一個人の中の相反する感情の間に蟠り、爆発寸前になつてゐる葛藤を、その悪事 || 「トリック」によつて表面化させ、その見せかけの安定を攪乱する。登場人物が、内面やある人物との関係に、不安定さや脆弱さを抱えている時に、必ずファゾムは出現する。おそらく、彼が出現しなければその脆弱さは外面化せず、それを隠し持つたままですると状況は続いていたことであろう。ドン・ディエゴは悩みを抱えたまま隠遁生活を続けていたであろうし、宝石商の嫁と姑は陰険ないがみあいを続けたろうし、レナルドたちは乏しい金でその日暮らしの生活をしていたであろう。しかしそれでは、何の解決にもならない。ここにファゾムが現れ、片づけながら彼らの弱点を露呈させて、一挙に見せかけの安定を崩壊させていくのである。

ここまでならば、彼は単なる破壊者であつただろう。が、読者が小説の最後四分の一で異なつたテキストの中に投げ込まれることで、彼の悪漢としての機能は大きく変化する。悪漢ファゾムの変貌である。しかし、この部分で彼は不在なわけで、その時いかにして機能の変化を起すのが、それを見てみよう。

この最後の十章では、攪乱させられた「感情の人」が各々動き回り、失った財産を取り戻したり、偶然に彼ら同士出会つて互いの誤解を解いたり、仮面を脱いで素顔を見せたりする。そして、自分たちがいかに不安定な境遇にあつたか、いかに容易くファゾムに騙されたかを悟り、あやうく自分たちの最も大切な暖かい人間の感情を台無しにするところであつたことを知る。彼らは「のように、自分たちの弱点や不安定さに気づいて克服することで、眞の安定を勝ち得るのだ。彼らの不安定さと欠点が顕在化し、そのためには彼らは破

滅した。いつたんせうして破滅する」とが、彼らの新たなる安定に繋がる。いわば、彼らは一度死の体験を経て蘇ったようだ。一度壊されないと云ひて再生したのである。読者は最終章で、貧乏の心地によつやく改心し、すべての悪漢性を失つた抜け殻のようなファジムを見て、幸福になつた「感情の人」と彼とを見較ぐると、ファジムの機能が、」の新たな調和を獲得せらるといふ所までを含んでいたのだと同じ感じぬの。」の」をナルドが素朴な言葉で語る所である。

His fraud, ingratitude and villainy are, I believe, unrivalled: yet his base designs have been defeated: and heaven perhaps hath made him the involuntary instrument for bringing our constancy and virtue to the test.... (341)

作品の最後の部分で、あまりに多用される偶然の邂逅には、昔から非難が集中してゐた。しかし」の偶然も、ファジムの惹起するもの、彼の機能の一部と考へられないだらうか。ファジムは、前半四分の三で仕掛け人としてねむりを走り回る。彼の仕掛けたトライックは大がかりで、それいすべをし終えのまではかなりの時間を要する。そして彼が仕事を終えると、必要でなくなつた彼は消え、その仕掛けは（偶然）という形をとりて、独りでに次々と作動し始めるのである。最後の四分の一の部分はその仕掛けられた爆裂弾が爆発する場面なのだ。

もちろん、」の（偶然）の介在をも含めて、登場人物が仮面をつけていたところ、ナルドが邪悪な伯父によつて塔に閉じ込められていた母を救い出す」とも、幸福な結婚と調和で終わるのも、すべて重要な「ロ

マンス」の特質である。「これらの要素が最後の部分の雰囲気を決定する。ファゾムの機能変化と作品の調子の変化は関係しあい、時を同じくして起つたのであつた。

5

のようだ。」今までファゾムの悪漢としての機能を分析してみると、私は、ファゾムと「トリシクスター」像との近似を思わずにはいられない。ユングは、「トリシクスター」像の原型をローマ神話のメルクリウスの中に見出している。こう書いてくる。

A curious combination of typical trickster motifs can be found in the alchemical figure of Mercurius: for instance, his fondness for sly jokes and malicious pranks, his powers as a shape-shifter, his dual nature, half animal, half divine, his exposure to all kinds of tortures, and -last but not the least- his approximation to the figure of a saviour. ○

「彼らの特徴は、よくファンタジムのそれと符合している。ハングが言うように、「トーリックスター」とは神話的存在であり、人間の根源的心理の具現化である。彼はある人間、もしくは複数の人間の性格的欠陥、不安定を体現して生まふる。」*The trickster is a collective shadow figure, and an epitome of all the*

*inferior traits of character in individuals.*”<sup>10</sup> 彼はその変幻自在やふたたび、アクト、ヒューリックの撹乱を惹き起り、不安定や危機的状態にならねば押し進め、その破壊的行為によって欠陥を持っていた人間を逆に救う。結果的に、彼は人々に試練を与えることによって、更に強固な信仰を人にもたらす救世主、神と近似した姿を帯びるところなのだ。

ただ、リヒャルト・救世主ファズムが世の進歩や改革に一役買ひたと結論を出すのは早計である。ハームの「ユニットスター」的機能によつて「感情の人」たちの得た確固たる安定とは何であつたかを再考する必要性がある。

「感情の人」たちの住み活動する「ロマンス」の世界とは、本来非現実的なものである。であるから、それは本来現実である悪徳渦巻く世間とは絶縁したものであるはずだ。ところが性格的欠点や偶然によつて、彼の世間と接触をおこす。現実と「ロマンス」の二つの世界を繋ぐ者ファズムがそこには付け込むのだ。ファズムが二つの世界の間に架ける橋は一時的なものであつながら、最後には再び二つの世界が絶縁したスタティックな状況に落ち着く。

「感情の人」たちの獲得した知恵とは、いかに悪徳渦巻く世間と関わりあいにならざりし、二つの世どうまく生きていくかという方法であった。(つまり換言すれば、)二つの世の秩序の中に“いかにうまく摩擦を起さねずに入組み入れられるか”であった。最終的に、既存の社会構造の安定を願うスマレンジットの世界観は二つの見られること。

ユーリックスターとしてのファズムの窮屈的な存在意義は、二つの世の秩序や現存の体制をより強固にするところにある。ハームは結局触れあつたところの二つの世界の間を、ユーリックによって駆け抜けていつただけなの

かもしれない。彼は「トリック」の王者「トリック」スターであったが、別の言い方をするなら、ただの一人のいたずらものでもあったのだ。

## 第七章

### 旅の弁証法——『バンフリー・クリンカー』

#### 1

『バンフリー・クリンカーの旅』における旅(“expedition”を仮に)こう訳しておくる)の道筋は大よそ円環を描く。これは事実だ。だが、(こう言つて)とによつてこの作品の大よそが記述できたと思う誤謬を犯すまい。例えば、この旅が(初老の登場人物ブランブルの健康探求と発見)の旅であるとか、(複数の男女の連れ合い探し→成功)の旅であるとかいう風に規定してしまえば、円環は閉じ、読みも完結する。作品 자체がこのような読みを強要しているとも確かだ。が、この強要に安閑と従う我々をあざ笑うのがまさにその同じ作品であることを感じる時、我々はこの小説の(読み)を放棄し、昔の批評家のように『クリンカー』は単なる脱線とエピソードの寄せ集めだ、と言つて居直りたい気分になる。『クリンカー』はおそらく多様な要素から成る奇妙な混淆物なのだ。

こうしてこの章を書き始めた以上、私は(読み)を放棄したわけではない。しかもこの作品の本質は(脱線)

であると結論づけたい。この二つのことを同時に行うのが本章の目的である。

2

さて旅は円環を描く。がその円は閉じているかというと決してそうでないことは、『オックスフォードイギリス小説』版に付された地図を見れば一目瞭然だ。一行は、ブランブルトン屋敷を出発し、グレート・ブリテン島を左回りに一周してブランブルトン屋敷に戻ることになつてゐる。が、その当の出発点であり目的地である屋敷がどこにあるかは特定できないし、マンチエスターを出立した後の一行の足取りも定かでない。従つて、地図作成者の手も円環を閉じる直前で止まらざるをえないのである。

そもそもこの旅に目的地はあるのだろうか。学者たちが言うようにスマレットが自分の故郷スコシットランド礼賛のためにこの作品を書いたのだとすれば、○六、目的地はそこであろうか。もつとも可能性が高いのは、目的地がデニスン邸における「田園隠退の幸福」であるということだ。がこれは他人の家である。一緒に住むべくもなく、彼らはここを離れ、旅を続けなければならない。それともブランブルトン屋敷そのものだろうか。だが、彼らは振り出しに戻るためにわざわざその当の（理想）の場所を後にすると言うのか。それに最後に一行は、道程を異にして二手に別れるのだ。

このように疑問文を積み重ねていっても事態は紛糾するばかりである。そこで、とりあえずこの旅が結果的に辿つた空間を整理するために大きくこれを四つに分けてみよう。

第一の空間はブランブルトン屋敷である。二二は、先ほど触れたように、モンモスシャーにあるとは言われる

がその中のじい」か分からず、作者がベースやロンドンについて記した箇所の詳細な地名一覧と照らし合わすと違和感を覚えざるを得ない。作品全体が書簡体で書かれ、プランブルトン屋敷宛ての手紙もあるという技巧上の問題も当然あろうが、我々には屋敷の具体的描写はほとんど与えられない。従つてもちろん〈現在そこにいる〉という形で登場人物の声も聞けない。いわばプランブルトン屋敷は架空の空間である。地図の上で特定できる現実に存在する場所ではないのだ。

これと全く対照的なのが、旅行案内記風の描写で記述される空間である。その中でも、スコットランドに入るまでの空間とスコットランド内の空間の孕む気分は異質のものであるため、これらを分けて第一、第三の空間と考えたい。

がそのいずれにおいても、その当時の現実に存在した風物が登場し批評される。スマレット特有のどたばた喜劇がなければ、時に我々は「これがフィクションである」と忘れるほどだ。」の意味で、ベースやロンドンに代表される第二の空間とそして第三の空間は、完全に架空の空間であるプランブルトン屋敷、及び後述する第四の空間の二者と対極にあるものとして一つの括弧で括れよう。

」の二種類の空間、つまり〈第一と第三〉及び〈第一と第四〉の二つを差異化しているのが、そこに投影された手紙の発信人たちの気分である。前者は陰鬱で後者は明るい。プランブルの甥であるジエリーは基本的にはすべての場所・物を享樂する所以はあるが、そのはしゃぎぶりは「」とにスコットランドにおいて著しい。プランブルも、ベースやロンドンではひたすら文句を言うばかりであったのに、スコットランドではその語調は和らいでいく。

プランブルの感じる第一の空間の墮落は、テュアンの用語を借りるなら場所(place)のスペース(space)化で

ある「〇セ。「場所」はいわば家の空間であり、生理的欲求が満たされる価値観の共有される暖かな空間である。「スペース」は、広大な外部であり自由を含意するが、見知らぬトボスであり可能性に開かれた空間なのだ。彼は、ベースでもクインと共に今の世の中を嘆いているが、ロンドンでの次の発言を眺めてみよう。

もう一つはつきりとしてもらいたい点があります。この世界は今わたしが見えてるぐらい、いつも  
つまらぬものだったのがどうかということです。もし人類の道徳がこの三十年間に恐ろしいほどの堕落  
に染まらなかつたのだとするなら、わたしのほうが年寄りに特有の悪習、『怒りっぽく不機嫌で、常に  
自分が若かつた時代の自慢をする』に冒されているに違いありません。または、もつとあり得るのは、  
以前は若さにまかせて激しく仕事や遊びをしていたために人間性の腐った部分が見えなかつたという  
ことです。〇八。

プランブルが昔慣れ親しんだ場所としての空間は、現在の彼とは齟齬そごをきたしており、もはや見知らぬ、ス  
ペースの拡がりでしかない。

逆に、プランブルはこれまでスコットランドに足を踏み入れたことがなく(62)、最初そこは「スペース」であつた。初めて目にするスコットランドの欠点も多く田に入るが、にもかかわらず人々は親切で歓待してくれ、何と言つても水が美しく(一)の作品で水はもつとも重要な価値判断の基準だ)すばらしい。「スペース」は、「場所」(place)化していく。プランブルのレヴン川を讃える手紙は、作品全体の中でも最も高揚した部分であると  
書いたのも過言ではないのだ。

第四の空間はデニスンの邸宅である。つまり「田園隠退神話」の理想郷であり、理想郷というからには、現実性は希薄である。

一行はスコットランドを出た後はあちこちに寄り、スコットランドでの気分の延長で総じて皆の機嫌はよい。「この旅の現実性が薄らぎ、一行が神話の世界の中に迷い込んでいくことを象徴するのは、途中から手紙の発信地が消滅する」とである。ブランブルのマンチエスター発、九月十五日づけの手紙以降発信地は記載されない（〇九）。ちょうどブランブルトン屋敷の所在地がつまびらかでないように、以降の旅の道筋は次第に茫然としてくる。そして行き着くのが、反理想とされるペイナードの住むカントリー・ハウス、そして理想とされるデニスンのカントリー・ハウスなのだ。

ブランブルの学生時代の友人であるデニスンの館に、田園の幸福がいかに体現されているかは、既に論じられているので（二）では詳しく辿らない（一〇）。ただそのもてなし好きの住人たちの慈悲心、空氣・水の清澄さ、それに庭や周囲の環境等の描写は当時の文学手法に則った通り一遍なものと言えよう。そのあまりこの空間は非現実性を強くしている。（二）のような環境において、クリンカーがブランブルの子であることが判明したり、三組の結婚が一度に行われたり、という「ロマンス」的出来事がまとめて発生するのも当然の一ことだ。

ただスマレットはあまり器用な作家ではないわけで、スコットランドとデニスン邸を賞讃する彼の形容詞はそろそろ大きく変わらない。上のような印象の違いを生むのは、作家の立場からいうと、彼の生まれ故郷である場所への思い入れと、片や漠然と先行する文学慣習から受け継いだ、スマレット自身直感的には分からぬ「田園隠退神話」の差であろう。そのため前者の描写は集中力に満ちたものとなり、後者からは他とは違ったデニスン邸の具体的な姿は我々の頭に浮んでこない。おそらく統一感(unity)を作ろうとす

るスマレットは、強調点を逆にしたかったと思われるが、以上のような事情がその統一に反する結果を生み出したのだ。彼は自分の心情を、ついうつかり暴露してしまった。

### 3

以上のように空間を四つに分類してみた。確かに第二と第三の空間はある程度比較できそうだが、全体の中で価値の上下を決定するのは困難だ……。「ロマンス」的文脈と文学的慣習という立脚点に立つと、当然目的地は「デニスン邸」ということになろうし、むのとも力を込めて描かれた現実の場所としての目的地はスクートランドだ。さらに常に参照される架空の理想地ブランブルトン屋敷も有力候補である。上の分類によればつきりしたのは『クリンカー』内に共存する様々な空間の異質性と、その中で優劣順位をつけねばとの可能性と……ことになる。

この四つの空間を一行は順番に訪れていくわけだが、この進行に従つて、第一の空間から第四（そして第一に戻るという）の（円環）において何か意味を持ったゲシュタルトが現出するといふとも言えない。四つの空間はそれぞれ独立した空間で、登場人物たちは異なつたやり方で、これらの空間を生きる。それらを総合してある構造が生まれるにしても、あまりに存在形態のレベルが異なつた空間が併存しているといふことだ。

価値基準やレベルの変化によって四つの空間の優先順位が変わると、この空間のありようは、絶対的価値を決めようとする試みを無効にする。敢えて言うなら、これらの空間は相対性（relativity）を我々に投げ掛ける」といふ、作品全体における相対性の意義を訴えかける……。つまり四つの空間は総合できず、そい

から一貫性は抽出できないが、まさにそのことが、作品内の一貫した相対性を際立たせる結果になつているのである。

これが時間・空間軸に沿つた縦割りにおける相対性とするなら、同時刻における横割りの相対性を生みだすものは何かとすると、同一事物・事件に対する複数人物の複数反応だ。六人の旅の一一行が同じ」とに対して異なる所見を述べるという基本的枠組そのものが相対性を実現しているのである。ある一つの風景の絶対的価値といつものほこの枠組によつて決定不能となる。この作品には特權的時間・空間とこうものは存在しないのだ。

いのうに考へると、我々の関心は空間の統合といふとは別の方向へ向かわざるを得ない」となる。

だが、そこへ行く前に、それとは矛盾するようだが、私はもう一度この〈円環〉を強調しておきたい。第一から第四の空間がそれぞれ別個の存在形態を持つてゐるところと、それらを足せば円環になるといふことは何ら関連性を持たないが、この統一(unity)としての〈円環〉の形成を促し、それを示唆する、ある文脈は確かに存在している。

次のリストハイゴーのせりふを見てみよう。彼は、経済的富や人間の流れについて語つてゐる。

人間の体内をめぐる血の流れのような、絶え間のない循環("circulation")があるので。イングランドはその心臓で、それが分配したすべての流れはまたそこに返済され戻つてくるのです。(278)

スロシット・ハンド人である彼は、結局すべてがイングランドに流入する川に慣つて、川の匂うのだが、グレート・ブリテン島が人間の体という円環であつて、その中を体液が循環していくという考えは、この作品の下層に浸透している。

すなわち、この作品における旅とは、一行がグレート・ブリテン島という体を一循環するものだと言える。循環が滞れば健康は失われるが、旅という運動＝循環は健康をもたらす。循環するだけで健康になるのだ。作品の冒頭であれほど痛風と体の不調を訴えていたブランブルが、旅が進むにつれて次第に元気を取り戻していくのもうなづけられる。

また、その循環を促進させ、四体液の調和をもたらすのは、スマーリット自身の論文『水の外用についての論考』("An Essay on the External use of Water")に書かれてゐるようによくあることだ。ベースのロンドンの水は悪く飲めないし、その中に浸れない。スロシット・ハンドやデニス・スペンサーの水は良く清浄な水だ。ブランブルの旅とは、良い水＝良い循環→健康の探求にあつたのだ。これをもたらす円環を仮に良い円環と呼ぶことにしよう。

このように述べたことは眞実である。つまりこの小説における旅は、体＝円環という統一体を作り、一貫して言及される水という媒体によって、健康回復という目的地に向かひて一直線に進んでいくことになる。と同時にこれは眞実ではない。先に検証したように、旅の中で実際に描かれた空間の中にはブランブルたちにとづいての目的地＝理想たるべきものはない……四。

なぜこのような事態に陥るのだろうか。ある意味でこの作品の〈円環〉は、更に言うならこの時代の〈円環〉は、必然的にこののような事態を生み出さざるを得ないのではないか。ある究極の理想を求めるためには、求

心的な、中心を求める旅行にならねばならない。がこの作品では、ペイナード邸のような反理想は存在するとはいへ、四つの空間の中で排除されるような描かれ方をしているものはない(ベースでさえ、最後に二手に分かれたジェリーの方のグレープが再び訪れようとするぐらい魅力的なのだ)。中心に到達することがない以上、旅の一回は円周上を滑りながら回っていくしかない<sup>一五</sup>。危うくすると遠心力で弾き飛ばされるかもしれない。だからこそ、旅は目的地を求める統一を作ろうとしながらも、挫折の憂き目を見る」とになるのである。

これは(円環)の側からの説明であるが、それ以前にそもそもこれらの空間は、同心円上に並んで円環を形成するということ自体を拒否しているとしか思えないことも事実だ。いかに統一しようとする意識が作品内にあつたとしても、全くレベルの異なる空間を生きる登場人物たちは、その時々で自己の生き方を変化させねばならぬわけで、その際そのような統一は拡散せざるをえない。作品の枠組自体が統一を拒否しているのだ。また、先ほどの循環<sup>一六</sup>健康という直線的発展は、ブランブル個人についてのみ眞實に近いものであるし、その眞実は次の瞬間どうなるかわからないような不安定なものなのだ。

すなわち、この作品は円環でありながら円環を拒否している。相対的でありながらゴールを求める統合しようとすると、作品が表面的にやろうとしていることと、実現されたものが一致していないのである。我々は二者択一の可能性を放棄せざるを得ない。

この小説には、二者択一を許さない重要な対があり、これを論じなければならない。ブランブルとジェリー

の二人の登場人物である。この作品中の手紙の大部分は彼ら二人のものであるという事実が示すように、彼らは作品中でもいつも大きな比重を持っています。この二人は共に旅行を続ける仲間であり互いに愛情を感じているが、彼らは全く異なったものを表現している。結果的に二人は同じ空間を同時に動いていますが、彼らの生きている空間は全く異質なものとれます。

次は、ジエリーのベース擁護発言ですね。

ベースは縮んだ円環("contracted circle")や高い、同じ退屈な場面が、変化("variation")やなく永遠に回る("revolve")こと不平を言う人たちもいますが、謂われのない非難だと感じます。わたしは逆に、この小さな場所に慣れてしまふやんの娯楽と変化("variety")があるのに驚かせた。(48)

この作品には良い円環と共に悪い円環も存在する。変化がなく何も生み出せば、単に回るだけの不活発な("inactive")円環である。ジエリーは、ベースが悪い円環であるという説を否定しています。

ベースが多様性を持ちそれほど彼がそこを気に入ったなら、彼はそのままベースに留まるはずだが、そうはない。彼は「絶えず場面を転換させ、いつも新しい事物を取り囲まれて」(72)。彼は多様性を愛し、常にスペースを求め新しい事物を享受しようとする。差異を求める。彼の動きを一言で言うなら「前進」である。

同じベースや、ブランドルは舞踏会に招待され、皆の動きながら眠っているような退屈なダンスの繰り返す。

しを憎む。

わたしは、長時間、騒々しい群衆のただ中で半ば窒息して坐っていました。そしてわたしが不思議に思わずにはいられなかつたのは、理性あると言われる地位を持つたあれほど多くの人が、洋服屋の裁ち板より少し大きいぐらいの場所で、一晩中同じ退屈な形を描いているおもしろみのない動物たちの動きの連続を眺めることに娯楽を見出せることです。…それは同じ不活発でつまらない場面の繰り返しで、すべての動きにおいて眠つてゐるような役者たちが演じていたのです。(65)

ブランドルはベースが不活発な繰り返しだと言う。繰り返しは円環ではないが、その内実は(悪い円環)そのものである。ブランドルはベースに対してジエリーとは反対の評価を下しているわけだ。  
ブランドルのロンドンでの次の発言も、基本的に同趣旨のものである。

ラネローの娯楽とは何なのでしょうか。会衆の半分はオリーヴ搾油器に繋がれた盲目のろばのように、終りのない円環("circle")を作つてお互いの後ろにくつづいています。そこでは、彼らは話もできず、人を区別できず、人に区別してももらえないのです。(88—89)

悪い円環を嫌うという点では、このようにジエリーとブランドルは共通する。がしかしブランドルはジエリー同様に多様性を求めているとは言えない。彼はもはや多様な変化そのものを享樂できる年齢ではない。彼に必

要なのは根源的("original")なもののだが、それは(現在=いり)ではない。良き場所(place)としてのベースはただ彼の記憶の中にのみあるものだ。彼の観察は冷静なものだが、やはりきまり文句は老人のそれである(106—7の引用参照)。昔は良かったと言うのは容易だが、昔への逆行は不可能である。根源(origin)は到達不可能な消滅してしまった過去の領分なのだ。

もう一つ彼が根源として常に言及=参照するのがブランブルトン屋敷である。彼のもう一つのきまり文句は「ブランブルトン屋敷を出て」なければよかつた」(47)だ。彼の目は旅の進行とは逆方向、彼の出立地に向いている。ブランブルの動きを一言で言うなら〈後退〉なのである。

だが、彼は現実には後退はできない。後退→過去への逆行は不可能であるからだ。その上ブランブルトン屋敷は架空のものであつたことを想起しよう。理想の根源などというものは存在しない。たとえブランブルトン屋敷が存在するとしたところで、一度〈その場所=その時〉を出立したブランブルに逆行は許されない。従つて彼の動き=〈後退〉は彼の意識内における運動である。

彼がせめてやさける時への反逆は、旅行において左廻り、つまり時計の針と逆向きの円を描くという行動に現れてくるのではないだろうか。不可能な逆行に対する憧れと、どうしようもない時計の前進に対するせめてものブランブルの反抗と言えよう。

後退→過去に目の向いているブランブルと、前進→未来に目の向いているジヒリーがいつしょに旅をできるのは、彼らの内的運動に対し逆の現実が歯止めをかけているためだ。ブランブルは過去に戻れず、不快な現実から逃亡するためには、いやがおうでも前に行くしかない。それに、彼にとっての救いは、旅が円環であるため目的地=出立地であり、前進する=出立地であり、前進する=イコール後退することであるという幻想を抱けることである。ジヒ

リーは享楽の変化を求めて前進したいが、現実に享楽するには、その場に一定期間停滞しなくてはならない。

「のよつじし」、「一着の歩調はほぼ合うわけである。とは言え、同時進行する一人の持つ逆方向の意識が「」の作品の旅("expedition")の緊張を高めるにこぶんだ。

## 5

セレーニアリオでの結論は主に前半の部分をもとに推論されたもので、当然スロシットランドの箇所以降にも田を注がなければならない。

スロシットランドの悪い面を見る時の二人は、ベースやロンドンを見る時と大きく変わらない。エディンバラに窓から汚物を捨てたりする悪い面がある原因是、すべて習慣のせいだとブランブルは言う。習慣とは繰り返しであり、繰り返しの悪といふ考えが繰り返される。キャンベル氏邸での悪習を記述する時のジェリーも、ベースにいる時と同口調だ。キャンベル氏の嫌いなバグパイプの吹き手の動きは執拗に田を描き、広間の中といふ同じ空間を行ったり来たり("backwards and forwards")するのである。

「」で攻撃されてくるのは、田環=繰り返しのものではなくて、それの持つ単調さと、眠りを誘うような不活発("inactivity")である。つまり悪い田環である。セレーニアリオとブランブル二人の動きは逆のものであると言ふが、一人とも動きの重要性への認識は共有する。ブランブルは作品の最後でこれをはつきり意識するようになり、彼は坐りきりの生活 ("sedentary life")を放棄する(いは語りでも旅行をしてくるブランブルは坐

りきりの生活をしているわけではないが）。悪い円環とは意識内における停滞であり、プランブルがそれを嫌うのはそれが（後退）しないからであり、ジエリーが嫌うのはそれが（前進）しないからなのだ。このように悪い円環はスコットランドにも存在するのであるが、プラスの面の方がより強調される。

ジエリーは、エディンバラを気に入り、ダンブリーズに住んでみたいと言う。すべてのものを公平に享樂するという彼の態度には全く変化が見られない（イングランドに戻つたら戻つたで、やはりイングランドはいい、などと書いている）。

しかし、プランブルは前述の如く、スコットランドにおいて気分の変化を見せる。彼はエディンバラを去り難いと思い、どこか都会に住まなければならないのならここがいいと言う。スコットランドはウェールズに似ていると言ひ、その自然美を賞讃する。全篇がここで完結していたとしても、読者はさほどおかしく思わないであろう。スコットランドはプランブルにとってスペース、アッティーと/or/を思い出そう。テュアンの言うように「スペースは開いており、それは未来を示唆し、行動を促す」。だとすれば、（後退）するはずのプランブルは、ここで人生を積極的に前進させる価値を見つけたことになるのであろうか。

プランブルの見るスコットランドは、実は逆に（過去）に通じていて。ここは作者スマレットが幼少時代を過した故郷であるところとも、（過去）という雰囲気を濃密にするのに役立つていて。この気分が、プランブルの内面の運動と一致したとは言えまい。

全体の中でもっとも高揚した部分であるプランブルの手紙の中で、スマレット自身が書いた詩が引用されている。その中でスマレットは、理想郷アーケイディアにも比すべきレヴァンの水を讃える。その清浄な流れの中で彼は若い頃手足を洗つたものであった。その流れは穏やかで澄んでおり、岩に妨げられることもなく小石の上

をさらさらと流れる。スマレツトは、この川辺で昔と同様に神の恵みを守るために、羊飼いは笛を吹き人々はせつせと働くことを望んでいる。狡猾さを知らない昔ながらの信仰が見えるようにと願う(249—50)。根源的なものに憧れるブランブルの心情に合致するアーケイディアという言葉がここには見える。ブランブル自身も「スコットランドのアーケイディア」(248)という言葉を使っている。彼はここを訪れるのは初めてなのだが、この川は幼年時代、またさらにその昔へと彼の心をいざなう。川はそれ自体理想として現存するように見えて、実は我々を過去へと運んでいき、理想であるという根源的な状況をどんどんその方向へ繰り延べていく。

ともあれ、ブランブルの理想にもっとも近いレヴァン川は、彼を過去へと邁行させる。彼の動きは、やはり(後退)なのだ。前述の空間分類では、第一、第三の空間は場所(place)とスペースという点で逆の意味を持つていたはずだが、ブランブルの心の奥では結局それらは同じヴァクトルでしかなかつたのだ。

## 6

このように、ジェリーとブランブルに代表される全く逆の空間意識が、この作品を支配していることを我々は見てきた。ジェリーの運動を、ブランブルはその存在によって逆行させようとする。ブランブルの運動を、ジェリーはその存在によって逆行させようとする。だが、その試みはどうやらも不可能なのだ。また、循環を求める旅は円環を作ろうとするが、その一方で異質な四つの空間の排他性は円環の成立を拒絶するし、良い円環と悪い円環を区別せず「円環そのものを嫌う」と時に発言する一行は、反円環を強く示唆する。

この二つの全く逆方向の契機を一身に引き受けるのが、ハンフリー・クリンカーである。彼が二者を中和す

るというのではない。同時に正反対の動きを体現するのだ。

クリンカーが最初に登場するのは、ベースからロンドンへの道中である。(一)までに既に作品の五分の一が終わっており、タイトル・ロールを担うべき主人公の出現にしてはいかにも遅い。しかも彼は作品中そう再々顔を見せるわけではなく、タイトルとの関係が疑問視されてきた。しかし、その五分の一の部分でジエリーとブランドルの対立する意識という構図が明確にされるわけで、それが確立された時に、まさにその二つの意識を一身に引き受けるクリンカーが現れるのは時宜に適っていると思われる。それに、次に論ずるような彼の機能が、タイトル・ロールそのものであると私は考える。

彼が登場するのは、馬車がひっくり返った時の騒ぎで首になつた御者の後釜としてである。一文無しに近いクリンカーは、御者台に坐つた時剥き出しの臀部を御婦人方に見せることで鑿楚を買う。不器用で単純なクリンカーのへまに腹を立てた、ブランブルの妹の初老独身女性であるタビサと一緒に着起<sup>シ</sup>すことで、一行の間に大混乱が起<sup>シ</sup>る。

(二)で、クリンカーは一度停滞した馬車の動きを、新しい御者として前に進めるべく登場するわけだ。ところが同時に、彼は騒ぎを起<sup>シ</sup>して動きを停滞させてしまう。そこにエピソードが生まれ、脱線が生まれる。彼の出現が、ベースからロンドンへの途中、すなわち道中において起<sup>シ</sup>るもの暗示的である。彼は、ベースとロンドンとくつ二つの場所を繋ぎながら切るのである。

ロンドンでのクリンカーを見てみよう。ブランブル一行がそろそろ(一)を出発しようかという時になつて、彼は、追剥に間違えられて投獄されてしまう。そのためブランブルは、「あの可哀そうな厄介者がロチエスターで裁判にかけられるまで、ロンドンに数週間いなくてはならない。そこでどうやら、わたしの北への旅

(“expedition”)は御破算になつてしまひた」(146)とい嘆くいふしきりである。結局は追剥の被害者の証言で釈放の由処がつき、あとクリンカーと一行に必要なのは、待つという忍耐だけである。」のH派ソードにおけるクリンカーは、前進しようとする一行の動きを停滞させている。

スカーベラでは逆に彼は、もう少し長くそこに止まるはずであった一行をあたふたと出発させ、前進させるることになる。ブランブルは、鉱泉水と水泳が健康に良いといつて、この場所をたいそう気に入っていた。そのブランブルが水泳中くしゃみをした時、クリンカーは彼が溺れかけたものと勘違いし、裸体のままのブランブルを、その耳を摑んで岸に引っぱり上げる。見世物になつた彼は大恥をかく。もともと大衆嫌いであったブランブルは、「のことに耐えられずこの場を後にすることになるのだ。

」の直後の場面で、馬車が壊れて動けなくなつた時、クリンカーは馬車を修繕する。つまり前進に寄与する。修繕の途中に、夫を亡くした妻の感傷的な語が語られる。

スカーベラでのクリンカーによる水難救助は仇になつたが、ブランブルが旧友デニスンに会うきのかけになつた川の事故で彼はブランブルの命を救う。ブランブルがあの世に行つてしまふのを引き止めたのだ。同時に馬車はまたもや壊れ、動きはデニスン邸において停滞する。

クリンカーの機能をまとめてみよう。彼は、動きの方向を逆転させる。彼は〈前進〉させまた〈後退〉させる。その意味でクリンカーは、ブランブルとジェリーの間に存在する運動の緊張を実現させ、活性化を促しているといえる。「こうして、」の緊張は作品の中に具体的に表れ、そこからエピソードが生まれ、脱線が生まれるわけだ。

従つて、クリンカーの本質的な動きは、行つたり来たら(“backwards and forwards”)するものであるはず

だ。だが彼のこの運動は、スコットランドのバグパイプ吹きのそれと違つて、停滞した不活発さ("inactivity")を表すものではなく、極めてアクティブなものと言える。彼は前に進む存在なのか後ろに下がる存在なのかは決められない。決定不能である。その両方の動きを同時に表現し、身を挺してこの決定不能性を表現しているのがクリンカーなのである。

クリンカーは、このように、ある一つの機能である。完全に受肉した存在だとは言えない。非常に示唆的ことに、彼の存在は基本的にジェリーやブランブルによつて手紙の中で語られる」とのみで保証されている。彼は語る存在でなく、語られる存在なのだ。

彼は動きを脱線させ、エピソードを生む。と同時に、彼クリンカー自身が脱線の結果生まれた子供である。次の引用は、ブランブルが、実はクリンカーが自分の血氣盛んな青年時代の脱線で作つてしまつた私生児であつたことを告げる時のせりふだ。

これまでのハンフリー・クリンカーが、マシュー・ロイドに变身したというわけだ。で彼は我々の血族であるという名誉に浴する権利がある。要するに、あの悪党は、わしが血氣盛んで節度ない放蕩に耽つていた時に自ら植えつけたクラブ「野性のりんごの木」であると判明したのだ。(318—9)

クリンカー＝脱線でもあるわけである。

クリンカーの機能を以上のようないまどみる。The Expedition of Humphry Clinker は、この作品のタイトルには様々な含蓄がありそうだ。

まず、クリンカーは旅のお供をするのであって、これが、彼の旅行ではないことを知つと、いかにも奇妙なタイトルである。が、この旅の持つ本質をクリンカーが体現してゐるとするなら、"of"は同格であつて旅=ベンフリーニ・クリンカーとして捉えらねよう。

ただ"expedition"や"of"や"Clinker"も、義足の意味を決定する必要はない。例えばブーケのようないい"expedite"を〇山〇〇一一番の定義「…の前進を助け、速める」と取るなり。セ、クリンカーが前進を促す、といいた意味のタイトルにならぬ。これだと、彼の機能の一部だけを表現してしまふことにならう。

グリーンの細かい「"expedite"や"act of freeing"(解放する行為)"や"clinker"が俗語や「一片の排泄物」の意味であると考へてみると、面白い。タイトルは極めて興味深いものとなる。グリーン自身の解釈によれば、この二つの語義の組み合わせは、この小説の「便秘と下痢のテーマ」に關係するのである。が、私は前置詞に着目してみようと思つ。

"of"は田的格とも主格とも取れるのではなかろうか。まず、田的格に取るふ、このタイトルはクリンカーという排泄物を解放するつまり排泄してしまつ」とを表す。

クリンカーは脱線なのであつて、本来小説の統一といつゝとかから考へると、排除すべきマージナルな存在であるはずだ。従つての作品自体が、このマージナルなクリンカーを排除=排泄しなければならない。といふのがそれはできない。それが可能になるのは作品が終わる時である。作品の終結=クリンカーの排泄である。とす

ると、作品が統一體になるべき契機を手にした時が同時に作品の終りであるという皮肉な結果にならう。

主格に立ると逆に統一が強調される。このタイトルは、クリンカーという人物の行う解放、すなわち浄化行為を示唆する。これは、成功と失敗に終わる一つの海難救助や嵐など水に纏わる主要なエピソードにおいてクリンカーが中心人物であることに具体的に現れている。水はすでに指摘した通り循環の象徴であり、浄化する元素なのだ。溺れたブランブルを助けた彼の働きにより、一行はデニソンと会うことができ、作品各所にばらまかれていた謎は氷解し、ウェディング・マーチが高らかに響き渡る。

實際、作品は浄化に向かっていることは事実だ。ブランブルの健康も機嫌も次第に良くなり、終りに近い所では次のようなせりふも聞ける。

わたしの健康はたいそう良くなつたので、痛風やリューマチなど何だ、という気分です。わたしはあまりにも早く自分を隠居者リストに加えていたのだと思うようになりました。それに、愚かにも怠惰といいう隠遁所の中で健康を求めていたのです。病人はあまりに坐りきりで規則正しく、注意深すぎるのです。わたしたちは時には、「人生の車輪を進める」ために身体の運動を増やしてやらねばいけません。体を丈夫にするためには、時には不節制という波の中に飛び込まねばなりません。生命が活発に循環("circulation")する」とは健康のまさに本質であり基準であるわけですが、それを促進させるためには、転地と同様、つきあう相手を変えるのも必要だということもわかりました。(3339)

健康のためには運動が必要で、「波」の中に「飛び込ま」なくてはならない(ブランブルは何度飛び込んだこ

とだらう。つまり、旅における田環＝体の中の循環→健康という例の統一(unity)志向の主題を、「」のブランド自身が確認しているのだ。彼の意識は、これまでとは変化していると言える。ブランド＝後退の公式は最後に崩れてしまつたように見える。

だが、「」の一つ前の彼の手紙からわかるように、前進の価値を悟ったはずのブランドは、現実には停止してしまう。法律に則つて結婚式を行うためには、「」の村に数週間滞在せねばならず、彼らは結局クリスマスをブランブルトン屋敷で迎えられない。ブランドは「現在停滞してしまった」と(33-)のだ。そして、「」で作品の時間は止まる。これがまでの部分での意識の(後退)と現実の(前進)が、意識の(前進)と現実の(後退)に変化してくる。が、前進／後退の緊張はまだ解けていない。

また、ブランドの機嫌が良くなるのと同様に、結婚に向かって一行の幸福度も増大する。ただ彼らは百分率で幸福になるとは言えない。ショリーは「喜劇も終りに近づいた。幕も降りようとしている」と統一を強調する言葉を書いた同じ手紙において、「おそらく、」の三組のカップルは「幸せの絶頂にいるようだが」、結婚相手をもつて知ればその調子も変わるだろう」(34-)と書いて水を注す。物語を未来へ差延する。ノーバンの描寫するように、ブランドの上機嫌といつても理解しかわらないのである。

マイケル・カインが書いた「マトロピズム」の手紙が作品全体で最後の手紙であるとともに興味深い。彼女は自分のクリンカーとの結婚を報告しているのだが、綴りの間違によより、結婚("matrimony")は金の問題("mattermoney")であつて神の恩寵("grace")は神の油("grease")である。夫の財布は取るに足りぬ("contemptible")のではなく、嘲諷的である("contentible")。なぜなら嘲諷の彼女は結婚しない本当に幸福になつたのだらうか。

ある意味で、このアンビギュアスな最後の手紙は、この作品の意味を一義的に決定しようとする試みをはぐらかすものなのではないか。先ほど見たように、作品のタイトルそのものすら、全く異なつた二つの方向を同時に表現しているものである。

この二義性を端的に表すのが〈前進〉と〈後退〉という運動であった。これが弁証法的に掛け合わさった時脱線が生じ、エピソードが生まれた。〈脱線〉は生産である。ブランブルの脱線の結果クリンカーが生まれた。作品における脱線は話を生んだ。

この作品全体について考えると、それ自体スマレジットという作者の脱線によって生まれたものと考えられるのである。

ブランブルはスマレジット的存在だと言われてきたし、クリンカーはスマレジットのこれまでの小説の様々な滑稽な登場人物に似ている。つまり、クリンカーという存在は、スマレジットの創作した過去の作品に觸及(refer)してくるわけで、この「」により、『ブランブルの子クリンカー』とこうのは『スマレジットの書いた小説群』と読み換えられる。クリンカーは、スマレジットの死後も残つて活躍すべき作品群のことなのである。

スマレジットは、死の直前のこの作品の中に自分自身も登場し、過去の自分自身の作品にも直接言及し、過去を取り込んでいる。同時に、これらを未来に投げ掛けてもいる。「ブランブルトン屋敷はやがて彼〔クリンカー〕の子孫で溢れる」(345)はずであるのだ。世界には、スマレジットの本が氾濫するはずであるのだ(殘念ながら実状はそうなつていないが)。

すなわち、この作品 자체も、過去への後退と未来への前進の弁証法によつて成立しているのだ。この二つの運動がスマレジットの中で掛け合わさつた時、〈脱線〉=『ハンフリー・クリンカーの旅』という作品が生産された。

## 第三部 フィクションのレトリック

### 第八章

#### 統合者と非統合者—『コノソリデーター』

1

『統合者』(The Consolidator)という作品は、一般には知られていないにせよ、デフォーの研究者にとっては頭の上を飛ぶ蠅のようなもので、膨大なデフォーの作品群の中においては蠅以上の存在ではないちっぽけなものにしても、何かしら鬱陶しい、追い払おうとしても追い払いきれないようなものではなかつたかと思われ

る。

後期の傑作「イクション群執筆がスタートする十五年ほどの前の1705年に書かれた」の散文作品がないしろにできない意味を持つてゐる理由は以下の三点に要約される。」の作品がデフォーとしては特異な「月世界旅行」という題材を扱つたものであるところが第一点……。第二点は、スウェイフトの作品と密接な繋がり合いをもつてゐる点。またデフォーは、『非国教徒処理小径』("The Shortest Way with the Dissenters") (一七〇三) 出版によつて誹謗中傷罪で逮捕され、むし刑(ムロニー)に処せられたが、」の騒動の余波覚めやらぬ一七〇五年に『統合者』は書かれており、その一件を題材として取り扱つてゐる。これが批評家に注目された第三点である。

ただし、これらの事実もあまり豊かな研究成果を生んだとは言い難い。まず一点目からは、「架空旅行記」という文学伝統を踏襲したものであるところから、後期の「イクションを産み出す土台となつたといひ」ことが論じられたのみである。第二点目に関心を示した学者の書物の結論は、この作品が『植物語』(一七〇四)の影響を受け、『ガリバー旅行記』(一七二〇)のバルニバーレのプロジェクトターたちに影響を与えたという影響関係を実証することにより、スウェイフトのテクニックがはるかに秀逸であると指摘するに留まつてゐる……。第三点目の事実は、研究者に取つてがフオーの伝記を調査するうえでの手掛かり以上のもになつてゐない、見方によればそれにすらなつていないと、いう難点がある。以上のようにやや貧困な研究史を辿ると、『統合者』論は十分に行われていないし、それも困難であるという現状が看取できよう。

」の困難を、耳田を引く月世界旅行という架空旅行譚は所詮作品の五分の一の分量しか占めていないことから起因しており、その他の部分で執拗に繰り返される風刺までも取り込んだ視座というのは獲得しに

べるかの事情がある。要するに全体を読み全体を捕えた論点が欠けていたために生じた、批評の面白地  
味も幅広い過幅ではないであらう。いの次にいた部分の読みを読みながら、この作品は数多くの「ナホー  
性」の母なる極めて特徴的な位置を占めるにふさわしかったのである。

## 2

1)の性品に触れた数少ない批評家は、エ・リカルソンがねら、やの『世界への旅』の読みこぶせ、1)の性  
品やおもろいのは十八世紀に大に兴った中国趣味、ハーロードリードあり、中国人は何世纪か同一ロ  
ーバル人として人々の発明をしたのであり、イギリスの実験家など中國の人間に比ぐたるがゆえに恐れや  
畏れ、驚きの如きだな。

And as these things must be very useful in these parts, to abate the pride and arrogance  
of our modern undertakers of great enterprises, authors of strange foreign accounts,  
philosophical transactions, and the like: if time and opportunity permit, I may let them  
know how infinitely we are outdone by those refined nations, in all manner of mechanic  
improvements and arts; and in discoursing of this, it will necessarily come in my way to  
speak of a most noble invention, being an engine I would recommend to all people....  
(本編廿六回 節のマカラベキ本セラム鑑賞の御見聞)

シノワズリーをあまりに強調する読みを採用するならば、さらにそれを敷衍させて、それらの発明をもたらしたのは実は月世界人であったとする次の引用に見られる記述によつて、月世界人は中国人をも凌駕する知恵を備えている存在で、月世界とは最高の知恵を持って快適な環境を実現したアルカディア的世界であるということになる。そうすると、この作品は架空旅行記のうちこの時代に爆發的流行となつた『月世界旅行』の文学伝統のある一つの型（例えはフランシス・ゴドウイン作『月の男』<sup>二二五</sup>が代表するような）にそつくり嵌まつてしまつことになるようと思われる（二二六）。

It is further related of this famous author, that he was no native of this world, but was born in the moon, and coming hither to make discoveries, by a strange invention arrived to by the virtuosos of that habitable world, the emperor of China prevailed with him to stay and improve his subjects in the most exquisite accomplishments of those lunar regions; and no wonder the Chinese are such exquisite artists, and masters of such sublime knowledge, when this famous author has blest them with such unaccountable methods of improvement.(218)

しかし、まず作品の冒頭で触れられるのは、なぜかロシアの話であり、ロシアの現在の優秀さが、ヨーロッパの物真似を行なつた結果もたらされたものであると述べられる。この「物真似」というテーマが導入されるのは、

次に詳細に語じるが、中國趣味は、眞しくそれが適用されるためにはかなひない。次の兩用に見ゆるのよ  
うに、中國人の優秀やばい所やよいの、中國人の物真似から出したのであつて、その点では、ほかの人種の體  
験するのとはだこのである。

That it is not to be wondered at, why the Chinese excel so much all these parts of the world, since but for that knowledge which comes down to them from the world in the moon, they would be like other people. (227)

アーリーの問題、「ヨーロッパ＜中國＜アフリカ」の圖式が順調に形成され、ついで「アフリカは中國の優秀やよいの破滅ではないか」といふ。

### 3

アーリーの問題、すなわち中國人に対する評価、又は中國の文化が古くから栄えたといひながら中國を古代と補ふ換えると、問題は「古代人」対「近代人」論争になるが、これについては、数少ない『統合者』についての論文の中で議論が戦われよう。

まことに古の論文だが、チョン・シラウイは上の圖の箇所を引いて、結局はデフォーが徹頭徹尾中國文化の敵対者であったと語り、作品の最初の部分で中國を賛美してみせたのはその賛美を誇張すればいかえ

つて中国の滑稽さを露呈させる」とが目的であったとしている「一七」。

またその後の論文では、ナレル・ショーが、ニコルソンを批判して、やはり同じ箇所を引用して、「古代」を賛美する語り手とは見解を異にするデフォーが実は「古代人」よりも「近代人」擁護者であったとしている「二八」。

私には、「一」で中国がそれほどひどく中傷されているようにも思えないし、また「」の作品において語り手と作者の距離を意識的に作り出すような近代的手法が使用されているようにも思えない。中国が賛美されている箇所では「眞面目」に賛美されているのであって、それが実は中国のみの優秀さに還元されるわけがないと述べられるときには、やはりそれは「眞面目」に行われる所以である。

すなわち、今あげた二人の学者の言うように、二項対立を持ち出してそのどちらかに軍配を挙げるといふことが、「一」での眼目なのではない。ある「」がある箇所で肯定されて、また後にそれが否定されるという行為が時間的に連続して起ることが重要であるわけだ。「」により導入されるのが「相対化」の視点なのである。

相対化の視点は月、また同時に月世界その物についても適用される。月の世界が基本的に地球と同じであつて、「月は地球にとって月であるが、地球は月にとっては月的な存在なのだ」という議論がなされる。逆転、相対化の視点が強調されるのだ（241）。月に行くための装置、コンソリデーター（統合者）の形状が述べられた後で、月世界の理想的あり様が延々と語られながらも同時に月世界の墮落や腐敗も描かれ、時には次の引用の様に地球のほうがむしろましなのではないか、地球に戻ろう、という感想を語り手が漏らしたりする場面もあるのである。

When I saw into the bottom of all this deceit, I began to take up new resolutions of returning back into our old world again, and going home to England, where, though I had conceived great indignation at the treatment our passive obedience men gave their prince here.... (292)

つまり、「ヨーロッパへ中国へ月世界」、という図式は、作られながら同時に否定されていく。「これはある」とが述べられるながらそれを否定することを同時に言うということであり、作品中に中国人が発見した機械（それを使えば右手で手紙を書きながら左手でそれをコピーすることができる）が紹介されるが、むしろ「こなわち極めてデフォー的な営みが、後期の傑作フィクション群が書かれるかなり以前に書かれたこの作品の中ですでに進行なわれているのである。

「S、AであつてがつAでない」という描き方は、飛行機械コンソリデーター（「統合者」）の形状を述べるときにも使われてゐる。その形状については、比較的有名であり詳述しないが、空飛ぶ車（“chariot”）の形をした機械で（“engine”）一一つある体の背中に一枚の翼があり、それは5-13枚の羽から成つてゐるとされ、ジョン・ウイルキンズの分類した四つの空中飛行術のうち、一番田の鳥の力を借りる方法と四番田の空飛ぶ車（“chariot”）による方法の折衷のような物である（二二九）。

もちろん、このハンソリデーターはイギリス議会の下院(House of Commons)の寓意であり、月に飛び上

がぬるべに總は議念を開くべくの意昧である。繼此はロバートークー、やなわら眼鏡を統合する象徴的  
存在ドナリ。ハハコト一ターが機體アリスムル船は飛び上るる、やなわら物の心を點綴せしめに到  
達する、やなわら理想的世界に行き着く事が可能だのである。

「か」、の群衆船であるせやの統合神の輿ひ輪を發するやうに、やなわらの飛行を妨害する様々な  
風(風速だある)が吹くやうである。ハハコト一ターのやうな五輪は風が吹く形だる、すなわち振闐  
抗争がある、先せう導たる理想的機能が働く事無輪コレハモリド。

It is true this engine is frequently assaulted with fierce winds and furious storms, which sometimes drive it a great way out of its way; and indeed, considering the length of the passage and the various regions it goes through, it would be strange if it should meet with no obstructions. These are oblique gales....

There are a great many other internal blasts, which proceed from the fire within, which, sometimes not circulating right, breaks out in little gusts of wind and heat, and is apt to endanger setting fire to the feathers: and this is more or less dangerous according as among which of the feathers it happens; for some of the feathers are more apt to take fire than others, as their quills or heads are more apt to take fire than others, as their quills or heads are more or less full of that solid matter mentioned before. (239)

些品种的母猪“consolidate”了，冲刷水沟的粪便和泥浆也一并冲刷到下水道里。

...the dissenters, like a parcel of knaves, have retained all the high-churchmen in their pay; they are certainly all in their pension-roll: indeed, I could not see the money paid them there, it was too remote; but I could plainly see the thing; *all the deep lines of the project are laid as true, they are so tacked and consolidated together, that if any one will give themselves leave to consider, they will be most effectually convinced that the high church and the dissenters here, are all in a cabal, a mere knot, a piece of clockwork....* (257)

It would be endless to call over the roll of their sublime politics. They damn moderation in order to peace and union, set the house on fire to save it from desolation, plunder to avoid persecution, and *consolidate things in order to their more immediate dissolution.* (342)

...they [puritans] had never had so many machines and intrigues to ruin and understood it, *they had never been so often tacked and consolidated to oppression and persecution, and yet never have rebelled or broke the peace, incurred the displeasure of their princes, or*

「...」の部分は高教会派とドライセンターが徒党を組んで陰謀のプロセクトを企んでいたことを非難した部分であるが、その徒党を組むことの「盐」出現する“consolidate”という単語が使われる。他の挙げた而用の中でも、“consolidate”は解体を前提とした結合として描かれてくるから、肯定的に使用されるのは極めて少なからずある。特にこの「...」の部分にも見えてくるように、“tack”という単語が“consolidate”よりもよく使われて使用されている。“tack”の場合は、財政案に付加してある法案を通そうとする（いふやうに）特徴的な作品（繪）の論文でも後に触れるところ、「非国教徒が一時に国教徒を装つて」("Occasional Conformity")を阻止しようとする法案」を十八世紀初頭に通そ  
うとした人間の行為を指すけれど、当然後に触れるところの行為を批判した作者の意識の中では極めて悪いイメージを伴った単語である。その単語と共に使用される“consolidate”は悪いイメージがつまっている。ハッコルターは劍に飛び、人心を統合する肯定的な存在であると共に、次の瞬間には右部分裂や突風にあおられて墜落する可能性を持ち、人心をばらばらにする非統合者でもあるわけである。

月の世界に着いてからば、月の中で起つた出来事についてイギリスの政治、社会の風刺が様々に行なわれぬ。作品全体の書合かいの部分が一番長い、ハッコルターは、その部分の「政治的、経済的様相にしたといひや、トフホーがイギリスの様々な幣風田舎のものに加えていた執拗な攻撃をいいじめ追復してみる以上のものではない」と述べ、長居は無用である、ハッコルター。しかし『月世界旅行』といふホントクストかのではなくて「月世界旅行」にたいし関心を惹かれるのであり、若

干の長話をしたいと思う。ただ、完全にこの部分は「鍵小説」("roman à clef")として書かれていたため、私なりの解説をして地球上の出来事に翻訳して論じて必要があぬかと思われる。

## 4

月世界に着いた語り手は、一人の厳かな哲学者に出会い、月世界のことを色々と教わり、彼と様々な議論を交わす。この哲学者は氣の毒ない人で、眞実をあまりにあからさまに描いたパンフレットを著したために、月世界で地球のピロリー(やるし台)に似たような物に架けられ投獄された経験を持つ人物であった。

月の世界の出来事に話して様々なイギリスの政治、経済、社会の現実が風刺されるが、その中で最も強調して触れられてくるのが、一・名誉革命、二・先程触れた「非国教徒が一次的に国教徒を装う」とを阻止する法案 ("A Bill to Prevent Occasional Conformity")、三・ペイントン王位継承戦争、の三者である。

お手の「つか」・名誉革命は語り手なりに読み替え=解釈が行われるが、その特徴的な部分を取り上げてみよう。全体的に語り手はジョイムズ一世に同情的であり、そもそもは寛容で国民を思いやる王であつたジョイムズが徐々に堕落していくのは、国教徒(月ではソルナリアノーズと呼ばれる)の策略のためであつて、国教徒はルーリタンを破滅させるため、カトリック教徒であるジョイムズ一世を支持するふりをし("passive obedience")、それを絶対服従("absolute obedience")へ解釈した国王が安心し好きなようになに施政を行なうことを促す。このたむね。国教徒、中でもカトリックに改宗したりをして国王に

近でこの寵姫を取つてゐるにないた一人の国教徒は、国王のあへれどもした様々な改革を懇意に計画し、しかも極端にあくまで進むべくは力に駆した。やがては、群臣に用ひられた暴政をやがては決意をやめやらせたのである。国教徒の陰謀、罠("snare" "hook" "bait")に嵌つてこの側近達は、王を睨む罪並みハムサヤトスの而程のみに懲ら。

They pleaded how rational a thing it was to expect that by degrees and good management, which by precipitate measures would be endangered and overthrown.

Had these wholesome counsels taken place in the king's mind, he had been king to his last hour, and the Solunarians and Crolians too had been all undone, for he had certainly encroached them gradually, and brought that to pass in time which by precipitant measures he was not likely to effect. (302-3)

確かにジムバーバーは、既に世間をかうじて穩健な方法でつかまつて改革に成功したであつた、やつたねば、国教徒のヨルゴークタの破滅はつづいたであつた、と謂ふ事は感概を惹くところである。が、世間を運んで側近達の忠勤の時を貰わず、国教徒の陰謀は無事に成る所へかかへた国王は、忠勤に、強引に政策を進めた挙げ句、ヘンリエッカの命を奪つたを得なくなつた。

ソリで懸念する所は、他人を驅すために用ひたのがトロツキ、トロツキの架空性=「ハイクハムハ世」であつて、ある政策や思想や極端にあくまで進むべきが破滅をぬけたのかどうか、トロツキの後期に特徴的

見られるトーザである。

名誉革命という出来事が、ジョイムズ一世評価における誤解をはらすという形で展開された後、民衆の幸福のみを願つてあれだけの功績を成し遂げながらも、軍事出費などの点で国民に真意を理解されぬままに失意のうちに世を去つたウイリアム三世のことが描かれ、さらに国教徒でありながら宗教寛容法を順守し、ピューリタン容認を打ち出しながらもその演説の言葉尻を捕えられ国教徒にも批判されたアン女王のことが描かれ、「誤解」が一つのテーマとして展開されていく。

その誤解のクライマックスとして語られるのが、『クロリアンズ(もちろんピューリタンのいじ)処理小径』といふ本が月で出版された後の騒動についてである。語り手が出会ひた月世界の哲学者が、このことを物語つてゐる。哲学者は、いかに自分が世間から誤解を受け、実はピューリタンであつたにもかかわらず他のピューリタン達から最も激烈な攻撃を受けたのであり、いかに世間を啓蒙しようとする者が感謝の心を持たない人々から迫害を受けるかというとの実例としてあげる。この本のタイトル(“The Shortest Way with the Crolians”)から、アレガリーと云う寓話の形態を取ることで身を隠す必要性があつたにもかかわらず、トトオ本人の登場は誰の目にも明らかである。

次に話題に登るのが一番田の「特別な場合のみの国教遵守を禁ずる法案」(“A Bill to Prevent Occasional Conformity”)の一件である。これは事实上ピューリタン排斥法であつて、トトオ自身が書うようになつてピューリタンが職につくことを妨げる目的を持った法律であり、国教徒が最も国会通過を期待していたものであった。この法案も徐々に推し進めていれば通つたものを、ヘンリー・サッチャベールに代表される何人かの過激論者が極端な論陣を張り、「すべてのピューリタンは悪魔だから殺戮すべきだ」とか、「ピューリタン

かいの身のゆのじがない怪物やおの」から、議論をペントンシルで発表したために逆効果を招き、世の反感及び国教徒達自身からの反感を買ふ、結果的に法案は非成立にならざるを得ぬ。あの理論を極端に押し進めるのが破滅をもたらすハトーヤが再び繰り返せねしものである。

Here I could not but observe, as I have done before in the case of the banished king, how impolitic these high Solunarian churchmen acted in all their proceedings; for had they contented themselves by little and little to have done work, they had done it effectually; but pushing at extremities, they overshot themselves, and ruined all. (334-5)

ソリュード微妙な議論が展開わたる、これがの極端なペントンシルが、おほりの極端わからずやの論者の愚かやを示唆してゐるが、逆に非常に狡滑なペトロニターンが国教徒のやりをして、故意に上の法案を成立させたためには書いたが、『同能性も十分考えねばならぬ』と謂われる。すなわち、語り手は『非国教徒を撲滅するための近道』の誤解の原因となりた一種類の解釈を他人にたいして反復してゐるのである。すなわち、非国教徒である人間がトイロードをして書いたことが、過激な国教徒が真剣に論じたりとする誤解される可能性を認め、その解釈を他人に対しても行つてゐるのだ。過激派の滑稽やと反対者のトイロードが限りなく近づいてしまつて、それ自体がトイロードであるから、事実が、現実と作品の垣根を超えて増殖をおこさるのである。

If any man in the whole world in the moon will pretend this was not a *plot*, a Crolian design, a mere *conspiracy* to destroy the law, let him tell me for what other end could these men offer such extremes as they needs must know would meet with immediate opposition, things that they knew all the honest men, all the grandees, all the patriarchs, and almost all the feathers would oppose. (340)

山の上にいた艦の煙をかき、リトナーがヨークターナーの煙を燃やして煙船で、艦船を火薬船へと向けてゐた。リトナーは、次の場所でヨークターナーの煙船が砲艇に燃つた火薬船のリトナーに船幅を示すために、彼の煙船の煙を燃やして、砲艇回避の秘訣が、ヨークターナーの煙全体の根柢("unite")を示すんだ、と煙を立てる。

（340）

At last they took the hint, that his advice directed them to unite their subdivided parties into one general interest, and to act in concert upon one bottom; to lay aside the selfish, narrow, suspicious spirit, (three qualifications the Crolians were but too justly charged with,) and begin to act with courage, unanimity, and largeness of soul; to open their eyes to their own interest, maintain a regular correspondence with one another in all parts of the

kingdom, and to bring their civil interest into a form. (352-3)

心のたるにせば、船の賑闊抗争を以て、ヨーロッパへ銀行を設立し、それ以外の無数のものに金を貸せばいいが、株価操作のトロハムと申すものはだまの力強を用ひねばやうだ、シヤーリートも、悉々に穩健な方法で、艦隊に供ひたことあるから、最終的に兵のヨーロッパへたゞかねばならぬ時を貰す。語り半ば地盤に立つてゐるが、却てヨーロッパへの結果は國全体の利益に繋がるのよ、それがやきなことは彼の血筋の悪かゝれを招くのである、次の元年にはあわせて、彼のせば血分薄血筋の相を嫌うてこねかむじめの、山體調をせけ加ベレーノ。

When I saw this, it forced me to reflect upon affairs in our own country; Well, said I, it is happy for England that our dissenters have not this spirit of union, and largeness of heart among them; for if they were not *a narrow, mean-spirited, short-sighted, self-preserving, friend-betraying, poor-neglecting people*, they might have been every way as safe, as considerable, as regarded, and as numerous, as the Croilians in the moon; but it is not in their souls to do themselves good, nor to espouse, or stand by those that would do it for them; and it is well for the churchmen that it is so, for many attempts have been made to save them, but their own narrowness of soul and dividedness in interest has always prevented its being effectual, and discouraged all the instruments that ever attempted to

『非国教徒処理小径』で生じた誤解を、デフォーは、い)で晴らそうと試みているようだが、このような議論を読んだピューリタン達は、果たしてその誤解を解いたであろうか。とてもそれは思われない。かえつて怒りと誤解の念を強くしたように思われる……。

三番目のスペイン継承戦争についても長々と語られるが、カルロス二世の亡き後、ルイ十四世がその孫フリップをフェリペ五世としてたてたことに反対したイギリスとオランダが宣戦布告して始まり、当時まだ継続中であったこの戦争について、語り手がいくつかの点でイギリス側を批判しているのだが、その中で最も強調されるのが、列国が時間稼ぎのためにいつたんフェリペ五世を認めておき、軍隊の態勢を整えた後で宣戦布告したことへの非難である(実はこれは史実に反している)。特にこれは、列国に加わっていたイギリス国内でも国教徒がオランダと組んで仕組んだ罠であるという批判があつたぐいで、語り手は、戦争そのものはとにかくその手続きに見られる嘘、虚偽は絶対許せないとしている。

以上、作品の流れに沿いながらそのテーマや特徴を拾い上げてきた。これらの特質は、すべて後期の傑作フイクション群に見られる重要なものであるようと思われる。従つて、この作品が「架空旅行記」であつて月世界旅行という想像上の題材を扱つてゐるという理由によつて後期の想像で書かれたフイクションに繋がつていくの

ではなくて、その作品の持つ重要な特質とその展開の仕方が、後期作品群のそれを極めて強く予示しているという理由について、強い繋がりを持つているのだと私は主張したい。

やうにこの作品のありようそのものも、後期のフイクションと強い繋がりを示していると考えられる。『統合者』(『コンソリデーター』)という作品のありようを一語で述べるなら、「自己言及性」もしくは「自己参照性」ということになるであろう。「これは単にこの作品の中に作者デフォーが体験した『非国教徒処理小径』の経緯が述べられているということだけによるものではない。それなら他にもそのような類のパンフレットは多く書かれているし、ここで扱われた題材も当時のデフォーの政治、経済、社会的関心事の反復、取り纏めに過ぎない」とになる。

この特徴は鈴木善三氏がマンドヴィルの『蜂の寓話』の中で、メニッポス的風刺の特徴として挙げられたような意味での「自己言及性」に近いものである。<sup>33</sup> すなわち、マンドヴィルが自分の書いた一編の詩の招いた誤解を晴らすために説明的注釈を後で施し、さらに論文を付け加え、またも告発を受けたために弁明を付け加えていく、といった無限増殖的スタディクション的仕掛けである。同時にこの特徴は、私が第十章「自己参照」というレトリック——『ロクサーナ』<sup>34</sup>で詳しく論じることだが、後期デフォーが書いたフイクション群の重要な特徴でもあるわけである。

デフォーは、「極端さは破滅をもたらす」とか、「誤解」や「架空性」("plot" "project")の理不尽さを他人について告発しながら、実は自分自身のことを述べてゐるのである。「極端さ」によって破滅したのは彼自身であり、世間の「誤解」を受けてひどい目にあつたのも彼自身であるし、プロジェクトやプロジェクト(商売、政治的かけひきの両者の意味で)において失敗したのも彼自身なのである。ところでは、それらを批判することだ、

彼は彼自身を弁護し、反省し、また誤解を晴らそうとしているように見える。

といふが、上に見てきたように、彼はピューリタンへ結束を促しながら、次に彼らの批判に戻って、誤解を晴らそうとしながら誤解を再生産しているようだ。また一番目の論点について検証しながら、自分の『非国教徒処理小径』を告発した側の解釈の有効性を追認している。これは『非国教徒処理小径』を書いたことを反省している」とを意味している訳ではない(そのような主旨のパンフレットもあるが)。明らかに彼は『非国教徒処理小径』について書いた部分で自分の立場を説明し、弁護しながら、別の部分の理論によって自分を再告発しているわけだ。ある意図を持ちながら、それを無意識に自ら裏切っていく。デフォーの「自己」言及性」には、このような特色もあるのである。

『非国教徒処理小径』裁判の際の宣告によつて彼は政治的に急進的な作品を書くことを禁じられていたために(バックシャイダーの『デフォー伝』による)、この作品は架空旅行という形を取つて、デフォーは自らの姿を隠し、風刺をアレゴリーによって糊塗する必要性がどうしてもあつた。しかしその中で、彼は自らをかなり明白に現し、自己弁護をしながら、同時に誤解を再生産し増殖させていく。これは、嘘を、フィクションを、プロットを次から次へと作り続けざるを得ない、デフォー的フィクションの原動力であり、同時に負的エネルギー連鎖である状況を如実に示していくよう思われる。彼は自らの姿勢、思想、社会的立場、自らの作品を統合しようとする統合者であると共に、それを裏切つていく非統合者でもあるわけだ。

嘘をついてはいけないという嘘をつき、限りなくプロットを増殖し続けていくデフォーの姿をこの作品の中にも見るとすれば、この作品が分類されてきたジャンルである「架空旅行記」の架空は従来“imaginary”的意味であり、「想像旅行記」であったわけだが、デフォーの場合「想像力によって創造したり創造されたりする」

(“creating or created by imagination”) と、想像の意味「創造」(“fictitious”) を使いつて、「創造旅  
行」(“fictitious voyage”) などいふが、実際的なやせなからいふ。

## 第九章

### 境界線上のH·E——『ペスト』

1

トマホーの『ペスト』(A Journal of the Plague Year) (一七二二) は、H·E による作品としての最も大きな議論の分かれ目は、H·E による語り手を「いわゆるべんか」と「べん」とに関してであろう。ボーナマンは、H·E による語り手の存在は問題でなく、「個人を出さない語り手」("impersonal narrator") によっての彼の由を通して見えてくる歴史的事実のほうが重要であるとする、語り手 H·E の存在を重視したジャーマンなどの考え方を否定する。

この一人に代表される、歴史的事実が語り手がという論争の根源には、この作品を歴史として扱うか、虚構として扱うかという古くから行われてきた議論がある(三八)。しかし、歴史そのものが、野家啓一の言うように歴史家の語った一つの物語であって、過去の事実の「解釈学的変形」であるとするなら(三九)、とりあえ、ヒストリー対フィクションとして二者択一の議論を棚上げにして、語り手の存在の軽重やむしろはその位

置づけに議論の焦点を合わせ直すことができるのではないか。歴史は語られた一つの物語なのであって、絶対的権威を持つた唯一の真実がありえないものだとすると、問題は、どの様な物語が語られてるのか、ひいてはどの様にそれが語られてるかという語り手の問題になるのだ。

そのような観点でH·Fの語りを考えようとするべく、『ペスト』と同じ年に出版され、同じ題材を扱い同じ主張を繰り返してくるにむかわらず、語りの特徴といつて画で極めて異なった構造を持つて居るデフォーの『ペストのための適切なる準備』(Due Preparations for the Plague)を比較の対象として眺めてみる。いは、かなり助けになると想おおむ。

基本的には『ペストのための適切なる準備』は二つの部分に分かれ、概論を述べた最初の部分を除外すると、ペストに際しての体の準備と魂の準備という二つの項目を扱っており、前者に対しても自分の家の中への自主閉鎖、後者の準備としては、自分の人生を振り返った上で神の前にひれ伏して改悛するという理想的方策を提唱している。その有効性を実証するために、語り手は各々の項目に関して一例ずつの話しを物語る。前者に対しては、ペストの噂を初めて耳にした時点から用意をし、生活必需品を家の中に蓄え、家を完全に閉鎖してペストをやり過ごした賢明なる家族の物語、後者に対しては、母親と三人の子供(一人の兄と一人の妹)の物語が語られ、母親はペストが来たという噂が聞こえるやうなや、自分たちは死刑宣告を受けたも同然なのだから改悛し神に身を任せて死出の準備をするべきだと娘を説得し、今度はその娘が極めて冗漫な会話の中で次男を同じ様に説得していくのである。

この二つの長い物語は、一つの実例("example")であることをやめ、後世の人々が従うべき模範("exemplary")として彼の打ち出した方策を裏打ちする。物語は「一つの」という不定冠詞で語られるので

せたゞ、確固たる權威による提唱もあつた。例えば次の箇所のよひだ語が作品中何度も見いだす。

I laid down this as a principle which experience and the judgment of very able physicians and men of long practice confirm to me, whose authority I must needs say I have not yet seen overthrown; and as the history I have given of a family ... is really the history of several families rather than of one, and is a perfect model for future practice.... 1回

田舎の權威による生神のものな由體、アルコレ作品全体の整然たる體の口、おたば別の體の方をすれば単純な論理展開は、『ペークル』に現れていたよりの脚本のれなり。『ペークルのための選取なる準備』の重大な特色を整理してゐる、一・直線的に進む整理やれた語り、二・たいた一への例（“example”）が理想的模範（“exemplary”）例になつてゐる。これは絶妙的由體、アルコレはたゞ。アルコレは二項式を手掛けてゐる、『ペークル』を總説してゐるところである。

## 2

『ペークルのための選取なる準備』の語りはかなり異なつた、『ペークル』の語りは正・反の語りの印象を簡単にはめこねない。彼は常口口のみ、監定をしてからはじめて翻訳する。彼の語の母國は、アルコレの語りだから

この話題が常じらしめやがて、一の話題を語り終えないうちに次の話題が順番を待ちわねずに翻つて入り、当座の話題は結論を以てやるといふがなく、「また後に話す」とになつて」ふつひて後送りにされふ。ある物語を語つてゐる最中に連想として浮んだ事柄は「心の声…と聞えど」と、脱線によひて心の声に入り込んでいく。彼はいふんな実例を聞いたり経験したらしく知つてゐたぬ、「わたしはむへんのりふぶ  
聞つて例を出やへと聞けばやかぬのだが」、さうの実例を積み重ねてみても眞実には到達すべくわなこいとを知つてゐたぬ、突如筆を絶つておつたのである。少なほいゆ、」のような落ち着きのない語り手を「個人を出でない語り手」("impersonal")の如きは読者の読後感からはかなりかけ離れた行為でおぬし聞ねるを得な。

確かに、自分をエ・エリック・ヤルド書くのは、アーチャーが自分の作品にロード署名した事実を想起せんやう、或る程な自己主張であつて、彼がなんなく自己を匿名のままやぶるトモドヒコした努力の痕跡は作品中に残存する。作品の顔面部分である次の引用を見やみよ。

I have set this particular down so fully, because I know not but it may be of Moment to those who come after me, if they come to be brought to the same Distress, and to the same Manner of making their Choice and therefore I desire this Account may pass with them, rather for a Direction to themselves to act by, than a History of my actings, seeing it may not be of one Farthing value to them to note what became of me. (8)

H·Fは、自分の行状の歴史（彼自身の個人史、もしくは当時の history の意味でない記録）を書くのは控えて、後世の人の手引きとなるように描いたと言い、謙虚なる血口抹殺を計っているかの「りんき口振りである。

確かに右の引用が持つ表向きの意味は、「わたしは自分の行いを自慢したい」のではなくて、ペストという異常事態の中でいかに振る舞うべきかについての一例として少しでも役に立ててほしい」ということであるが、少しひねくれた見方をすると、彼の気持ちの中に、自分が「後世の教訓となるべき模範」になつた、「こう権威志向の部分を読み取る」とも不可能ではない。そういう意味では、彼は一つの歴史 ("a history") を提示していくのではなく、逆に神のような立場で「超越論的歴史」、「絶対唯一の歴史 ("the history")」を確立しようとしているといふことも可能なのである。

こうした事態に立ち至ると、先程描いた語り手H·Fの姿とは全く異なった像が見えてくるし、血口を模範とするような『ペストのための適切なる準備』の語りが『ペスト』の中にも侵入していくことがわかる。」のような絶対的権力の拠り所となつてるのは何であろうか。それは彼がしばしば媚び詔いながら称擁する市長等が代表する政府というよりは、絶対的な力で襲いかかる敵であるペストそのものである。しばしばH·Fは人格化されたペストと同じ視点で人間を見ているように感じられる」とがある。巨大なる悪としての「ペスト」の舌なめずりをするような視線で、犠牲となる人間を狙つているH·F、彼はペストという巨体の悪の権力をあたかも掌中に収めたかのような描写をしばしば行うのだ。

絶対的力であり、否応なく「」にでも入り込んでくるペストを前にして、我々は通り過ぎるまで息を潜めて待つぐらいしかなす術はない。『ペストのための適切なる準備』の後半の救いは、助かるための個人的努力を放棄し、改心して神に頼ることであった。前半部は自主閉鎖という個人の努力であったが、後半でこの様に

絶望感を偽装するための神への依存が強調されるために、こちらの作品は極めて教訓色が強く、ペストという絶対的力を前にした諦めの雰囲気が漂っている。最後に語り手を救出してくれた船長と船も、人間の積極的な意図とは関わりのない形で偶然に出現するのである。

『ペスト』においてもペストの力は圧倒的で、いつたんペストに魅入られたら死を覚悟して諦めるしかない。ただ、このような絶対的な力を数十年後になつて描いた語り手は、すでにその脅威から脱しているわけで、自己の権威づけのために、その描く筆の力の中にペストの振るう絶対的力をそつと忍び込ませたとしても、書き手の心理としては良く理解できる。事実、先ほど論じたように、H·Fは、ペストの猛威を描く際、しばしば被害者の視点からと「よりもペストに同化して自ら猛威を振るつて」と感じられることがあるのだ。

ここには、数の持つ魔術的力も関わっているだろう。H·Fはなぜあれほど執拗に死者の数にこだわるのであろうか。彼は週刊死亡報を引用しながら、自分自身の経験と伝聞を基にその数を上方修正しつゝ、自分自身の死亡者数一覧を作り上げていく。私は、デフォー作品に常に見られる、ある項目の一覧表を作り上げ、その数を数え上げる性癖の背後には数とカタログによつて世の中を掌中に治めようとする征服欲が隠蔽されていると考えているが、この作品でも、ペストに襲われた都市一覧とその死亡者数一覧は、ペストの持つ支配力と、その一覧を弄ぶH·Fがその支配力に加担している様をまさまさと目に見える形で我々に語つてくれる。そもそも、犠牲者の数が思われている以上に多いことを、必要以上に熱心に語る心理は、その犠牲を密かに自らの快楽としている者の心理なのではないだろうか。

同様の後ろめたい快楽を求めて、彼は莫大な数の死体を放り込む大穴("great pit")を見ようとする。大穴の中には、死体を満載した荷馬車から、犠牲者達がほとんど裸の状態でどさりと投げ込まれる。死体

には個人の区別も、金持ちの区別もなし(18)、すぐさま塊になつて("mass", "heap")となる。彼はショックを受けぬが、の大穴(19)、が、死亡者数の一覽表を次から次へと呑み込んで片付けていくペースの大まな口なのであつて、H·Eはその口の大きさを調べ、一週間の間にそれが千百十四の死体を呑み込んだら、それを執拗に書き出している。

大穴の部分の描写では金持ねし貧民は区別せぬといが、実なりのペストによる疫病の流行は貧民のものやあつたれば、別の場所で明示せねばならぬ。ロハム(20)を逃げ出す金の手段の持たなかつた貧民達は生むいための仕事を得るために、最もペースよく感染しやすい職をも厭つてひだりあき、危険な市場などにも出向かざるを得なかつた。彼等の雇用対策として政府が設けた強制閉鎖家屋の見張り番やその家の中の看護婦になつた者や、仕方なく泥棒になつた者や、墓男や流しの笛吹きの話しながら、貧民達の個々の物語が語られた後で(82—103)、慈善が大いに行われたにもかかわらず、職を失い飢えて絶望した貧民達が暴動に走る可能性は極めて極かつたりしが指摘せられる。その起りうる暴動を防ぐため最大の存在は彼等を十把一絡にこじて処理したペペルンのやうなやつたのである。

And, which tho' a melancholy Article in it self, yet was a Deliverance in its Kind, namely, the Plague ... carried off in that Time thirty or forty Thousand of these very People, which had they been left, would certainly have been an unsufferable Burden, by their Poverty ... and they would... have put the whole Nation...into the utmost Terror and Confusion. (97-98)

ペストがもたらした破壊は、多くの貧民が生き残っていたならばさうに悲惨な混乱を招いただらうところへいとがいりや指摘される。ペストはあらかじめその貧民たちを根絶する力を持っていた。また意のままに、破滅をもたらしたり秩序を回復させたりする力をペストは持つのだと語るH·Fは、あたかもペストの怪力を由らのものとしたかのようだ。C·H·フリンが指摘するように、また作品の最後の部分で“the Plague was itself a sufficient Purge”(140)と言わ祝するように、ペストは、そもそも社会が抱えていた様々な都市問題(貧困、人口過密、住居)などを解決し、浄化してくれるものでもあったのである。

かくしてペストに仮託した筆の力で、1665年という歴史上の一時点で起ったペストという出来事を絶対的真実として描く、すなわち一般論をぶち上げるH·Fは、一方の極に存在する。このように、自己を匿名にする」と逆に絶対的権力を身に着けた語り手であるH·Fを特徴づけるには「個人を出さない語り手」ではなくて「個人を超えた語り手」と言つたほうが適切であろう。

### 3

「個人を超えた語り手」であるH·Fは、また全く別の語り口を見せる場合がある。この第三節では、もう一つの語り方の特徴を考えることにする。作品の冒頭で述べられてくるように、当時は印刷された新聞といふものは無かつたわけであるから(1)、彼が情報を得るのは自己の体験と他人からの伝聞による以外は無かったのである。H·Fの経験至上主義は次の引用の中などに見られる。次の引用は、やあほひ九十八ページの

引用の後で、死者の数を上方修正するときの箇所である。

If I may be allowed to give my Opinion, by what I saw with my Eyes, and heard from other People that were Eye Witnesses, I do verily believe the same, *viz.* that there died, at least, 1000000 of the Plague only.... (99)

彼は自分の重撃した体験を重視し、それを信頼して様々な物語やヒピソードを実例("example")として提出する。彼は様々な物語を語るのだが、そのあぐくに次のように書いて由らの手で唐突に語りの流れを断ち切ってしまう。

I cou'd give a great many such Stories as these ... which in the long Course of that dismal Year, I met with, *that is* heard of, and which are very certain to be true, or very near the Truth; that is to say, true in the General, for no Man could at such a Time, learn all the Particulars. (52)

I could dwell a great while upon the Calamities of this dreadful time, and go on to describe the Objects that appear'd among us every Day, the dreadful Extravagancies which the Distraction of sick People drove them into ... But after I have told you, as I

have above, that One Man being tyed in his Bed ... And how another, by the insufferable Torment he bore, daunced and sung naked in the Streets ... What can be added more? What can be said to represent the Misery of these Times, more lively to the Reader, or to give him a more perfect Idea of a complicated Distress? (176-177)

「ほんのたゞ「ゆひる語のへと略べせやうだが…」」と云ふ軽語せり。性品の語つり算にて極めて特徴的である。彼はおのづかに眞実に接近し得ぬところ、自分の体験や人の口撃談からの実例(example)を積み上げてはいるが、死体をこじら積み上げたといふペペトの口が食り食ひて」がへよへど、様々な物語は消費されながらも、眞実に到達するにはいたせぬ。経験の限界に気が無力感を感じたH·Eは、それ以上例を積み重ねるのを放棄せざるを得ない(図11)。

彼は、やがての個人の経験を収集し、取捨選択、含味したうえで、その中から抽象される眞実を提出するような歴史家ではない。彼が超越論的歴史を語りたいのが、個人を大めく飛び越へてくべしむらのやうだ、口以外にはその実態の見えない大きな流れに身を任せたときだけなのである。

同じ様に、右の後半の引用でも表明せられたように、彼はある事柄を語つてやうがどうもなし。いつも表現するやうのこの歴界があのいふ感じのやうを得ない。何度も引用せねばれた箇所であるが、次の例を見てみよう。

.. it is impossible to say any Thing that is able to give a true Idea of it to those who did

not see it, other than this; that it was indeed *very, very* dreadful, and such as no Tongue can express. (60)

「れば、経験主義の限界の如きは先に、その経験を語る表現にも限界がある」ことを述べた箇所である。『ペペト』は、實事として一つの論理の筋道を辿り、「我々せある出来事、すなわち歴史を個人の手から物語へりゆべ不可能なやはないか」という感想を持つものとなる。

以上は、体験は一への特別な例にして、述置したがまおどきをも知らぬたゞゝれど、全般的な唯一絶対の眞実を形成すべく、なんどかの認識を示した所をゆつ、箇所引用してみよう。これは作品の最後に近い箇所で、「ペペト患者はわざと他人に自分の病気を移そうとする」ふつゝ一般に細ねおいた俗説を否定する過程の箇所である。

I confess no particular Case is sufficient to prove a general but I cou'd name several People within the Knowledge of some of their Neighbours and Families yet living, who shew'd the contrary to an extream. (200)

個々の実例を挙げたから云ひて、一般論を証明するには十分ではないのである。

アリルが、この箇所は逆の読み方をする、いふむ可能だ。一つの実例を物語へても「ペペト患者は他人に病気を移さないかね」と云ふ者は間違つた』ふつゝ一般論を証明するには不十分かもしけないが、間違いで

あると感じている一般論が巷に流布している限り、それに対しても個々の(“particular”)実例をもつけて、できうる限りの抵抗を示す必要は絶対にある、「」のような決意表明、もしくは作品を通じてそのようなことを実践してきたことの総括だとも読めるのだ。

自己の経験、自己の判断力、個々の実例などは、右にあげたような一般に流布しているペストに纏わる噂や俗説を断罪し、否定するときには、大いに力を發揮する。

例えば右の引用でもそうであったように、ペストに感染した患者が、他人をも巻き込みたいという邪悪な欲望を持ち、わざと他人に自分の病気を移そうとするという俗説は、繰り返し繰り返し否認されぬし、看護人が仕事を早く終わらせるために患者の顔に濡れたハンカチを被せて殺したという噂も、彼の経験と判断に照らしてとても有り得ない話として、退けている。

それどころか、彼の体験した個々の物語は、語りの流れが絶対的歴史、一般論に突き進みそうになると必ずそれを塞き止め、個々の人間がいかに生きたかという人間の個別(“particular”)の話に、語りを振り戻す働きをしている。つまり、他人の一般論のみならず、自分の語る一般論に対しても搖さぶりをかける力も持っているのである。「」のような個々の物語の力は「これまで触れられる」とがあまり無かつたが、この作品において極めて重要な役割を果たしている。「」のような物語を語る語り手を「個人を超えた語り手」に対し、「私的な語り手」と呼ぶことにしたい。

作品の流れが一般論に流れようとする最も大きな場面は、すでに言及した墓穴としての大穴の場面と、貧民の描写とその厄介な肉体を処理してくれるペストの役割に賛意を示す場面であろう。

前者では、大穴の恐ろしさの描写と、すべてが呑み尽くされ個の区別は無化されてしまうという事実が圧倒的な力を持つとするとき、死者運搬馬車の後ろについて来た一人の哀れな男の物語に語りは移行する。

彼はその家族をペストで失い、家族の死体を乗せた馬車の後を追いこの大穴にまでやつてくるのだが、せめてそつと穴の中に埋葬されるものだと思っていた遺体が、他の死体と共に穴の中に一度に放り込まれるのを見て氣絶する。この場面までは、個人を塊の一部として食い尽くす大きな穴のほうに物語の力点があるが、その後で彼が近くのパブに運ばれ、三人のならず者に侮辱され、それをH·Fが諫める所まで物語が進むと、完全に力点はペストという状況にあっての個人の悲劇と、そのような状況においても行いを悔い改めず悪行を重ねる個人の悪辣さのほうに移行してしまう。

また、危険なことを自ら行つてペストに罹病してしまった貧民達の愚かしさが描かれ、ペストが彼等の暴動を未然に防いだという発言の後には、この作品の中で最も感動的なものとして批評家が言及してきた、船頭のロバートの物語が書かれるのだが、彼が片付けられるべき貧民の一人であることに注目しなければならない。

ロバートは、ペストに罹った妻子を養うために船頭として必死に働きその稼ぎのすべてを妻に渡しながら、神への心からの信仰を決して忘れない。H·Fは彼の献身ぶりにすっかり感動して、自分の身と彼を比べて恥ずかしさを感じるのである。ロバートの素晴らしいところは、塊としてみたときの貧民の愚かしさから、個人のレベルに語りを引き戻す。H·Fは船の上に逃れて生き延びている貧民達の事を知り、彼に連れていつてもらつて、

何日隻中の船がトマズの上に浮かんで、其の光景を田の原たる所で見ゆ。

I cannot guess at the Number of Ships, but I think there must be several Hundreds of Sail; and I could not but applaud the Contrivance, for ten thousand People, and more, who attended Ship Affairs, were certainly sheltered here from the Violence of the Contagion, and liv'd very safe and very easy. (111)

その後で、アーヴィングは「何の手段策を講じたか」ローマンの人々の懼がつやが體みる、その悲惨事態が露へしゆる人々の心のみを奪え、他人に対する同情心など飄散霧消し、親子の間でも情がなくなり殺傷事件が起りだつたりが押捺せぬ。

...the Danger of immediate Death to ourselves, took away all Bowels of Love, all Concern for one another: I speak in general, for there were many Instances of immovable Affection, Pity, and Duty in many, and some that came to my knowledge; that is to say, by here-say. (115)

ソレからド艦つたれも一般化の様相を呈し始めるので、語り手は急いで実例を用ひ、人間の同情の氣持ふる顕示の趣が甚つたく無くなつてゐたねが、なんどりんく実話の物語である。

その実例の後で、語りは、「一度触れておいて「他にいろいろ書く」とがあるのでとりあえずこれだけのことを書いておく」といつて後回しにして、いた三人の男がロンドンから逃亡するところ、「物語」(“Their Story”)に戻る。

I come back to my three Men: Their Story has a Moral in every Part of it, and their whole Conduct, and that of some who they join'd with, is a Pattern for all poor Men to follow, or Women either; if ever such a Time comes again; and if there was no other End in recording it, I think this a very just one, whether my Account be exactly according to Fact or no. (122)

」の三人男の物語の中で、「ペストをやり過すためのある方策が取られ、その方策は後世の貧民が見習い手本にすべきものだと」言うのだが（“Pattern”は「模範にすべきもの」という意味と「一つの例」という意味を持つ両義的な単語だが、ここでは前者の意味が強いように思われる）、この箇所には、自分の知っている一つの例を模範例とする権威者の口調が忍び込んでいる。さらに、この後に再び、ペストが貧民の暴動を予防したことが書かれ、この物語で描かれる賢い方策によつてペストから逃げることができずに、絶望の余りどんなむちやでもやつてのける可能性のある人間は、塊（“mass”）として大穴が貪り食うであろう事を予言しているが、このようないことを書くH·Fは巨大なペストの力に寄生している「個人を超えた語り手」である。

機転を働かせて勤勉に働くこと、最悪の事態をも回避できる」と我々に知らしめ、一般論に戻りかけた語りを今一度個(“particular”)の方に振り戻す。徐々に「私的な語り手」の勢力のほうが強くなつてくるのだ。

この三人の男たちが実践したのは、少数分離隔離の一例であつて、彼等はペストの猖獗するロンドンを逃亡し、ロンドン人を通過させる」と拒む周辺の村をその機知とちよつとしたペテンで「まかして通り、その向こうにある別の村の慈善を受けて、その近辺で人から離れて生活する。

## 5

フーコーは、「この時代の権力者はペストの状態を理想的な統治の状態として思い描いたと言つてよい」(四四)。ペストが発生すると、施政者がその伝播を防ぐために講じた策は少数分離隔離であつて、人々が各家庭に分散して監禁されると、権力者は彼等を一望の下に監視することが可能になるからである。

『ペスト』において、イギリス政府が行つた「理想的統治状態」は家屋強制閉鎖であり、この話題に語り手は執拗にこだわつていく。基本的に彼がこの政策に反対の立場を取りながらもしばしば曖昧な言辞を行うのは、彼が少数分離隔離を支持しているからで、彼が思い描いたペストへの対抗策はすべてこの方策の変形にすぎない。

家屋「強制」閉鎖は好ましくないにしても、逆に自ら自分の家に必需品を蓄えて「自主」閉鎖することは理想的な手立てであつて、『ペストのための適切なる準備』でも、作品の半分を使ってその方法が称揚されてい

る。先程論じた三人の男の話でも、場所は郊外であつても、彼等は家を建てて他人から自らを隔離して立て籠るわけで自主閉鎖の一変形と言える。最も壯観なのは、H・Fが船乗りロバートに見せてもらったテムズ川に浮かぶ数百隻の船であろう。注釈者のルイス・ランダは、このような光景が他の文献で見られないもので、とてもありそうもない話だと言いながらも、これを印象的な光景だと述べている(276)。人々は少数に分かれて船に逃亡しているわけで、やはりこれも自主閉鎖の一変形になつてゐることに注目しなければならない。

人が強制的にある場所に監禁されるとそこは地獄になり、その場所に自ら閉じ籠る、もしくはその監禁を楽しんでしまうとそこはコートピアになるというは、『ロビンソン・クルーソー』以来、デフォーのフィクションが持つ一テーマである。これまで論じてきたように、この作品はこのテーマを共有していく。このことから導き出される結論は、デフォーが描くペストから逃れる「これらの方策は、ランダが「とてもありえない」("very unlikely")」と言いたいことが示すように、現実に1665年に取られた歴史的に意義のある政策であるというよりもむしろ、語り手の理念、もしくは夢想の具象化であるとこうことである。イギリス政府がペスト猖獗時に取つた「家屋強制閉鎖」を批判していたデフォーは、家屋「自主」閉鎖の夢想に浸つてゐるのだ。

とすると、個人が必死で努力した結果勝ち得たはずのペスト打倒の手段がしよせんは絵空事であつて、その勝ち誇った語り口にもかかわらず、もしまだペストが襲来した時実践する」とのできない方策、つまり「「フィクション」(架空の話)でしかない」とことになるのだろうか。大穴に呑み込まれる家族を眺めていた男の話の結末では、彼を罵つたならず者たちがペストに倒れてしまふにその大穴に放り込まれることが述べられて、悪者に対する神の復讐が強調されている。この悪行に対する神の下す罰という因果関係はいかにもでき過ぎた話で、やはり他の物語と同様にその解決は夢想、フィクションでしかないようと思われる。

「……で、個は大きな歴史に呑み込まれるしかない」と、再び我々は感じざるを得ない。個人の努力の限界、行き止まりを再び感じざるを得ないので。ただ一つ注意しなければならないのは、上に述べた個の闘争の実例は作品の中で継起的に起こるわけであるから、全体の流れは、一般と個が戦いながら、片方がその戦力を延ばしては次の瞬間にはもう一方がその勢力を転覆し逆転が起こるという様相を呈するわけだ。この作品は、このような逆転運動を絶えず繰り返している。

これを語り手のレベルで見ると、「個人を超えた語り手」と「私的な語り手」の綱引き状態ということになる。「二者が交互に霸權を握り作品は進行していく。語り手の持つ二面性と、語りといふ波の永久満ち引き運動を理解するためには、先程の政府権力とそれに対する語り手の関与の仕方を考えてみると良いようと思われる。

## 6

H·Fが、「家屋強制閉鎖」などに関して批判的であったにしても、全般的な調子としては政府のペストに対する対応策を肯定し、再三再四くどいほど市長などの賞賛の言葉を残していることはしばしば指摘されてきた。確かに、この作品が書かれた段階で民衆のパニックが起らぬないように、政府の取る政策を肯定しておこうという意図がそこには見られるかもしれないが（四五）、基本的にはH·Fに権力におもねる態度があつたことを嗅ぎ取るのは困難ではない。この『ペスト』がその少し前の1721年に国会を通過した新検疫法を正当化するために書かれた、すなわち政府肯定のパンフレットとして書かれたという極端な議論すら存在するの

である一四六。

H·Fが夢想したペストを回避する理想的手立てとしての自主閉鎖を行おうという感情の背後には、あらかじめ権力に好適な方策を自らの手で行えば強制を逃れる」ことができる、どうも気持ちが隠されてくるのではないかろうか。権力に反抗して勝利を治める」とは不可能なのだから、先回りして前もって負けておけば強制といふ憂き目を見る羽目にはならないではないか。

「のような心理を含めて、H·Fの権力に対峙するときの姿勢を私は「積極的敗北主義」(positive defeatism)と呼ぶ」といふ。これが最も顕著に行はれられるのは、H·F自らの「家屋自主閉鎖」が行われるところである。これを行う」といふと、H·Fはある程度の安全を確保し、危ないときは内に籠り、何か事が起きたよつたと窓から外を眺め、止むに止まない好奇心に駆られるといつて出かけ、内と外の境界線の辺りで自由自在に出入りができる状態になる。境界線上にいるH·Fのスタンスが最も良くわかる姿を作品内に探すと、それは窓から半身を出して外を見てゐるH·Fの姿なのである。

H·Fの敗北主義を批判しようとするれば、簡単である。H·Fは最初から勝算がないとしてペストとの戦いを放棄している。本当に危険な状態に陥ったとき、彼は家の中に遁走すれば良いのであって、事実、そのまま何週間も閉じ籠つたままのことが何度がある。彼の立場で社会に対してできる」とはあつたはずである。例えば、彼が褒めそやす政府の市長などは、自ら罹患する危険を冒して通りに出て秩序回復のためにあらゆる努力を行つてゐると、H·F自ら述べている。彼はそれを褒めても、自分がその活動に加わる意思は持つていよいよだ。ところでも彼は属していた教区の区長から調査員に任じられたとき、何とかしてその職から逃れようとするからである一四七。

I had about this time a little Hardship put upon me, which I was at first greatly afflicted at, and very much disturb'd about; tho' as it prov'd, it did not expose me to any Disaster; and this was being appointed by the Alderman of Portsoken Ward, one of the Examiners of the Houses in the Precinct where I liv'd.... (159)

職に就かたくなつて畠田ふ、H・山は田舎者が家庭強制閉鎖に反対の意見やあひて、その反対の立場に加担する所へ地位に就かたくなつたからであると弁明してゐるが、いの直後の箇所では彼は強制閉鎖にも幾つかの利点があることを述べ、完全に反対やなまづいとを譲ることなく、田舎者がいの職に任じられた体験を「もみじの困った出来事」へ幅広い事があかぬよへり、最も大きな理由は自分が脅かされたくなつたこと及び腰の気持ゆゑである。社会的責務を果たすためより自分安全のせいかはるかに重いのである。

作品の最後に近い場所で、彼はペストが近づくやうなまゝ一皿散に町を逃げ出した牧師や医者を責任放棄しつゝ責めるわけにはいかないと言ひて、雖に田舎の立場の辯護化を行つてゐるが、社会的に役立つてゐるのである可能性に気がおながい田舎の家の窓から高みの見物を眺め込んだH・山は、決して褒められたものではなさ。ピーター・ハントシムは、ソフオー作品には社会から逃れても籠ゆゑつむやうな性癖が見て取られるといふふいふふが、リリコはこれは濃厚に感じられる(四八)。

やの一方で、私が敗北主義に「積極的」という形容を被せたのは、りおおやの研究者の考えとは異なりて、H・山は単なる改動的な反映者ではなく、まさに田舎の田や畠をもつてゐる積極性を兼ね備へつてゐる程

は考へてゐるからである。上に述べた責任放棄は公共上の問題であるが、別の個人的なレベルでは彼は異なつた行動を起す。三人のならず者に意見し、対等にやり合う部分や、兄の倉庫から帽子を盗んだ女性たちに、「このようにいつ死ぬとも知れない災厄の時にあつて泥棒を働く愚を説く姿を見ると、人を説得して正しい道に導き入れようとする積極的な一面を見る」ことができるし、身の危険を顧みず川にまで出かけて他人（ロバート）と接触し、わざわざ遠くにいる船への避難者を見に行くH・Fの中には、情報を収集し真実を伝えるために戦地に赴くジャーナリストの先駆けを見る思いがする。

かくしてこの「積極的敗北主義」には、あらかじめ自分の負けを認めておいて、そうして自ら存在を認めた限定された枠に嵌まつた状態の中でできる限りの活動を行おうとする、そもそも必然的に限界を抱えざるをえない人間の可能性を極めるためのぎりぎりの努力が含意されているわけである。

このような語り手H・Fの二面性を要約した「積極的敗北主義」は、もちろんきれいな一対一の対応にはならないにしても、彼が語りを実践したときには「個人を超えた語り手」と「私的な語り手」の分裂となつて顕現し、その語りが一つの作品になつてある流れを形成すると、それは「一般」と「個」のせめぎあいの歴史となるのである。

従つて、このH・Fという語り手がいたからこそ、ここに描かれた歴史は成立したのである。同じ1665年のペストを経験したピープスが平然としており、彼の日記においてペストはたいして大きな比重を占めていないことを思い出してみるとよい（四九）。あえて『ペスト』の作者であるデフォーの存在を忘れるならば、語り手H・Fの性質がアブリオリに存在してからその後で、この作品の語りの構造、流れはひとりでに出来上がつたと言えるのである。そういう意味で、この作品では語り手H・Fよりもそこで描かれる歴史のほうが重要だという冒頭で

上げたボードマンの説は根本的に間違つてゐると言わざるを得ない。語り手H・Fがいなければそもそも歴史は存在しなかつたのであるから。

H・Fは公式発表の週刊死亡報の嘘を暴いたり、噂を否定したりすることで、すでに出来上つた既成の歴史、つまり定冠詞のついた歴史を突き崩し、新たな角度からこの歴史上の事実を再構築しようとする。ただ、彼はその既成の歴史の代替物たる歴史を提供し、それに定冠詞を加えることには決して成功しない。そのような定冠詞を加えるためには権力やペストの力に寄生し続けなければならないが、寄生すれば、ペストの振るう猛威を伝えることはできても、ペストについての真実は永久に見えてこないに違いないのだ。

ペストについての真実とは、それを体験した一個人の真実なのであって、それがゆえにこの作品のタイトルはThe Historyではなく、"A Journal"でなくてはならない。"A Journal"を幾つ積み上げても全般的な真実に達することができないことをH・Fは知悉しているが、その限界は逆に強みでもあり、その限界の中で彼は頼り無い風情ではあってもその頼り無さすらもあらひ出して自分の語りとして「物語」つている。そのようなH・Fは一個人の真実を極めて説得力を持つて我々に伝えることに成功しており、それがゆえに「私的な語り手」のいらない『ペストのための適切なる準備』とは異なつてこの作品は、いまだにわれわれに読み継がれているのである。

## 第十章

### 自己参照というレトリック——『ロクサーナ』

1

順序は逆であるが、『ロクサーナ』の終りの部分を見てみよう。

わたしは今はこれ以上申せません。しかし上で申しましたように、わたしは夫と彼の息子（この息子の、）と云つては以前申しましたと共に無事オランダに到着いたしました。そうしてわたしたちの新たな将来にふさわしいだけの豪華な外見を装つて姿を見せたことは、もうすでに申しました通りです。

ここで何年か裕福な、そして外面向には幸福な境遇で暮しました後、わたしは恐るべき災難の人生に転落致しました。エイミーもそうです。わたしたちの以前の良き時代のまさに、逆転でありました。天の報いが、わたしたち二人によつてあのかわいそうな娘になされた罪の上に下つたようでした。そして、わ

たしはまたたいそう低い境遇に落ちましたので、罪の結果悲惨さがもたらされたのと同様に、悲惨な境遇に陥ったというそれだけの原因のために、後悔の気持ちを感じたようでした（五〇）。（傍線筆者）

ナラティブ分析批評において、作品の終結が分析対象になる」とがしばしばはあるが、デフォーの作品においても、結末部分は作品全体の在り方を規定している。特に『ロクサーナ』では結末部分が全体を要約し、かつ反復している。

結末部分についてのこれまでの議論は、大きく二つに分類されると思われる。一つはその不自然さを非難し、それが構造上の破綻に繋がっているとする議論である。もう一つは、この結末部分が一見不自然に見え、実は作品の他の部分と連結し、作品の一貫性を損ねてはいないとするユニティ論者の説である。<sup>五三</sup>

後者のはなしは、一面の眞実ではあるが、この結末部分の唐突や完結感の無さの理由は、いかによつて解説するにはできない。あの唐突さに驚かされた読者の気持ちをどのように説明すればよいか。やはり『ロクサーナ』批判派の言う不自然さは依然としてある。詹姆斯・フェラン (James Phelan) は放つて帖つたが、『ロクサーナ』の終りは様々な不安定や緊張が解けておらず、「終り」("closure") である「完結」("completeness") で

」の終結部の前半は主に作品の前の部分に言及している。現実の時間配列に従うと、ロクサーナとスーザンという実の母子の追跡と逃走のHPLソースがあり、スーザン失踪の後、ロクサーナは夫と共に無事オランダに逃れるのであるが、作品の中では、オランダに逃れたことがあらかじめ要約として述べられた後に、時間を遡りスーザンの話が六十数ページに渡って語られる。それが終わった後の作品の終結部分で、以前その事を描いたことに言及しながら再度その事が述べられるわけである。

終結部の後半はその後に起つたはずのことをやはり要約のような形で仄めかしたまま終わつてゐる。悲惨な生活に落ちたことは事実のようであるが、それが天の与える罪として訪れたのが、またその結果後悔の気持ちを感じたのかどうかといつては、「ようだ」("seem'd") という言い方をして自信なげである<sup>11</sup>。いずれにしても、この後半部は作品が終わった後のことに對して漠然とした形で言及してゐると言えよう。

この終結部分の、作品内に対する言及性と作品外に対する言及性は、この作品にとって重大な特徴を示唆し、かつ混乱を呼んできたと思える。

マリアンナ・トーロゴブニック (Marianna Torgovnick) は小説の終り方を幾つかのパターンに分類してゐる<sup>12</sup>。『ロクサーナ』を小説 (novel) の幅の事も難しく、彼女の分類に『ロクサーナ』の終結部分を当てはめるのが難しいのではあるが、興味深い事実が彼女の指摘から読み取る事ができる。

「非完結性」という特徴は彼女の分類の一〇 “incompletion” に相当するのかかもしれないが、私は「非完結性」とこの細葉に、この作品独自の幾つかの積極的な意味を付与したいので、幾分物足りなさを感じる。作品の終りが、やむに続いてよく物語を暗示するという意味では、「脱線説」("tangential") に近いのがもしかれない。やむに「次に続く」という性格がより明瞭になつた場合、彼女はそれを「連繩」("linkage") と呼ぶ。

「われわれはそのような小説を閉じる戦略を『連鎖』と呼ぶ。というのは、そのような終り方は、小説をその冒頭や中間部に結びつけるのではなくて、もう一つの（しばしばまだ書かれていない）小説に結びつけるからである」と、トーゴブニクは結論づけている。

彼女のこの言葉は、小説の終りを作品内に言及するものと作品外に言及するものとの二つに分類し、作品の終結を考える際に「二者択一」があるということを前提にしているようだ。

このような前提が、これまで『ロクサーナ』の終結部を考えてきた学者たちをも捕らえてきたのではないか。大雑把に言えば、トーゴブニクの指摘した「分類の一」の戦略を用い、「」の作品の終りをその冒頭や中間部に結びつけようとした研究者は、『ロクサーナ』の一貫性を主張した。『ロクサーナ』終結部に彼女の分類の一の由を読み取った学者は、トーゴブニクのように「連鎖」という特徴に価値を見出していないので、單にセリヒ不自然さと「否定的な特質を見たのである。もちろんヨーティ派でも、ノヴァシク（Maximilian E. Novak）のように『ロクサーナ』がデフォーの傑作になる」とを妨げているのは、切り詰められた終結部だけを欠陥として特別扱いする学者もいる。いずれにせよ、ヨーティ派も伝統派も、小説の価値をその完結感（フランの翻訳で“completeness”）に求めているといった点では同じであるように思われる。

どの学者がどちらの派に分類されるかが明確なわけがないにせよ、そのような二つの傾向を生む素地が『ロクサーナ』の終結部の一いつのパラグラフの中に隠されているのである。終結部の前半部の言及性は強く作品内を志向し、作品内の貫通性に寄与する。実際、もし後半部分がなかつたと仮定して、前半部の後に「」の後わたしは、後悔の念を絶えず持ちながらも、少なくとも外面向には幸福な一生を過ぎました」とい

うようなせりふを加えて物語を終わらせたとすれば、ある程度の統一は成し遂げられたのではないか。後半部は作品の外を強く志向しており、従来の、完結感を重視する学者には受入れ難いものであろう。(この部分に嫌悪感を覚えた論者にはもはや終結部の前半は目に入らない。結末の一一つのパラグラフが一一つの逆の傾向の批評を生み出したのである。かたやこの作品の価値を擱い上げようとする者、かたやこの作品の破綻を論難しようとする者と、全く立場は別であるが、彼等が終結部のどちらか一方しか見ていないという点では同じである。

どちらか一方に偏重したような読み方は慎まなければならない。その上で、私がこの終結部で最も注目したいのは、言及性である。二つのパラグラフでその方向は逆であるが、どちらにも、ある言説がそれだけで留まらずに他のものを参照し言及することによって、それとある種の関係を樹立しようとする意識が見て取られる。私は「の意識を」この作品を支配する最も大きな力学として捉え、「自己言及性」、または「自己参照性」と呼ぼうと思う。

この作品が内的関連性をもつということは、しばしば指摘されてきた。ただ、この指摘をしたのは、容易に想像されるように、ユニティ派の論客である。例えば、ヒグドン(D. L. Higdon)はエピソード間の関連性を実証し、時間処理の厳密さを指摘し、様々な反復や何度も登場する人物や物を表にして、この作品の内的関連性を正しく描いたのではあるが、これらから導き出される結論は、テーマの上での統一があり一貫性が見られるということである。彼は故意に終結部の後半を無視している(一五八)。

確かにエピソード間の連関性があることや、反復、再登場があるということは、「自己参照性」という特徴の一つの現れではある。しかし、作品の終りがそれ以降のこととを指示していたり、「」のことは後に述べる

とになるう」と言いながらもその言及先がないような実例があつたりする」とに対してもどのような説明をつけたら良いのであろうか。」の問題に触れる前に「自己参照性」そのものについて考える」とにする。

自己参照には大きく分けて、未来に対するものと過去に向かうものとがある。未来に対する「自己言及性」から具体的に見てみるとしよう。

## 2

最も基本的な未来参照は、「その」と「以て」では、後に述べることにならへ」("of that hereafter")という言葉によって、簡単に述べた出来事の詳細な内容を未来に繰り延べるという手法である。<sup>1) 2)</sup> 「」のような言葉遣いはずいぶん何度も作品中に見られるが、決まり文句のようなものとしてとくに意味もなく使われているものもある。実際に重大な事実や事柄に言及しているものと数の上では拮抗している。ただ、現実に作品を読んでる最中に、「」のうちどちらであるのかを識別することは極めて困難である。同じような言葉を使つた未来言及があまりにも多いため、それらすべてが我々の記憶に残るわけではない。作品の後になって言及先が出てきたときに、「」ぢやそれと言及元を照合する読者もそう多くはないと思える。

未来参照があまりにも目立たぬ形で現れて、批評家さえもそれを見過さすという場合さえある。次の引用を見てみよう。

「」う申しますと読者の皆様はびっくりなさるに違いないのですが、わたしは夫を目にすることは二度

「いりやこがせんやした。やひに言うと、一度と田にする」とがなかつただけでなく、あの人からの便りもなく消息もなく、……おぬや、地面がぱいくりと口を開いてあの人を飲み込んでしまひて、だれもそのことを知らないかのようでした。後で申します」とは除いてですが。(12)

これは、ロクサーナの最初の夫が彼女の前から逃亡したときのことと述べてゐる。」の一節を引用した後ヒグドンは、「デフオーがこの様に夫は二度と現れなかつたと言ひながらも、後で再び彼を登場させるのはロクサーナの言葉に偽りがあるが、もしくはデフオーの記憶力に問題があると述べてゐる。しかし、もちろん我々は「後で話す」とは除いて」という短い一節を見過してはならない。

確かに」の引用部分は奇妙と言えば奇妙である。最後の一節に至るまでは、夫が失踪したい」とに対する驚きと、その後も全く手掛かりがない」とを強調して述べるトーリックは、」の時点を基準にして未来を語る語り手の意識である。それに対して「後で話す」とは除いて」という言葉は、過去の人生を一望の下に眺め、それにある時間的因果関係を与えるとする未来を基準にして過去を振り返る語り手のもののように聞えね。

しかし、そう思う読者である私は」の一節を読みながら、「後で話すこと」が何であるのかを知つていぬ。すなわち過去を振り返る語り手の立つよくな地點「」に立つてゐるのである。」の作品を前から読んできて、」の部分を見た読者は、「except as hereafter」 という言葉をある留保・引ひ掛かりとして読むであろう。

未来言及が意味を持つのは、それが未来を志向してゐるからである。我々は“except as hereafter” という言葉を読むことで、何かが将来起るやうであらうとこういふとを知り、かつそれが何が分から

ないという宙ぶらりんの状態に置かれる。数多くある未来への自己言及は、それにより作品の緊張を高め、速度を加速させ前へ前へと物語を投げ掛けしていくのだ……。

「のような単純な言及の中には、エイミー（ロクサーナの召使であり友人であり分身）が最終的に報いられることがないことを仄めかしたものや、若いときからダンスが上手でそれが後になって役立つた（つまり国王の前でトルコ風のダンスを踊って心を捕らえたことなど）を先語りするものや、彼女の最初の情夫である宝石商が殺された時その宝石箱を持っていたことを隠していたが、後になつてそれを悔いる結果になると言つて、そのため宝石殺しの科で、あるユダヤ人にひどい目に遭わされる」ことを予告している部分など様々なものがあるが、とてもそのすべてを一一例としてあげることはできない。

予言、というのも未来参照の一つの形である。その幾つかの具体例を見てみるとしよう。宝石商は、殺害されるその日にロクサーナを訪れている。ロクサーナは、彼が商用で出かけると言つた時、彼の血に塗れた顔を幻視し、外出を必死でやめようとするが、彼はそれを振り切つて出かけて彼女の予言通り殺される。未来を前もって体験し、すでに苦しみを感じている彼女は、その未来が現実にやつてきて、当然のこととしてそれを受け止める。宝石商は外出の際彼女に全財産と宝石を託し、彼女はそれを結果的に自分のものにする。彼女にとって情夫の死は利益になつたのだった。

また、悪魔のようなユダヤ人の元をかろうじて逃れ、船でオランダに向かう途中に起つる大嵐も彼女が予言したものである。正確に言えば、航海の途中、嵐が吹けば心の故郷イギリスに戻れるのにと彼女が密かに願い、それが実現するのである。ロクサーナとエイミーは九死に一生を得る。

彼女の意識は未来の方向を向き、あらかじめ未来を取り込み、そのため現在と未来の距離はなくなり、未来が現在を浸食して行くのである。逆に言えば、現在が未来に吸収されてしまうのである。

この一つのエピソードを眺めるだけで、実はこれらの災害や死は彼女がもたらしたのではないかという疑念を抱くには十分である。一人目の愛人、大公と何年か付き合ったとき彼の后が病死することや、彼自身後に猪狩りをしていたときに重傷を負うことや、起るのではないかと彼女が予感してなんとかくいとめようとするエイミーによるスザン殺害が起り（実際はこれは仄めかされるだけで断定はされていない）、彼女が結果的に安全を確保することなどを読むと、この疑念は確信に変わる。ロクサーナは破滅をもたらす女性(*femme fatale*)である（嵐の場合のように自ら災害を招く事もある）。

彼女を危機に陥れたユダヤ人が両耳を切り落とされたのも彼女への罪のためであろうし、たとえ彼女のために物理的な災害を被らなかつた男達でも、彼女との不倫関係によって道徳的損害を受けている（彼等は自らそれを求めたわけではあるが）。エイミーの処女を自分の情夫に無理やり奪わせたのも彼女である。過去を振り返るという視点から見ている語り手のロクサーナ自身、大公と自分の関係について、「そのために今日までわたしあはしばしば暗澹たる反省の念に沈んで参りました。振り返って考えますと、わたしはあれほどの方【大公】を陥れる罠であつたのです。わたしの影響のためにあれほどの邪悪な道に走らせてしまつたのですし、わたしが悪魔の手先になつての方にあれほどの損害を与えたに相違ないのです」（102）と認めている。過去の行為を振り返る語り手としての彼女は、良心の呵責と悔恨という重荷を背負つてゐるかのように見えるが、あくまでも作品内で進行していく時間を生きるロクサーナは他人の破滅を代償に自分の安全を確保し、蓄財をしていくのである。

もちろん、これらの予言が実現するのは、ロクサーナの意志によるものではないが、未来参照は、そのような論理的因果関係を飛び越えて早めに未来を取り込んでいくとする。そのために、被害を被る人間にとつて不幸な未来を、彼女は招き寄せるのである。そのような未来参照の力学を内面に供えているロクサーナは、やはり、ファム・ファタールであると言えよう。

## 3

ここで、参照作用の分析から少し離れて、「ロクサーナ」という人物像について考えてみよう。『ロクサーナ』の結末部によって、作品の構造は閉じたものでなくなったわけだが、ロクサーナ自身の人生も閉じたものではなくなつた。彼女の改心についても悲劇についても、すべてが曖昧なまま物語は放擲されてしまった。しかし、まさにこの宙ぶらりんの状態、閉じない曖昧な状況、「非完結性」こそ彼女の生き方を端的に要約するものではなかろうか。

その実態はとにかく、ロクサーナの生活が最も安定しているように見えるのは、作品の冒頭と終局である。作品の最後では、既に述べたようにオランダ人商人と結婚して、従男爵夫人と伯爵夫人の二つの称号を手に入れ、何の心配もなくオランダに渡つて余生を過ごすことになる。冒頭でも彼女は名の知れた醸造業者の元に嫁ぎ、五人の子供を生み何の苦労もないはずであった。

ところが作品の終局の安定が偽装であったとの同様に、冒頭でも彼女の夫が全く生活力のない「馬鹿」であることが判明し、彼が財産を蕩尽してしまった揚げ句に家から忽然と姿を消してしまうことで、彼女の最

初の危機が訪れる事になる。彼女がこの危機を回避するためにとった手段は、五人の子供を夫の親戚の家に無理やり押しつけ(「この実際の処理係りはエイミーである」)借りていた家の主人の囲い者になり金を得るというものであった。

慈悲心を持ち、友人であるとされる男がここで彼女に迫つてゆき、実は彼女の肉体に最も関心がある」とを露呈する」とで、無償の慈悲心や愛情や友情などというものが存在しない」とを早くも読者は知る」となる。事実、この作品でロクサーナの分身としてのエイミーは別として、人間と人間を繋ぐ暖かい関係性というものは決して成立しない。どんな理由があるにせよ、自分の子供を捨て、男性の提供する金品へのお礼としてしか愛情、もつと端的にいえば肉体を与える」ことができない女性としてロクサーナ自身も、この関係性の欠如という作品中の特徴に大きく寄与しているといえよう。

この家主である宝石商が彼女に迫つたとき、彼女はこのまま飢え死にするか、それとも彼に身を委ねるかという究極の選択を迫られる事になる。これまでこの場面は、スターの言う決疑論("Casuistry")的に、すなわち人間の意志とどうしようもない状況の葛藤の末に人間が敗北し、その敗北の結果、人間としては罪を負うことになるが、そのどうしようもなさゆえに同時に読み手の同情を呼ぶような場面として読まれる」とが多かつたと思われる。その逃げ道なしの選択の結果、ロクサーナは社会的道徳的規範("principle")から逸脱し、罪の人生を送り始めるというわけである。

しかし、「に至るまでの様々なセクシュアルな仄めかしは何だろうか。ロクサーナは、食べ物を得るために体を提供する」とは当然のことだと、もうエイミーを「あなたはまるで悪魔の私的相談役であるかのように、悪魔の側に立つた議論をしてくる」(37)と悪魔呼ばわりして非難しているのではあるが、彼女が喜んで男を

自分の家に入れて一緒に食事をして、その上に金まで費して居ることを知ると、彼女がそれ程嫌な選択を必要に迫られて行つたという風には、読者は思わなくなる。

この場面の一重の意味 ("double entendres")についてはバーズアルが詳しく論じているので繰り返さないが<sup>(一)</sup>、これ以降ロクサーナは何人の男の情婦になるが、その最初のきっかけは、必ず男を自分の家に招き入れ、一緒に食事をとることであるのは極めて興味深い事実である<sup>(二)</sup>ことを指摘しておきたい。彼女が暮している家が宝石商の家であるのは確かに事実ではあるが、「どうぞあなたのものです」と書いて家を案内する」と自分で自分を入れて「いる容器を男に差し出すのは、自分の体を提供する身振りの様に思えるし、しかもハイミーの「貴方様の部屋はもう準備であります」(33)と書うのは確かに性的な含意を持つて居る。また、この宝石商が「この家に十分家具が整つたら、夏にやつてくる紳士の方々に貸間とし提供するようにわたしが手配しましよう。そうすればあなたもかなり良い収入を容易に得られる」と<sup>(三)</sup>書うのを聞くと、彼は娼婦館のようなものを開こうとしているのではないかとすら思える。

もちろん宝石商は他人であるし、ハイミーもロクサーナの分身ではあるといつても他人であるのだが、この辺りの濃密な性的雰囲気は性的成就 (Consummation)に向かつての下地を作つて居るように読める。別の言い方をすれば、ロクサーナの選択は、生理的に受けつけないものを必要に駆られて受け入れたという、運命を強いらされた者の悲劇ではなく、なるべくしてなつた自然の経過であったという風に読める。わいと言ふなら、わいと高慢な心を持ち人にちやほやされるのが好きで派手な生活が好きなロクサーナは、結婚を介しない純粹な利益追及のための完結しない男との関係を、自らの意志により選択したかのようにすら見えてくる。

「かのように」「という言葉を私は使わざるを得ない。それは未来参照であるロクサーナの予言とそれが実現する」との間になんら因果関係が存在せず、彼女の意志がそこに関わっていないにもかかわらず、そこになんらかの連續性を我々が読み取ったのと同じ事情からである。作品の終結部で、ロクサーナが自分の罪と天の報いが下ることとの間の因果関係について、「ようだ」("seem'd")という言葉を使っていたが、この "seem" は作品全体を覆っているのである。神の配剤と人間の意志の葛藤という伝統的な主題が、ここではかなり変形している。神の意志や神の突きつける選択は曖昧なものになり、神の突きつける運命と人間の意志はそれ程鮮明な対称と対立を作っていない。場合によつては一者は馴れ合つてさへいるようだ。ある出来事があつて、その後にある別の出来事が起つる。その間に客観的連結がないのに我々がそこに因果関係がある「ようだ」と感じるのは、そのギャップに神の見えざる手が働いたからであろうし、また後に起つた出来事を結果として呼び込もうとする人間の意志が働いたからでもある。『ロクサーナ』という作品で、この一者は奇妙な形で入り交じつてゐるのである（六四）。

いずれにせよ、ロクサーナには、最初からそもそも閉じた関係、安定性というものは約束されていない事が分かつた。彼女はいわば最初から宙吊り状態である。

彼女は、生涯を通して都合四人の男の囮い者になるが、彼女自身このような関係が早晚崩れざるを得ないものであることを常に意識している。例えば、一番目の男である大公に大事にされ、多額の金や品物を貰つて極めて良好な関係を保つているように見えるときでも、次のように彼女は言つて、将来起つるべき別れを見据えている。

「このように裕福で幸福な生活をしていた最中にも、わたしはこれまでに金持ちと貧乏を一度ずつ交互に経験していることを忘れてはおりませんでした。そう、わたしは心得ておかねばなりません。わたしは今いる状況は何時までも続くものだなどという期待を持つてはいけないのです。わたしは一人子供を生んで、また一人生もうとしています。このまま何度も子供を生めば、わたしの利益を支えてきた大きな条件、すなわち彼の言う美しさが損なわれていくでしょう。そして美しさが衰えれば、彼の情熱も衰えるでしょうし、わたしを大切にする彼の暖かい気持ちも冷めることでしょう。そして偉大な男性がたの情婦たちがそうなるように、わたしもまた捨てられるかも知れないのです。だから、落ちる時にはできるだけ静かに落ちるように心掛けておくのがわたしの勤めなのです。」（105）

かくもロクサーナの人間関係は不安定で、いつ崩壊するとも知れないものである。崩壊すれば次の新しい関係を求めざるを得ない。かくして彼女は反復の人生を歩むことになる。この間の事情をポーラ・バツクシャイダーはその優れた著書の中で正確に捕らえている（六五）。ただバツクシャイダーが、「ロクサーナは人間の愛情と関係性のはかなさを受け入れて、賞賛と興奮と変化の中に満足を求めていた」と言い、「変化が訪れないときには自ら変化を起こうとする、何かを探究する人物である」と言うとき、余りにもロクサーナの積極的に前進して行く女性商人的な側面を強調し過ぎてはいまいか。

確かに、関係性の崩壊という特徴はロクサーナという人物にまとわりついでいる。それを見据えて次の段階に進んでいく彼女の前進する性格は、語りの上での特徴である未来参照と結びついて、この作品の重要な一面を作っている。しかし、それを強調し過ぎると現実の彼女のもう一つの側面を見過してしまう。

ロクサーナはバツクシャイダーの言うように、人に依存することなく絶えず変化していく逞しい女性ではない。全く逆である。彼女は自ら行動することはない、絶えず人をうまく利用し、依存することによって生きる「六六 寄生者である。おまけに彼女の寄生した相手には、彼女と一緒にいるだけで後に災厄が降りかかる」。

ロクサーナは、邪魔になった子供を夫の親戚に押しつけることにより処理する時でも、スーザンを始末する時でも、自ら手を下すことはない。行動するのはエイミーである。富をどんどん増殖させていくのも、男から貢がれた金によるものである。確かに体を売るということを経済活動と考えることはできるし、ロクサーナにある程度現実処理能力がつくのは事実ではあるが、それにしても帳簿をつけたりする現実的な仕事をこなす秘書はやはりエイミーであるし、オランダ人の商人やロバート・クリエイトンの忠告によるところも大きい。彼女は現実生活の上では受動的であるし、重要な行動を起こす力はない。そのような彼女に現実的な力があるように思わせるのはなぜかと言うと、何度も言うように、彼女の意志が運命と緩やかな形で共謀して現実に手を下さなくとも未来を招来するからなのである。

関係性の否定を生きる、すなわち社会からはみだしながら社会に寄生する偽装の生活を送っているロクサーナが、一度だけ自ら関係性を求めるときがある。オランダ商人のプロポーズを断ったときである。結婚というものは関係性の確立であつて、ある一つの完結であるように思われる。それを断るということはこれまで通りの生き方をしているようだが、実はそうでないと私は考える。ロクサーナに人間的な関係性を樹立するチャンスがあったとすれば、このときをおいてなかつたのではないだろうか。

もちろん、彼女が今で言う「フュニースト理論」のような論理を駆使して、もうすでに肉体関係のできている、

愛する男との結婚をかたくなに拒んだのは、最初の夫との苦い経験があつたからであろう。女性はいくら金持ちの家に生まれても、結婚すればその財産を夫に渡さなければならない。そのため夫に財産を食い潰されたとき打つ手がなかつたのである。その結果、半ば自らの意志によつて彼女は囮い者の人生、つまり関係性の否定という人生を送るようになるのである。

しかし、女性にとって結婚が夫次第で脆くも潰え去つてしまふ可能性を孕んでいるなら、そもそも結婚そのものもそれ程閉じた堅固なものではないのではないか。ロクサーナは最初に結婚したときからすでに関係性の否定を生きていたのである。

そのような彼女が最初に愛したのがこのオランダ人商人である(宝石商と大公を彼女が愛していたとは私には思えない)。彼女は様々な理由を並べて結婚を断る。結婚することによって、社会、制度という欺瞞の安定の中に取り込まれたくないのである。しかし彼女は愛する男を失いたくないのであつて、絶望した彼が彼女の元を去ろうとするのを必死に引き止めようとし、自分に都合の悪いパリ以外なら世界のどこにでも一緒に行くと言うのだが、結婚できないものならいつそ会えないほうがいいと言つて、男はパリに去つてしまう。別れは避けることはできない。「男」は彼女が言うように本質的に制度の中に取り込まれていて、男はパリに去つてある。

ここで彼女が新たな関係性を摸索していることは極めて注目するに値する。確かにここで彼女の決断に對して、回想する視点から語るロクサーナは後悔の念を表明しているし(虚榮心をもつた自分が、まだ囮い者の生活を送るつもりであつたために結婚を拒絶したのだと言つて)(161)、多くの批評家が指摘するように、彼女のフェミニスト理論はそれを風刺するために否定的に導入されていると見る見方は、ある程度正しい(六七)。自分の身籠もつた子供に対する無責任さも感情的には非難されるべきものである。

にもかかわらずロクサーナは、ここで初めて自らの意志によつて関係性の否定の生活を脱却し、オランダ商人が「あなたはこの世界の中での新たな何かを始めようとしている」(153)と言つたように、既存の関係性とは別のこところに新しい関係性の可能性を求めてゐるのだ。つまり社会の寄生者であつた彼女が、男に搾取されることも男に依存することをもやめて(二の二者は表裏一体である)、独立した対等の形で、結婚という制度に取り込まれずに、愛する男と暮すという形態である。

オランダ人商人とのエピソードの直前の場面で、彼女が嵐で九死に一生を得て心身共に浄化されてゐる(二の前向きの姿勢を生む一要因であろう。しかも、海が怖くなつたエイミーはロクサーナがオランダにくるとき付き添つてこなかつた。ロクサーナがエイミーという「行動する分身」なしで、一人で意志を持ち自ら行動するのは(二の場面だけなのである。

ただ、彼女が強力な意志を持つて「新たな何か」が何であるのかを把握して、そこに積極的に邁進しているというわけではない。結婚できないならば(二の場を去ると彼が言つた時、次のように彼女は言う。

わたしは彼の話(二の点が全く気に入りませんでした。彼を手放すつもりも全く無かつたのですから。  
それでいて彼の願いの通りの形で彼のものになつてしまつつもりもまた全く無かつたのです。そんなわけで、わたしは気持ちの定まらない一種の宙ぶらりん状態に投げ出され、どういう道を取るべきか分からぬ  
有様でした。(154)

彼女は新たな関係性を擱む一步手前のところまで至りながら、相変わらずこのように決疑論

(“casuistry”)的な二つの両極の選択肢の前で宙吊りになつてゐる。結局彼女は、彼女自身もう一步踏み出す決断力がなかつたことと、制度に組み込まれた「男」であるオランダ商人が彼女を理解できなかつたために、唯一のチャンスを掴み損なつてしまふ。彼女はその前の嵐のときに過去の邪悪な生活を改心するチャンスを逃しているし、このときも結婚さえしていれば悔い改める!ともできただろうにと過去を振り返る視点から嘆いてゐる(159)が、彼女が後悔すべき!とは、結婚しなかつたということではない。ロクサーナがこのときに失つたものは、過去の邪悪な生活を悔い改めね(“repent”)機会ではなくて、既存の概念とは異なつた関係性を作り出す機会だつたのである。

オランダ商人は別れるときに手紙を残していくが、その中に不吉な内容の予言を記していく。オランダ商人を拒絶したことでロクサーナは身の破滅を招き、後悔するようになるであろう、ついには彼女は悪い夫によつて身を滅ぼされるであろう、という趣旨のものである。ロクサーナは、この予言がその詳細な点までも後になって実現するだろうことを述べ、未来に言及していく。しかしあらじこの予言が当たつているならば、ロクサーナが未来に結婚するのは他でもないこのオランダ商人なのであつて、彼によつて破滅させられるという奇妙なことになるが、それは後半部分を論じるときに触れることにしよう。

ロクサーナはこの不吉な予言に震撼して、その予言が実現した場合のみじめさや困窮について思いを巡らせる。それが彼女の最も惨めであつた時代、食べるのもなく持ち物のすべてを売り払つてしまつた末に困い者となつたあの時代を蘇らせる。

その時、わたしの人生のあの忌まわしい光景、そうです、わたしが以前に述べました五人の子供と共に

に取り残されてからのあの事件が、再びわたしの心に蘇ってきました。そしてどうすればあのようないるべき状態になるのか、それを避けるにはどう振る舞つたらいいのか、わたしは座り込んでそんなことを考えておりました。(162)

「のうこ、」この作品では未来に思いを馳せるときに、同時に過去のことに言及することがしばしばある。以前に引用した105ページの部分も同じような構造を持つている。過去を参照しながら、それを教訓にして未来に備える。右の引用では、未来の悲惨さを想像することから、悲惨さの原形である光景に意識が遡る。過去参照である。

#### 4

右の162ページの引用にもあるような「以前に述べたように」という言葉が代表する過去参照の出てくる頻度は、「後に述べるように」に代表される未来参照に比べれば少ない。未来参照の数は、予想に反して作品の後半になつても減少することはないが、過去参照の数は、過去が積み重ねられていない作品の前半部分では圧倒的に少ない。数少ない言及は、重要な出来事、例えば最初の夫が逃げた後の悲惨な生活や、エイミーのレイプや、ユダヤ人が耳を切り落とされたことなどに限られる。

最初に重要な過去言及が行われるのは、嵐の場面である。凄まじい嵐によつてロクサーナは死の世界を垣間見る。そのとき彼女は自分の過去の恥辱に塗れた人生を嫌悪の気持ちを持つて思い出すのだ。そして、狂

乱状態のエイミーに、あなたに罪を犯させた、つまり道徳的に堕落させたのは自分であったのだから(つまりエイミーのレイプ事件のこと)に言及している)、「のように天の報いを受ける最大の原因は自分にあると言つてしる。

「の嵐を予言して実現させる」ことにより無理やり因果関係を作つて現在を未来に接ぎ木したロクサーナは、実際にその嵐が起つたとき、その原因を自分の罪に満ちた生活に求める」とで、現在を過去に接ぎ木する。これが過去への参照行為である。

ただ、私がすでに指摘したように、嵐はおさまり、彼女は結局改悛に失敗する。改悛とは過去への参照行為とは異なり、過去を否定することであるべく。そのようなことはこの段階ではすでに不可能である。もうすでに言及の網の目は張られているのである。しかも言及の網により、作品の密度が最も濃くなろうとしている時点に、この網を断ち切ることはできない。この後で愛する人(オランダ商人)に求婚されたときですら、彼女にはそれができないのである。

過去が重大な意義を持つて現在に関わつてくるのは、「の」ように過去に言及する場合のほかに、実際に過去の事件、もしくは人物が現在に介入してくるときである。それは、過去の人物の再登場という形を取る場合や、ロクサーナが自分の過去の汚点(と彼女が考えているもの)を抹殺するためにそれらに働き掛ける場合などである。いずれにせよ、そのために現在は邪悪な影響力によって汚染されて行き、ロクサーナは追い詰められて行く。私はこれらの現象をも過去参照として取り扱おうと思う。「以前にも述べたように」というような単純な過去言及を行つていくうちに、本当は抹殺してしまいたい過去が消滅するどころか徐々に濃密な存在になつて行き、現在に対する現実の影響力を行使する力を持つようになつてくるのである。

最初のそのような介入は、一番目的情夫である大公に囲われている時期に、失踪した最初の夫が突如姿を見せるという事件である（六九）。失踪した場面を、本章第2節の最初で引用した時に私が強調した「後で話すこと」というのがこの事件のことである。彼に見つかり今の境遇を知られると、大公との良好な関係が危機に陥ってしまう。彼女は四六時中彼を見張らせて、なんとかうまく接触を持たずに逃げおおすことができる。彼女はこの場合、なんとか過去の侵入を食い止めることができるのだ。

この時はうまくいったが、過去に対する彼女のこの態度は危険なものではなかろうか。彼女は過去を見張り、過去を支配し、過去を馴致しようとする。このような態度は、自分の人生及びそれに関わるすべてのものを掌握し、それらのうちで自分の支配から外に出るものなくそうとする企図である。これはすべてを統一し、完結した閉鎖した状況を作り出そうとするものだ。このような企図は、閉鎖した関係性を拒否し反復と増殖を続けるロクサーナの物語を危機に陥れると思われる。

事実ロクサーナの破滅が始まるのは、作品の後半で自分の過去を追跡し始めたときである。彼女は、自分を見捨てた最初の夫とそれから彼との間の五人の子供がどうなったかを調査し、さらに大公、ユダヤ人、結婚を断つたオランダ商人など彼女と関係のあった人物のすべてについてのその後を調べようとする。

作品の終りに近づいて、彼女はどうしてこの様な過去探索に乗り出すのであろうか。関係性の否定の人生をこの段階で放棄し、失われた過去を取り戻し、それらとの関係性を復活させようというのだろうか。

そうだとすると彼女は一大変身を遂げたわけで、百八十度転換したということになる。彼女がそれまでの囲い者の生活を捨て、クエイカーチ教徒の女性の家に身を隠し、自分自身もクエイカーチ教徒に変装したとき、彼女はまさにこのことを目指していたのである。しかも彼女は探索の末に十一年ぶりに見つけ出した、一度

は拒絶したオランダ商人と結婚までするのである。確かに一大転身と言ひてよしやあい。

この前後のロクサーナの肩書きに対する「だおりは」偏執狂的な様相すら帶びてゐる。過去探索の最中に以前の情夫である大公が自分を妻として迎えたがつて、「ことを知り、もし妻となれば「公爵夫人」になる」とを考え、結婚しようと思つたオランダ商人を遠めに。大公の負傷により、「これが御破算になつたときには狂乱するが、それを立ち直らせたのが、当のオランダ商人が二つの貴族の称号を獲得する」と、ロクサーナが「従男爵夫人」と「伯爵夫人」になれるよう計らうと申しだした。要するに彼女は、社会からはみ出したといひでの反復の生活に疲れで、なんとか変身をしたいと盼望するようになつてゐるのである。変身の結果過去と断絶して、社会的な称号を手にいねぬといひ再び社会に入り、それが持つ安定性に繋るうとしているのだ。

しかし、彼女が作品の中頃に与えられたロクサーナといふ名前“the Name of Roxana”(一七〇)が借り物の偽りの名前であったのと同様に、“the Name of Princess”(一七〇)(公爵夫人といふ名前＝名称)も単なるねばだけのものでしかない。オランダ商人も幅広い称呼など簡単に金で買えるのである。金と変身によって社会の安定性を取り込むとしても、それ程たやすくはない。結局彼女は「ようだ」("seem")という見せかけの世界から逃れていかない。関係性は相変わらず失われたままなのである。

オランダ商人との結婚についても同じことが言える。これは決して失敗した恋愛をやり直すことによる関係性の復活ではない。確かに彼女はまだ彼に対する愛情を保持しているようだが、結婚後それを感じさせることはほとんど無い。以前結婚を拒んだときは積極的に新たな関係性を模索しようとする意志が感じられただが、今回は完全に防御の姿勢が見られる。彼女が結婚という制度に迎合する事は、以前は欺瞞だとして

退けた社会の安定性に今度は必死になつて繩るための行動としか思われない。結婚した後、彼女は「かくしてわたしは、わたしの術策を巡らす人生のすべてに終止符を打つたのです」と言い、「将来は幸福に満ちた日々だけなのです」(243)と言つて、過去との断絶を成し遂げたかのような口振りだが、果たしてそうだろうか。

彼女とオランダ商人の会話に過去への言及が満ちている」とにもみられるように、このオランダ商人は、彼女の恥辱に満ちた過去の領分に属している。しかも彼はロクサーナの未来に不吉な予言を残していた。いわば彼女にとつての過去の汚点の一つなのである。ロクサーナは結婚という閉じた状態をそこに押しつけることで、予言を封じ込め、未完のまま残した過去を完結させようとするのだ。この態度は、過去を追跡しようとする他の彼女の行動と同じく、過去を支配し掌握しようとする態度である。

これは過去との関係性を造り上げようとする態度では決してない。過去を変更し、統治することは、過去を後悔し改心することに繋がり、それはすなわち過去を否定することである。関係性の否定という人生をある程度自らの意志で選び取つて前向きに生きていた彼女は、(二)にきてそれを後悔し、過去を変更するために、過去の関係性を破壊するという行動を取り始めるのである。同じ関係性の否定とは言え、前者と後者では大きな差異がある。彼女の変節がこのギャップを生み出すことになる。

過去を変更しようとする試みの例をもう一つ見てみよう。ロクサーナは下宿している家の主人であるクリカーチ教徒の女性にかなりの金品を送つてゐる。(一)で彼女は注釈を付け加え、自分の慈善行為を描くのは、見せびらかせるためではなく、四人の子供を抱えて夫に逃げられて貧乏しているこの女性の生活が、自分自身が全く同じ境遇であった時代のどん底の生活を思い出させるからだと言つてゐる。過去への言及である。ロ

クサーナが慈善をするのは、自分の一番苦しかった過去を鎮静させ、宥めるためであつた。慈善のため彼女が与える金品は、過去への手向けなのである。

「」のように彼女は過去を懷柔しようとすると、それが容易でないのは、過去を隠蔽したり変更したりすることが容易でないと同様である。ロクサーナは反復の生活を送っていた頃は比較的過去を無視していたのであるが、一度過去探索に乗り出してしまっては、過去は堰を切ったように彼女のほうに押し寄せてくる。過去を変更しようとして行う言及、參照行為によって、過去はその意味を何度もなぞらえ濃密になって行く。そのため益々過去を支配することが困難になり、なんとかしようと躍起になつて隠蔽工作に走れば、それだけ余計に苦境に陥つてしまつた。ロクサーナは徐々に「自己参照性」という泥沼の中にはまつていく。

彼女はその結果、最後には（彼女の言葉によれば）破滅するわけだが、そうしてみるとオランダ商人の予言を結婚によって封じ込めようとする彼女の試みは失敗したことになる。破滅を回避しようとして結婚したにもかかわらず、逆にそれが破滅をもたらすことになるのだ。だとするとオランダ商人の予言は計らずも別の形で実現したことになるのである。

ロクサーナは自分の慈善行為に対する注釈の中で、夫が失踪して子供と取り残された自分の極貧時代を思い出として「」の哀れな女性（クエーカー教徒の女性）を助けようとする愛情に満ちた気持ちが起つた源泉であり根源である」と書いている。何と書つても過去の中で最も言及されることが多いのが、「最初の夫失踪→極貧生活→子供の処理→妾の生活」という一連の出来事なのである。すでに私が引用した、105ページと162ページの部分にもその言及があるし、私自身も「」の部分に何回か言及している。

彼女も「根源」("the Original Springs, or Fountain-Head") という言葉を使つてゐるようだ、「」の部

分で彼女のその後の反復の人生を決定する基本構造「金を得る＝子供を処分する＝妾になる」が確立したのである。この構造には、「関係性の否定」の萌芽のすべてを読み取ることができる。子供との関係、自分を囲った男との関係、これらはすべて閉じない関係、完結状態に至らない崩壊した、もしくはこれから崩壊すべき関係なのである。

「の」とを考えると、この場面に自己参照の矢が集中する、またここから自己参照の矢が伸びていくもの当然であるよう思える。そもそもそれ自体が閉じていない非完結である構造が、参照行為によって自らを反復していくのである。この場面に反復や過去参照が堆積するにつれて、ある情念が積み重なっていき、この場面は単なるエピソードではなくなり、濃密な空間に変貌して行く。このような空間から、あの悪魔のような執拗さでロクサーナを追跡する、ステーザンという存在が出現するのも極めて良く理解できるのだ。

## 5

ステーザンは、このとき捨てた五人の子供のうちの一一番年上の子供である。もちろんこれがわかるのはロクサーナが過去探索に乗り出して、エイミーに調べさせた結果であるから、作品のうちでも最後に近い部分である。従つて、誰もその時点までその存在を知らないのだが、ステーザンはわからない形ですでに作品の中に入り込んでいる。ステーザンはいないようで必ず「いる」つまり「偏在」する。最初の捨てられる場面に彼女は当然いたはずであるし、ロクサーナが作品のちょうど中央部分で社交界の花形となり、国王の妾となつた絶頂期に、それとは知らずにステーザンは母親のメイドとなつて働いていたのである。それ以降彼女はエイミーが過去調査

によってそれと知つて解雇するまぢずっとロクサーナの側にいて働いていたことになる。彼女は誰にも知られず、誰にも見られず、ずっとロクサーナを見張つていたことになる。自分が仕えていた女性がどうやら自分の母親らしいということに気づいたスーザンは、自分を認めさせようとして、執拗な追及を行う。皮肉なことにそれに気づいたきっかけは、彼女がロクサーナという名前("the Name of Roxana")を知つていたことである。追及の最中に、偶然うまくロクサーナの家に入り込んだスーザンは、そこに居合わせた人の前で、自分が以前働いていた女主人、すなわちロクサーナの絶頂期のことを物語り始める。かくしてロクサーナの過去が抜群の記憶力で微に入り細を穿つて語られ、彼女自身過去の化身的存在であるスーザンがロクサーナの過去を暴露してゆくのである。しかも、スーザンの物語はロクサーナの物語を別の角度から語り直し「再物語」化している。すなわち、ロクサーナが語つた時に明解にしなかつた事実を暴露しているのだ。ロクサーナが国王の愛人になつたことや、連日パーティーを開いて、彼女の家が事実上色事と賭け事を行う場になつていたといふこと(作品の冒頭で仄めかされていたロクサーナの家=売春宿が実現しているわけだ)などである。同じ事件が後になつて別の人物の目を通して語られることで、ロクサーナの過去、そしてそこを見られるロクサーナ像に別の角度から色が塗られる」ととなる。

スパイを雇い、行動をすべて見張らせ、といに逃げても追いかけてくるスーザンの追及には鬼々迫るものがあり、読者はそれから逃れたいというロクサーナの焦燥感を共にする。しかし良く考えてみれば、なぜそれ程必死にロクサーナはスーザンから逃亡する必要があるのだろうか。確かに自分の高級娼婦としての生活を夫に密告されれば、ロクサーナは破滅するだろう。しかし、スーザンを認知するときに自分の側に抱き込んで止めすることができるのであるだろう。

ところが彼女はその様なことは全く思ひつかない。ロクサーナは、現実に対処する上でスーザンが障害になるという点だけで恐れているわけではないのである。彼女の恐怖は何かもつと根源的なものである。

スーザンはどこに逃げても恐ろしいほどの正確さで迫ってくる。タンブリッジまで行つて今度こそ逃げおおせたと思つてみると、また玄関先に現れる。スーザンを出し抜くことは不可能だ。

スーザンはロクサーナの支配力を越えた懷柔しようのない過去である（七二）。また同時に彼女は、ロクサーナの子供であるという意味で彼女の未来でもある。スーザンは過去であり未来である。しかも彼女は作品のあちらこちらに現れ作品内の意味を繋ぎ、そして同時にロクサーナの将来を危機に陥れる」とで作品の意味を作品の外に解放している。

スーザンは「自己参照性」の化身なのである。彼女はロクサーナの変身を阻み、閉鎖を打ち壊し、反復と自己参照のめぐるめぐような世界に彼女を引き戻そうとする悪魔なのである。破滅をもたらす悪魔であったロクサーナの子供はやはり悪魔であった。

彼女はエイミーの怒りを買って、最後には殺害された「ようだ」。しかしあくまでも「これは「ようだ」「seem」ということであつて確証はない。スーザンは、まだ生きているのではないかという含みを残しながら作品から姿を消す。スーザンはいよいよ「いる」のである。例え彼女が死んでいたにせよ、スーザンがロクサーナの過去であり未来である以上、スーザンはやはり「いる」と言えよう。

結局ロクサーナには閉じた関係性を作ることはできなかつた。彼女は非完結性という呪縛から逃れることができないのである。スーザンが消滅して無事にオランダに逃れた後も幸福とはほど遠い陰鬱の毎日を送ることになる。

「いや、私が最初に論じた結末部分に到着した。結末部分はペーチンの物語が始まる数十年前に、要約として先語りされでいると私は指摘しておいた。その部分を検討してみよう。

時間的にはこの部分は、前にも述べたようにオランダに無事到着した後の「ことあるから、やがてのペーチンを殺した「はずの」H・イリーはロクサーナの怒りを買つて家から追い出されでいるはずである。ユリルが、せとんじ眠る」とわざわざ、寝ても起らんじ夢ばかり見る暗澹たる日々を送っているロクサーナは、「わたしの唯一の心の慰めは一人きりやうねんけどH・イリーに胸の内をぶちあけたい」とやった」(160)と書いている。といへりとは作品の最後で予告だけされでいるH・イリーの再登場が「いや」では実現していないわけである。作品の外に向かう自己言及が、裏返つて作品内に一部取り込まれでいる。

やがてに次の引用はこうだいようか。

わたしは罪という重荷を心に抱き、自分が何を成すべきかがわからず、全くの暗闇の中を彷徨うのやした。そして、このような状態で、わたしは一年近くも煩悶の日々を送つたのです。日々を送つたと聞えるのは、もし神様の標榜のお陰でわたしが救つてやるわなければ、わたしはすぐにも死に倒つたであろうかひどい。どういふことかは後に述べるところ("But of that hereafter")。(160)

彼女は死の危機に瀕したであろうと想像されるこの経験について、後で述べではない。この自己参照の矢は作品の外に伸びて行く。

このように言及先が作品内に無い自己参照が何箇所か見られる。エイミーによるスザン殺害も推察と自己参照によって仄めかされるだけで、「今は時間がないのでそのうち述べる」とロクサーナは言うのだが、結局最後まで真相は詳らかにならず、作品の外に放り出される。私が冒頭で引用した作品の終結部の中にも、「今は」「れ以上申せません」という言葉が見えるが、「今」言えないのだったら後に言うのであるうか。「後」とは作品の終わった後になるのだが。

ロクサーナは、「このわたしの物語の終り」という言葉を一度使っている。それが使われるのは本当のこの『ロクサーナ』という作品の終りの部分ではない。それが先語りされている265ページの私が引用した部分の直後である。物語の終りが物語の途中に隠蔽されているわけだ。

これらの事実を考え合わせると、この作品の終りは故意に隠されているのではないかと思えてくる。作品の完結感は作り出されたはずなのに、故意にはぐらかされ「非完結」となった。実際の物語の終りは作品内に隠され、現実に完成した作品の終りには言及性の矢印が残されるだけである。

それではいったい、「自己言及性」とはなんであるか。

まず自己とは、『ロクサーナ』という作品であり、ロクサーナという人物である。「自己」というと、唯一無二の統一体であって、それが自らに言及するというと、メタフィクション的なものが想像されるかもしれないが、私の言う自己はもっと緩やかな概念である。本来は私のこれまで論じてきたような「言及」というのは他者へ

の言及のはずであるが、『ロクサーナ』の場合、その行為は他者への言及ではなく自己を外に投げかける運動となつてゐる。自己Aを外に投企すると、その言及先は、Aになり、「A」になり自己は反復されながらどんどん膨張して行く。

基本的には「自己」を代表するのはロクサーナであるが、その「ロクサーナ」という名前自体が「借り物」であつて、ノヴァツクの言うように、様々な文学作品の類似した性格の登場人物につけられた名前に由来している<sup>一七四</sup>。ロクサーナも、偶然この名前で呼ばれるようになつたことによつて、間テクスト的に外に開かれた存在になつてゐるわけだ。

「自己」での自己は、確立、確定してしまつたものではない。反復、投企、参照によつて増殖してゆき、ある意味では拡散して行くものだ。しかし同時に、參照行為によつて反復される自己は、その反復のずれ<sup>一七五</sup>のようなものによつて変化を作り出し、膨張の最中に核分裂を起こすことで他者を生み出そうともしている。他者が生まれるということは境界の成立を暗示し、その結果、自己の確立の機会をも生み出すことになる。自己は拡散の行為によつて逆に自己を収束し、收敛しても行くのである。

しかし自己は、そうたやすく確立されるものではない。そのためには自己はその確立しないままの姿を、何度も自己参照によつてなぞりなぞられなければならない。なぞられるとき、それは同じ線で描かれるのではなく、少しずつ違つた線でなぞられる(スーザンの二度語りや、要約によるエピソードの先語りや、スーザンという存在によるロクサーナの反復などを思い出すとよい)。従つて、自己は確定しないまま、ある範囲内で濃密さを増していく。ロクサーナの「自己」とは星雲のようなものであつて、中央は極めて濃密で、その光を回りに放射することで自らを繰り返し、周辺にいくほど薄くなつていく。『ロクサーナ』という作品は、星雲の中心の密度の

濃い辺りにあるのだと聞えよう。また、この星雲はそれを見ている読者にも光を投影し、自己言及し、関係性をもひこむ。

「のような「自己参照性」をその本質として持つ」の作品は、一つの教訓物語として完結する」とはできないかった。またスター(G. A. Starr)の書く「精神的自伝」("spiritual autobiography")にもならなかつた。ただし、スターによれば「精神的自伝」という文学的伝統はその特徴として自己言及性(彼は)の言葉は使つていいが)を持つてゐるところである。〔精神的自伝〕に則つた作品のそのような言及先はただ一つで、作品の中頃に起つた悔い改め("repentance")の場面である。作品内の様々な出来事は、互いに連関を持たないが、すぐれてがいの神の前での改悛と云つて出来事に繋がり、それに言及するとスターは書いてゐる。

この事実の指摘は、私の議論においては極めて興味深いものだ。『ロクサーナ』という作品はこの文学伝統に則つて書かれ始めたらしい。といふが、その一番重要で中央に描かれるはずの改悛は成されないまま、どんどん遅延してゆく。結局引用した最後のパラグラフにあるように、改悛はなされた「よう」なのではあるが作品の外に放り出されている。しかもその改悛の場面とだけ連関を持つはずの各々の出来事がそれぞれ勝手に言及の触手を伸ばし始め、互いに関係を持ち始めるのである。

これを文学伝統の変形と解体だとスターのよう考へるのは容易だが、私はこれは『ロクサーナ』にいつては必然的なプロセスであつたと考へる。その理由の一いは、すでに述べたように「自己参照性」の機能が全く異なつてゐること、そしてもう一つは、ロクサーナにとって改悛は到底できない行為であるところである。何度も言つたように、改悛とは過去を否定することである。そのようないことは不可能だ。いくら逃げようとしても過去は追いつくる。責任は人間が取るべきもので、改悛によつてそれを神に転嫁する」とはできない。

文学的伝統に従うという」とは、ある意味で作品に秩序を押しつけることである。キリスト教的秩序、カーマジドが言うところのカイロス的時間の押しつけである<sup>一七七</sup>。『ロクサーナ』という作品はそれをやろうとしている。が同時に、それが描くのは世俗の人間の自由な意志である。従つて、作品はその秩序に反抗しようともしているのだ。作品内の各部に連関を持たせて一貫性を作り出し、秩序を打ち立てようとする。そしてその連関を外に開いて秩序と一貫性を突き崩す、「自己参照性」はその二つの相反する機能を同時に持つのだ。

関係性の否定、「非完結性」という言葉で要約されるロクサーナはその自分のイメージを無限に反復していく。「」のような否定的な側面と共に、彼女はその「非完結性」を武器にして積極的に活用し、増殖し、蓄財する。その意味で、彼女は悪魔的無限反復による絶望感と増殖による希望の両者を併せ持っていると言えるだろう（最後には前者が強くなるが）。またその反復によってなぞられた彼女のイメージは徐々に強いものになって行き、前から後ろへと流れゆく一回限りの現在の中に存在する作品の中で、収斂してゆくのだ。

カーマジドは、「中間」といふ人間は、「終結」("ending")を想定する」とによつて、「起源」と響き合う」とができる、「起源」と「中間」と「終結」という一貫したパターンを作り出す想像力を持つていると指摘するが<sup>一七八</sup>、『ロクサーナ』はそのような安心感に対しても昂然と反抗し、あくまでも現在に固着している<sup>一七九</sup>。始めも終りもない非完結の現在を自己言及で塗り込んで、さらにその回りに膨らんでいく。

「自己参照性」は無限反復によつて、関係性の否定というマイナスの性質を繰り延べていく働きを持つと述べた。「自己」が「他者」に変わつてこうとする時代、一人一人異なつた複数の個人から成り立つ社会が成立しようとしている時代背景の中で、『ロクサーナ』の持つ「自己」から「他者」が生まれようとしている。そのよ

うな「自己を言及する」という行為は、言及された自己・Aと関係を持とうとする行為である。関係性の失われた絶望的な地点で何とか関係性を作り出そう、回復しようと/orする絶望的に積極的な身振り、この作品の「自己参照性」はそのようなものであるのだ。

## 第十一章

### ガリバーの肉体

1

『ガリバー旅行記』は肉体についての物語である。この物語は、細い紐と小さな杭で地面に縛りつけられたガリバーの巨大な肉体に、さわざわと虫のようなリリパット人が這い上がつていく場面から始まる。

一般にスカトロジーといふ言葉で要約される、全篇を通して撒き散らされる排泄物、莫大な量の食事を貪り食う巨大な肉の固まりとしての人間、傷つけ傷つけられる体、人間の肉体に対置して描かれる馬の肉体等々、この作品は、様々な肉体的記号に満ち溢れている。もし排泄物を肉体の属性とすることが困難であるなら、上のようなことすべてにベルリバーの企画者たちの言語物質化の試みなどを含めて、それらを肉体性と呼ぶかわりに、物質性("physicality")と言ふ換えてもよいかかもしれない——。

いわゆる古典的、精神—肉体の二元論における精神、というようなものもある。しかし、精神は肉体によつて表象され、肉体、といふ物質の上に、人間の思想、価値観、心理などすべてが刻印されてゐる。この意味

で、この肉体、とは市川浩の言う精神と身体の合一体の概念としての「身」<sup>一ハ</sup>に重なつて、」よう。『ガリバー』において、肉体は人間のすべてであるのだ。

したがつて、この場合の肉体は「客体としての身体」というよりは「現象としての身体」であり、心理的肉体である、と言える。大雑把な物言いをするなら、巨人は巨大な存在であり、力が強く偉いがゆえに巨大なのであつて、小人は反対に、弱小で価値が劣り、卑しいがゆえに体が小さい。馬の肉体に至つては話にもならない。単なる畜生ではないか。馬はこの作品で、肉体とすら呼んでもらえない。

このような、肉体のヒエラルキーのようなものを想定する時、様々な肉体世界を彷徨するガリバーは何を体験するのだろうか。そしてひるがえつて、ガリバーの肉体とは、どのようなものだろうか。これを考へることには、少なくともある方向から作品としての『ガリバー旅行記』の一貫性に光を投げかけると思われる。

ガリバーは、イギリスを出発し、小人国・巨人国・飛ぶ島・馬の国などを次々と訪れる。なるほど、確かにそうなのだろう。だが、すべてが見つめ見つめられる、相対性のあわせ鏡のような、この『ガリバー』の世界において、彼が確固とした存在であり、すべての基準である、ということをそれほど易々と信頼してよいものであろうか。

リリパット人から見た彼は巨人であり、プロブディングナグ人から見た彼は小人であり、フウイヌムから見た彼は醜い家畜ヤフーである。リリパット人はガリバーを山("Man Mountain")と呼び、プロブディングナグでは動物として扱われ、その両者とも自分たちを人間("human")と呼ぶのだ。視点が変わると、すべては逆転する。

いのように、試みに彼らから見たガリバー、彼らの視線に晒されたガリバーというものを考えてみると、た

ちまち彼の肉体は、流動性の中で漂いだし、姿を変貌させていく。

ガリバーの肉体は、他者との関係的存在としての肉体なのであって、次の市川浩の「身」に関する指摘は、よくその性質を言い表している。

つまり身は固定した一つの実体的統一ではなく、他なるもの——他なるもののなかには物もあれば他者もあるわけですが——そういう他なるものとのかかわりにおいてある関係的な統一である。そして關係の多様に応じて多重性をもち、実体のように固定した統一ではなくて、たえず統一がやりなおされる危うい統一が身の統合である。したがつて場合によつては、身は他との關係において多極分解する可能性もある。<sup>(一八二)</sup>

まさに、ガリバーの肉体は、作品が進み、様々な他と交わっていくうちに、統一性を維持できなくなつて分解していくのだ。

変貌するガリバーの肉体。もちろんこれを、表面的テキストは否定している。ガリバーの大きさはリリパット人の十二倍であり、プロブディングナグ人の十二分の一である。ということは、単純計算では、彼は、この両者の中間の大きさだ、ということになる。事実、ガリバーはプロブディングナグにおいて、しきりにリリパットを思いだし、あそこでは自分は巨大な怪物として見られたのに、とかいうことを思つてゐる。<sup>(一)</sup>この回想的な彼の独白を聞くと、ガリバーは自分を中間に位置づけようとしているかに見えるが、同じ場面(麦畑で巨人に捕まりそうになる場面)での次の引用を見てみよう。

Undoubtedly Philosophers are in the Right when they tell us, that nothing is great or little otherwise than by Comparison: It might have pleased Fortune to let the *Lilliputians* find some Nation, where the People were as diminutive with respect to them, as they were to me. And who knows but that even this prodigious Race of Mortals might be equally overmatched in some distant Part of the World, whereof we have yet no Discovery?<sup>1) <ii)</sup>

彼がいのむへな相対化の規範を盡る體のは件中篇で、これは彼の恒常的な認識だとは思へないが、それを読む我々読者はいの視点を獲得する。「何が大きいか小さいかは、比較によつてかなる」と云ふれば、ガリバーはリリペット人の比較におよび大それ、しかプロブ<sup>ト</sup>イングナグ人との比較におよび小それ、アーヴィングが體えなん、と云ふことだ。臣人より大それ臣人、小人より小それ小人の存在の可能性がある時（中間）はだいへん。リリペット人とガリバーの関係は、ガリバーとプロブ<sup>ト</sup>イングナグ人との関係と相似である。しかしガリバーは、決して「中間」に定位しない。あくまでも彼は、リリペット人や臣人であり、プロブ<sup>ト</sup>イングナグでは小人なのだ。彼が（定数）であれば『リリペット人×一=ガリバー=一×一×プロブ<sup>ト</sup>イングナグ人』<sup>2) <ii)</sup>等式は正解であらうが、ガリバーは（変数）である。

ただ、『ガリバー旅行記』には、確かに（中間）<sup>3) <ii)</sup>記号は存在する。ガリバーがそりから出発し、ついで帰つてく、座標の原点たる現実（イギリス）である。（イギリス）<sup>4) <ii)</sup>地理的実体は、変数たるガリバーを

定数化させようとする。これは、ガリバーという変数が、その動きによって「イギリス」という定数を変数化しようとする逆の運動と重なりあって、諷刺という機能が働くことを保証しながら、作品の幅を広いものにしている。

「」で氣をつけなければならないのは、「イギリス」というのは、我々を騙す記号であった、ということだ。作者スワイフトは、この現実「イギリス」を盾に取つて、我々読者に架空の国々を信じさせようとする、いやそのふりをする。我々は、今騙される一件事をやめよう。そして変数ガリバーの行方を追つてみよう。そして諷刺される現実の「イギリス」という枠を取り払つて、諷刺のための道具であるはずの、空想世界の中のみに、ガリバーの姿を搜つてみよう。

一つ確認をしておく。ガリバーの変貌を見つめる目は、我々読者の目である。今言つたように「イギリス」という枠を取り払つて、すべてを相対性の中に解き放つた時、四つの世界、リリパット・ブルブディングナグ・ラピュータ・フウイスムなどを繋ぐ鎖は切れてしまい、互いの連関は失われる。そこに、因果の鎖を感じるのは、見通しのよい場所において、その時にガリバーを見つめる登場人物たちの目をある程度共有したり、ガリバーの心中に分け入つたりしながら、テキストの提供するすべてのものを自分の中に取り込み、ガリバーの肉体の変化を心の中に作り出す読者である。私、という読者は、一方で絶対的基準のない相対性の世界の中に、ガリバーの肉体が漂つていることをへ知つていながら、他方でその心の中で肉体は、はつきりとしたある軌跡を描いて形態を変化させている。その理由は、もう一度言うならガリバーの肉体が心理的肉体であるからだ。

ココペシト国に、ある日天から人が墜落する。それがガリバーであった。リリペシト人は少なからず、ガリバーの歎落は眞実であった。次の引用を見てみよう。

For as to what we have heard you affirm, that there are other Kingdoms and States in the World, inhabited by human Creatures as large as yourself, our Philosophers are in much Doubt; and would rather conjecture that you dropped from the Moon, or the Stars...

(49)

彼の(イギリス)がるふるーの國の存在を信じず、彼が月から落ちて来たものだと思ふ。

なるせぬ、ガリバーとしての描写もなかなか暗示的だ。彼が気がつくと月を開けた時、最初は彼には太陽しか見えない。仰向けに寝かせねばならぬのだ。このガリバーの月は、故郷からの歎落して、セリに撞ねた月である。彼は、リリペシト王に服従を誓う時、太陽に証人にならしむを頼む。彼が最初に運び込まれる場所は、今は使われていない大きな神殿だ。これいわぐれのいわば、聖なる天とガリバーの繋がりを仄めかす。

天から来た巨大なガリバーを迎え入れる素地は、すばりリリペシトのせじ出来上がりだった。この国にねこて、体が大きい、背が高い、ふくらむとは決定的な美德であると考えられてゐる。ココペシト月は、他の者たちより、ガリバーの爪の大さやの分だけ脚が高く。やつてゐるが、月の王たる立派なんだを感じさせる。

"He is taller by almost the Breadth of my Nail, than any of his Court; which alone is enough

to strike an Awe into the Beholders.” (30) また、ガリバーは彼の公私両面で、山を讃へた箇所は、  
凡て大體はそのるべく大それ、神韻溢身体の揮吟である。

GOLBASTO MOMAREN EVLAME GURDILo SHEFIN MULLY ULLY GUE, most  
Mighty Emperor of *Lilliput*, Delight and Terror of the Universe, whose Dominions  
extend five Thousand Blustrugs, (about twelve Miles in Circumference) to the  
Extremities of the Globe: Monarch of all Monarchs: Taller than the Sons of Men: whose  
Feet press down to the Center, and whose Head strikes against the Sun.... (43)

ウマルソハ・トマーレは圓卓の上に箇所を示す事ゝレ、與少なむのセレヤリ、トトマニを握りしめる處かゝる所  
諷刺である。此處にて云ふ所が我々はその前より、ヨリペシム人の持つ上昇拡大志向、大それての憧れなりの  
中に読み取るべしである。

彼らが死体を埋葬する時、頭を下に吐き出さうとする理窟ぬるのを、負の状況に際しての彼らの上昇  
拡大志向の逆転、トトマニ読む。ヤコブ、16世紀の文脈で捉える時、ヨリペシム人が大臣を選ぶ際、綱渡り  
やねじる極めて飛ぐる者が選ばれる理窟ゆ、おのやか明るいからだ。すなわち、ローブの上に身を乗せし太陽  
に近づいた者、やがて臣大臣に対する憧れを身を挺しておこる激しい表現であった者が、大臣としての価値  
を有する者、お見なされたわけである。云々。

以上の感情を抱いていたリリペシム人といふべし、ガリバーは理想の姿であつたはずだ。彼のとは、ガリバー

とは「もつとも偉大な驚異」("Greatest Prodigy")である。そして完璧なる巨大な存在である。それでは、リリパット人が完璧だ、と感じたはずのガリバーの肉体は、実はどのようなものであろうか。

まずはそれは、リリパット人の千七百二十八人分の食糧を平らげる、貪り食う肉体である。次にそれは莫大な量の排泄をする肉体であり、最後に、ガリバーが人間凱旋門になってその下を軍隊が通るエピソードでは、ズボンの合間から見える巨大なるフアロスを持つ肉体である。だがしかし、肉体はいくら確固としたものでも、やはり肉の固まりなのであって、弱い側面も持っている。だから、ガリバーの肉体は一撃で何十人のリリパット人を倒すこともできるような強い巨人のものである反面、弓矢で射られればすぐずきずきと痛み、毒矢ならばすぐに死んでしまうだろうようなモータルな一人間の弱い肉体でもあるのだ。そういう目で見れば、食り食うことや排泄をすることは、過剰感や豊饒感をもたらし、祝祭的気分の源泉でありながらも一匹セ、同時に、肉、物質としての存在の負の記号でもあるのだ。逆の言い方をすれば、正の要素も負の要素も引き受けた肉体こそが、確固たる存在としての肉体であると言えよう。冒頭のガリバーの肉体は、そう呼ばれる資格を持っている。

しかし、このような肉体は、リリパット人が求めていた精神的で聖なる巨大さとは、齟齬をきたすもので、冒頭の喜ばしい祝祭的気分が早晚崩壊することを予感させる。最初、ガリバーとリリパット人の関係には、確かに天から落ちた巨人とそれを崇める小人、という図式が当て嵌まる。ガリバーを中心にリリパットには非日常的な世界が現出する。國のあちこちの田舎からガリバーを一目見ようと皆が上京ってきて、村は空っぽになり家事や農耕は忘れられる。小人たちはガリバーのすさまじい食欲を見て喜び、彼の胸の上で踊る。〈はれ〉の世界である。

アリルが、眞顔のいの部分におけるやうに、リリペッシュ人のガリバーに対する態度はまた、ハドベントなゆのが存在する。ハドベントは、ハドベントの「ガリバーのハイクハム」("Gulliver's Fiction")の著者、スティーヴン・コハーン(Steven Cohan)が、その論文「ガリバーのハイクハム」("Gulliver's Fiction")の中で、リリペッシュ人のガリバーは、「驚異」("prodigy")であるが、「いかにもS」("nuisance")であるとして、虚指摘した事実に因るやうなのだ。つまり、ガリバーは神でもある共に、やいかに極まりない、せかでん肉体でもある、ハドベントの「ガリバー」では、リリペッシュ人は彼を運ぶのに苦労するし、毎日しぶ量の食事を食べねりとは、感嘆の的となるので、回転に、財政的破綻をもたらしかねない。莫大な量の便を排泄する、りんご感嘆われぬが、後ほど実害が出てくるよう、頭痛の種でもある。

リリペッシュ人は、最初からガリバーを、その死臭が悪疫をもたらすだらうような、單なる肉体の囮であつて見ていた。

Sometimes they determined to starve me, or at least to shoot me in the Face and Hands with poisoned Arrows, which would soon dispatch me: But again they considered, that the Stench of so large a Carcass might produce a Plague in the Metropolis, and probably spread through the whole Kingdom. (32)

ガリバーが聖("sacred")なる存在であつたが("profane")なるのを兼ね備へて、ハドベントの「ガリバー」、最初彼が入れられた神殿は、過去に殺人事件が起つたため汚れた、"profane"なるのだったのだ。

...there stood an ancient Temple, esteemed to be the largest in the whole Kingdom; which having been polluted some Years before by an unnatural Murder, was, according to the Zeal of those People, looked upon as Prophane, and therefore had been applied to common Use. (27)

血分たるの理想的形態が実際に吸肉して現れた時、リリパシト人が最初いかに感嘆し喜び、次に困惑し、次第に厄介に思うようになったかは想像に難くない。起りぬべきやなごい事が起りいたわけだから。想像上の神や巨人は祭りが終わればなくなるが、ガリバーの肉体は存続する。祭りの恒常化は祭りの堕落であり、日常を破壊する。

リリパシト人のアンビゲンムな感情の負の面の増大に伴つて、その負性は、ガリバーの肉体を「縮ぬ」していく。これを象徴的に表す最初の身振りは、身の自由を得るために、リリパシトの敵国アントラズロの攻撃条項等、屈辱的な内容を含んだ誓言文を受け入れる時のガリバーが示すものだ。彼はリリパシト国王の足もとに這いつぶせつゝ。これは、小人の前に巨人が小さくないでみせん、という逆転的動作だと思ふ。

その後、アントラズロの多くの戦艦を手で弓の張り下げる、ヒューブ偉業を成すにもかかわらず、小人の奴隸として使われてゐるガリバーは、むはや眞の巨人と云ふに値しないし、彼がフリムナップの妻と密通したといふ噂話が出来た時、ガリバーは小人と密通やあぬぐらふの誓文に縮んでしまつたかのように我々には思える。

決定的に彼の肉体を縮ませる契機となつたのは、例の、王宮の火事をガリバーが小便で消し止めた事件だ。この事件では、彼は、彼の肉体性をもつとも大きく發揮し、それによつて（善）を成したはずであつた。ところが、ある程度彼自身それを予期していたとはいへ、この行為は全く逆に解釈され、負の方向に働くことになつた。ガリバーはリリパット人にとって、憎むべき肉体に変わりはてたのである。

排泄とはバフチーンの言葉を借りれば、「肉体のドラマのアクション」であり、これは「肉体と世界の境界線上」、つまり肉体の「凸出したもの、穴のあるもの」において行なわれる<sup>一九〇</sup>。排泄物とは、肉体性の発露であるとともに、内と外とを繋ぐものなのだ。マリー・ダグラス(Mary Douglas)も次のように言う。

身体の開口部に興味がもたれるのは、共同体への出入口、共同体からの脱出路および共同体への侵入といったことについての関心があるからである。私見によれば、社会的境界に関する懸念がなければ、身体の境界に対する懸念は生じないと予想される。<sup>一九一</sup>

ガリバーの排尿も、この場合社会的行動になつていたと考えられる。この場面の排尿は、彼の肉体性の最後の誇示であったのと共に、彼の社会的地位を喪失させるものであつた。ガリバーにとって、小便是下へ放出するものであつたが、リリパット人にとっては、上から降つてくる暴力であつたのだ。彼らにとっては、宮殿の焼失という物理的損害より、小便を浴びせられる、という精神的苦痛のほうが大きかつたのだ。

ガリバーは、このリリパット人たちの反応を目のあたりにして、これ以降自分の肉体に向けられる他人の視線を気にして<sup>一九二</sup>、自分の肉体への信頼感を喪失していく。つまり彼は、小人と社会的結びつきにおいて、

しだいに彼らの目を獲得して、上から下へ降りてくる暴力を意識するようになつてくるのだ。小ぢやに慣れてきたとも手伝つて小人の視線を獲得した時、彼は下から上を見上げるような見方をするようになり、そして彼が外界を、そして自分の巨大な肉体を小人の目で認知するようになった時、世界が巨大化する。

今述べたことは、実際に起つたことは内面の価値観や心理からくる認知の歪みだ、という、心理的説明にならうかと思うが、(二)で私は、最初に述べた、肉体とは心理的肉体である、という言葉を再度繰り返したい。ガリバーの巨大さは、心理的的巨大さでもある。したがつて、小人にとってもガリバーにとっても読者にとっても、ガリバーの巨大さを感じられなくなつた時、もはやガリバーは巨人ではないのである。

(一)のようにして、心理的にガリバーの肉体は縮小し、プロブデイングナグでの肉体の縮小＝小人化に先行する。リリペット人やガリバー自身にとっても、我々読者の心中でも、すでにプロブデイングナグへの準備は出来上がつている。彼が巨人国へ漂着した時、我々はガリバーが偶然巨人国に着いたと思うよりもむしろ、ガリバーがだんだんと縮み、巨人が自然に見えてきたのではないか、とう印象を持つのだ<sup>(一)</sup>。ガリバー自身も、アロブティングナグ人のあまりの巨大さに、自分は普通の大きさの何分の一かに縮んだのではないか、と感心する。“I really began to imagine my self dwindled many Degrees below my usual Size.”(一〇一)

(二)には、彼の性格の柔軟性("adaptability")<sup>(二)</sup>が體現されている。彼が他人の影響を受けやすい、信じやしない性格で、その国におこつてもかいの考え方にある程度染まつてしまつたことは、すでに指摘されてゐる通りである。カリバーの肉体も、その性格同様柔軟であり、その形態を変化せらる。

ただカリバード(縮む)と並んで、おもかでも(あたかもそのよつと見えた)と、ついでに「わなこ」と注

意しておいやう。」の作品を相対性の中に投げ込んでいる我々は、大きさ小ささを計る尺度を失つてゐるのであるから。重要なのは印象なのである。あまり厳格な論理に重きを置くなら、フレデリック・キーナー(Frederick, M. Keener)が大小関係に正確な観察眼を注ぎながらも陥りしまった罪に、我々も落ちて「ホーリーにならぬやう」(註)。

### 3

とにかくガリバーは国人間に到着する。ガリバーは着いた早々、第一章で一度排便をした後は、全くしなくなる。これは、興味深い事実だ。リリパットではさかんに排泄をした彼が、「」の場面以降作中で、一度も排泄をしなくなるのである。(註)

ガリバーは、「」や、みずからを“human”と呼ぶプログディングナグ人たちに、徹底して動物や昆虫のレベルで扱われる。ガリバーは“Insect”であり“diminutive animal”であり“creature”である。国人たちは、ガリバーにその背丈だけの価値しか認めず、いくら彼が勇気や名誉を誇つてみても無駄で、嘲笑的になるだけだ。彼に価値がない」とと、彼の肉体が矮小であることはイコールなのである。排泄が、リリパットにおいて、ガリバーの肉体性の大きな発露であつたことを考えると、肉体性の大部分を失つたガリバーが、排泄をしなくなるのは、当然のことと言えよう。

不思議なことに、「」の作品では、人間以外の動物は排泄をしない。ガリバーは昆虫レベルに落ちるとそれをやめ、フウイヌムもしない。排泄とは、いやもひと正確に言うなら、排泄を意識する」とは、ものと人間的

な行為だと考えられてゐるやうである。

自分自身は、その肉体性を削ぎ落とされ、昆虫のレベルまで落ちたガリバーは、今度は観察者として、プロブディングナグ人の肉体を眺めるようになる。彼は、小さくとこう肉体の特徴を生かして、人間の肉体をじっくり、そばから拡大して見ることができる。この際、それを眺めるガリバーの目は、プロブディングナグという特定の国の巨人といふ異常なものを見てゐるのではなく、むしろ普遍的な人間の肉体を見てゐるといふことに注意したい。現実に起つてゐることが認知の歪みだとするなら、リリパット人もプロブディングナグ人もガリバーも、同列の人間として考へ得るのだ。

ガリバーに見えてゐるプロブディングナグ人の肉体のクロテスクや、スカトロジカルな側面は、リリパットで、おもにガリバーから発していった肉体性、そのスカトロジカルな側面、クロテスクなど連続してゐる。したがつて、当然彼らの肉体の特質は第一部の中に見られたものの延長線上にある。

それは、食り食う肉体で、そのすさまじい量に、ガリバーは胸が悪くなる。また女性でもガリバーの前で平気で排尿をする。そしてやはり、死すぐきセータルな肉体で、処刑で首を切られた巨人の死体からは、噴水のような血が吹き出る。

第一部より強調されるのは、その性的な側面と醜悪感である。宦廷の女官たちは、平気でガリバーの前で裸になつたり、次の引用のように、口に由來のも譲らねるよつた数々の性的なやうをしたりするのだ。

The handsomest among these Maids of Honour, a pleasant frolicksome Girl of sixteen, would sometimes set me astride upon one of her Nipples; with many other Tricks,

wherein the Reader will excuse me for not being over particular. But, I was so much displeased, that I entreated *Ghundalclitch* to contrive some excuse for not seeing that young Lady any more. (119)

肉体の醜悪やむ徹底して描写される。代表的なのは、ガリバーが潜り込むほどの大的な癌腫を乳房に持った女性の物語の描写である。

ガリバーは、トロトロヒヤングナグ人たちの高潔なる道徳に感心する、ところよりは、その肉体の醜悪さを嫌悪するものとなる。リリピットを出した時点では、彼は自分の肉体への不信感を持ち、そのため矮小化しておいただけであったが、トロトロヒヤングナグを離れる時は、やはり積極的に、人間一般の肉体性に反発するようになってしまった。

ガリバーが、たまたま道に落ちていた巨大な牛の糞を飛び越そうとして失敗し、糞まみれにならぶハムハームは、ホントに小やかなものだが、非常に悲唆的だ。

結局、人間は糞尿から逃れない、いは出来ないのだ。しかもかかねるが、ガリバーはそれに嫌悪感のみを抱くものとなり、自己の肉体性(=“physicality”)からの離脱する方向にある。糞を飛び越そうとするのは、それを超越しようとする試みであり、糞に落ち込むのは、その失敗であるかのようにHムハームは読める。

しかし、この詩歌でガリバーなりの不遜な試みの渦中にあり、留まりようがない。したがつてのHムハームは、ガリバーの最終的凋落の予型となつてゐるわけだ。換言するなら、牛の糞は肉体の側からの、ガリバーへの警告や非難などの意味合いを込めた、一つの攻撃であったかもしれない。これは第四部のヤフーによる糞尿攻

鏡に驚いたんだ。

人の巨人國におこり、ガリバーは持ちあえの柔軟性で巨人に同化して、彼の視線を共有するも、彼になってしまった。彼が「數ヶ月間、人々を見たり彼の言話をしたりするのに慣れ」にいた時、鏡の前で女王とその手の上の自分の姿を較べた時は、その比較のおもしろい滑稽さに、自分で自身に対して笑いを禁じ得なこせなかったのやある」と。

Neither indeed could I forbear smiling at my self, when the Queen used to place me upon her Hand towards a Looking-Glass, by which both our Persons appeared before me in full View together; and there could nothing be more ridiculous than the Comparison:

(107)

自分を三人称化してそれを笑えるガリバーは、かねてヨーロッパへで小人の国で自分を見ぬよにならなかったが、巨人の皿や皿を見るよにならなかった。最後に、彼の視線獲得は完全になり、アロブット・イン・ケナグを丑た直後、船の上の自分と同じサイズの人間たちを小人としてしか見られなくなつた。“I was equally confounded at the Sight of so many Pigmies; for such I took them [the Sailors] to be, after having so long accustomed mine Eyes to the monstrous Objects I had left.”(→107)

やういのむねに、小人が巨人の視線で見るよにならなかった時、どうもつまらなか起り始めたのか。それが巨人大に見えた巨人の世界の事物を、ガリバーは自分の大きさの縮小のためのふたつ眼のものとなつた

だ。」の時、世界の縮小化が起る。

リリパツトにおけると同様に、ガリバーが他者（「*いのち*では巨人）の視線を獲得した時、彼の肉体は、今度は膨張し、『不思議の国のアリス』のように大きくなったり小さくなったりする反復運動が起り、そうな気がするが、実際はそうはない。なぜか。

リリパツトの最後においては、ガリバーの内面の下落、すなわち肉体性の喪失が、彼の視線の転換と一緒にして、ガリバーは縮小した。といふが、「*いのち*では、彼の視線は巨人のものになつたにもかかわらず、彼の内面は、人間の肉体性（＝“physicality”）を拒否しているのだ。」のようだ、視線と内面の不一致が生み出されるのが、目だけが高い位置にあって、肉体が伴つていない、という状況である。「*いのち*の状況の形象化が、第三部の〈飛ぶ島〉なのだ。

#### 4

作品の冒頭では、天から落ちてきた巨人であったガリバーは、もはや今では天にも帰れず、血匂の巨大な体から下界を見降ろす（「*いのち*でもやさず、「太陽と地上の間の不透明な物質」（“a vast opaque body between me and the Sun”））引ひ張り上げられて他人の力で飛ぶことができるのみである。」（「*飛ぶ島*」の）が、body が「*せせらべ*」（「*いのち*」に着目したい。〈飛ぶ島〉とは飛ぶ肉体なのである）いかにも不安定な量感のない肉体を暗示する。

プロブディングナグを出した時のガリバーの精神状態では、〈飛ぶ島〉は彼の安住の地になりそうに思える。（「

トロータ人たちは、肉体や物質的なものは軽蔑し、抽象思考に沈むあまり、現実の生活は顧みられず、家は傾き服は体に合わない。彼らの肉体は、フッラッパー("flapper")と云がれて刺激を与えるまで機能しないし、彼らの肉体性放棄は、その外見の歪みによって表現される。人の頭も右か左に傾いて、一方の眼は内側に向かう。もう一方は直ぐ天に向かっていた。“Their Heads were all reclined either to the Right, or the Left; one of their Eyes turned inward, and the other directly up to the Zenith.”(165)

肉体に愛想をへがしたカリバーが物質的下界を捨てて、〈飛ぶ鳥〉は體育やおなじのはなしやが。カリバーは、トロータを去る理由として、自分がトロータ人にあおりに無視されやがてこの(それも軽蔑を持つ)ふるいのような島に閉じこもられたのが嫌になつた、ふるい一巻を挙げてや。

これは、まだ彼の肉体に一抹の望みが残つてゐる証拠であらう。肉体嫌惡が極端ほど進むと、他人との交際はやめなくなり、ただひたすら自分の肉体を頭から廻らやがて内に沈み、人間嫌う("misanthrope")にならしかねない。前に述べたように、肉体とは社会性認識のものだから、肉体喪失は社会放棄に繋り、人間嫌いを生む。カリバーはやまではつていいわけだ。彼は閉鎖空間のトロータを嫌い、その下の属国ベルリベールの「固い地面に着いた時、何がしかの満足を味わつた。」(174)の、いかがわしいが、彼が確固とした地面が象徴する物質性をまだ捨てられていない、ふるいことがわかる。

ベルリベールの人々は、やはり実生活を軽んじ、哲学と実験二昧の日々を送つてゐるが、リリードの企画者たる("projectors")の企画は、上のトロータと違つて実用的なもくねみであるのが特徴だ。従来から、の企画者たちの実験は、の作品全体で無駄な部分であるとか単なる英國王立協会の諷刺であつたわれ、

他の部分との有機的な連関なし全くなじむやれいやだ。しかし私にはそうは思えぬ。

彼の「企画者たち」("projectors")の「企画」("projects")が多くば、彼のが失つてしまひた肉体性に対する追慕、むしろはいだわりのような感情の表現ではなかろうか。もう少し積極的に取るなら、それを取り戻そうとする、狂気じみた滑稽な試みなのだ。彼らは、寝食を忘れて、その決して実現しない実験に取り組む。数学の公式をウーバスに書いて、それを食べて消化するなど覚えよう、といふのは数学の肉体化の試み、画葉を廃止して、その表す物そのものを見せるなどや余話をしようとするのは、言語の物質化の試み、といった具合である。

わのも顕著な実験は、スカトロジカルなものである。排泄物から再び食物を作り出そうという実験や、肛門から空気を吹き込んで腹痛を直そうとこう逆転的実験、それに政治家の叛乱を見抜くためには、その便を調べればよい、という考え方などである。排泄物などうのは内部と外部を結ぶものであるところとは以前指摘しておいた。彼らベルニールは外部("outside")に由て来た糞便を手がかりにして、失われた内面、肉体性("physicality")やむじ觸へなむ、正負両面を含んだ包括的人間性を回復せようと必死になつてゐるのだ。

さて、この企画を描写する時のガリバーは、第三部全体の彼についてローベンが書つように、観察者に徹しており、一九一、無感動だ一〇〇。彼が好奇心に駆られて、物見遊山を続けた後で発するロメントは、「私は、これ以上の國で長居をして、見るべきものもな」と思ひたのや、イギリスに帰るのを考へ始めた。」(192)、それのみである。企画者たちの「命がけの試みの数々」("desperate attempts")にせば、彼は身上のやれぬ心のあつたはずであらう。少しだけでも肉体性に未練を現せた、ラピタータを去る時のガリバーは、ヨリに行つ

てしまったのだろうか。

第三部に限つては、ガリバーがその國の人間の視線を獲得して、その姿を変化させる“*コミシット*”とは起らぬ。それは、この部分においてのみ、彼が観察者に徹し、いっさい彼の観察するものに*コミシット*しないからである。相手の視線を自分のものにする、というのはそれほどの強い思い入れ、*コミシットメント*があつてこそできることなのだ。

また、もう一つその理由として考えられるることは、第三部では、ガリバーの見ている相手がガリバーと同じ大きさの人間だということである。視線の問題と関わりなく、飛ぶ島から下に降りてあちこち動き回るだけの第三部のガリバーが可能であるわけは、相手が異形の者ではないという点に求められよう<sup>110-1</sup>。とにかく、等身大の人間を対象とした<sup>110-2</sup>の第三部では、視線のコンテクストは「休みする」<sup>110-3</sup>の第二部は四楽章交響曲のスケルツオに相等する、というクインタナ(Quintana)の言葉が思い出される<sup>110-4</sup>。

グラブダブドリブで歴史上有名な死人を呼び出すエピソードと、不死の人間ストラルドブログについてのエピソードはガリバーにとってある意味あいを持つ。前者によって彼は、最近百年間にいかに人間が堕落したか、という退行史観を学ぶ<sup>二〇三</sup>。

As every Person called up made exactly the same Appearance he had done in the World, it gave me melancholy Reflections to observe how much the Race of human Kind was degenerate among us, within these Hundred Years past. (201)

不死人間ストラルツトラグを見ゆるゝや、彼の進歩觀と、生きれば生きぬせし知恵や財産も權力も身に  
つかふねる、という樂觀主義は打ち碎かれる。人間は、生もれば生きぬばむ逆に懲慘やを身に纏ひ、肉体は  
醜くないといふへばかりなのだ。

リリーリのHムハーム見ゆるゝ、當時の直線的進歩を信じる歴史觀を逆轉したよつた退行的な思想は、  
ガリバーの肉体の退行、衰退の物語にそのまま重なつてゐる。その物語がフウイヌマ国で完成する直前より、リ  
のHムハームは挿入され、その先行きをタイポロジカルに先取りしてゐるのだ。

## 四

第四部のフウイヌマ國旅行には、例の恐るべき肉体的動物ヤフーが登場する。彼はほんれ以上ないほど醜  
悪や、ぬいじゆ體いもののがボスになる、ムシのよひに、醜いほひ偉いといつて醜やのストラルキーを持つ。あたすや  
ホンマ食欲を掉ら、腹一杯でもまだ食べ続け、肚ふたはあた食べぐ。好色や性欲を煽ふがほんがどしゃや、あた  
“Strange disposition to Nastiness and Dirt”(263)を掉つてぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬ  
悪臭を吐く。

ヤフーのぬいじゆ特徴的行動は、糞尿攻撃である。彼はガリバーに、木の上から糞尿を浴びせかけぬ。

Several of this cursed Brood getting hold of the Branches behind, leaped up into the Tree, from whence they began to discharge their Excrements on my Head: However, I

escaped pretty well, by sticking close to the Stem of the Tree, but was almost stifled with the Filth, which fell about me on every Side. (224)

尧の機嫌取りの太鼓壺の座を睨ねねだ、ヤフー女トシム、端やみせつ糞尿攻撃をしかた。

He [the Favourite] usually continues in Office till a worse can be found; but the very Moment he is discarded, his Successor, at the Head of all the *Yahoos* in that District, Young and Old, Male and Female, come in a Body, and discharge their Excrements upon him from Head to Foot. (262-263)

彼のせ、<sup>ハヤシル</sup>「糞尿の存在」(excremental Being)<sup>ハヤシル</sup>。

ハヤシル、ヤフーの肉体由特權を整頓してみぬる、極端にめで悪し進むるにてせんゆるに、それがは第1船のガリバーの肉体も、クロイツヤングナゲ人のやれ山ホーベートラッカトニテ。ニニペラムのH回に小便をかけるガリバーも、ガリバーに糞尿をかけゆヤフーのマーシはタヘドン。ロドリカのたま、ヤフーは純粹な<sup>ハヤシル</sup>の肉体かのやめた動物で、ヤフー=肉体であるのだ。

ガリバーは、始めてヤフーに会った時、なぜ糞尿攻撃を受けねばならぬのか。ヤフーは、後に入間でもあるリヒが判明するが、彼のせ、別の所でガリバーが、「ねたつが彼のと同じ種のものやあるむ、彼のがふくらみの懸像トシム、ぬるい體の理由があつ」、彼はおつて仲間意識を持つものではなぬ。

彼のは、の次に而座する初対面の場はねじてやに彼に效して、わのよつた感情を持いたのではなかつた。

The ugly Monster, when he saw me, distorted several Ways every Feature of his Visage, and stared as at an Object he had never seen before; then approaching nearer, lifted up his fore Paw, whether out of Curiosity or Mischief, I could not tell: But I drew my Hanger, and gave him a good Blow with the flat Side of it. (224)

ガリバーは、ヤフーがそせり寄ひて來て其手を擧ひるふうに行爲の意味を察へりもつかず、攻撃を仕掛けるのだが、ヤフーにつけみれば、それは仲間との接觸の仕草であつた。それを坦然やがて、わざと皿に倒した時、ヤフーは糞尿攻撃を始めるねじやね。

肉体を捨てかけたガリバーが、肉体の化身たるヤフーは、一皿見ただけで反感を抱くことには、極めてあり得る話だ。実際、彼はヤフーに対してもねのなじ嫌悪を感じ続ける。したがつて、ヤフーの攻撃は、第一船の牛の糞と同じよひ、そのよつたガリバーの性向に対する肉体の側からの報復のよつたものだと考えられる。

第四部で、ガリバーが肉体性を喪失してゐる証拠の一端として、戦ふに道具を使ひ、衣服を使ひ、衣服を着てゐるガリバーとが挙がる。衣服を着るには肉体を隠蔽するものであり、肉体性の逃避である。

知性ある馬などに描かれていたウイッグだが、最初衣服が何であるか判らない。ガリバーがそれを脱いでみせられた理解であった彼は、今度は、なぜ自然が与えてくれたもの隠す必要があるのか理解に苦しむ。彼らの辿り着いた結論は、いた。ガリバーは服を脱げば、あのぬかむかするヤフーになる。また、ヤフーは他の動物を嫌うところから、お風ふを憎みあつ。その原因は彼の敵の不快なものためであり、その不快な肉体をガリバーが衣服で隠すのは賢明だ、ふくらハウイッグの隠匿だいた。

He said, the *Yahoos* were known to hate one another more than they did any different Species of Animals; and the Reason usually assigned, was, the Odiousness of their own Shapes, which all could see in the rest, but not in themselves. He had therefore begun to think it not unwise in us to cover our Bodies, and by that Invention, conceal many of our Deformities from each other, which would else be hardly supportable. (260)

つまり、ガリバーは體の肉体である。しかもかねむか、やれかの皿なんのやへんコレだら、やれが、（衣服を着る）ふくらハウイッグ動作は現れない。先せん描寫したまゝ、衣服は肉体性を隠蔽する装置だ、と云つねけだ。

ハウイッグが最初ガリバーを非難するのは、その肉体の不完全や、たゞれば両手の弱さ、直立歩行の不便やなんどつてや、その点ではヤフーにも劣るといふ。この非難の延長上にあるのが次の、戦争に対するもので、彼らは人間が互いを憎みおいて、攻撃的でない脆弱な肉体のため傷つけあえなのは幸いだと嘲つ。それに対してもガリバーは、人間の持つ武器と兵法の名を数え挙げ、これらの道具は互いを殺しあふ、人間の（肉

体)を燃(の)せる事(こと)が(が)體(からだ)に(に)附(つ)け(て)體(からだ)を(を)燃(の)す。

And, to set forth the Valour of my own dear Countrymen, I assured him, that I had seen them blow up a Hundred Enemies at once in a Siege, and as many in a Ship; and beheld the dead Bodies drop down in Pieces from the Clouds, to the great Diversion of all the Spectators. (247)

人間は脆弱な肉体であるのに加えて、武器を使用するにあれば、やるたただでやれ弱い肉体を吹き飛ばしあう。」の如きが語るに依れば、人間は肉体性からの離れて、道具・武器といったような不自然なものを使いたしたがゆえに肉体を軽視し、破滅せし、それがために墮落したのだといふのである。

これより一層、衣服と道具に関する批判は、ガリバーの肉体喪失に留まらず、人間全体に対するものであり、文明批判にむけたじふるに注意したい。肉体を喪失してしまふのは、かくかガリバーだけではないがわしがなうのだ。

このあたり、ガリバーは四章と五章で人間の特徴と風習を列挙して、説明するが、ハウイツム＝ハイスクールの批判を受ける。そのことは、彼のヤフーに対する嫌悪感と相俟つて、彼の人間嫌いを強めていく。そうしてやれと反対に、ハイスクール崇拜の念が高まっていく。そのあまり、醜惡な人間界にはもう帰りたくない、とする想うのだ。彼はハイスクール＝馬の視線を獲得して、そのまま人間を見るようになる。

最後には彼は完全に馬の如きに染まってしまったが、やのよつた彼の内面は肉体の形

は眠れる。彼は、人間やおぬしの顔を缺いてゐるから、顔の振り、形態、歩き方などヤツの顔や模倣をつかない。

When I happened to behold the Reflection of my own Form in a Lake or Fountain, I turned away my Face in Horror and detestation of my self; and could better endure the Sight of a common *Yahoo*, than of my own Person. By conversing with the *Houyhnhnms*, and looking upon them with Delight, I fell to imitate their Gait and Gesture, which is now grown into a Habit; and my Friends often tell me in a blunt Way that I trot *like a Horse* which however, I take for a great Compliment: Neither shall I disown, that in speaking I am apt to fall into the Voice and manner of the *Houyhnhnms*, and hear myself ridiculed on that Account without the least Mortification. (278-279)

「おが完璧になつた時、ガリバーは人間やおぬしの顔に黙ら。

ガリバーが黙らせる、おぬしの顔や振舞いなどあらへだ。が、本章第三回振り返るが、動物の肉体などはもとより、おいたへ懸念せねてはな。もとおは黒であつて、ヤツは肉体はだ。彼のは食慾も性慾もなく(性欲はこのに必要な量以上ならぬといふが)、羞恥心も、モータードおぬしの事柄についての意識すらだけだ。彼ののの特質は、彼のは肉體として規定する。したがへて、ガリバーが黙らせる、ガリバーが、肉体を完全に放棄して肉體的存在はないだへりといふのもだ。

当然、ガリバーはフュイヌム国を強制退去させられる時、祖国を追われるようなショックを受けて失神する。彼は、人間界に戻つても人間としては暮すことができず、厩という閉鎖空間の中に馬たちと共に閉じ籠つて余生を送る。彼は四つ足になつて、馬たちといななきの会話を交すのだ。

ガリバーが、排泄物("excrement")、つまり肉体性からもとも離れた精神状態である時、人間が最初 "excrement"から離れたきつかけである直立姿勢<sup>(二〇七)</sup>は完璧であるはずだ。ところが彼は馬の真似をして四つ足歩行をし、鼻を地面にこすりつけている。これは痛烈な皮肉であり、逆転であると言えよう。

巨人や小人や飛ぶ人間など、訪れる国の影響で様々な形態に変貌しながら、確実に人間の肉体を喪失していくガリバーの窮屈的な姿は、馬であった。作品の冒頭で、突然何の理由もなしに巨人として登場したガリバーは、最後は馬になつたまま、人間に戻れる見通しもなく行き止まってしまう。

## 6

結局、この作品は、ガリバーの肉体の喪失と墮落の物語と言えよう。換言すれば、肉体における反成長物語(アンチビルド・ダウン・ストーリー)、つまり肉体という建物を建てるのではなく、崩す物語である<sup>(二〇七)</sup>。

ただ、こう規定するなら、この結末は極めて悲劇的で、我々に絶望のみを投げ掛けていくことになりそうだが、はたしてそうだろうか。

第四部でガリバーは、しばしば自分は單なる惨めなヤフーにすぎないと自嘲的に呟くのだが、この認識はひたすらマイナスの方向に働き、彼は自己のヤフー性から目をそらし、フュイヌムの真似をする<sup>(二〇七)</sup>。そこか

ら逃避しようとするばかりである。これは、実はガリバーには自己のヤフー性の真実が見えていない、といつゝことを物語つてゐるようだと思ふ。

確かに人間の肉体は醜い。糞尿も垂らすし、すさまじい食欲や性慾も持つ。それに柄ちるべきモータルなものもある。しかしそれと同時に、物質としての肉体は“essential”なもの、本質であつて、人間存在の根幹でもあるのだ。N.O.ブラウン(N.O.Brown)の『Hロスとタナトス』によると、スワイ夫婦は、「不潔と汚物への奇妙な性癖は、人間に限定された特權である」という考え方を持つてゐた。だとすると『ガリバー旅行記』の中でも、他の動物が排泄をしない理由も明らかであつた。

この醜い肉体から逃れようと/orする人間の試みは、畢竟人間でなくなる試み、ガリバーのように馬になる試みにしかならないのだ。人間として生きようと題うなんら、この肉体の醜さと“physicality”を直視せねばならない。

一つの注釈を付け加えよう。では肉体の醜さと“physicality”を表現したヤフーは理想像なのか、という問題についてだが、私はそうは考へない。ヤフーは醜さを受け入れてゐるのではなくて、醜さを生きているのだ。彼らは醜さ以上でもなく以下でもなく、飛躍するのことを知らない。硬直した醜さなのだ。したがつて、ヤフーは次に私が述べようとする逆転とも無縁である。彼らは警告し教化するための、一面的、観念的(肉体の觀念とはブランドキンカルだが)存在なのであって、決して理想化してはいけない。

さて、人はまず、この根幹的な肉体を受容すべきである。むしろをしないならば、人間の、暖かく高潔で崇高な面をも同時に受け入れられなくなる。ガリバーが、最後に助けられた船の船長で、極めて友好的で暖かい感情を持つてシノ・ペドロに対しても“OK”、また自分の妻子に対しても嫌悪感しか持てないのは、彼が肉

体を拒否したからだ。彼は人間の負の面を拒絶した時、同時に正の面をも拒絶したい」となる。人間の正負両面を含んだ全体、つまり人間のすべてが肉体だからだ。

プラウンによれば、スワイフトは「恋の状態と愛する人の排泄の機能に気づくことの間に何か絶対的な矛盾があるという観念」を持つていた。つまり、「肛門機能に適切にも要約されている我々の動物的肉体と、見せかけの昇華、より正確に言えば、昇華されている」とき仮面またはロマンティックなプラトニック・ラブとの間の不一致を感じていた<sup>310</sup>。しかし、たとえそうだとしても、スワイフトにとっては人間の正負両者ともが眞実であったと私には思える。

肉体を捨てたガリバーは、人間の一の二つの面の深い狭間に落ち込んだのだ。だから彼は暖かい感情を持つ人間を受け入れられない。感情的などとも肉体の上で起こり、そこに刻み込まれる。矛盾した一面は、矛盾してはいても、どちらも肉体の上で起こる現象なのだ。ガリバーの肉体は心理的肉体でもあった。

『ガリバー』の中には、グラムダルクリツチや栗毛馬やドン・ペドロ、といったガリバーに対し優しく親切で、別れの時涙を流してくれるような一連の存在が出てきて、異なった感情的な文脈を作っている。このことは、スワイフトが単に絶望的な不条理な結末のみを、我々に投げ掛けたのではないことを教えてくれる。人間に崇高さは可能なはずなのだ。

人間は、あるいは我々の言葉で言うなら肉体は、なるほど分裂している。しかしへスワイフトは、なんとかアクロバット的逆転によって<sup>311</sup>、その間隙を一举に飛び越えることができるのではないかという期待を持っていたのだ。ひょっとすると駄目かもしれない、という思いもちらりと頭を掠めたかもしれない。

逆転上昇するためには、そこから飛び上がる地盤が必要である。つまり醜悪な面の肉体だ。この地盤を確

保すべく、我々はおや、全本(totality)の肉体を受容しようではないか。

## 第四部 フイクションの詐術

### 第十一章

#### 詐術としてのレトリック——『カーネル・ジャック』

1

デフォーの『カーネル・ジャック』(1722)の中に、なぜか気になる光景がある。これまで批評家たちがあまり気にしていなかつたエピソードで、主人公ジャックが社会でのし上がつていく一段階にすこないはずの一断片である。

それは、イギリスから詐欺によって拉致され、ベージニアに年俸奉公人("indentured servant")として連

れてこられたジャックが、そこの主人の目にとまり、奴隸に等しい当時の新大陸の年季奉公人にしては大抜擢であるが、早くして監督官(“overseer”)に出世し、黒人奴隸たちを支配していくとするヒンコードである。これは当時のバージニアでは、平均的な一連の光景なのであろうが、何かしらきな臭い、また少し不愉快な気持ちを抱かせる、またそれにしては、この『カーネル・ジャック』という作品の中ではうまく位置づけされた、作品構成の中にはきちんとまつてある一断片である。だからこそ、一層私の心に、ある種の軋み音を発するのである。

もちろん、この光景について不自然さがつぎまとうのは、人間の歴史の中で最も忌まわしいものの一つである奴隸制ということにこの部分が関わっているためであることは間違いない。しかし、この大きな制度そのものの下には十八世紀イギリスの植民地制度の問題が存在し、さらに特定化して、この時代のジャーナリストとしてはおそらく最も影響力を持った一人であったデフォーと植民地主義との関わりにまで焦点を絞り込む必要がある。

もちろん、現実の十八世紀バージニアにおける植民地制度の実体と、それをデフォーはどう表現し、どう宣伝したかということは別の問題であるが、この現実と、一作家の文化接触を探ることで、西洋における強者と弱者の関わりに働いていたある種の支配力学が導きだされると私は考える。弱者の支配という目的を持つた強者が意識的にそのディスコースに働きかけていた力学であり、レトリックである。本章はその支配のレトリックをあぶりだすことを目的とする。

さらに、なぜこのエピソードが無視されてきたかという批評上の理由を考えるとき、我々は、G・A・スターに代表される、デフォーを弱者の擁護者として位置づけた、最近までの何十年来の大きな批評史を考えず

にはおれない——。」の立場をあまりに前面に出すならば、逆に、支配する立場に立つデフォー像というものがいいが、しろにされるのは容易に想像がつくことで、今我々は植民地時代における支配する側の立場に立つデフォー像をもう一度再構築する時に来ているのではなかろうか。本章は、こういったデフォー像の再構築も同時に試みる。

植民地政策を論じる文献の中のひとつ重要なテーマでルネッサンス期から論じられてきたものとして、奴隸支配を暴力で行うべきか寛容さで行うべきかという議論がある。例えば、P・ハーヴィによれば、1625年にペーカスは、イギリスの植民地政策では、武器を用いて奴隸に畏怖の念を起し、せながらも、慈悲の気持ちを持ち、あくまでスペインの残虐さに対してもイギリスの寛容さの外見を取り繕う必要性を説き、黒人奴隸支配のキーワードを穏健な厳格さ("gentle severity")であるとしている<sup>111</sup>。それからおよそ百年後、イギリスの拡張主義が端緒を開き、黒人奴隸の数が爆発的に増加しつつある十八世紀前半、この同じ問題はますます切実なものであったはずである。

なるほど、『カーネル・ジャック』のヒンズードを見る限り、この切実な問題に対処することが急務であったことが伺えるし、ペーカスの百年後になつてもいぜんおおやけに有効な解決策は確立していかつたらしく、これがよく理解できる。この時代にマクシミリアン・E・ノヴァークの言うように植民地主義の宣伝家("colonial propagandist")であつたデフォーが<sup>112</sup>、この問題にどう対処したのか、このヒンズード眺めながら考えてみたいといふにやる。

イギリスの植民地であったバージニアに誘拐されて連れていかれ、自らも白人奴隸の身分に転落したカーネル・ジャックは、しばらく経つて、新たにイギリスから流刑になつてやつてきた新入りの少年泥棒にプランテーションの主人が説教をする場面に出くわす。その少年の来歴が、スリであつた自分の過去にあまりに似ており、かつ主人の説教があまりに感動的であつたために彼は涙を流す。それを見咎めた主人は好奇心を感じ、彼にその理由を尋ねることになる。自分が不当に扱われた経緯を彼は主人に訴え、実は自分はかなりのお金のあるイギリスの紳士に預けており、単なる「ろつきではないことを告げて（この蓄財は彼のスリと策略の腕によるものだが）、主人の同情を買う幸運に恵まれる。その結果プランテーション監督者に取り立てられて、どん底から這い上がる」ことになった。

監督者という、直接奴隸を使う身分に昇進したとき、彼は先に述べた奴隸支配の問題に否応なしに対峙させられる「ことになるわけだ。鞭で無理やり言うことを聞かせるには、彼の気弱な心がそれに耐えられないし、優しく扱えば奴隸たちはつけあがり、彼の軟弱さを嘲笑する。

そのような窮地において彼が編み出した秘策（“happy secret”）は次のようなものであった。すなわち、過失を犯した奴隸に一度極刑を申し渡し、執行間際に許しを与える。この極刑への恐怖を感じる何日間を過ごした後の許しという落差のショックによって、奴隸たちに大きな感謝の念を起させ、奴隸がその後は自らの意志で主人に従うように仕向けるという方策である。

ジャック わたしはあるの巧妙なる秘策を考え出したのです。これを駆使する」とによつて秩序が保たれ、農園の仕事が、勤勉にしかも迅速になされ、黒人たちは畏怖の念にとらえられ、彼らの生來の性格が抑えられ、家族の安全と平安が確保されるのです。それも、乱暴なやり方でなく穏健な方法で、そして拷問や残忍なやり方でなく穏やかな矯正によつて、また正しい懲戒によつても、耐える」とのできない苦痛への恐怖と同じぐらのことが可能になるのです。

ジャック 結構です、ご主人様、まずあの黒人ですが、奴は今まで黒人たちが経験したことのないほどの厳しい罰を恐れて震え上がつております。ご主人様の許しを得て、こいつをまったく鞭打つこともなく明日解放してやるつもりでした。もちろんその前にわたしなりのやり方で、奴の罪を説いて聞かせ、奴の心に許しの価値を十分に染み込ませるのです。もしこの方法で、鞭で言うことをきかせる以上に、よりよき奴隸を作り出すことができれば、ご主人様もわたしの言うことに一理あるとお考え下さるのではないでしようか。

主人 なるほど、しかしそんなにうまく事が進まなかつたとすればどうだ。あの連中は全く感謝の気持ちを持ち合わせてないのだから。

ジャック それはつまり、あの連中が過ちを犯したとき、これまで一度たりとも許してもらつたことがないから、いつたい慈悲とは何なのかわからないのです。であれば何に対し感謝して良いのか分からぬのも道理でありますよう。

主人 なるほど、おまえの言うことはもつともだ。慈悲が示されたことの無いとき、彼らに何の義務も生じないはずだ。

ジャック　その上に、仮にたまたま奴等が罰から放免されたとき（……でもそんなことはめったにならない）ですが、「いつら」の事情でそうなつたか知らざるといふのがないのです。奴等の心に感謝の原理（“Principles of Gratitude”）を植え付ける努力が払われていないのです。みんなに親切な行為がなされたか、そしやねば、それに恩義を感じるべきか、またその結果どれ程彼らに利益があるか、ちゃんと話すべきなのです。

最初にこの方法が試みられ成功を見た黒人がムシャツ（Mouchat）であり、やるにその感謝の念が心かのものであるかどうかを試すために、ジャックは、自分が主人の不興を買ひて絞首刑になるという噂をわざわざ聞いて反応を見るという策略を思いつく。案の定、それを聞きつけたムシャツは、自分の命と引き換えにジャックを助けて欲しいと跪いて嘆願し、ジャックを大変満足させ、結局生き物の性質（“nature”）は黒人であろうが他の召使」と同じであつて、あまねく生物には理性とくらうものが支配しているのだ、ハラメントやせぬ」とになる。

彼らが行動するときのより深いところとなる感情ややる気は、恐怖以外に何もなかつたのです。そうであれば憎しみの気持ちしか生まれないのも仕方ありません。でも彼らが同情の念で扱われれば、彼らは他の召使いと同様に愛情を持つて仕えるようになるでしょう。性質は同じなのですし、他のすべての生物と同じくらい彼らを理性が支配しているのです。でも慈悲がいつたい何なのか味わつた事がないために愛情原則に基づいて行動するすべを知らなゐのです。　（Colonel Jack, 143）

「この方策を着実に実践していくことで黒人奴隸の支配に成功したジャックは、主人に認められ、自らのプランテーションすら持てるようになり、植民者として大きな成功を見る。

このエピソードは、奴隸が感謝の念から、自らの意志で主人に心からの忠誠を誓うという点では、『ロビンソン・クルーソー』の有名なフライデー・エピソードと構造を一している。クルーソーが自分の奴隸を手に入れどう支配するにいたつたか、簡単に振り返ってみよう。次の引用は『ロビンソン・クルーソー』からのものである。

わたしは、泳いでいる二人が入り江を泳ぎ渡るのに、彼らから逃げていい男より二倍以上時間がかかるつていふのに気がついた。そのときあらがいがたい強い感情がわたしにわき上がった。今こそが、わたしに、とつての召使い、ひよつとして仲間か手助けを手に入れるべきときだ。明らかに神のお導きによつて、この哀れなもの命を助ける使命がわたしに課せられたのだ。

.....

わたしは彼にこちらに戻つてくるように手招きした。そしてとかくする内に、ゆっくりとわたしは追いかける二人の方に近寄つていき、最初の奴の上に飛びかかり、銃身の銃床で殴り倒した。……この男を殴り倒したとき、彼と共に追いかけていたもう一人の男は怯えたかのように立ち止まつた。そしてわたしが速やかに近づいていくと、直ぐに彼が手に弓矢を持つておりわたしを射ようと構えているのに気がついた。そこでやむなくわたしは先に彼を鉄砲で撃たざるを得なくなつたのだ。わたしは銃を撃ち、即座に一発でそいつを殺した、二二六。

「」で見られるように、クルーソーは銃を使ひて自らの力でフライデーを敵対者の手から救い出す。フライデーは感謝し、跪き、自らの意志による（“voluntary will”）クルーソーを主人として崇め、忠誠を誓う。クルーソーの「」の行為の動機は、引用から明らかのように、召使い、または友人が欲しいという必要性、欲望であった。

「」の姿にショーンホーンは、古代の戦う王（“warrior king”）の反映を見、自ら武器を持ち臣民のために闘うことや忠誠を勝ち得るサウルのような神話的英雄像を見て取っている。クルーソーのフライデーに対する権力は、銃という目に見える権力であり、フライデーの隸属は彼自らが選び取った隸属で、ジョン・ロックがりえないものとして否定した「自らの意志による隸属」（“voluntary servitude”）なのである。「」の議論は極めて説得力のあるものであり、従来の、すなわち弱者（クルーソーの場合では難破という最低の状態に落ちているという意味での）が生き延びていく手段を模索し、次第に発展を遂げていくという近代人的クルーソー観を転覆したものとして注目される。

### 3

孤島とバージニアのプランテーションとの違いはあつても、「」のクルーソーとフライデーとの関係は『カーネル・ジャック』のジャックとムンヤットの関係によく似ている。

ただ、臣民を守るために自らの手で力を振るうクルーソーに対して、ジャックが言葉とトリックに拠っている点が決定的な相違点と言えるだろう。クルーソーの権力は目に見える明らかなものであったが、カーネル・ジ

ヤツクの場合、権力は目に見えないものだ。先に挙げたショーンホーンはデフォーと古い君主論との関わりを実証し、ショーン・ロツク以降の進歩的デフォー像という、従来のものと大きく異なったデフォー像を提出した点で注目されるが、彼が見逃してしまったのは今見えた『カーネル・ジャック』でのムシャット・ヒピソードにおけるジャックを「闘う王」("warrior king")と呼ぶことは到底不可能であり、ヒピソードを見る限り、ショーンホーンの述べた「デフォー像は、覆るように見える。

ロツクは、戦う王 ("warrior king") の持つ二つの要素、“throne”, “sceptre”, “sword”、すなわち王冠、錫杖、剣のうち、近代的君主について最後の剣を持たない像をイメージしていた。だとすると、ジャックは剣を持たない、すなわち他者に対して暴力を振るわない近代的君主たるとしているのだろうか。

ヒピソードに対する欧米の批評家のほぼ完全な黙殺はそれ自体極めて興味深いことだが<sup>11</sup>、数少ない論評の主流は、上のようないい論評の主流は、上のような非暴力性を捉えてジャックの慈悲心を肯定的に評価するといった態度である。例えば、W・マクベーリーは『カーネル・ジャック』という作品を、富裕中産階級の人道主義的本能に語りかけるものだとしている<sup>12</sup>。また、次のように、ジャックは監督官としての黒人奴隸の扱いにおいて人道主義的改革を行ったと言つて、その行動を称賛している。「監督官として、彼は黒人奴隸の扱いで人道的な改革を行ひ、彼の慈悲心を示すことで黒人の中に潜んでいた感謝の感覚を引き起したのである……」L・ハートヴィヒトは、この作品において主人の慈悲心と召使いの感謝との関係がジャックの社会での上昇の基礎をなし得るとしてゐるとしている<sup>13</sup>。

なるほど、感謝の余り跪くムシャットを前に、ほんの少し前までは白人奴隸の身であった自分自身と比較して同情の念から泣き出すジャックには、そもそも彼が持つていた非暴力主義、同情や感謝など単純な人間

感情への信頼などが見られ、その上、当時からすれば珍しい平等感や民族相対主義も窺える。これは先ほどの143ページの引用部分にも見られるし、次の引用の中でも、手に負えない、性悪な連中というのは黒人だけではなく、白人の中にもいるというせりふにも現れている。

ジャック 「主人様、黒人の中にも無感覺で愚劣で、下劣な性質の者もあります。おまけに、全く手に負えず、聞き分けが無く、適切な感情を抱くこともできず、とりわけ、わたしの申しております感謝の感覺を抱くことができないのです。ただし「主人様、」存じのように、そのような者は黒人の中にだけでなく、キリスト教徒の中にもいるのでござります。」 (*Colonel Jack*, 145)

さらに、以上のような策略による支配を行えば暴力が回避できるという点で、現実として暴力や残忍さで経営されていたプランテーションの方針への反対意見表明とも取れ、古くから行われてきた奴隸支配についての議論に一石を投じた感もある。

ただし、これは表面的なテクストを読む限りにおいての議論である。我々はこれが果たして本当であるのか検証する必要がある。リッチー・ロバートソンは、眞の意味での異文化接触はまれであり、逆にそれを回避する方法は数多くあり、その内の一つは、他民族を不完全な形の自分として捕えることで他民族の他者性を否定することだと言つている……。ジャックの民族相対主義も、その人種差別を否定した近代的意識の外面とは裏腹に、それを持ったからといって他民族文化（この場合黒人のそれ）をそれ自体として尊重する態度には結びつかないのでないだろうか。

このエピソードの近代的という特徴は、ロック的体裁は取つてゐるもの、その実ロックの本質である急進的進歩性、民主主義とは全く無縁のものと考えられる。この意味においてショーンホーンの反ロック的保守主義者デフォー像は依然有効であったわけだ。この反近代的デフォー像を認めた上で、私がそこにつけ加えたいのは、現実に存在している植民地經營を肯定的に宣伝する植民地主義宣伝者デフォーに潜む、きな臭い側面である。

植民地主義宣伝者デフォーという概念を提出したノヴァクは、ムシャット・エピソードは無視したうえで、「改心し、重労働に精励すればプランターとして成功する」と述べ<sup>一一一三</sup>、ジャックの成功がひたすら彼の過去の行為の反省と労働が故であることを認めて、このエピソードの有効性を肯定していくようである。

ノヴァクの黒人奴隸に対する態度を少し見てみよう。彼は次のように言つている。「だが、こういった種類の成功を收めるのは働くという意志を持った人間と、奴隸や召使いを買うだけの資本をもつてゐる人間だけなのだ<sup>一一四</sup>。」

「奴隸と召使い」の中には、白人の流刑囚たちも含まれてゐるだろうが、さらに次の箇所を見ていだきた  
い。

モルとジャックはタバコを栽培することによつて新たな富を作り出した。そして奴隸を輸入することで人口を増やし、貧困者を年季奉公人や囚人として雇い、彼らの農園で使うために各種製品をイギリスから輸入した。こういったモルやジャックやクルーソーを、植民地から金を搾り取る不在地主とみなすこととは誤りである<sup>一一五</sup>。

ノヴァクは、ジャックやモルが極貧から這いあがり、成功する姿を肯定的にとらえているのだが、同じ人間であるはずの黒人奴隸に対する人権的意識は全く見られない。

ノヴァクに関しては二つのことが指摘できるであろう。まず彼は、植民地主義の宣伝者デフォーという極めて正確な指摘をしながらも、その姿を批判するのではなく肯定しており、むしろ植民地主義者、拡張論者の視点によつて議論をしていくように見受けられるということ。そのような彼にとって一黒人奴隸の小さなエピソードなど何の意味もなかつたことである。

それともうひとつ、彼は、弱者が生き延びていくために懸命なる努力をし成功を遂げるという近代人デフォーを宣伝し、スターに繋がるデフォー批評の道筋を作つたという点である。

植民地主義宣伝者という定義だけを彼に借りることにして、ここで私が強調したいデフォーの側面は、彼のものとは全く逆のものである。

ノヴァクにとって社会の下層にいるジャックやモルは這いあがる当然の権利を持つているのだが、民族の違う黒人であるムシャットは、考慮の対象にすらならなかつた。ノヴァクと同じ視点、つまり「西欧中心主義」がデフォーのこのムシャット・エピソードには隠蔽されている。

結局あまねく生物の本質("nature")は同じだというさきほどのジャックのコメントの裏には、「人間」とは「ヨーロッパ人」であるという意味が隠されており、深いレベルでの画一主義が看取できる。つまり、黒人は不完全なヨーロッパ人なのであつて、身分関係の上下は所与のものとして厳然として存在しているのだ。

ひよつとすると、今述べたような議論は、生ぬるいのかもしれない。黒人をキリスト教徒と同列に論じるい

とで、人権を配慮する身ぶりはしながらも、黒人は人間ではない、という気持ちは各所に無意識のうちに現れていく。例えば143ページの引用箇所で、黒人奴隸は性質("nature")は同じであるとは書かれているが、彼らは決して人間であるとは書かれや“creature”と描写されている。次のように言われている箇所もある。「わたしたちの農園では、奴等(黒人)は人間であらかのように扱われております。他の農園では大として扱われてゐるの」("they were us'd like Men, in the other like Dogs");」(Colonel Jack, 150)」の発言は明らかに、黒人はそもそも人間では無いという意識を表している。なめらかな表面の下に、差別意識を示唆するディスコースが隠されているのである。

植民地があつてそこに奴隸がいるという事実は歴然としてあるわけ((一))が『ロビンソン・クルーソー』と異なる点だが)、その現実の枠内で、奴隸を奴隸として最大限有効に使うための方策を考える)ことが最優先の課題なのである。つまり、経済効率を上げるために使ったための方策を考える)ことが最も優先的であるのである。つまり、人道主義はあくまで必要な見せかけに過ぎない。」の課題に答えるべく、ジャックは先ほど私が指摘した奇策を考え出したわけだ。

この後、ジャックはムシャットを完全に操つていく。ムシャットは宣伝工作員として養成され、彼の感謝と忠誠の念を他の黒人奴隸に伝えるように説得される。

さて、ムシャットよ、おまえは白人が慈悲の念を見せる)ことができると知ったわけだ。今度はおまえが他の黒人たちに、自分達がどのように考えられているかを知らせなくてはならない。つまり、黒人は鞭以外のものは、屁とも思っていない、優しく扱われば良くなる)がより悪くなり、それがために白人は黒人に慈悲の念を見せないのである)ことを。そして、黒人が折檻を受けた後におとなしくなると同じぐらい、優しく扱

「でもう、た後に感謝できるところをわざと白人に示してくれば、より優しく扱うでもうえるのだ」ということを説き、納得させぬことが出来るかどうか試してみよ。〈Colonel Jack, 140〉

黒人奴隸はそもそも自由を剥奪されていいるのだから身体的に操られてくるのは当然として、その感情までもが操作される」と注目しなくてはならない。ジャックの減刑のレトリックは、本文で“plot”という単語が使用されてくることからもわかるように、「策略」であり、嘘であり「ファイクション」であり、クルーソーの振るう剣（“sword”）とは全く異なる次元のものである。ピーター・ニューマによると、『ロジンソン・クルーソー』について指摘された同種の欺瞞は、その作品の「闘う王」という神話的枠組みによって比較的咀嚼しやすいものにされているが、より現実に根ざした『カーネル・ジャック』では、その捏造されたファイクション性ゆえにかなり陰鬱なものになつてゐる。

すなわち、ムシャットの感じた感謝は、「うまく操作された感謝の気持ち」（“kindness well Managed,” 143）という言葉が示すように、この「ファイクション」によって作られた、強いられた感情なのである。「ファイクションの詐術」と書いてよいだろう。暴力によつて強制労働させられるのと、嘘のレトリックによつて自らの民族文化からはぎ取られ、無批判に隸属して労働するのと、どちらがムシャットにとって不幸であつたかを、我々は考える必要があるだろう。そう考へると、ジャックの解決策は、古くから行われてきた植民地における奴隸操縦の問題に関する議論を終結させるにいかが、ますます錯綜させたと言えるのではないだろうか。

ジャックにとって、このようにファイクションを作り上げる必要が生じたのは、皮肉なことに、彼の民族相対主義のためである。上下関係が固定した差別感を公然と口にするなら、暴力による単純な押さえ込みで事が

足りるわけで、施政者にとつては樂なのであるうが、カーネル・ジャックがその隠蔽された西欧中心主義にもかかわらず非差別主義を標榜する以上、黒人が上に立つ可能性を否定するわけにいかない。それだけは絶対阻止せねばならない。そのためには、他人を説得するためのフィクションを捏造する必要があったのだ。結果として、本来は現実の植民地での現実の対応策を提示するはずのものが、とうてい実現不可能な、リアリズムというより、「いたずら」に近い「トリック」を用いたエピソードになってしまったわけだ。「内在する作者」の人文主義的スタンスを示すディスコースに無意識のうちに入り込んだ西欧中心主義による極めて興味深い歪曲と言わざるを得ない。

## 4

以上で、黒人奴隸懐柔のためのレトリックを解明した。このジャックの策略の重大な特徴は、減刑を行うという点であった。実は、極めて注目されることとは、この恣意的な策略に用いられるレトリックは、当時の政府がこの当地、バージニアに移民を送り込むための便法として用いたそれと全く同じであるという事実だ。

つまり、当時おそるべき数の囚人が死刑判決を受けていたわけだが、そのうち大多数のものが流刑に減刑され、新大陸に送られていた。死刑囚たちは減刑という寛大な処置、政府の慈悲に感謝して改心し、心を入れ替えて働くようになるというふれこみである。死刑囚を減刑すれば彼らは改悛してよりよき労働者として新大陸の働き手になることは、例えば次の『カーネル・ジャック』の引用の中にも見られる。

「うごつた」と（死刑囚を減刑する）はいの世で改悛を促す最も強い動機であります。そして泥棒たちを絞首台から救ういのほうが、絞首台そのものよりも多くの改悛者を作り出すのです。（Colonel Jack, 166）

政府の表向きの論理によれば、減刑によっての感謝から、囚人は宗教的改悛者に生まれ変わるものだといふことになる。ナッソーも、囚人に新大陸流刑を選ぶように『モル・フランダーズ』で推奨している。『カーネル・ジャック』の中でもあからさまに新大陸行きを勧めている箇所があるが、一ヵ所引用しておこう。

流刑になるか、さもなくば誘拐されてそういう土地に拉致された人々は、一般的に悲惨な境遇で、破滅したものと考えられています。ですが、わたしの経験から、そのような考え方の人々に誓つて断言であります。奉公期間を勤勉に勤め上げていい評判を勝ち得たら（それだけの価値を持った人なら確実にそう）、になりましょう、誰でも、つまり最も貧乏な人でも、この世で一番の極悪な犯罪人でも、その奉公期間完了の後は一人立ちして、しかもぐきときに良い農園を築きあげるには間違いないのです。

（Colonel Jack, 152）

権力の代弁者として黒人奴隸懷柔のレトリックを編み出したジャックが、政府政策に反対しようはずもない。改悛し身を碎いて精励しさえすれば、たとえもど死刑囚であつても必ずやアメリカ的立身出世を成し遂げね、ことができるはずなのである。

ただもちろん、「黒人奴隸懐柔のレトリック」が欺瞞に満ちたものであったと同様に、この政府の表向きの論理も詭弁、欺瞞である。彼らの意図は、植民地における労働力確保であり、そのことによってイギリスに富を還元させることであった。

この背景には、川北稔氏も指摘するように、一七一八年の「囚人移送法」までは「流刑」が法律で禁じられていたため、死刑囚を減刑することによってのみ植民地の大量の労働力の確保が可能であったという事情がある。事実、十七世紀後半から十八世紀にかけて、有罪になると死刑になる「死刑罪」条項が激増し、死刑を宣告された罪人が激増したのと同時に、減刑されて新大陸に送られた罪人も急増した。『囚人移送法』以降、直接の流刑宣告も増えたとはいえ、死刑囚の減刑による流刑もいかわらず行われていたのである。デフォーの1722年に書かれた『モル・フランダーズ』の女主人公が経験した運命もまさにこれであつた。移民はまだまだ少なく、労働力は不足し、政府は広報活動、及びトリックによつて新大陸の労働力確保を行つていたわけだ。

政府が自らに都合の良い状況を作り出すために編み出した説得のためのレトリックは、減刑→感謝→従順な奴隸や召使いの生産、というパターンを取り、ジャックのレトリックとメトニミカルな連関を持つことになる。

ジャックが考案した奴隸懐柔のレトリックによつても、飼い慣らしが不可能な奴隸は確かに存在する。そのような奴隸はどうするかというと、ジャックは「統治不能（“ungovernable”）なものは追い出してしまうべきだ」と書いて、最後は「統治不能」黒人の放逐になる」と示唆している。次の引用箇所は先ほど引用した145ページの直後の部分である。

やむ、「主人様、もしそのようないい御しがたい、不従順な連中が邪魔だすね」とさは、そういういた連中に対処するために、まずは試しになめらかなやり方を行います。次に馬の調教をするように彼らの気質を調教するために暴力的手段に訴えます。そして、何も効果がないときは、そのような下司野郎は売り払い、その代わりに別の奴隸を買えばよいのです。(Colonel Jack, 145)

## 15

以上述べてきたよな支配のレトリックがなぜいのうな虚偽に満ちた様相を呈するかといふと、リのトリックの本質が故意に隠蔽されているからである。もひに、その隠蔽を行つてゐる「内在する作者」……れらのH派ソードに対するスタンスをより明確にするためには、それらが作品全体の構成の中やどのよな位置づけをなされていふかを確認する必要性があると思われる。

実は、冒頭で述べたように、『カーネル・ジャック』という作品全体の表面上の読みは、身分の下の者が感謝を感じ、田上のものに忠誠を誓うというテーマを肯定するものである。作品構成の一貫性そのものが、私の指摘した陰鬱な論理を持つ他者説得のレトリックを裏打ちするものとなつてゐるのだ。

リの作品の中で感謝("gratitude")が大きなテーマの一つとなりふりふりは、これまで何度も何度か指摘されしてきた。先ほどあげたバートウ・ワイトも田上の者の慈悲心("benevolence")に対する田下の者の感謝が作品全体を通して見られるべつべつである。ベースアルも感謝原理について極めて正確な指摘をしてゐる。

重要な点は、ジャックから見て上の者に対する感謝の念と、下の者から受ける感謝の念との両者が作品の中を見られてそれらが等しいものとして扱われているということである。

ジャックが目上の者に対して感謝を感じる場合の最も重要なものは次のエピソードである。ジャコバイトたちの反乱に荷担していたジャックは、作品の後半部分で、反乱者たちが失敗によって極刑に処せられたり、また自分の身近のプランテーションに流刑されたりするのを見聞きして、自分の築き上げてきた地位がこのことによつて灰燼に帰し、自分も捕えられ処刑されるのではないかと、戦々恐々たる日々を送つてゐる。

このとき、妻や様々なコネクションの尽力によつて大赦令が発行されたとき彼は次のように感じるのである。

そして、ここで言わせていただきたいのは、わたしはいわば、わたしの命をジョージ国王陛下の御手から授かつたようなものであり、それもたいそうわたしの満足のいくようなやりかたで授かったのですから、わたしは心から改心をいたし、心からジョージ陛下のおんために身を委ねる決意をいたした、ということであります。

このことは感謝原理からで、陛下から命をいただいたことへの恩義の気持ちからであります。そして、この気持ちはそれ以来ずっとわたしに宿つており、これからもわたしの敬意の念が残つてゐる限り、そして感謝の義務が残つてゐる限り続くでありますよう。

さらにこの直後に、彼はこの感謝原理が人生で最も重要な指針となるべきものであることを次のように宣言する。

おそらくいのわたしの感謝原理は、これを読まれている方すべてに受け入れられるものではないあります。ですが、わたしはいのような事柄において、わたしの行動を、厳密なる美德と感謝原理に則って御していきたいと決意いたしたのです。(Colonel Jack, 276-7)

ジャックは自らが臣上の者に感謝の念を感じて、それを土台に世間の中でのしあがいでいた。自ら実践した人生での感謝原理を他人もまねをする」という当然の成功を見るはずだ、という理屈である。従つて当然、彼の臣下の者も彼の慈悲や許しに對して感謝の念で服従するべきであり、あらゆる世間の人間関係においての原理は普遍的に適用されるべきであるといふことである。

作品を通じて何度も確認され、主人公であるジャックが人生の最後に行き着いた結論(先ほどの国王の大赦のエピソードは作品の最後に近い部分である)が、この感謝原理であったことから、この慈悲→感謝→服従といふ図式は、作品全体において権威づけされている原理であることがわかる。このことから、本章の前半で触れた、黒人奴隸とジャックの関係、流刑囚人と司法権力との関係も、「内在する作者」の公的な権威による("authorial")裏づけを与えられているとも明らかである。

ところが、本章の前半で述べたように、それらの関係の裏には陰鬱なる「支配のレトリック」という「詐術」が隠蔽されてくる。臣下のジャックが自らの意志で臣上の者に従つたからといって、臣下の者に同じ事を期待する理由にはならないのではないだろうか。ましてや、彼のやつているように、口先のレトリックによつて自らに従つよう仕向ける(ところば)とは、現実にはそのように強いていることと等しい)ような操作は、彼が言つてい

るような、また「内在する作者」が主張しているような、理想的な社会構造を作り出す人間の根本原理には決してならないのである。

この作品に「内在する作者」としてのデフォーをこのように読み解いていくと、極めて西欧中心主義的な像が浮かび上がってきた。この陰鬱なるデフォー像は必ずしも他のデフォー作品を読むときの我々の印象と一致するわけではない。

少なくとも言えることは、『カーネル・ジャック』の中で、同じレトリックが繰り返し別の対象に向けて応用されたように、同じ構造のレトリックが反復されるのは極めてデフォー的な行為であるということだ。

例えば『モル・フランダーズ』の中で、弱い女性が自分をひどいやり方で捨てた男性を、逆に策略によつて改心させ感謝の念を持つて自分と結婚するように仕向けるといったエピソードがあるが、これは『カーネル・ジャック』の中の慈悲→感謝→服従と同じ構造を持つていてもかかわらず、与える印象は全く逆のものだ。G.A.スターは、モルのこのような様々な策略や悪事を、どうしようもない窮境で生き延びていくための方便として弁護したわけだ<sup>(1)-(11)</sup>、それが今日のデフォー像形成に力を貸した。社会的弱者は、生き延びていくためにやむなく選択を強いられて、絶対基準からすれば悪でしかない行動をとるように追い込まれる。本来なら選択しようがない、生存か悪を行うかという選択を議論する理論が決疑論("casuistry")であり、この議論の導入と、最近の批評動向によって、彼ら彼女の罪は寛容に人道的に考えるべきだということになつた。

同じレトリックでもその使い方と使う対象を変えることで、全く別のトロイックが作り出され、倫理的含意と作品全体の力学は変化する。レトリックを反復することが、デフォーのトロイックでありフィクションを作る行

為なのであり、トリックという現実の中で有効な策略をめぐらすための道具が、デフォー独特的のレトリックなのである。すなわちレトリックはトリックで、トリックはレトリックである。そして、そのレトリック＝トリックの応用の仕方と作品全体の構造への組み込み方によって、個々の作品の印象は極端に異なつてくるわけだ。

そこで、本章の最初に触れた、デフォーに関する批評史の問題に立ち返つて考えてみよう。私が、非常に気になる軋み音を感じたこのエピソードに、これまでの批評家たちがほとんど注目をしなかつた理由は一つあると思われる。一つには、デフォーと同じ欧米圏の批評家は同じ西欧というディスクースを共有しているということ。同じコンテクストをいまだに共有している批評家にとっては、これまでに述べたような支配的論理は語るに足りないものなのである。

もう一つは、ノヴァク、スター以来の二〇〇〇年来のデフォー評価の流れとして、支配する側の論理は無視される傾向があつたということだ。ショーンホーンに見られるような、支配する側としてのデフォーをとらえ直すことは、デフォー再評価として極めて重要なことである。本博士論文『詐術としてのフィクション』では、この視点を踏まえたデフォー像の再構築を試みているのである。

## 第十三章

### メソディスト、ハンフリー・クリンカー

1

メソディズムの創始者、ジョン・ウェズレーが死ぬまで過ごした家と彼のチャペルはロンドンのシティーウォールの外オールド・ストリートに近いところに現在も残っている。彼の父親サミュエルと同級生であったダニエル・デフォーの墓はその斜め向かいのバンヒルフィールド墓地内にあるが、そのデフォーはピューリタンであり、ウェズレーと同じくノンコンフォーミストであった。すなわちこの界隈は、英國国教徒ではない、正統から外れたはみだしもののテリトリーであつたわけで(だからシティーウォールの外にある)、当のデフォーが描いた十七世紀のペスト流行の際には、万という単位の死体を投げ込む巨大な穴が掘られた地であつたことを思い出すと、余計にその悪場所としての土地柄を感じずにはおられない。

ウェズレー兄弟やホワイトフィールドなどメソディズムの巨人たちと同時代、十八世紀中頃を生きたスモレットは、彼らの強大な影響力を感じていたに違ひなかつただろうし、大衆に迎合する作品を残したとはいえ、

本質的には保守主義者であった彼が、人々を熱狂させるこの新興宗教についていささかならず苦々しく感じていたことは間違いないようだ<sup>(1)(2)(3)</sup>。

ただ、何人かの批評家の行つてきたように、スマレットのエッセイからその批判的スタンスを切り取つて、彼の代表的作品である『ベンフリー・クリンカー』(1771)で描かれるメソディズムをその型紙で塗り込んでしまうところの作品から見えてくるはずの重要な側面が捨象されてしまう<sup>(4)</sup>。メソディズムはこの作品のキーワードであり、また逆にこの作品を読むことで、十八世紀の一般読書階層(これは決して一般大衆ではなかつたはずだが)からメソディズムがどういったスタフラーで捉えられていたかを探ることができると考へる。

## 2

かつて国会議員を勤めたこともありジエントルマンである『ベンフリー・クリンカー』の主要登場人物であるブランブルは、第七章で触れたように、健康が優れず、転地療養を兼ねてみずがらのカントリー・ハウスを後にして、イギリス国内旅行の旅に出る。ブランブルについて忘れてはいけない事実は、彼が金持のジエントルマンであるということであり、この旅行も召し使いを引き連れて自家用馬車で行う大名旅行であったということである。

青年ハンフリー・クリンカーは、病氣治療のために金を使い果たし、着るものすら自由にならず裸同然、御者席に臀部丸見えで座つた姿で一行の前に姿をあらわすのであった。幸運にも馬丁として登用されるクリンカーは、金持のブランブルと対照的に社会の最下層に位置する生き物であった。このクリンカーがなぜか突

然、メソヂイストとして群衆に向ひて説教を始めたのだ。クリンカーがメソヂズムの説教者としてなばなしに躍進をやくH<sup>ム</sup>ルハーツ

1・セハーメジハーデ<sup>ス</sup>宮殿の階下で召し使い相手に説教をする場面

2・H<sup>ム</sup>ルロハーデンの集会所で大衆相手に説教をするH<sup>ム</sup>ルハーツ

3・監獄で囚人相手に説教をした時H<sup>ム</sup>ルハーツ

の三つである。

ベースからのロハシ<sup>ス</sup>に行へ途中で拾ねねだ、捨て大同然のクリンカー<sup>ス</sup>が、ロハシ<sup>ス</sup>に着いて初めて表だつた行動をするのが、第一のH<sup>ム</sup>ルハーツである。ある国会議員であったブランブルは宮殿を訪問し、各界の名士に会うのだが、そのペーティーが終わって壁<sup>ス</sup>に降りて、椅子を演壇にしたてて召し使いたちに弁舌を振るひて、クリンクルを攻撃する。世人であるブランブルの姿に気がついた彼は、急いで演壇からの降りて馬車を呼ぶに忙しく。

*At the foot of the stair-case, there was a crowd of lackeys and chairmen, and in the midst of them stood Humphry Clinker, exalted upon a stool, with his hat in one hand, and a paper in the other, in the act of holding forth to the people. —Before we could inquire into the meaning of this exhibition, he perceived his master, thrust the paper into his pocket, descended from his elevation, bolted through the crowd, and brought up the carriage to the*

通常貴族の館では、主人である貴族たちが階上のホールでパーティーを開き、召し使いたちは階下で控えていた。着るもの、食べ物の、言葉すべてが「上」である世界から降りてきたブランブルたちが、それとは全く異なった召し使いたちの領分である下界に降りてくる。ついで遭遇するのが、ほんの何日か前には裸同然で空腹に耐えていたクリンカーの、偉そうに一段上の場所に（といつても主人たちの場である二階には到底届かない）上って説教をする姿だ。このコントラストと、背伸びをしたクリンカーの姿が滑稽に見えたのであらう。ブランブルは甥のジエリーと顔を見合わせて爆笑する。

この段階で、サドーのヒビソードが社会的階級の問題と関わっていることは明白である。クリンカーは後で主人のブランブルに呼ばれたとき、召し使いたちに神の恩寵をとき、妾りに神の名を使ってのしゆ」と戒めないと申し開きをする。ブランブルは、下々の者がちやんとした話し方を身につけたら身分の上下差がなくなるのではないかと切り返すが、クリンカーは審判の日には身分の上下などなくなりますから、と階級格差に対する批判じみた言辞を吐くのである。後でブランブルは、妹のタビサに「我が家に大変な改革者（“reformer”）を持ったものだな」と一言嫌味を言う。

これは、はつきりとメソディズムという言葉が使われているわけではないが、万人に与えられる神の恩寵という概念はメソディストたちの説く典型的なものであるし、メソディズムという宗教が（特にジョン・ウエズレーのもの）貧民のための宗教と呼ばれた」とを考えると、階上ではなく階下における、低社会層への説教というのはその特徴と合致したもので、後にはつきりとメソディストと呼ばれるのを待つまでもなく当時の読者は、戸

外で説教をするウバヌーのをすゞに連想したはやだ。

アランブルが甥のジドリーの頭を歩くと、メソディズムの命令の場に出くわせる。大変な人ばかりで通りも人があふれてゐる。拵装して近づいてみると、おひつりとかわの説教をしてゐる従僕とだ、他ならぬクリンカーデあつた。群衆の中には、アランブルの旅の同行者のなかの、女性陣がすべて参加して熱心に説教に聞き入つてゐるではないか。ジドリーは前回と同様滑稽に感じると、アランブルの方は、今度は激怒し、の集金を中断せしクリンカーを厳しく叱責する。

クリンカーは、アランブルの妹タビアス・メソディズム創始者の一人、カロライナ・ハーバードの命懸けを訪れて説教を聞いたのがきっかけで、あの女神の勅葉が自分の中に湧き起つたりむを知りある。神の恩寵の光は富める者のみならず貧者の身上も豊かなものにならんかと、第1のHヌヌーと同様、神の前での平等を説く。

'I hope (said Humphry) I have not failed in my duty to your honour—I should be a vile wretch if I did, considering the misery from which your charity and compassion relieved me—but having *an inward admonition of the spirit*—' An admonition of the devil—(cried the squire, in a passion) What admonition, you blockhead? —What right has such a fellow as you to set up for a reformer?' Begging your honour's pardon, (replied Clinker) may not the new light of God's grace shine upon the poor and the ignorant in their humility, as well as

upon the wealthy, and the philosopher in all his pride of human learning?" "What you imagine to be the new light of grace, (said his master) I take to be a deceitful vapour, glimmering through a crack in your upper story—In a word, Mr. Clinker, I will have no light in my family but what pays the king's taxes, unless it be the light of reason, which you don't pretend to follow." (138)

アーハンタルは、ルネサンスの時代の魔術師、「トロハカーザルス」や「黙党が狂信者 ("enthusiast"、 "fanaticism")」であるが如く思ひた。女をねめかべて新し光なる想に燃ゆるなり、仕し使ふの職を解いて放つ田や山林のやうな。アーハンタルはやせやせしくて怒りてこらへいか。

貴族の集まつた場所の壁から降つて来たアーリーはクリンカーはおまことにむづぶつと説教をしてゐる、直接一壁の上流社会を脅かすには懸念があるやうに滑稽にしが見えなかつたのだが、たまたま通りかかつたアーリーは大群衆に演説をするクリンカーはやうは見えなかつたはずだ。

アーハンタルが通りや群衆と同じ高めの視点から見たときのクリンカーは、群衆の先導者である。アーハンタルたゞ社会層の上に属する貴族たゞらふにて新興宗教に参加する群衆はヤマトやあり、自分たちの既得権を奪がす潜在力を持つた存在である。ルネサンス貴族である大衆を自分の召し使ふやあるクリンカーが熱狂やせ焚きひかねのせめりやうと腹立たしくいふのである。彼が激怒するのも当然のいふやうである。しかし何か理解不能である。ルネサンスがもへる嫌うのは、作品中でせつぱんの君のやうに、群衆であり、大衆であらぬがどうぞ。

おのゝ直接的な理由は、この旅の一行のリーダーたる自分であつたアラン・ヘンリイ、自分が先導・指揮する一行のうち女性たちがすべてクリンカーの説教に聞き入つてゐた點だ。彼の権威を著しく損なつたものを感じられたらしい。社金階層の最底辺に属するクリンカーが上の者に説教するとは不遜の極みに思われたのである。演壇の上にあがいたクリンカーは女性の女房トレストに手を握つてゐやう。職を解いていた所で、さうしたクリンカーは次の如きに叫んで居る（“submit”）。

...her ladyship has been very good to me, ever since we came to London and surely she has a heart turned for religious exercises....But at the same time, I'm bound to love and obey your honour—It becometh not such a poor ignorant fellow as me, to hold dispute with gentlemen of rank and learning—As for the matter of knowledge, I am no more than a beast in comparison of your honour; therefore I submit; and, with God's grace, I will follow you to the world's end, if you don't think me too far gone to be out of confinement. (139)

批評家の母リサ・リスムスヘーネルはクリンカーの能力は無力化された（“incapacitated”）ための譴諭が多く、ソートイペイベルの「お父り」で現金和起され、作品全体で風刺の対象となつたのだといふのが圧倒的である。しかし私は、クリド本筋は譴諭を終えてこの小説をねねた。クリド、譴諭を進めたお父りのリスムスヘーネルは今、譴諭して余裕はない。

批評家の一行の出張スハベーを訪ねたお父りは、批評初老のマッター・トランバ、その妹の独身女性タラホ

(結婚を強く望んでいた)、甥のジェリー、姪のリディア、女中のウェーニフレンド、それにクリンカーである。上述のクリンカーのメソディスト集会に参加していたのは、このうち女性陣すべてと、それに加えてバートンという男性である。

実は、誰でもいいから早く結婚したくてたまらない、四十五歳という当時としてはすでに婚期を逸してい るタビサは、このバートンという男を狙っている。男性を射止めるためには、メソディズムという宗教を利用して同じ宗門に彼を下せられれば、魂の触れ合いから男女の触れ合いにまで発展させる——もができるだらう——う妄想を抱いた彼女が、メソディズムの会合に参加するようになり、クリンカーも会合に加わった——この感化されて説教まで行うようになったというわけだ。

甥の情報によつて以上のような事情を知つたブルは妙に納得してしまひ、一度はメソディズムを捨てなければ解任するとまで言つたわけだが、矛先を收め、「別の方に向に氣をそらされる=楽しむ("divert")」になるとなる——。結局最終的に、この作品中一番目のメソディズムのエピソードでは、宗教の是非に関する決着がなされずに、タビサの年甲斐もない男性籠絡作戦というロマンジックなエピソードに譲り替えられてしまうわけだ。

この妙な結末から二つのことが読み取られると考える。まず、メソディズムという宗教がセクシュアルなイメージで捉えられていたことである。宗教的熱狂と性的熱狂が横滑りの連想によりてメタファーとしていつよくなたにされてゐるところである。

第二に、この連想によつて、上流階級への脅威となりうる大衆の宗教的エネルギーが無化されていることである。第一のエピソードで滑稽だったメソディズムが第二のエピソードで脅威に変化しそうになつた。しかし、宗

教はセックスに変化する」とで、再び笑うべき対象に滑り落ちる。メソディズムは脅威でなく嘲笑の対象に転げ落ちるのである。

### 3

といふことは、やはりメソディズムは多くの批評家のよう、「」で全く意味をなくしてしまつた」とになるのだろうか。

メソディズムが風刺の対象としている作品で描かれてくるのは確かだ。メソディズムにかぶれた登場人物を考えてみよう。まずクリンカーは世間を知らない「」("naivete")がゆえにメソディズムにかぶれる。彼は超自然現象や亡靈をも信じやすくそれがゆえに引き起す事件もこゝにか作品中に描かれるが、メソディズムもののコンテクストで語られている。タビサは上述の「」と男あたりと宗教が密接に結びついて常に面白おかしく語られる。ウイニフレッドは性的にクリンカーに惹かれており、宗教の熱狂はむしろセックスの熱狂に近いものである。リディアは寄宿学校を出たてのうぶな娘であり、その無知がためのメソディズムかぶれという風に描かれ、彼女は後に叔母のタビサの誤った宗教意識を批判したりして、メソディズムへの懷疑心を募らせていく。メソディスト全員が何らかの意味で風刺されてくる。

しかしそれにもかかわらず、上記のエピソードから解いたように、メソディズムは上流階級について脅威の対

象であるがために排除されるのではなく、滑稽な存在であるがゆえに見逃されているのだということを忘れてはならない。このエピソードでは、上流階級の寛容な精神によつてメソディズムは寛恕されるわけで、宗教の存続は可能になつたわけである。実際クリンカーはこれ以降もメソディストであることをやめていないことを指摘しておこう。批評家たちが無視しがちな、私が第三番目としてあげておいたエピソードを検討してみると、

クランカーは迫り来る私の嫌疑をかけられ、突如クラーケンウル監獄にせり込まれる。捕まえた当初は況ねぬ様子で、ジムニーの懲らし帽を脱ぎ、「Squire! (cried he, sobbing) what shall I say?—I can't—no, I can't speak—my poor heart is bursting with gratitude to you and my dear—dear—generous—noble benefactor.' (150) と感激の言葉を连々口にする。この彼の調子が他の人物にはどう思われるか。

ところが、次の日ジエリーが監獄を訪れると、彼はあつけらかんとした様子で監獄の囚人に向かつてまたしても説教を行つてゐるではないか。この姿は、その布教活動のキャリアを監獄での説教で始めたというホワイト・フィールドの姿を彷彿とさせるものだ。典型的、模範的メソディスト説教者といえよう。クリンカーがメソディズムの説教を行う対象は、これまでのエピソードからわかるように、召し使いであり囚人であり女性である。社会階層としては下の者たちであり、ちょうど貧困階層にとつてウエズレーやホワイトフィールドがヒーローであつたように、クリンカーも彼らにとつてはボビーヨラー・ヒーローであつたわけだ。

クリンカーは、おもかげに何人の囚人たぬをスハイベムに召喚せられた。これがのだとおもへたが、ふたりの間。彼は“submit”して、メハリ・ヤバムの説教者たるにいふねどおれはやだせなかつたのか。

現実上、トト・ハグレンのクリンカーの頭上に冠り、ハグレンがメハリ・ヤベムにいふねどおれも、おれも、クリンカーが納得したふうで、おもむろである。ハグレンは、クリンカーはメハリ・ヤベムを放棄したせやうである。トト・ハグレンが後でハグリーと號して心中で態度を軟化せたりといふが、クリンカーが知る由がない。

ヨリの後、性品の母・アダラ、心母・ド・モード・マダラの愛慕の変容(151)が現実に反映され、性品のメハリ・ヤベムを認めた。トト・ハグレン自身の後での行動を認めた。

...he has been discharged accordingly, to the unspeakable satisfaction of our whole family, to which he has recommended himself in an extraordinary manner, not only by his obliging deportment, but by *his talents of preaching, praying, and singing psalms*, which he has exercised with such effect, that even Tabby respects him as a chosen vessel. If there was any thing like affectation or hypocrisy in this excess of religion, I would not keep him in my service; but, so far as I can observe, *the fellow's character is downright simplicity, warmed with a kind of enthusiasm, which renders him very susceptible of gratitude and attachment to his benefactors.* (153)

一番不思議なのは、あれほど彼を怒らせた“enthusiasm”という観念が、(二)では感謝の気持ちや恩人への愛情に結びつくとされていることだ。人心を惑わしかねない危うい宗教上の概念を見事に階級性の枠組みの中に懷柔して取り込んでいる。

## 4

さて、クリンカーがメソディストとして一番強調していたことは、これまで見てきたように「神の前での平等」ということであった。クリンカーの存在は階級制度というものに対する疑念を表象する存在として機能している。特に前に引用した箇所の中であるように、人間の価値は生来自分の属する階級で決まるのではなく、個人の努力によって獲得した人間の資質で決まるのだという主張は画期的であろう(二四二)。

作品を通じて、階級を横断して上昇するのに最も近い位置にいるのがクリンカーであり、彼は懸命に主人に仕え様々な個人的努力を積み重ね、次第に信頼を得ていく。この一連の過程が極まるエピソードが、クリンカーによるプランブル救出劇である。

プランブル一行は雨で増水した川を馬車で渡ろうとするが、車軸が折れプランブルは馬車ごと川の流れに飲み込まれて溺れそうになる。あわやのところを助け上げたのがクリンカーであり、プランブルは感謝のあまりクリンカーに年間三十ポンドの定収入を約束するのだ。ある善行とそれに対する感謝、という人間の気持の問題が、金銭の授受によって精算されるというのはいかにもこの作品に特徴的だが、いずれにしてもクリンカーは自らの力で彼の身に余るほどの収入を手にしたわけだ。

自らの努力と幸運で社会階層を上昇しようとするクリンカーは、低い階層にある他の者たちをもそのメソディズムの説教で押し上げようとしていたわけで、まさに社会階層間移動の起爆剤とでも言える存在であった。このクリンカー像は、このHピソードまではと有効であった。彼は最初に裸一貫（“naked”）からスタートした自分の身の上を振り返り、自分の社会的上昇を喜ぶ。ここは作品中で階層間移動のテーマが絶頂に達した場面と言えよう。

ところが、次の瞬間に、このクリマイマックスはあっさりと崩壊する。ところのはじめのときのじやくしゃやブランブルが学生時代の旧友のデニソンに会い、その旧友がブランブルの旧姓ロイドで呼びかけたことから、クリンカーが、実はブランブルの昔つきあっていた女性との間にできていた実の子供であつたことが判明するからだ。

彼は社会階層を上るために日々努力したはずであるのに、実はそんな必要はなかつたことになる。そもそもジョントルマンたる生來の資格を持つてゐるなら努力などせずともすべての特權を掌中にしていたはずだから。もちろん、このような偶然の人間関係の判明というエピソードはフィールディングを始め、この時代の小説には多く見られるわけだが、このロマンス的道具立ては、この『バンフリー・クリンカー』という作品ではある種の重要な機能を果たしていると思われる。

この結末によつて、梯子を上つて、こゝうとする庶民の努力が、「フイクション」の中のとんでもない偶然の一致によつて無化され雲散霧消する。既存の階級制という構造体の一部として、庶民の向上心が枠組みの中に取り込まれてしまうという結末であると言えるからだ。

メソディストとして、庶民の代表として活躍していたクリンカーが、実は上流階級の生まれであったところは、実に皮肉な結末である。クリンカーは父親ブランブルの配慮により、ブランブルの領地の“vestry

clerk"(教区書記)に就任する所になりそうだ。パリッシュ・ホールは英國国教会であり、メソディストとしての骨抜きにやがれりとなるわけだ。

メソディズムのテーマに戻つて、作品全体の企図を要約するなら、それはメソディズム取り込みの願望成就

であり、メソディズムの固い込み運動であると言えよう。メソディズムは宗教として否定される事はなかつたが、社会の転覆を図るようなエネルギーを剥ぎ取つた上で、うまく階級制度の中に取り込まれてしまつた。

ただ、だからといってメソディズムが意味のないものであつたかというとそれは違う。そもそも社会において力のない存在であれば、取り上げる必要がなかつたであろうし、本当に容赦なくたく必要があるものなら、滑稽なメソディストの登場人物を作つて、ひたすら攻撃対象にすればいいだけである。

クリンカーという中心人物がメソディストである必要があつたのだ。ブランドンブルといふ上流階級の代表者と血の繋がつた者として、メソディズムを骨肉の関係として取り込まなければならなかつた。それだけこの宗教の力が大きかつたといふべきを、ローハンソーン自身が物語ついてゐると考えられる。

ホガースの「当世風結婚」の第一アパートは、上流階級の居間で、画面左の人物が、上流階級の結婚したばかりのカップルの自堕落な様子をあざけるように横目で見てゐる図である。彼は「の家の財産管理執事("Estate steward")」で、メソディストであると言われてゐる(図1)。

この人物は眉をひそめ、軽蔑の眼差しで主人たちを見て上流階級を批判する姿勢を示しているが、執事

として働いているという意味ではその当の上流階級に取り込まれているとも言える。ポールソンの説では、上流階級にうまく取り入っているとして批判もされたホワイトフィールドへの風刺であるといつてだ<sup>(二四四)</sup>。メソディストの執事は眉をひそめながらも上流階級を容認し、そこに寄生していたわけである。これは、ブルンブルの、眉をひそめながらもメソディストを容認しみずからの階級に取り込もうとする姿勢と方向は逆だが、この時代の両者の関係を補完的にうまく説明している。

メソディズムという宗教は、貴賤を問わず神が恩寵を与える事を説き、慈善に寄与して民衆の不満を抑えることで、暴動にまでいたりかねないその巨大なエネルギーを抑え、革命勃発に至らなかつたイギリスを説明する際の一つの大きな要素とされることがある。ちょうど一七七一年という、フランス革命を控えた時期に書かれたこの『ハンフリー・クリンカー』という作品は、この微妙な時期の上流階級と大衆の緊張関係・力学などと実にうまく合致しており、社会安定を願望していた上流階級のための、願望成就小説としても読まれるべきなのである。

## 第十四章

### 『オックスフォード英語辞典』と『ロビンソン・クルーソー』

1

近年デフオーの『ロビンソン・クルーソー』を植民地主義喧伝の書物として読む「読み」が批評家中に見られるようになった。これはもちろん、古くはマクシミリアン・ノヴァツクなどから見られる見方ではあるが（一四五）、最近は特にこの作品に見られるそのような傾向を批判する動きが際だつてゐるようを感じられる（一四六）。『ロビンソン・クルーソー』という、昔から多くの読者を惹きつけてきた作品であるからこそ、逆にそのような植民地主義・拡張主義や西欧中心主義が読みとられるとするならば、そのインパクトは現代に至るまで極めて強いものであつたはずで、例えばパールマンに見られるような、クルーソーの性格批判に至るまでの評価に行き着くのも不思議ではないのである（一四七）。

『ロビンソン・クルーソー』が受容されてきたこの三百年ほどの間で、執筆時期である1719年と現代を結ぶ中間点に位置づけられるのが十九世紀後半のヴィクトリア朝時代である。この時期は帝国主義が頂点に達した時期であり、このような時期に『ロビンソン・クルーソー』がどのように受容されたかを考えることは、イ

ギリスの文化変遷を辿る上で重要なことであると思われる。

「」の時期に重なって進行した国家的・一大プロジェクトに『オックスフォード英語辞典』があった（「これ以降 *OED*」）。今や「」の大辞典の第二版が CD-ROM になりパソコン上で処理が可能である。「」の大辞典を利用すれば「」で、ヴィクトリア朝の『ロビンソン・クルーソー』の集団的受容が探れないだろうか。

## 2

『ロビンソン・クルーソー』を *OED* で検索してみると、引用されている箇所が際だつて多いことに気づく。十八世紀イギリスでの同時代の比肩すべき作家にはスウェフトとリチャードソンが考えられるが、スウェフト作品全体の引用数はデフォー全体のそれとほぼ変わらないが、その最も有名な『ガリバー旅行記』と『ロビンソン・クルーソー』単体で比べると、一三四一箇所対六〇八箇所で圧倒的にクルーソーの方が多い。またリチャードソンの代表作である『クラリッサ』は、クルーソーとは比べものにならないほどの長大な作品であり、十八世紀における受容の点では遜色を取らないはずであるのに、引用箇所は一八四箇所とクルーソーに比べて劣っている（図八）。

「」の単純な事実からしても、*OED* が編纂された時代の編纂者、いやむしろ文例を寄稿した雑志文献閱讀者たちに取つて、『ロビンソン・クルーソー』は何らかの意味で高い比重を持つていたことが窺える。

引用を選択し *OED* に載せていく作業が実際に行われた時期を推測するために、雑志文献閱讀者が利用し、*OED* の引用文として採用されたエディションを調べてみると、圧倒的に一八四〇年のスコットのエディシ

ヨンの再版本と一八五八年版、もしくはその時期のHディションが多い」とがわかる<sup>(二四九)</sup>。

OED 初版編纂の前段階、すなわち一八五七年からのトレンチ、ファーニベルらが愛国心に燃えて国家の威信をかけた大事業として例文を集め始めた時期にクルーソーの引用が集め始められ、一〇有余年の後のマレーらが編纂を開始したときには、『ロビンソン・クルーソー』の引用収集作業はほぼ完了していたと推察される。

収集計画の指導者たちは愛国的な意識によって膨大な過去の文献や英文学からの引用収集を行つた。<sup>(一)</sup>の時期は国立肖像画美術館(National Portrait Gallery)の建築<sup>(二五〇)</sup>や「ホールデン・トレジャリーの時期」と重なつており、國家の統一、そして「そのような企ての愛国的な重要さ」が認識された時期であり<sup>(二五一)、(二)</sup>のような国家的な意識や編纂者の気概は文例収集者たちの作業に反映したに違いない。

一九九四年刊行『言葉の帝国——オックスフォード英語辞典の統治』の中でウイリングスキーは、OED の中にヴィクトリア朝帝国主義的キヤノンを見いだしている<sup>(二五二)</sup>。彼も記すように、OED はイギリス国民に語りかけているのだが、その語りかけている対象は市民権のある教養ある一般人なのであって、しかもその取り上げる素材は印刷されたものに限っていた。印刷物を牛耳ついたのは当時の勃興中産階級である。OED は労働者や女性に関する語彙に薄いことも知られている<sup>(二五三)</sup>。OED のそもそもの成り立ちから、排他性は見られたのである<sup>(二五四)</sup>。OED に刻み込まれた読みの主体である集団は排他的な一部のエリート層であり、一部エリート集団の持つ価値観・イデオロギーによつて偏向を帯びると考えられる。引用をカードに書いて編集者に提供した人たちの読書意識は『ロビンソン・クルーソー』の引用構築に貢献していたであろう。

すなわち、本章はウイリングスキーの考え方と同じヴェクトル上にあり、ある特定の時代の特定の階層の作品の

読みが、それ 자체ある特定の意識の元に企てられたプロジェクトである *OED* の中に、刻み込まれているはずだ、といふ」とを出発点にしている。これを特定化すると、ヴィクトリア朝の中産階級以上の、教養ある読者に一世紀半前の『ロビンソン・クルーソー』という作品がどう受容されたかという問題になる。電子版の *OED* を使って、以前では不可能であった、ある作品の *OED* 全体における引用すべてに目をとおすという作業を行うことによって、この問題があぶりだされてしまうと私は考えるものである。

### 3

ただ、無目標にやみくもに読み進めていつても得るところは少ないと思われる。テーマをいくつかに絞り込んで、それに該当する引用を探していくことにする。先ず念頭におくのは次の二点である。

- 一、引用の取捨選択の際に働く恣意性（ある特定の価値観が無意識に表出）
- 二、その引用に与えられる定義＝解釈における偏向

絞り込むべき話題であるが、以下ののようなテーマを定めた。

- 一、植民地主義をも含む支配と被支配の関係を示唆する引用
- 二、宗教心に関係する引用
- 三、孤島での経済活動にまつわる引用

この三點に絞った理由は、冒頭でも述べたように、植民地主義の端緒をつけたとされる『ロビンソン・クルーソー』がヴィクトリア朝という帝国主義の時代にどのような意識で受け取られているかを探ることができると考えたからである。さらに *OED* そのものが国家という意識を色濃く持っている以上、『ロビンソン・クルーソー』という作品の持つ植民地のローテクストはその意識と結びつきやすかつたと考えられる。さらに植民地主義と『ロビンソン・クルーソー』が同じ俎上で語られる場面が増えてきた現在、ヴィクトリア朝の読みを現在への布石として位置づけができるかもしれないからだ。

また、ヴィクトリア朝においては、孤島に流れ着いた何一つない生活からすべてを築きあげていく力強いクルーソーの経済的な面（ホモ・エコノミクス）への共感が大きかつたわけで、この文脈をどう捉えているかに興味をそそられる。

辞典編纂の発起人の一人であったトレンチがウェストミンスター寺院の司祭長であったことからも容易に想像がつくように、*OED* の企てには宗教的な野心が潜んでいた。彼の考えは神学と言語学を結合させることであつたし（二五五）、英語という言語には人を道徳的に導くガイドとなる力があると堅く信じていたのであつた。そのような意識を持つて収集された引用の中で、宗教人クルーソーとして読まれることの多かつた『ロビンソン・クルーソー』がどう捉えられているかを考えることは、同時にその時代を考えることだと思われる。

以下に、具体的な作業の内容を列挙する。

#### （準備作業）

『ロビンソン・クルーソー』の電子テキスト入手。行番号のついたテキストファイルに落とす。

(絞り込み作業)

- 一・*OED*による自由テキスト検索及び用例検索を行う。(crusoe を文字列として検索)
- 二・その結果ファイルをテキストファイル出力にかけて、テキストファイルに落とす。<sup>二五六</sup>。
- 三・用例検索による検索からは用例の部分だけしかテキストファイルに落とせないため、『ロビンソン・クルーソー』の中の引用されている部分の一覧表を取り出す。
- 四・自由テキスト検索の結果ファイルからテキストファイル出力によりて、『ロビンソン・クルーソー』に引用されている語彙の一覧表を作成。
- 五・三の一三七五箇所の引用すべてに目を通し、前述した三つのテーマに当てはまるものをピックアップ。
- 六・五からさらに絞り込む。五と四を照らし合わせ、また引用部分を電子化した『ロビンソン・クルーソー』のテキスト全体から探し出し作品全体のなかの位置づけを探る。<sup>二五七</sup>。
- そして、ある種の価値観を強く示唆すると思われる項目をピックアップ(二〇四項目に絞り込み)。
- 七・六の中でさらに特徴的に価値観が現れている話題に焦点を絞る(七七項目に絞り込む)。
- 八・七の中でも一番顕著に選ばれている話題に絞る(約三〇項目)。
- 九・ある作品の*OED*に引用されている単語の語彙集のようなものは極めて利用価値が高いと考えられる。プログラミングにより *OED* 中に引用されている単語・その語義・引用箇所を一覧表にする。
- 以上の絞り込み作業で作成した資料にさらにもう一つ資料を付け加える。

自由キリスト教徒の crusoe や、三七五例。用例検索では、三四一例。この差が生じる理由は、自由キリスト教徒は OED のトキスト全体が検索の対象になるのに対し、アーヴィング以外の人物が『ロビンソン・クルーソー』について言及している部分も選り出されていないからである。したがって、差の三四例はアーヴィング以外の著者による文獻が『ロビンソン・クルーソー』に言及しているものであると言え、その部分を読む限りの時代の『ロビンソン・クルーソー』のイメージや評価をある程度探すことができると思われる。筆とぬる私の使用者は以下の三点である。

一、翻訳された作品のトキスト『ロビンソン・クルーソー』

二、OED からの検索結果、及びセイレーンのトキストファイルに変換されたもの

三、OED にねじてトマホー以外のものがクルーソーに言及している引用

4

最初に三点挙げた資料のうち第三のものを用いて、ヴィクトリア朝でのクルーソーのイメージを探つてみたい。時代を絞るために、論理とする引用は「トマホー」朝のものに限つて選んだ。<sup>114</sup>

が、『ロビンソン・クルーソー』について触れた引用からの当時かなり人気があった事実が見受けられる。

... Historiographer of deathless Crusoe.

295

our  
If our hero: used familiarly of the hero by the writer of a work of fiction... etc.  
1854 Rawdon Brown... He... said that he had amused him more than anyone since  
Robinson Crusoe! A greater compliment could certainly not have been paid our  
hero.

### **prolificacy**

1884 Sat. Rev. Defoe, with all his versatility and all his prolificacy, wrote but one

Robinson Crusoe.

historiographer の項目でチャーレズ・ラムが触れているのは、「不滅の『ロビンソン・クルーソー』」という作品

historiographer の項目でチャールス・ラムが触れていたのは「不滅の日記ハンセン・クルーソー」という作品の記録者トッホー」であった。our の項目で一八五四年のグラウンの引用では、『クルーソーが面白く作品の基準となりうるものである』ことが示唆されてる。historiographer や our などの語書の項目の意味は引用部分の持つイメージと密接につながっていると思われる。トッホーは記録者 = historiographer なのである。『ロマンソン・クルーソー』は「我々の」主人公なのである。

逆に、*prolificacy* の項目が示唆する限りでは、デフォーはクルーソーだけしか書けなかつたといふことだ。デフォーの膨大な作品群の中でも、ひとりクルーソーのみがヴィクトリア朝の感性に合つていたらしいとするよりむしろある。

作品のおもしろさは、離れ孤島でのクルーソーの奮闘ぶりから得られるように思われるのだが、この時代の

クルーハーのイメージは孤島に漂着したかねてやうな人物である。これは文明社会に復帰する所  
の困難な船員の前提があつた上から覗取たものだ。

corner 3b. fig. To put into a position of difficulty or embarrassment.

1848 Lowell... Although there are few so Outrageously cornered by fate as poor Crusoe.

crusoe One who is shipwrecked on a desert island, like the hero of Defoe's book. robinsonade A novel with a subject similar to that of Robinson Crusoe; a story about shipwreck on a desert island.

1847 Blackw. Mag. These outcasts from civilisation, the adventures of most of whom would furnish abundant materials for a Robinsonade.

如の corner の原義の元から脱離すれば、出走の立壁に兜ふくらひの如き(OEDの定義では困難に陥った)  
かねてやうなクルーハー——アーヴィング、アルフレッド crusoe & robinsonade など、直譯クルーハー——  
黙示の原義が「クルーハーのまゝの孤島に漂着した者」である。robinsonade の元には「文明社会  
からの隔絶やおたずね」による離棄が見かけられ、クルーハーは墨やぬきのイメージが窺へる。

默示黙示——、OEDの元田を訳してゐる、トトモーリー氏は「文明社会から隔絶した存在  
やおたずねの如き——」と訳してゐる。トトモーリー氏は「イタリア朝の有名な批

詩家がいながら、彼の著作物からの引用も *OED* にば多く取られた(九六例)。“ハーネーはトトホーとの二つの研究書も著してゐるが、その中で *OED* が取られたのはトトホーが社会と対抗したときの記述がばとんじである。例えは「雑誌の編集者は彼から遠ざかれた」とか、「彼と同じ宗教の信奉者たちは彼がそのような形に処せられたのは彼自身のやうだ」として彼を非難した」とか、「彼の批判したペントレシル」といふた真面目である。代表的な作品の主人公(ハーネー)はクルーソーの持つイメージが逆にその作者(ハーネー)に投影された現象がハーネー見て取られる。

### *scholiast*

1864 Lowell... With what pride did we hail her [the ship's] return! She was our  
*scholiast* upon Robinson Crusoe and the Mutiny of the Bounty.

### *paper* (v.)

1865 F. T. Buckland... A lady... asked him if he was Robinson Crusoe that Mr.  
Buckland had papered.

如の「注釈者」の用法や「紙貼り」、クルーソーの「貼る」とせ當時かなり行なわれたものであつた。*paper* の頃田や「紙貼り」が語及もおこる。注釈を入れる行為=scholiast & 「...に  
のべて書く=paper」へいた語義の用法の中にクルーソーが語及せられてゐるわけだ。ヴィクトリア朝の人たちは『ロマン・クルーソー』などの大いに語り書いたのではなかいか。

彼ら、彼女らが心の内に抱いたかくの内容を窺う際に参考となるのは、「神観説」から頃田の引用である。

### objective

1855 Fitzjames... The book [Robinson Crusoe]... is, to use a much-abused word, eminently objective; that is, the circumstances are drawn from a real study of things as they are, and not in order to exemplify the workings of a particular habit of mind.

いわば、『ロビンソン・クルーソー』はあくまで特定の心性の働きを例示するものではなく、作品の様々な情況は現実のあくまでその際を研究したいふかの趣がれたものなので、極めて客観的な作品なのだ、といふことである。

以上述べたもとで、『ロビンソン・クルーソー』は固い作品であるむかゝクレヨン朝の人々は感じた。この固いやむを得ない、クルーソーは文明から隔絶せねば、さすれば改換して文明社会は歸つていいや神なのだと云ふ解があつた。『ロビンソン・クルーソー』という作品はいつ頃からいふが流行つたが、語の際に重要ないいざ、やの現実性・客觀性に重きを置いて教訓を引き出していくのである。

事実、先述した文芸批評家であるハーマン・ホフマンたよな意見を表明してゐる。たなむか、『ロビンソン・クルーソー』のみが時代を超えた芸術作品であるむかゝ時代、やがて『ロビンソン・クルーソー』は決して

てでうちあげの作品ではなく、現実に即した実践の書物なのだと「う」とである。十八世紀に西インド諸島にいく船旅の途中で難破し、一人きりで孤島に取り残されるという事態は十分考えられるものであったとされる。その上で、その事態にどう対処し、逆にこの孤島を自分自身のものにしていくかが重要なのであり、『ロビンソン・クルーソー』を読むことで我々はそれを教えられるというわけだ。

デフォーの作品の中で同じく切実な現実の問題として例に挙げられるのは、モル・フランダーズが夫とヴァージニアに流刑で流されたときまず運命を切り開くために必要なことを考える場面、それからカーネル・ジヤツクが同じくヴァージニアでプランテーションを切り盛りし、運営していく手立てを考える場面である。(一)これらはすべて植民地にまつわる話題である(二六一)。『ロビンソン・クルーソー』が植民地文学として読まれるとき、これは決してフィクションではなく、現実処理の一例、もしくは植民地経営マニュアルとして読まれるはずだといつた意識が感じられる。

OEDにおいても、またこの時代を代表する批評家であるバンターにしても、『ロビンソン・クルーソー』においてもひとも関心を引かれた問題は、植民地の問題であったようだ。この大きな関心の理由は、すなわち植民地の問題が『ロビンソン・クルーソー』から約百五十年後の帝国主義のヴィクトリア朝イギリスにおいても『ロビンソン・クルーソー』の時代と同じぐらい切実な問題であったからに他ならない。

ドウモの難題に付く。ソシテ用を總括するトモリで、アリ。

## emblem

1719 De Foe *Crusoe* i.14 And my Father, an Embleme of our blessed Saviour's Parable, had even killed the fatted Calf for me.

## enter

1719 De Foe *Crusoe* (1840) He would...endeavour to enter me fairly into the station of life which, etc.

最終的に絞り込まれた標題を詳しく述べてみる。批評家がいつのまは父親の権威が大きくなるのだと思ふのが常である。emblem の定義「ある種の美德美質を持つて命ぜた人物の擬人化」の例として、『ロムンヘン・クルーケー』の「私の最も深い我らが救い主の象徴であるわたしの父は、わたしのために太った子牛を殺してやれやめられた」と云ふ船員が取るお神にも出でても父親の権威への関心が窺われる。enter では父がねたしを社領やしおぬぐれ地位に上げようと努力してやれたところ箇所が取られ、父親のまゝのまは牛を社領で猪の骨の代りに牛の頭の皮をかぶせたところが強調される。

## middle

1716 South Serm. And therefore men of a middle condition are indeed doubly happy.

「ハーバードの『middle』なのやない、middle の原義は『ロマンス・カルニー』から一箇所引用が取られたね」、美德の神の生活を説いたりする人生の中庸の生活、「がめらか」と「がまぐち」用例が取られる。一七八一年の引用では「中庸の生活を行つるのは一重に幸福である」と云ふ部分がとられ、それが説教集からの引用やおじいさんから、ダイクトな傳理宗教觀による父親の教えを持つ中庸の生垣を説くのが重點であることがわかる。

indigested b. Not ordered in the mind; not thought out; ill-considered.

1719 De Foe *Crusoe* The wild and indigested Notion of raising my Fortune.

如の用法は父の教えに關して「幾千金を夢見たり」と、皿の端に手を下すのカルーネーが口メンテを加えれば、*OED*でいう語の *indigested* は注目すべき言葉で、親の心の事を聞くかぎり家から飛び出でる心を消化不能の未成熟な物であるという説教異論語の半の見方を理解してある。

18世紀の『ロマンス・カルニー』理解に關して、カルニーは父親の教えに財を貰わなかいたがゆえに孤島上に旅立った人物であることを強かつたと述べてゐる。

Robinson Crusoe The name of the eponymous hero of Daniel Defoe's fictional narrative (1719), who survives ship-wreck on a desert island, used allusively.

1878 Trollope *How "Mastiffs" went to Iceland* ii. 6 Though the life of a Robinson

Crusoe or a few Robinson Crusoes may be very picturesque, humanity will always desire to restore a Robinson Crusoe back to the community of the world.

repenting

1719 De Foe *Crusoe* i. (Globe) Like a true repenting Prodigal.

たゞし、彼はついおどかしの驕を受けてゐるやせなく、カイクムコト朝の読者わんがお詫びだんだりと、「ローハン・クルーサー」の冒頭で「人間がいたいもクルーサーのよつたな人物を世間に、社会の中に復帰されたる願望してゐるのだ」からやむべく理解である。「後悔する」の意味からぬかぬように、クルーサーはある意味で父に背いた自分の行為を後悔するのやうに、心に神に詛められ、最終的に社会に復帰するのである。

人が強制的にあの場所に監禁されぬまいとは地獄になり、その場所に血の悶じ籠る、ぬづくせんの監禁を乐しえやしあうせいりせナードポアにならざらのば、ドワオーの作品の一部一セグメントである。孤島に幽閉されたりぬむどう状態を逆転の発想によじて、血の意志や開拓すべきペラタイスの新大陸と考える、いふむ可能である。ドワオーは孤島は他のたゞやつのカリブ海の植民地になりつゝ土地を區切るロハペ人の垂涎の由である新大陸となる。

『ローハン・クルーサー』でも画の事態が生じてゐる。上のやうな逆転のダイナミクスはOEDのやうな書も込まれてゐないが、東洋や東洋の文化に積極的植民活動がOEDに挿入込まれてゐる。

1719 De Foe *Crusoe* (1840) I had a great desire to make a more perfect discovery of the island.

plant

b. To settle (a person) in a place, establish as a settler or colonist.

1719 De Foe *Crusoe* (1840) My being planted so well in Brazil.

如の語は「やまと」の植民地主義に關する而擴張的なる、plant、は「ヨーロッパ・カバーへー」等様に八回の語が使われてゐる。植民地主義的意味で使用される回数が多いため、比較的曖昧な plantation や「の語が多く」に用かかねば、その「開拓地と植民地」といふ意味の箇所が採用されるのが注目すべき点である。

植民活動を行つたる先住地のカリブ人は眞然邪魔地であるせうだ、OED ではリバウエーと翻訳された敵対者を含む侵略者である。

Carib

1719 De Foe *Crusoe* (1858) Their battles with the Caribbeans.

*Ibid.* (1858) 320 How 300 Caribbees came and invaded them.

brutality 4. Inhumanity, savage cruelty; an inhuman action.

1719 De Foe *Crusoe* (1840) Hellish brutality.

扣の Carib の領地の示用で「極度の残酷のレーベル・カルーノー』に詠じたるカリブ人の一  
口づけ人の戦いを取り上げた所であら、brutality の領地や示用やおこる Hellish brutality は概ねカリブ  
人たちが人肉を食べた行為に対する感想を述べた箇所である。残酷=カリブ人の一式が見て取られる  
ところ。

食人のふりの行為は枚やく OED の語彙の中みなみなだらぬものである。食人の場面の示用は多い。食人  
を殺さ上かた頃皿が eating, feast, man, slaughter などである。

### eating

1719 De Foe Crusoe (1840) The said man-eating occasions.

### feast

1719 De Foe Crusoe (1840) And make a feast upon me.

### man

1719 De Foe Crusoe They...being men-eaters.

### slaughter

1719 De Foe Crusoe Two miserable Wretches...were now brought out for the  
Slaughter.

“slaughter”せしむかべ、「食ぐれ」、「人間」エシマト海賊の示用ふつて食人の場面が取  
ら出せます。黒船は異様な感じだ。リリヤウム示用を連れまへ、人間＝食ぐれ＝リリヤウムだね。『ロムハヘノ・クル  
ーク』にねこべ「人間は食ぐるヤリムルハ」エシマト出でたのがだれか。

食人を行うカリーバ人せ先住権による植民活動を妨げぬ事であつ、理由やなぜか存在だ。

live

1719 De Foe Crusoe (1840) The savages in the boat never could live out the storm.

1719 De Foe Crusoe (1840) The savages in the boat never could live out the storm.  
1719 De Foe Crusoe (Globe) They were all stupidly ignorant as to Matters of  
Religion  
executioner 1719 De Foe Crusoe (1840) To take upon me to be...an executioner of his  
[God's] justice.

「愚かに」の引用部分からわかるように、宗教（キリスト教）を知らない」とはすなわち愚かな」とである。宗教を知らない野蛮人は「処刑」されても仕方ないものと考えられているのではないだらうか（事実『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』では処刑される野蛮人や、処刑される異教徒などのエピソードが数多く描かれている）。「処刑する者」で引用されている部分は、野蛮人を殺していいものかどうか逡巡する場面である二六四。

しかし、わたしに思ついたことは、どんな使命や必要があつて、わたしに何もしていいししようともしていいない連中を襲つて手を血に染めることがあるだらうか、とこうことであった。彼等はわたしには罪を犯していないし、その野蛮な習慣は彼ら自身の破滅であり、実際それは神が彼等をそのような愚かな非人間的道に進むがまことにされたという事実なのだ。決して、わたしが彼等の行為を裁くとか、いわんや神の審判を実行すべき立場にあるわけでは無かつた。神は必要とあらば自らの手で罰されるであろう。

しかし、引用部分だけを見る限り、クルーソーは神の意志を実行する責務を負つたように見えるし、人肉を食う行為を行う“stupid”や“barbarous”な野蛮人は、上のような逡巡にも関わらず後にクルーソーの手にかかるて殺されるのである。宗教的な側面から言えば、クルーソーの人道的言辞とは裏腹に、彼は神に代わつて非人道的な行為を行う野蛮人を「処刑する者」になることに間違いは無いのである。

1719 De Foe *Crusoe* He had a Bow and Arrow, and was fitting it to shoot at me.

fury

1719 De Foe *Crusoe* He flew upon his murderers like a fury.

カリバ人ヒカルーハーたわの戦いやは、カリバ人が攻撃をかねてゐる場面が fit や雷やねる。ホントクルン  
一ノ一や仲間が曲いの意地で攻撃をしかけの場面は雷用やねる。ホント「復讐の鬼」や雷用やねるのば、ホ  
もに凶ひつて食ぐる六十前やあいたボハトガル人が、復讐の鬼と化してカリバ人に飛びかかる場面である。  
リスモドシ | 運 G OED の雷用を丹念に追ひ、人肉を食へよ」と「野蛮な行為」を行つた、キリスト  
教ヒ「罪惡々」「カリバ人」がヨーロッパ人に攻撃をかけ、やむなく、神の意志を実行するヨーロッパ人が復讐の  
ためニ野蛮人を処刑するやういた物語構造があらわだやうである。

learn c. To teach (a person a thing). Also with clause.

1719 De Foe *Crusoe* (1840) Having learnt him English.

Poll

1719 De Foe *Crusoe* (1840) I...learnt him [a parrot] to know his own name;..Pol.

最初の戦いノムヘ獲得したワイヤーは、「敵彼」の頭田ド雷用やねるモノは、教化の対象にならぬ  
ドスモ。Poll G 「見た」は彼=鷲鶴はねあべの名前せボハトガル教ペトアヘイタ」アルド雷用の女はワイヤー

英語を教えたやうだったといふ事用とせせ回しである。鸚鵡のボルトワイヤーは回し次元で捉えたおもしろいんだがよくわかる。クルーソーは鸚鵡に名前を呼ぶのは捕られたカリブ人によってヤードーと名前を与えるねだ。

### leading

1719 De Foe *Crusoe* (1840) They would be absolutely under my leading, as their...captain.

### engaged b. Obliged, attached by gratitude.

1719 De Foe *Crusoe* (1858) Never man had a more faithful, loving, sincere servant than Friday was to me... perfectly obliged and engaged.

leading の用法をみながら、クルーソーはハイドーと最後に島に上陸したイギリス人たちのユーティリティーは、ハイドーに助けられた彼のは心底からの感謝の念を胸に抱いて忠実なる僕となる。「感義を感じる」という意味で、ハイドーがクルーソーに感じたこの感謝の大それどもお世え忠実で誠実な「召使」はなかったといふのが専門である。

アルセー、以前筆者が第十一章で體じた事だが、感謝は人間のいたがたの母なる基礎的な感情であるアルセーの認識が、ハイドーの性品の母なるものである。リルバードは次の OED の項から翻訳である。

recompense 1. trans. To reward, requite, repay (a person) for something done or given.

Const. for, of (the thing done) and by, with (the return made).

1719 De Foe *Crusoe* The first Thing I did, was to recompense my original Benefactor.

「クルーハーが無かったいとは最初の恩人にお返しをすゑりふだ、おや人間最初にやくわ  
りふせ感謝を感じて相手に返事をするんだある。

たゞし、感謝の感情が田上のゆのゆのゆのゆになら、かゝる強要と云う側面がフイクヽヽヽ  
の語りの中や隠蔽われぬと、支配するの対被支配者の間にあらはせの陰鬱な感情のゆゑには整理され  
てしめう。そして、支配者に都合のよし口当たりの良じトイペースが形成され。OED の引用を辿る  
この過程がおき出しの示用の形で提示われてゐるだけに、ドヘオルメされた然で壁が立ち上がるのを気が  
つかせるを得なくなる。このもとにして読みこなした OED に収在する「クルーハー」は露骨な拡張主義者であ  
り、植民地活動を正当化しうする権力的植民地主義者として批判しうべき概念である。

以上で捉えたチャーチル朝のクルーハー像は、まず父親の教えを守らなかつたために島流しと云う罰を  
受けた、教訓となぬぐき否定的クルーハーのイメージであった。ところが逆に、植民者と云う観点からクル  
ーソーが読まれるとき、彼はヨーロッパに新たな植民地をもつた、當時としては肯定的に捉えられる模範  
像として浮かび上がる。しかし物は矛盾したイメージだが、これまでにしてゆかれてきた教訓なのであり、た

とえ統一的クルーソー像が見えなくとも *OED* はこのやうに闇知して、なにようと睨ねれる。」(61-1)のイメージの間には、クルーソーの経済活動があるわけや、隠ひめられた牢獄を努力によつてペラダイスに逆転させるエネルギーがあるのだが、残念ながらやいあれば *OED* には書き込まれない。それがい、由のを正当化するためにクルーソーが用いる巧妙な逆転の論理なんやうやく見えていいだ。

結果として、*OED* 61-11頁の箇所の引用を何度も筛にかけてようやく残ったクルーソーの外見はかなり「アーリー・エイジ」なり、教訓と結びついた一れ自身非常に寓話的なエングレーヴィングとしての姿である。これは先ほど論じたハイクトリト朝の『ロジンソン・クルーソー』像と繋がるもので、相互に補完しながら、「ハイクトリト人クルーソー」とやうづくべきマタフターを作り上げてゐる。

宗教的觀点からいへても、教訓にならひは無いのに結構なリードおいたと言える。英語といふ言語には人を道徳的に導くガイドとなる力があるといつてナンチの言葉の通りにクルーソーはハイクトリトに英語を教えた。いや出で道に導いたのであつた。他の様々な局面においても、『ロジンソン・クルーソー』は道徳的ガイドとして十分役に立つて、*OED* 61頁を退けりふと美説でもたらす點だ。

memento b. concr. An object serving to remind or warn in this way.

1719 De Foe *Crusoe* I have been, in all my Circumstances, a Memento to those who are touch'd with the general Plague of Mankind.

クルーソーはメメント(教訓として警醒や戒めのくも者)なのやう。

以上、*OED—CD2*を利用しながらヴィクトリア朝におけるクルーソー像を探ってきた。本章の初めに仮定した、引用選択に関する恣意性とその引用に与えられる定義の偏向について、前者に関しては、はつきりとした価値観が刻み込まれていることが実証できたように思われる。後者にはそれほど顕著な偏向は認められなかつた。これは、『ロビンソン・クルーソー』の引用が収集されていたファーニバルらの時期と、それに定義を与える作業を行つたマレーの時期との間に二十年ほどの時間の断絶があることが寄与していると推測される。マレーは単語の定義の中に偏向が入る可能性を十分認識しており、これを極力避けたことが最も大きい理由であつたと考へられる<sup>(二六五)</sup>。それに比べ、イギリスの威信をかけてひたすら言葉を収集していたファーニバルの時期の篤志文献閲読者たちの仕事にヴィクトリア朝的価値観が無意識に入り込むことは極めて容易だつたと想像される。しかも、その間の何十年かは、まさに世界に冠たる英文学のキャノンがヴィクトリア人たちの手によつて形成されていた時期である。さらにこのデータは後の編纂作業の際にさらなる絞り込みが行われたわけだが、その作業の中にもこのような意識が忍び込んでいたであろう。*OED*の『ロビンソン・クルーソー』の読みには「英文学」というキャノンの形成が写し出されているのだ。

また、マレーが恐れていたのは、篤志文献閲読者たちが希少語探しにうつつを抜かさないかといふことであつたが、この初期に集められたと考えられる『ロビンソン・クルーソー』にはそれほどこのことは露わになつていない。そのかわり篤志文献閲読者たちは、単語そのものに対する意識以上に物語のプロットに引きずられて单

語を収集していたという傾向が如実に観察される。

『ロビンソン・クルーソー』の有名な場面は、「と」、「とく」で引用されている。冒頭部分、クルーソーが金銭を難破船から引き上げ、孤島で金が何の役にも立たないことを嘆く場面、波打ち際にクルーソーが足跡を一つだけ見つける場面、フライデーがスペイン人を野蛮人から助ける場面、フライデーが熊と踊る場面、等々が引用として挙がっている。こういった印象深い場面や文章というものは時代にかかわりなく楽しめられてきたようで、デフォーの十八世紀からほぼ変わらず引用されたり挿し絵をつけられたりしている。雑志文献閲読者が引用を採用する基準として、その場面の印象深さということが大きな要因としてあつたと考えられる。

その意味で、人肉を食べる場面の引用が多いのも、場面の印象深さという理由もあつたと考えられるだろう。本章で絞ったクルーソー像の三つの特徴、すなわち人気の高さ、社会からの隔絶者クルーソー、そして植民者クルーソーのうち後の二者は教訓という点でくくられるが、最初の人気、おもしろさという特徴については少し異なる意識が働いていたようだ。雑志文献閲読者たちは、楽しく印象深い場面を「と」、「とく」で引用として選択する行為の中に、時代を超えて変わり無いクルーソー物語への無邪気なめりこみを再構築していたのである。

しかしもちろん、「無邪気」な心の中に滑り込んできたイデオロギーを看過することはできない。娯楽と教化は、『ロビンソン・クルーソー』の序文にあるように（第一章参照）小説を読むことの二つの効用であったが、娯楽は「教化」と一体のものである。十八世紀前半の『ロビンソン・クルーソー』の持つイデオロギーは、ヴィクトリア朝の価値観に翻訳され OED に書き込まれた。ヴィクトリア朝人の野望と帝国主義のイデオロギーは、雑志文献閲読者の引用文選択過程に忍び込んだ。OED は OED を参考する読者たちを、「」、「そりと」、「教

## 注

## 註

「」の小説起源論に題する文庫の企画をもとにした長文題である。本文の纏綿を展開する際は、  
その重要だと述べた川上みゆきの論文を参考。<sup>10</sup> Lennard J. Davis, *Factual Fictions: The Origins  
of the English Novel* (New York: Columbia University Press, 1983); Homer Obed Brown,  
*Institutions of the English Novel* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1997).

<sup>11</sup> Ian McEwan, *Atonement* (London: Jonathan Cape, 2001).

<sup>12</sup> Wayne Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: University of Chicago Press, 1961). 翻訳は米  
本弘一、『論語』、渡辺根留器、山口一郎、『ハーバード・クライクンの藝術』(水声社、1991)。  
四　愛べき Lady Mary Wortley Montagu(1689-1762)は、女性の女人は17世紀から18世紀イタリ  
アド麗生活を好んでいたが、彼女はエリザベス・クリーリングやジンなど多数  
の小説家の作品を読み漁っていた。小説は消費されるものであつて、余暇を過ごす際に重要な伴侶とな  
りうるが、十八世紀後半からの現象として考むべき。<sup>13</sup> Isobel Grundy, *Lady Mary Wortley  
Montagu—Comet of the Enlightenment* (Oxford: Oxford University Press, 1999) 11-12章を参考。  
十八世紀。

- Homero Obed Brown, *Institutions of the English Novel*, Preface 略。  
 Matthew Kneale, *English Passengers* (New York: Anchor Books, 2000), pp. 417-8.  
 Zadie Smith, *White Teeth* (New York: Random House, 2000), p.375.  
 Martin Green, *The Robinson Crusoe Story* (Pennsylvania: The Pennsylvania University Press, 1990).  
 ○ 順應體長篇『ロビンソン・クルーソー』(オーバード・ブランズ, 2000)。  
 11 Diana Souhami, *Selkirk's Island—The True and Strange Adventures of the Real Robinson Crusoe* (London: Weidenfeld & Nicolson, 2001).  
 11 Linda Colley, *Britons—Forging the Nation 1707-1837* (New Haven and London: Yale University Press, 1992). 民族の三元論的『ナショナル・アイデンティティ』(オーバード・ブランズ, 2000)。  
 11 Benedict Anderson, *Imagined Communities* (London: Verso, 1991).  
 14 Colley, p.15.  
 14 Colley, p.53.  
 14 Colley, pp.53-4.  
 14 Daniel Defoe, *Robinson Crusoe* (Oxford: Oxford University Press, 1972), p.92.  
 14 H.O.Brown, pp.179-80.  
 14 Daniel Defoe, *The True-Born Englishman in Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verses, 1660-1714, Volume VI: 1697-1704* (New Haven and London: Yale University Press, 1970), 11.45-54. 『出典◎ ベニスの文豪』(オーバード・ブランズ)、『歴史小説の本筋』。  
 10 Daniel Defoe, *Moll Flanders* (Oxford: Oxford University Press, 1971), p.60.

二

Anderson. x

Callaway 13

卷之三

酒井直樹『主体とは何か』現代思想 1993年10月号

<sup>11</sup> Ernest Renan, "What is a nation" in Homi K. Bhabha (ed.), *Nation and Narration* (London:

Routledge, 1990), p.19.

<sup>14</sup> Daniel Defoe, *The History of the Union Between England and Scotland, with A Collection of Original Papers Relating Thereto* (London: John Stockdale, 1786), p 458.

The supererogations instant here are the rights of vassalage which the Society of Scotland have over the people; which, as it is extended, gives the chiefs and heads of clans, laird, and heretors, such an absolute dominion over both the persons and goods of the poor subjected people, as seems perfectly inconsistent both with the peace and improvement of Scotland in particular, or of any free nation in general...” スコットランドの歴史と文化

<sup>112</sup> Daniel Defoe, *The Compleat English Gentleman* (London: David Nutt, 1890), Part 1, Chapter

二章 ハーナーの君主論は、見ロシク的近代統治論に見えるが、総合的に見るとむしろ旧約聖書のサウル王に見られるような、武器を棄てて人民を先導する国王像を理想と掲げていたと考えられる。この論述に關しては、Manuel Schonhorn, *Defoe's Politics—Parliament, power, kingship, and Robinson Crusoe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) の第六章を参照。

County, p. 300.

二九　）の坂の Schonhorn 説と合致する。

<sup>11</sup> ○ Homi K. Bhabha, "DissemiNation: time, narrative, and the margins of the modern nation" in Homi K. Bhabha (ed.), *Nation and Narration* (London: Routledge, 1990).

111 Bhabha, p.311.  
111 Bhabha, p.292.

## 第六章

J.Hector ST John de Crevecoeur, *Letters from an American Farmer* (Oxford: Oxford University Press, 1997), p.42.

煙田是火薌株の風味——「米輪庄外傳」(昭和20年)、大正10年。

Daniel Defoe, *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of ROBINSON CRUSOE* (London: J.M.Dent, 1895), p.65.

*Serious Reflections*, p.65.

*True-Born Englishman*, 1.372.

Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, p.49 「——」株の風味。

Lennard J.Davis, *Factual Fictions—The Origins of the English Novel*, p.79.

◎ Daniel Defoe, *A True Collection of the Writings of the Author of True-Born English-man* (Printed, and are to be sold by most Booksellers in London and Westminster, 1705).

◎ Daniel Defoe, *A Second Volume of the Writings of the Author of the True-Born Englishman* (Printed, and Sold by the Booksellers, 1705).

◎ Charles Gildon, *The Life and Strange Surprizing Adventures of Mr.D.... De F..., of London, Hosier, who Has liv'd above fifty Years by himself in the Kingdoms of North and South Britain* (London: J.Roberts, 1719) as reprinted in Paul Dottin (ed.), *Robinson Crusoe Examined and Criticis'd* (London & Paris: J.M.Dent & Sons Ltd., 1923).

- Defoe, *A Second Volume*, A3.
- Defoe, *A True Collection*, A3.
- Defoe, *A True Collection*, A4.
- Defoe, *A Second Volume*, A5.
- Defoe, *A True Collection*, A5-A6.
- Davis, chap.III.
- Serious Reflections, ix.
- Serious Reflections, x.
- Serious Reflections, xiii.
- 「トトト—セントラル」の文庫版 P.N.Furbank & W.R.Owens, *The Canonisation of Daniel Defoe* (New Haven & London: Yale University Press, 1988) の注釈や参考文献として P.N.Furbank & W.R.Owens, *A Critical Bibliography of Daniel Defoe* (London: Pickering & Chatto, 1998) の注釈を参考して『概要』
- 著作としての「セントラル」
- 紙一巻叢書。
- Serious Reflections, p.101.
- Daniel Defoe, *The Compleat English Gentleman*, Part1, Chapter 1 & Part2, Chapter2.
- Davis, p.217.
- Terry Eagleton, *Ideology* (London: Verso, 1991), pp.45-6.
- 煙井恒基「サントラル」、a. ~ o.
- 須尾龍太郎『ロマンスの歴史』(新潮社、1994)、a. ~ o.
- Geoffrey Sill, *The Cure of Passions and the Origins of the English Novel* (Cambridge: Cambridge University Press, 2001), pp.86-7.
- Gildon, pp.82-3.
- 「盗賊の小説」は、本著は René Girard, *Deceit, Desire & the Novel* (Baltimore and London:

The Johns Hopkins University Press, 1965)によれば、物体と客体と仲介者で形成するものだが、私は異なった意味で使用している。いわばクルーソーは読者を欲望し、読者は読む対象のクルーソーを欲望するという意味で主客は交換可能である。しかしクルーソーと読者の関係が同定されるためにはライターといふ他者が必要であるから、ライターは、クルーソーからの読者からも欲望される。その意味でライターは仲介者ではあるが、ライターが欲望する物体みなみは絶対あり得ない。

Homi Bhabha は植民地主義的「ミミクリー」が欲望する性質では、「世話を區分だが、完全にはそのどちらかの類型を兼ねて存在する」といふ。Homi Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994), p.86; "...colonial mimicry is the desire for a reformed, recognizable Other, as a subject of a difference that is almost the same, but not quite."

## 第三章

- カム Paula R. Backscheider, *Daniel Defoe—His Life* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, p.102).
- カム Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, p.3. 以降示す限り一ヶ数のみに限る。
- カム 「其宗世」の書簡と譲り受け、木本松蔵「『モーリー』と『モーリー』の『挿説書』」(2001年刊行) 参照。
- カム Homi Bhabha, *The Location of Culture* (London: Routledge, 1994), p.86.
- カム Martin Green, *The Robinson Crusoe Story* (Pennsylvania: The Pennsylvania University Press, 1990) 参照。ただしカム一貫『モーリー』をクルーソーと同一物語群の一部として扱つてゐるが、彼による『モーリー』は「歴史的小説」であつ、「モーリーの改変」にしかなる。

Daniel Defoe, *Roxana* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p.3. 以降略すが、一部のみ

記す。

○原タマムラは本の譯文である。The Fortunate Mistress: Or, A History Of The Life And Vast Variety of Fortunes Of mademoiselle de Beleau, Afterwards Call'd The Countess de Wintzelsheim, in Germany. Being the Person known by the Name of the Lady ROXANA, in the Time of King Charles II.

）の翻訳の“friend”の邦義は「友」で、OEDの邦義は「親類」である。しかし、作品を通じて“friend”は数多く登場し、共通する趣旨として私は指摘するものでは事実があると想われる。

）イギリス政府の認めた公使の植民活動の位階である「カバナー」が用いられる。

）ルウェルムクルーハーが自分の名前を名乗るのではなく、自分の頭部から仕事の行田、ややこしい體のボンに名前を教えるのがのみである。

J.M.Coetzee, *Foe* (Harmondsworth: Penguin Books, 1986), p.9. 以降略すが、一ヶ数のみや少す。

Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999), p.191 は、「事態を「ネイティブ」と「トル」の人間は、並んでやりとりを交わす連続の状況」、「道徳の欠陥を露う」などである。しかし、この語の翻訳の方で挙げられる。

）「比較言語文化論——翻訳文化の境界——」（『翻訳文化学講義』大阪大学出版会、1997）, p.30 や木村茂雄は「の沈黙に關して「翻訳と抵抗と発語の問題」を正確に指摘している。

- トウビウ Tobias Smollett, *Roderick Random* (Oxford: Oxford University Press, 1979), pp. xliv-xlv.
- ダミアン・グラント Damian Grant, "Roderick Random: Language as Projectile", in *Smollett: Author of the First Distinction*, Alan Bold (ed.) (London: Vision and Barnes & Noble, 1982), p. 145.
- ジョン・M・ワーナー John M. Warner, "Smollett's development as a Novelist", *Novel*, v. no. 2 (1972), p. 150.
- ジョージ・M・カール George M. Kahrl, *Tobias Smollett: Traveler-Novelist* (New York: Octagon Books, 1978), p. 25.
- ウォルター・アレン Walter Allen, *The English Novel* (Harmondsworth: Penguin Books, 1958), p. 70.
- ロバート・アルター Robert Alter, *Rogue's Progress* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1964), p. 71.
- ポール・フッセル Paul Fussell, *The Rhetorical World of Augustan Humanism* (London: Clarendon Press, 1965), p. 275.
- パウル・ガブリエル・ブーケ Paul-Gabriel Boucé, *The Novels of Tobias Smollett* (London: Longman, 1976), p. 142.
- ルイ・サージ Le Sage, *Gill Blas de Santillane* ("Collection Folio" Gallimard, 1973), vol. II, pp. 66-67: "Ah ! que de passages de la douleur à la joie, et de la joie à la douleur! Quelle succession bizarre de disgrâces et de prospérités!" p. 204: "Il ne faut pas être si sensible aux traverses de la vie. Vous êtes jeune. Après ce temps-ci vous en verrez un autre."
- ダouglas Brooks Douglas Brooks, *Number and Pattern in the Eighteenth-Century Novel* (London: R. K. P., 1973), chap. vi.
- ブーケ, p. 114.
- IAN C. ROSS Ian C. Ross, "Language, Structure and Vision in Smollett's *Roderick Random*", *Etudes Anglaises*, xxxi (1978), pp. 52-63.
- C. MELVYN NEW Cf. Melvyn New, "'The Grease of God': The Form of Eighteenth-century English Fiction", *PMLA*, xcii (1976), p. 238: "That is to say, it is readily apparent in reading Smollett, for example, that 'elements' of the romance and of satire persist in his fictions, while 'novelistic' elements

also become evident.”

☞ Cf. Ian Watt, *The Rise of the Novel* (Harmondsworth: Penguin Books, 1963), p. 24: “The novel's plot is also distinguished from the most previous fiction by its use of past experience as the cause of present action: a causal connection operating through time replaces the reliance of earlier narratives on disguises and coincidences....”

## 據長編

☞ Tobias Smollett, *Ferdinand Count Fathom* (Oxford: Oxford University Press, 1971), p. 374,

p. 381 繁。各段，上段是當年所作，下段是後年所作。

☞ Paul-Gabriel Bouc , *The Novels of Tobias Smollett* (London: Longman, 1976), pp. 145-174.

☞ 諸君所見，據翻寫繁體字本，David Hannay, *Life of Tobias George Smollett* (London: Walter Scott, 1887), pp. 90-91.

☞ William Hazlitt, “Lectures on the English Comic Writers”, in *The Complete Works of William Hazlitt* (London: J. M. Dent and Sons, 1931), vol. VI, p. 117.

☞ Lewis M. Knapp, *Tobias Smollett: Doctor of Men and Manners* (New York: Russell & Russell Inc., 1963), pp. 319-320.

☞ Bouc , *Smollett*, p. 172.

☞ Thomas R. Preston, *Not in Timon's Manner* (Alabama: The University of Alabama Press, 1975, T. O. Treadwell, “The Two Worlds of *Ferdinand Count Fathom*”, in *Tobias Smollett: Essays Presented to Lewis M. Knapp*, G. S. Rousseau and G. Bouc  (eds.) (New York: Oxford University Press, 1971) 繁。著者 M. A. Goldberg, *Smollett and the Scottish School* (Albuquerque: University of New Mexico Press, 1959) 繁“art”與“nature”之間的關係，詳見該文。

ハリの二種類に分類していき。

九八 「感情の人」の定義については、榎本太『ハ・キホールの森のナリ』(中経出版、1985)、p.240 参照。ハリドは、「感情の人」とはリチャード・ハムの作品からの発した「精神の美德の人」や、型にはねられた殺身的な人間であり、保護されねば簡単に悪の犠牲になってしまふ神であると説明していく。

九九 Treadwell, "Two Worlds", p.146.

一〇〇 選べせ、p.20 & p.75 など。

一〇一 Cf. Boucé, *Smollett*, p. 181.

一〇二 Boucé, *Smollett*, p. 135.

一〇三 ハリドは「トロイアの女将」のPreston, *Not in Timon's Manner*, pp. 97-98 など。

一〇四 C. G. Jung, "On the Psychology of the Trickster Figure", in Paul Radin, Karl Kerényi and C. G. Jung, *The Trickster: A Study in American Indian Mythology* (New York: Schocken Books, 1972), p. 195.

一〇五 Jung, *Trickster*, p. 209.

## 解釈

一〇六 e.g. Louis L. Martz, *The Later Career of Tobias Smollett* (New Haven: Yale University Press, 1942), p.170.

一〇七 Yi-Fu Tuan, *Space and Place* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977).

一〇八 Tobias Smollett, *The Expedition of Humphry Clinker* (Oxford: Oxford University Press, 1966), pp.106-7. 云々は、世界の旅の冒頭で、ハリドによれば、この二つが本筋の物語。



第八章

Facsimiles & Reprints, 1973).

—三〇 ニコルソン、『月世界への旅』、p.289。

Daniel Defoe, "A Serious Inquiry into this Grand Question: Whether a Law to Prevent the Occasional Conformity of Dissenters, Would not be Inconsistent with the Act of Toleration, and a Breach of the Queen's Promise", in *A Second Volume of The Writings of The Author of True-born*

*Englishman* (London: 1705), p. 325: "tis not Conformity, or Non-Conformity; 'tis not constant or occasional Conformity is the Question but keeping the Dissenters out of Offices "

者はピーラーリタンである。例えば国教徒を弾劾するため書かれ、想定された読者が国教徒では内部分裂は存在せず、結束せよのだ」と断言して、<sup>10</sup> Daniel Defoe, "More Short-Ways With the Dissenters", in *A Second Volume of The Writings*, p.291, "there is no damnable Schism among

<sup>111</sup> 鈴木善三、『イギリス風刺文学の系譜』(東京・研究社、1996)、pp.147-54。『メソポタミア的風刺の系譜』、『東北大学文学部研究年報』第39号(1989)。

<sup>11</sup> Paula R. Backscheider, *Daniel Detoe-His Life*, p. 148

第九章

Daniel Defoe, *A Journal of the Plague Year*, Louis Landa (ed.) (Oxford: Oxford University Press, 1990). ハサカニセイの豊作年記、ルイス・ランダ著。本邦初訳、木村良子訳、新星出版社、1990年。

Press, 1983), p. 84.

Everette Zimmerman, 'H. F.'s Meditations: A Journal of the Plague Year', P.M.L.A. vol. 87 (1972), p. 417.

F. Bastian, 'Defoe's *Journal of the Plague Year* Reconsidered', *Review of English Studies*, NS, xvi (1965), & Manuel Schonhorn, 'Defoe's *Journal of the Plague Year*: Topography and Intention', *Review of English Studies*, NS, xix (1968) などは、今まへとくに論議する。G. A. Starr, *Defoe and Casuistry* (Princeton: Princeton University Press, 1971) なども。

川井 輝彦訳「『疫禍の癡禍世紀』(『歌斐特の黙想』)」(『黙想』、即ち禪也、1990) pp.1-71°

○ Daniel Defoe, *Due Preparations for the Plague, as well for soul as body* (1722), in G.A. Aitken (ed.), *Romances and Narratives by Daniel Defoe* (London: Dent, 1895), Vol. XV, p. 82.

■ ■ ■ 黒川訳「『黙想の黙想』」(『黙想』、即ち禪也の黙想)、久松正司訳「禪叢社」(1991) p.137。

■ ■ ■ H. Flynn, *The Body in Swift and Defoe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990), chap. 6. 彼女は「黙想」が交換や取引によって既抜き出しへなる彼女の識禪が「都江の淨化するべくの役割」を強調し、個が「べく」としての大な存在に呑み込まれる様を最終的な結果として見る。作品全体を一つの教訓の構えとなる点で、一面的な解釈への懼れをもつてはならない。

■ ■ ■ Starr, *Casuistry*, p.55 せむの「ひとつの箇所を而用して、」の様に数々の修正や譲歩を行なうのは、船の舟に表かれる禪和の性質を帶びたものである。したがって、船の方を少しだけ、リリドムラの重禪達の高さは船の舟の真実性ではなく、船の放棄であると見ねる。

■ ■ ■ 「ハ・ハ・ハー」(『幽遊の禪』)(田村振路、新潮社、1977) p.201°

■ ■ ■ Maximilian E. Novak, 'Defoe and Disordered City', P.M.L.A., vol. 92(1977), p. 247.  
■ ■ ■ J.R. Moore, *Daniel Defoe: Citizen of the Modern World* (Chicago: University of Chicago Press, 1958), p. 320.

一四七 Peter Conrad, *The Everyman History of English Literature* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1985), p.341. Conrad も H. E の社会的責任回避を「よく指摘」、優れたノーベルを行つてゐるが、その社会参加の拒絶と孤立性を強調するあまり H. E の積極性を見過して、作品全体を否定的に捉えてゐるところが印象を留めない。

<sup>1</sup> Conrad, p. 340.  
<sup>2</sup> Novak, 'Defoe and Disordered City', p. 243.

Daniel Defoe, *Roxana: The Fortunate Mistress*, Jane Jack (ed.) (Oxford: Oxford University Press, 1964), pp.329-330.『ロクナート』のトクベヌは、此處に登場する。而て翻訳は、日本文庫本より。訳文は、『ロクナート』の翻訳者。日本語訳は私のものである。

Cf. M. G. Pettigrove, "The Incomplete English Gentlewoman: Character and Characterisation in *Roxana*," in *Studies in the Eighteenth Century IV* (Canberra: Australian National Univ. Press, 1979), p. 139 は、トマス・ホーリーの小説の結末は、すぐである程度開かれたものであると指摘している。『ロクスアナ』では特にその非完結性が作品全体の有り様と有機的に関連している點である。

111 逃心記 D. A. Miller, *Narrative and Its Discontents* (Princeton: Princeton University Press, 1981), Marianna Torgovnick, *Closure in the Novel* (Princeton: Princeton University Press, 1981), Peter Brooks, *Reading for the Plot* (New York: Knopf, 1984) 141  
逃心記 C. R. Kropf, "Theme and Structure in Defoe's *Roxana*" (*Studies In English*

Literature 1500-1900, VII, Summer 1972

James Phelan *Reading People Reading Books* (Chicago: The University of Chicago Press)

pp 15-18.

Pettigrove, "Gentlewoman," p 145 セイイーのスーザン殺害の曖昧さに触れながら、この結

Torgovnick, *Closure*, p. 14.

<sup>14</sup> Maximilian E. Novak, *Realism, Myth, and History in Detoe's Fiction* (Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1983), p. 119.

D.L. Higdon, *Time and English Fiction* (London and Basingstoke: The Macmillan Press LTD 1977) pp. 62-73.

一五九 この手法に簡単に言及した論文はいくつがある。例えば、内田毅「『ロクサーナ』におけるデフ

「小説批評について」（九陽市立大學「人文

六一 「語り手ロクサー」か、作品の母の「経験するロクサー」との関係は、極めて複雑で重要な問題ではあるが、紙面の都合と、論旨が錯綜するため、以下は深く論じない。  
六二 リケントイは「由兎由兔の物語を絶えず前進させのロクナーの疲れを知らぬ」 Hボルギーに言及してゐる。John J. Richettos *Narratives: Situations and Structures* (Oxford:  
Clarendon, 1955) 212-226。

V. O. Birdsell, *Defoe's Perpetual Seekers: A Study of the Major Fiction* (London and

Toronto: Associated University Presses, 1985), p. 152.

スターは、クルーソーが到達した、「神の標榜に完全に頼りきる」と「人間が自らに頼る」との中間を重要視している。G. A. Starr, *Spiritual Autobiography* (New York: Gordian Press, 1971), p.66. しかし私が一二で指摘する「神と人間の慣れ合」は、決して彼らのような境地ではない。スターは、「神を信じない堕落した魂("damned soul")」と彼が呼ぶ、ロクヤーナ自らが語っている

作品の軽説に、私の軽いような神が入り込んでいることを了承しないであろう。しかし、彼が一貫性が無いと言つて退ける「語り手ロクサーナ」の改心したらしい言葉を考慮に入れないと、やはりこの作品から「神」は完全に消え去つていないと考える。ただこの神は、本当のキリスト教的神であると軽うよりは、文学手法上の手段として無意識のうちに取り込まれた「神」であると軽いたまうが正しいであろう。

Paula R. Backscheider, *Daniel Defoe: Ambition and Innovation* (Kentucky: The University Press of Kentucky, 1986), pp.204-205. 彼女は「ロクサーナがほんの後ろを振り返る」などして次に歌謡に進んでいく。軽いロクサーナが「より大きな観点から様々な事件を見て、人生を結末の無い開かれたものを感じて、やよいのや、一への経験によって停止せられることはない」と指摘する。「彼女は最初からある関係が永続するとは思っていないのだ、心理的財政的に準備しておるのである」。ベシクシシャイダーは出でく関係性の破壊を描いている。

Cf. Terry J. Castle, "Amy, Who knew my disease": A Psychosexual Pattern in Defoe's *Roxana*" (*ELH* 46, 1979), p.85-56. Birdsall, *Perpetual Seekers*, p.146. 著者はロクサーナの愛慾性と複数の恋愛との競争によって羅列され、「バトルセロクサーナが必ず誰かに依存しておらず、保護者を必勝とするのにだらけだらけ」。

Birdsall, p.160 セルフオーバーに浮かぶ「皿田な女」の半張りはやしめたる女の連想があわゆく指摘していく。

「六八 彼女自身、大公との関係を続けていたが、しばしば後悔の念を感じ、彼とそのことについて語り合つたが、彼が「一度私たわが改心のりふを語り始めれば、私達は別れ話をしなければなりません」(p.82)と軽い場面でねじこむ。改心は過去と現在の否定につながらないのに、彼女は気が重いでいる。

David Durant, "Roxana's Fictions" (*Studies in the Novel*, VIII, Fall 1981), p.228には次のよくな評価がある。「ロクサーナの過半の眼に見えた象徴が、彼女の最初の大公の形を取つて姿を見せたので、彼女は注意深く彼を自分の新しい生活からの壁離す」。

Cf. Steven Cohan, "Other Bodies: Roxana's Confession of Guilt" (*Studies in the Novel*, VIII,

winter 1976), p.414. ローハンは、これはロクサーナが自分の良心を宥めるためだと主張している。

<sup>1-2</sup> Edward W. Said, *The World, the Text, and the Critic* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1983), p.113 も、反復の「シテ語の懸念」、「事物の転化が限ら」、「類似」した経験が起る。

〔セリ〕 Zimmerman, pp. 171-172 は「」の箇所 (p. 264) を引用しているが、あろうことかこれを時間的に「殺人が起る前」と解釈している。確かにこの辺りの時間は錯綜しており、おそらくそのためにはこの箇所は批評家の議論の対象にならなかつたのかもしれない。

Novak, *Realism, Myth, and History*, pp.114-115では様々なソースが辿られ、「ロクサーナ」が「ノヴァク」は、「デフォー」はロクサーナという人物の中に、歴史上存在した一人の妻の姿というよりも、一人の典型的な高級娼婦を作り上げることを目指していた」と言っている。しかし私には、むしろロクサーナは普遍的な存在というよりも、一回かぎりしかない現在に固着した人生を送っている人物のように思える。しかも彼女はその名前の由来が示すように、参照行為によつて凝縮しながらも外に開いてゆく。これは矛盾したことのようだが、その二つの特質が彼女の独特的魅力を作り出しているのではないかだろうか。  
一七五 Said, *The World*, p.116では、世代間の闘争が起ることからわかるように、反復に伴つて差異も生み出されると言つてゐる。ストーザンとロクサーナの闘争が思い出される。

<sup>22</sup> Frank Kermode, *The Sense of an Ending* (Oxford: Oxford University Press, 1968), p. 47.

Kermode, p. 17.

第十一章

八〇 次の論文は、私と拙論は違うが、心理と肉体の関係に着目して物質性を強調する重要な論文である。Paul Fussell, Jr., "The Frailty of Lemuel Gulliver", in *Essays in Literary History*, Rudolf Kirk and C.F. Main (eds.) (New Brunswick, N.J.: Rutgers U.P., 1960).

<sup>1</sup> *ibid.* Herbert Davis (ed.), *The Prose Writings of Jonathan Swift* (Oxford, 1939-68), V, 30.

八四  
たゞかほ。Samuel Holt Monk "The Pride of Lemuel Gulliver" *The Sewanee Review*

THE BOSTONIAN, OR, AMERICAN JOURNAL OF LITERATURE AND SCIENCE.

*Travels*, p. 382.

source 摂ふる格好の林葉となるべいたゞき H. J. ハーヴィング著 *Literature and Popular Culture in Eighteenth Century* に於ける議論は、Pat Rogers、

ミハイール・バフチーン『フランス・ラブレーの作品と中世・ルネサンスの民衆文化』、川端香男里訳（せりか書房、1980）の第IV章、V章参照。

<sup>12</sup> Steven Cohan, "Gulliver's Fiction", *Studies in the Novel*, 6 (1974), p.11.

次に挙げるのは Wilson の論文、「わの世にせ」から「迷路」へと、一転してやがては「迷路」へと、その表現を使つて、James R. Wilson, "Swift's Alazon", *Studia Neophilologica*, XXX (1958), p.156: "Gulliver has for the moment forgotten his superiority over these people and has shrunk to their size—his adaptability to his surroundings is remarkable." これによると、『アラゾン』 pp.280-281。  
次の一節は、ストニー・タクトの『象徳ルートの旅』(河出書房新社、1983) pp.138-139。 次の二節は、規線の問題についての解説である。 Cohan, "Fiction", p.11:  
"...Gulliver is more a prisoner of the Lilliputians, because he has cast his eyes down to their low stature."

一九一  
メアリー・ダグラス『象徴としての身体』、江河徹、他訳（紀伊国屋書店、1983）、pp.138-139。

（九二）次の引用は、視線の問題についての意味ある発言と言えよう。Cohan, "Fiction", p.11

"...Gulliver is more a prisoner of the Lilliputians, because he has cast his eyes down to their low

一九三三　普通は Cohan, p.10 のように、ガリバーはリリパットで拡大し、プロブゲインナグで縮小したと考えるのだが、私は、リリパットに来る以前は巨人であったガリバーが、リリパットに着いてから縮み始め、またプロブゲインナグではその逆のことが起こったと考へたい。  
一九三三のりふせ、その一例として次に挙げぬか。多くの批評家が指摘するが、こやれも私の  
體恤いたりトレスが違う。Wilson, "Alazon", p.156; Cohan, "Fiction", p.9; John B. Moore, "The  
Role of Gulliver", *Modern Philology*, XXV (May 1928), p.472.

Frederick, M. Keener, *The Chain of Becoming* (New York: Columbia University Press, 1983), pp.112-113. 彼の第11回の説明は結果的に私のものと重なるところもあが、キーナーがあくまで「イギリス」を原点としている点はおこでは全く異なる。そしてキーナーがガリバーの意識的考へに焦点を絞り、「彼はリリック・ハム」といふ所で適応するところは的を外おむると思ふ。

「九五」のエピソードへの注意を喚起してくれたのは、日本ジョンソン協会第十八回パネルディスカッション「ガリバー症候群」における、渡邊孔一氏の発表『ガリバー旅行記』のスカラロジーである。

いた。

「*カーリーのアート*」は、從来古く以来やれたものでいいだ。たゞやせ、程田敏英『カリバー旅行記』

『體争』(藝文社出版、1983)、p.224.

「九九  
Cohan, "Fiction", p.12.

「一〇〇 カーリーが"projector's"として積極的な関心と共感を示したくなる解釈する説もあるが、「カリバーは、好奇心をもつた」とかいう、表面的な言葉尻を捕へりのまゝに軽々しくは危険である。やせら、彼は消極的な観察者以外のものには見えない。cf. Tilton, "Art", p.251.

「一〇一 Cohan, "Fiction", p.12.

「一〇二 Ricardo Quintana, *Swift: An Introduction* (London: Oxford University Press, 1955), p.161.

「一〇三 Cohan, "Fiction", p.13.

「一〇四 田中久美著『魔術十八回』(新潮社、1982)、「カリバー症候群」と表す。渡邊孔一著の『幽霊』(新潮社、1982)。

「一〇五 ハサウエルは衣服の持つ物に着目しているが、「これがカリバーの本の『魔術十八回』」と題して、私の體育服をめぐらしながら書く。Fussell, "Frailty", in Norton's edition of Gulliver's Travels, pp.380-381.

「一〇六 岸川道『魔術』(新潮社)、p.110.

「一〇七 Tilton, "Art", p.255 とあるが Ellen Douglas Leyburn, *Satiric Allegory: Mirror of Man* (New Haven, 1956), p.90 が、"the progressive dehumanization of the people Gulliver visits, the progressive abstraction away from human trait" と記している。つまり魔術十八回が、概念的な形は未だ現れていない。

「一〇八 N.O.著『カリバーアート』(新潮社、1970)、p.198.

「一〇九 Cohan, "Fiction", p.15, James L. Tyne, "Gulliver's Maker and Gullibility", Criticism, VII (Spring 1965), p.160.

「一一〇 久保千鶴著『カリバーアート』(新潮社、1982)、p.192.

「「アーリントンの次の一冊を出版しよ。」 H. R. L. T. p.200,  
専門書『『ハムレットの歴史』』(ヨロ編訳 1984) p.61.

## 第十回

- G. A. Starr, *Defoe and Casuistry* (Princeton: Princeton University Press, 1971).
- Paul A. S. Harvey, "Marginal Annotation Concerning the Amerindian in Purchas His Pilgrimes," *Studies in Language and Culture* 16 (1990).
- Maximilian E. Novak, *Economics and the Fiction of Daniel Defoe* (Berkeley: University of California Press, 1962), chapt. VIII.
- Daniel Defoe, *Colonel Jack* (Oxford: Oxford University Press, 1965), p. 134. 『トマス・ピューリーの死』
- Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, pp.202-3.
- Manuel Schonhorn, *Defoe's Politics--Parliament, power, kingship, and Robinson Crusoe* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), chapt. 6.
- 『トマス・ピューリーの死』
- V. O. Birdsall, *Defoe's Perpetual Seekers--A Study of the Major Fiction* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1985), p. 131.
- William McBurney, "Colonel Jacque: Defoe's Definition of the Complete English Gentleman, *Studies in English Literature 1500-1900*, Vol.II, Number 3 (Summer 1962), p. 326.
- Lars Harveit, "A Chequer-work of Formulae. A Reading of Defoe's *Colonel Jack*," *English Studies--A Journal of English Language and Literature*, Vol. 63, Number 2 (April 1982), p. 131.

Ritchie Robertson, Introduction in Urs Bitterli's *Cultures in Conflict* (Oxford: Polity Press, 1986).

Novak, *Economics*, p. 150.

*Ibid.*, p.150.

*Ibid.*, p.154.

Peter Hulme, *Colonial Encounters--Europe and the native Caribbean, 1492-1797* (London: Merhuen, 1986), Chapt. 5. "Robinson Crusoe and Friday."

Daniel Defoe, *Moll Flanders*, p. 303 "I Told him he frighted and terrify'd with that which had no Terror in it; that if he had Money, as I was glad to hear he had, he might not only avoid the Servitude, suppos'd to be the Consequence of Transportation; but begin the World upon a new Foundation, and that such a one as he cou'd not fail of success in, with but the common Application usual in such Cases . . ."

三井義『此歌の本邦版』(新潮社, 1990)。

Wayne Booth, *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: Chicago University Press, 1961) 8 - 2

Maximilian E. Novak, *Defoe and the Nature of Man* (Oxford: Oxford University Press, 1963), p.118. 『此歌の本邦版』(新潮社, 1990)。Unlike Roxana, Colonel Jack reveals a full sense of gratitude as well as an awareness of the utility of arousing gratitude in others. Sometimes this awareness does not strike us as an admirable quality, for he uses the power of gratitude to break the spirit of Mouchat, a recalcitrant slave, and advances the theory that it is the best means of controlling all slaves."

Birdsall, p. 131. "It scarcely needs pointing out that this master represents to Colonel Jack what God represents to Robinson Crusoe and that Colonel Jack is, in turn, to the slave Mouchat what Crusoe is to Friday. And feelings of gratitude - the importance of which was one of Defoe's most fondly held convictions - become a central subject in this section of the

narrative." ベーツアルはムシャシトに觸及し、しかも感謝原理を正確に指摘しているわけだが、それがテー<sup>ト</sup>トロ以上のおのこ発展しない点に物足りなさがある。

第十三章

John Sekora, *Luxury: The Concept in Western Thought, Eden to Smollett* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1977), pp. 185-6 じせんしゅうじゆ と じゆせんじゆ じゆせんじゆ。然るに Paul Gabriel Bouc , *The Novels of Tobias Smollett* (London: Longman, 1976), p. 229 じせんしゅうじゆ と じゆせんじゆ じゆせんじゆ。Continuation of the Complete History of England (London: Longman, 1848) じせんしゅうじゆ と じゆせんじゆ じゆせんじゆ。

「リネボウの批評が『バーナード・クランカー』に及ぼす影響の歴史的報じられたかを  
論議するもの。試験のSekora, *Luxury* & Boucé, *The Novels & Betty A. Schellenberg, The  
Conversational Circle: Re-reading the English Novel, 1740-1775* (Kentucky: Kentucky  
University Press, 1996) によれば、スコット・イーブンは寛容な部分を重視したのに反し、ペニンシュラの代表的伝記であるLewis M.  
Knapp, *Tobias Smollett: Doctor of Men and Manners* (New York: Russell & Russel, Inc., 1963),  
p.307において、彼は「ペニンシュラはカムコムの結果、プロトベタントの熱狂者や偽善者を  
嫌うたるべく、トトノーブルがメソジスト・イーブンに匹敵する」と書いている。したがって、John  
Vladimir Price, *Tobias Smollett: The Expedition of Humphry Clinker* (London: Edward Arnold,  
1973), p.25では、「ペニンシュラの作風でメソジスト・イーブンを批判し風刺しているが、それにむかかね  
ば、ペニンシュラの根本的な、人間的で忠誠心を持つたむぎのしい性格が悪い影響を受けていない事

実が重要なのだ」と折衷的議論に墮している。プライスの最後の議論は、この作品中において、最終的にブランブルの息子であることがわかる事実によつて同情的に描かれているはずの中心人物が、風刺の対象であるメソディズムを信奉している事実にとまどいを見せており、それを説明できなかつたという事態を端的に示している。この一見矛盾したクリンカーとメソディズムの関係を説明することが本章の目的である。

World's Classics, 1984), p.99. 以降西用はすぐじりの版による。本文中の西用は闇トヒトハ「一」数のみを示す。されば、西用文書のイタリックは私の施したものである。

"...company, bound within studies so secure as to screen up a source of wealth, may easily comprehend how dangerous upon having such a reformer in the family." (*Clinker*, p. 100)

彼の群衆嫌いが乍ら母の心を惹き知るが、例へば次の箇句なれどがある。... for the mob is a monster I never could abide, whether in its head, tail, midriff, or members: I detest the whole of it, as a mass of ignorance, presumption, malice, and brutality; and, in this term of reprobation I include, without respect of rank, station. Or quality, all those of both sexes, who affect its manners, and court its society." (*Clinker*, 37)

典型的なものだ。Schellenberg, *The Conversational Circle*, p.109. ジャンル論者たる H. L. ノーブルを論じる際に、「クレバーカーのメンターバイブルは、……屈座にグランブルの解釈的権威（“interpretive authority”）」への挑戦として無効化せられ、単に彼の忠誠心と屈従を強化せられたもののみならぬ」として、メンターバイブルを、乗り越えるべき迷妄として取り扱っている。一四〇 作品中にはばかのわりと書かれていないが、ブランブルが甥のジエリーの情報を聞いているところには、すでにクリンカーは部屋を退出しており、このやりとりは聞いていなかつたものと考えられる。

〔図1〕 Bouc , *The Novels of Tobias Smollett*, p.230 は賛美にも、アランブルのメンティイズムへの寛容を擁護していくが、なぜ寛容になれたのか、あたりのメカニズムの分析が行われることはない。

〔図2〕 18世紀gentleman という概念に關して“gentleman by birth”か“gentleman by merit”かといふ議論があつた。いわば閑知の通りである。18世紀の背景には、新興市民階級がその努力によって蓄財などをし、紳士たる精神性を身につけたものが、「生まれながらの紳士」に劣ることはないと主張があつた。本章の結論からむねかぬ所へ、ベヤンシムの基本的考え方、生まれながらの紳士を重視する立場があつた。

〔図3〕 彼のボケシムに入へて、『Regeneration』の書物だ Whitefield の説教集であることをかいつの推論がなりた。Hogarth, *Marriage à la Mode*, Scenell (of VI) にて文末脚注最後に挿入した図版を参照。

〔図4〕 Hogarth's Graphic Works: Third Revised Edition, Compiled and with a Commentary by Donald Paulson (London: The Print Room, 1989), p.118.



## 概十四章

1) 国 Maximilian E. Novak, *Economics and the Fiction of Daniel Defoe* (Berkeley: University of California Press, 1962), chap. VII.  
2) 国 K. J. G. 先駆たるたるの開拓者 Peter Hulme, *Colonial Encounters--Europe and the native Caribbean, 1492-1797* (London: Methuen & Co., 1986), chap.5. "Robinson Crusoe and Friday" べん。

1) 国 E. Pearlman, "Robinson Crusoe and the Cannibals," *Mosaic* (10,1), 1976, p. 54.

1) 国 べ 番地に grep が c か t か m か 皮の awk, sed を使用。たゞ、OED-CD2 読みでさせやかに ハハハ C か M か 一々一々を使田した。心の他の処理に使用したパラメータせ、BSD 互換の OS も 紹介 Mach4.0 Unix の標準とした NEXTSTEP3.3J べん。

1) 国 O. K. M. Elisabeth Murray, *Caught in the Web of Words—*

James A. H. Murray and the Oxford English Dictionary (Yale: Yale University Press, 1977), p 136 どもお世話、ハトーレイバーンは雑志文献閲読者を募る文書の母、曲介達の辞典作成プロジェクトを 話の題の題材としての美術館を挙げてく。

1) 国 1) John Willinsky, *Empire of Words--The Reign of the OED* (Princeton: Princeton University Press, 1994), pp.5-6.

1) 国 1) OED が『ハルマヘー』などの伝説の中の女性に關して次のような部分が盛られてゐる。女性は 奴隸とした奴隸のよつた存在や、せこやく愛人として扱われるよつた存在であるふういた考へが読みと ふね。

woman 3.b. A kept mistress, paramour.

1719 De Foe *Crusoe* (Globe) If any of you take any of these Women, as a

Woman or Wife,.. he shall take but one.

*subjected*  
2. Reduced to a state of subjection; under the dominion or authority of another.

Hence, submissive, obedient.

1719 De Foe *Crusoe* (Globe) All the five were most willing,.. subjected  
Creatures, rather like Slaves than Wives.

1719 Willinsky, *Empire of Words*, pp. 17-8.

1719 Willinsky, *Empire of Words*, p. 18.

入手法は ftp(→→ターネル端末)で cat フィル名を cat フィル名を  
取る。

grep, awk を用いる

「」の「」一タ由体があおり大きくなつたぬいでは不可能であったが、むつ110世紀のクルーソーに題する語の十分な量のデータがあれば、そのデータと比較考量するに至らぬ時代各時代のクルーソー像を比較校証する事ができたかもしない。他の作家についても同様のようないふたつの受容、及び受容の比較研究は *OED-CD2* を使用する事で可能であると考えられる。*OED* から語用さばく *OED-CD-ROM2* による。本章では、見出し語・定義・語用の順で本文で用いながら、必歎がなつて評議やおも騒動が、世論の流れで語用は省略する。また、用例中、古典は必歎な場合を省略する。

1879 W. Minto *Defoe* Editors of journals held aloof from him.

1879 W. Minto *Defoe* His co-religionists were imprecating him as the man who had  
brought this persecution upon them.

1879 W. Minto *Defoe* One of the pamphlets which he professed to take off in his famous  
squib.

1879 William Minto, *Daniel Defoe* (London: Macmillan and co., 1885), p. 140.

〔K〕 Minto, *Defoe*, pp. 144-145.

〔K〕 “Hellsish brutality”という引用だけを眺める上の意味を読み取ることは不可能だ。このたん引用文を元の  
ノットクベムに戻す必要がある好例である。

〔K〕 摘十二章参照。

〔K〕 Murray, *Web of Words*, p. 202.

## I. Primary Sources

- Coetzee, J.M. *Foe*. Harmondsworth: Penguin Books, 1986.
- Defoe, Daniel. *Colonel Jack*. Oxford: Oxford University Press, 1965.
- \_\_\_\_\_. *The Compleat English Gentleman*. London: David Nutt, 1890.
- \_\_\_\_\_. *The CONSOLIDATOR: or MEMOIRS of SUNDRY TRANSLATIONS from the WORLD IN THE MOON...Translated from the Lunar Language, By the Author of The True-Born English Man (1705 )*, as reprinted in AMS Press.
- \_\_\_\_\_. *Due Preparations for the Plague, as well for soul as body (1722)* in G.A. Aitken (ed.), *Romances and Narratives by Daniel Defoe*, London: Dent, 1895.
- \_\_\_\_\_. *The History of the Union Between England and Scotland, with A Collection of Original Papers Relaing Thereto*. London: John Stockdale, 1786.
- \_\_\_\_\_. *A Journal of the Plague Year*, ed. Louis Landa. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- \_\_\_\_\_. *Moll Flanders*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- \_\_\_\_\_. *Robinson Crusoe*. Oxford: Oxford University Press, 1972.
- \_\_\_\_\_. *Roxana* (Oxford:Oxford University Press, 1996
- \_\_\_\_\_, *A Second Volume of the Writings of the Author of the True-Born Englishman*. Printed, and Sold by the Booksellers, 1705.
- \_\_\_\_\_, "A Serious Inquiry into this Grand Question: Whether a Law to Prevent the Occasional Conformity of Dissenters, Would not be Inconsistent with the Act of Toleration, and a Breach of the Queen's Promise", in *A Second Volume of The Writings of The Author of True-born Englishman*. London: 1705.

- \_\_\_\_\_, *Serious Reflections during the Life and Surprising Adventures of ROBINSON CRUSOE*. London: J.M.Dent, 1895.
- \_\_\_\_\_, *The True-Born Englishman in Poems on Affairs of State: Augustan Satirical Verses, 1660-1714, Volume VI: 1697-1704*. New Haven and London: Yale University Press, 1970.
- \_\_\_\_\_, *A True Collection of the Writings of the Author of True Born English-man*. Printed, and are to be sold by most Booksellers in London and Westminster, 1705.
- Gildon, Charles. *The Life and Strange Surprizing Adventures of Mr.D..... De F..., of London, Hosier, who Has liv'd above fifty Years by himself, in the Kingdoms of North and South Britain*.London: J.Roberts, 1719, as reprinted in Paul Dottin (ed.), *Robinson Crusoe Examin'd and Criticis'd*. London & Paris: J.M.Dent & Sons Ltd., 1923.
- Kneale, Matthew. *English Passengers*. New York: Anchor Books, 2000.
- Le Sage, *Gli Blas de Santillane*. "Collection Folio" Gallimard, 1973.
- Smith, Zadie. *White Teeth*. New York: Random House, 2000.
- Smollett, Tobias. *Continuation of the Complete History of England*. London: Longman, 1848.
- \_\_\_\_\_. *The Expedition of Humphry Clinker*. Oxford: Oxford University Press, 1966.
- \_\_\_\_\_. *Ferdinand Count Fathom*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- \_\_\_\_\_. *Roderick Random*. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Swift, Jonathan. *The Prose Writings of Jonathan Swift*, Herbert Davis (ed.), Oxford, 1939-68.

## II. Secondary Sources

- Alkon, Paul K. *Defoe and Fictional Time*. Athens: The University of Georgia Press, 1979.
- Allen, Walter. *The English Novel*. Harmondsworth: Penguin Books, 1958.
- Alter, Robert. *Rogue's Progress*. Cambridge.Mass.: Harvard University Press, 1964.

- Anderson, Benedict. *Imagined Communities*. London: Verso, 1991.
- Backsheider, Paula R. *Daniel Defoe: Ambition and Innovation*. Kentucky: The University Press of Kentucky, 1986.
- \_\_\_\_\_. *Daniel Defoe—His Life*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1989.
- Baine, Rodney. "Daniel Defoe's Imaginary Voyages to the Moon," *PMLA*, 1966.
- Bastian, F. 'Defoe's Journal of the Plague Year Reconsidered', *Review of English Studies*, NS, xvi, 1965.
- Bhabha, Homi K. "DissemiNation: time, narrative, and the margins of the modern nation" in Homi K. Bhabha (ed.), *Nation and Narration*. London: Routledge, 1990.
- \_\_\_\_\_, *The Location of Culture* London: Routledge, 1994.
- Birdsall, V. O. *Defoe's Perpetual Seekers: A Study of the Major Fiction*. London and Toronto: Associated University Presses, 1985.
- Boardman, M. M. *Defoe and the Uses of Narrative*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1983.
- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. Chicago: University of Chicago Press, 1961. 無題 米国  
波ー「論述藝術」翻訳版『ハーバード入試論述』長編訳 1991.
- Boucé, Paul. *The Novels of Tobias Smollett*. London: Longman, 1976.
- Brooks, Douglas. *Number and Pattern in the Eighteenth-Century Novel* London: R. K. P., 1973.
- Brooks, Peter. *Reading for the Plot*. New York: Knopf, 1984.
- Brown, Homer O. *Institutions of the English Novel*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1997.
- Castle, Terry J. "“Amy, Who knew my disease”: A Psychosexual Patten in Defoe's *Roxana*", *ELH* 46, 1979.
- Ch'en, shou·yi. "Daniel Defoe, China's Severe Critic," *Nankai Social and Economic Quarterly*, VIII, no.3, 1935.
- Cohan, Steven. "Gulliver's Fiction", *Studies in the Novel*, VII, 1974.
- \_\_\_\_\_, "Other Bodies: Roxana's Confession of Guilt", *Studies in the Novel*, VIII, winter 1976.

- Colley, Linda. *Britons—Forging the Nation 1707-1837*. New Haven and London: Yale University Press, 1992. 無論 三井總圖書『天下ノ日本圖書』如知圖大作丑鑑卷' 2000.
- Conrad, Peter. *The Everyman History of English Literature*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1985.
- Davis, Lennard J. *Factual Fictions—The Origins of the English Novel*. New York: Columbia University Press, 1983.
- de Crevecoeur, J. Hector ST John. *Letters from an American Farmer*. Oxford: Oxford University Press, 1997.
- Donovan, R. A. *The Shaping Vision*. Ithaca: Cornell Univ. Press, 1966.
- Durant, David. "Roxana's Fictions", *Studies in the Novel*, VIII, Fall 1981.
- Eagleton, Terry. *Ideology*. London: Verso, 1991.
- Flynn, H. *The Body in Swift and Defoe*. Cambridge: Cambridge University Press, 1990.
- Furbank, P.N. & Owens, W.R. *The Canonisation of Daniel Defoe*. New Haven & London: Yale University Press, 1988.
- \_\_\_\_\_. *A Critical Bibliography of Daniel Defoe* London: Pickering & Chatto, 1998.
- Fussell, Paul. "The Frailty of Lemuel Gulliver", *Essays in Literary History*, edited by Rudolf Kirk and C.F. Main. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1960.
- \_\_\_\_\_. *The Rhetorical World of Augustan Humanism*. Oxford: Clarendon Press, 1965.
- Girard, Rene. *Deceit, Desire & the Novel*. Baltimore and London: The Johns Hopkins University Press, 1965.
- Godwin, Francis. *The Man in the Moone*. London: John Norton, 1638.
- Goldberg, M. A. *Smollett and the Scottish School*. Albuquerque: University of New Mexico Press, 1959.
- Grant, Damian. "Roderick Random: Language as Projectile", *Smollett: Author of the First Distinction*, ed. Alan Bold. London: Vision and Barnes & Noble, 1982.
- \_\_\_\_\_, *Tobias Smollett: A Study in Style*. Manchester: Manchester University Press, 1977.
- Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. Pennsylvania: The Pennsylvania University Press,

1990.

- Grundy, Isobel. *Lady Mary Wortley Montagu—Comet of the Enlightenment*. Oxford: Oxford University Press, 1999.
- Hannay, David. *Life of Tobias George Smollett*. London: Walter Scott, 1887.
- Harvey, Lars. "A Chequer-work of Formulae. A Reading of Defoe's *Colonel Jack*," *English Studies / A Journal of English Language and Literature*, Vol. 63, Number 2, April 1982.
- Harvey, Paul A. S. "Marginal Annotation Concerning the Amerindian in Purchas His Pilgrimes," *Studies in Language and Culture* 16, 1990.
- Hazlitt, William. "Lectures on the English Comic Writers", in *The Complete Works of William Hazlitt*. London: J. M. Dent and Sons, 1931.
- Higdon, D. L. *Time and English Fiction*. London and Basingstoke: The Macmillan Press LTD., 1977.
- Hulme, Peter. *Colonial Encounters / Europe and the native Caribbean, 1492-1797*. London: Merhuen, 1986.
- Jung, C. G. "On the Psychology of the Trickster Figure", in Paul Radin, Karl Kerényi and C. G. Jung, *The Trickster: A Study in American Indian Mythology*. New York: Schocken Books, 1972.
- Kahrl, George M. *Tobias Smollett : Traveler-Novelist*. New York: Octagon Books, 1978.
- Keener, Frederick M. *The Chain of Becoming*. New York: Columbia University Press, 1983.
- Kermode, Frank. *The Sense of an Ending*. Oxford: Oxford University Press, 1968.
- Knapp, Lewis M. *Tobias Smollett: Doctor of Men and Manners*. New York: Russell & Russell Inc., 1963.
- Knight, George W. *The Burning Oracle*. London: Oxford University Press, 1939
- Kropt, C. R. "Theme and Structure in Defoe's *Roxana*", *Studies In English Literature 1500-1900*, VII, Summer 1972.
- Leyburn, Ellen D. *Satiric Allegory: Mirror of Man*. New Haven:Yale University Press, 1956.
- Martz, Louis L. *The Later Career of Tobias Smollett*. New Haven:Yale University Press, 1942.

- McBurney, William. "Colonel Jacque: Defoe's Definition of the Complete English Gentleman," *Studies in English Literature 1500-1900*, Vol.II, Summer Number 3, 1962.
- McEwan, Ian. *Atonement*. London: Jonathan Cape, 2001.
- Miller, D. A. *Narrative and Its Discontents*. Princeton: Princeton University Press, 1981.
- Monk, Samuel H. "The Pride of Lemuel Gulliver", *The Sewanee Review*, LX3, 1955.
- Moore, John B. "The Role of Gulliver", *Modern Philology*, XXV, May 1928.
- Moore, J.R. *Daniel Defoe: Citizen of the Modern World*. Chicago: University of Chicago Press, 1958.
- Murray, K. M. E. *Caught in the Web of Words--James A. H. Murray and the Oxford English Dictionary*. Yale: Yale University Press, 1977.
- New, Melvyn. "'The Grease of God': The Form of Eighteenth-century English Fiction", *PMLA*, xcii, 1976.
- Novak, Maximilian E. 'Defoe and Disordered City', *PMLA*. vol. 92, 1977.
- \_\_\_\_\_, *Defoe and the Nature of Man*. Oxford: Oxford University Press, 1963.
- \_\_\_\_\_, *Economics and the Fiction of Daniel Defoe*. Berkeley: University of California Press, 1962.
- \_\_\_\_\_, *Realism, Myth, and History in Defoe's Fiction*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1983.
- Orren, Tyna T. "True and False Accounts by Defoe". Ph. D, diss., University of Minnesota, 1976.
- Paulson, Donald. *Hogarth's Graphic Works: Third Revised Edition*, London: The Print Room, 1989.
- Pearlman, E. "Robinson Crusoe and the Cannibals," *Mosaic* (10,1), 1976.
- Pettigrove, M. G. "The Incomplete English Gentlewoman: Character and Characterisation in *Roxana*," *Studies in the Eighteenth Century IV*. Canberra: Australian National Univ. Press, 1979.
- Phelan, James. *Reading People, Reading Plots*. Chicago: The University of Chicago Press, 1989.
- Preston, Thomas R. *Not in Timon's Manner*. Alabama: The University of Alabama Press, 1975.

- Vladimir Price, John. *Tobias Smollett; The Expedition of Humphry Clinker* London: Edward Arnold, 1973.
- Quintana, Ricardo. *Swift: An Introduction*. London: Oxford University Press, 1955.
- Renan, Ernest. "What is a nation" in Homi K. Bhabha (ed.), *Nation and Narration*. London: Routledge, 1990.
- Richetti, John J. *Defoe's Narratives: Situations and Structures*. Oxford: Clarendon Press, 1975.
- Robertson, Ritchie. Introduction in Urs Bitterli's *Cultures in Conflict* Oxford: Polity Press, 1986.
- Rogers, Pat. *Literature and Popular Culture in Eighteenth Century England* Sussex: The Harvester Press, 1985.
- Ross, Ian C. "Language, Structure and Vision in Smollett's *Roderick Random*", *Études Anglaises*, xxxi, 1978.
- Ross, John F. *Swift and Defoe: A study in Relationship*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1941.
- Said, Edward W. *The World, the Text, and the Critic*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1983.
- Schellenberg, Betty A. *The Conversational Circle: Re-reading the English Novel, 1740-1775*. Kentucky: Kentucky University Press, 1996.
- Schonhorn, Manuel. 'Defoe's Journal of the Plague Year. Topography and Intention', *Review of English Studies*, NS, xix, 1968.
- \_\_\_\_\_. *Defoe's Politics—Parliament, power, kingship, and Robinson Crusoe*. Cambridge: Cambridge University Press, 1991.
- Sekora, John. *Luxury: The Concept in Western Thought, Eden to Smollett* Baltimore: The John Hopkins University Press, 1977.
- Shaw, Narelle L. "Ancients and Moderns in Defoe's *Consolidator*," *Studies in English Literature 1500-1900*, vol. 28, Summer Number 3, 1988.
- Sill, Geoffrey. *The Cure of Passions and the Origins of the English Novel* Cambridge: Cambridge

University Press, 2001.

Souhami, Diana. *Selkirk's Island—The True and Strange Adventures of the Real Robinson Crusoe*. London: Weidenfield & Nicolson, 2001.

Spivak, Gayatri C. *A Critique of Postcolonial Reason*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1999.

Starr, G. A. *Defoe and Casuistry*. Princeton: Princeton University Press, 1971.

\_\_\_\_\_. *Spiritual Autobiography*. New York: Gordian Press, 1971.

Tilton, John W. "Gulliver's Travels as a Work of Art", *Bucknell Review*, VIII December 1959.

Torgovnick, Marianna. *Closure in the Novel*. Princeton: Princeton University Press, 1981.

Treadwell, T. O. "The Two Worlds of Ferdinand Count Fathom", in G. S. Rousseau and G. Boucé (eds.), *Tobias Smollett: Essays Presented to Lewis M. Knapp*. New York: Oxford University Press, 1971.

Tuan, Yi-Fu. *Space and Place*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1977.

Tyne, James L. "Gulliver's Maker and Gullibility", *Criticism* VII, Spring 1965

Warner, John M. "Smollett's development as a Novelist", *Novel*, v, no. 2. 1972.

Watt, Ian. *The Rise of the Novel*. Harmondsworth: Penguin Books, 1963.

West, William A. "Matt Bramble's Journey to Health", *Texas Studies in Literature and Language* 11, 1969.

Wilkins, John. *The Discovery of a World in the Moone*. Delmar, New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1973.

Willinsky, John. *Empire of Words / The Reign of the OED*. Princeton: Princeton University Press, 1994.

Wilson, James R. "Swift's Alazon", *Studia Neophilologica*, XXX, 1958.

Zimmerman, Everette. *Defoe and the Novel*. Berkeley: University of California Press, 1975.

\_\_\_\_\_. 'H. F.'s Meditations: A Journal of the Plague Year', *P.M.L.A.* vol. 87, 1972.

### III. 邦語文献

- 天川潤次郎『ナフラー研究』未来社、1966.
- 市川浩『(身)の構造』青土社、1984.
- 岩尾龍太郎『ロマンスの砦』青土社、1994.
- 『ロマンス変形譚』みすゞ書房、2000.
- 植田和文『群衆の風景——英米都市文学論』南雲堂、2001.
- 内多毅『18世紀英文学のメカニズム』鷹書房、1975.
- 榎本太『初期イギリス小説の研究』朝日出版社、1970.
- 『アン・キホーテの影の下』中教出版、1985.
- 川北稔『民衆の大英帝国』邦波書店、1990.
- 木村茂雄「比較言語文化論——伽語文化の境界——」、『伽語文化学概論』大阪大学出版部、1997.
- 「「ボブ・アーロンズ」とナイペーク」、『英語青年』19号、研究社、2001.
- 酒井直樹「主体とは何か」、『現代思想』10号、青土社、1998.
- 鈴木善三『イギリス風刺文学の系譜』研究社、1996.
- 「メニヒボス的風刺の系譜」、『東北大文学部研究年報』第39号、1989.
- 高山宏氏『アリス狩り』青土社、1981.

メアリー・ダグラス『象徴としての身体』江河徹他訳 紀伊國屋書店、1983.

M.H.リヒテン「『月世界への旅』高山宏訳 図書刊行会、1986.

野家啓一「物語行為論序説」、『現代哲学の冒険』第八巻、『物語』岩波書店、1990.

野家啓一「歴史の終焉」と「物語の復権」、「格闘する現代思想」今西仁司編講談社、1991.  
マハムル・バフチーン『トランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』川端香男里訳 せりか書房、

1980.

マジム・トーロー『監獄の誕生』田村淑訳 新潮社、1977.

N.O.アラウ「ロスとタナーヌ」秋山さと子訳 竹内書店新社、1970.

和田敏英『ガリバー旅行記』論争』開文社出版、1983.

渡辺孔二『スウェイフトの断想』日口書店、1984.